
和菓子さま 剣士さま

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和菓子さま 剣士さま

【Nコード】

N 6 4 2 3 P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

高三でようやく青春することができた慶子さんと和菓子屋の若旦那（？）との未知との遭遇な物語。

物語は三月から始まり、ひと月ごとの読み切りで進んでいきます。和菓子に魅せられた女の子の目を通して、季節の和菓子（上生菓子）も出てきます。

また、剣道部での様子や、そこでの仲間とのあれこれも展開していきます。

お時間のあるときに、是非覗いてみてください。

自サイトでも公開中。

4 / 27 番外編を書きました。

ご興味があるかたは、活動報告をご覧ください。

登場人物 紹介

ネタバレになるところは、少し隠しています。

「学校」サイド

・ 柏木 慶子（主人公） 高校三年・・・とある事情により、高三で「青春」を迎えた娘

・ 鈴木 学 高校三年・・・慶子の同級生

・ 山路 茜・・・高校三年 剣道部女子部 部長 心優しき同級生

・ 福地 裕也・・・高校三年 剣道部男子部 部長 熱血部長

・ 和歌山・・・高校三年 剣道部男子部 副部長 明るい坊主頭

・ 北村・・・高校三年 剣道部男子部 頼れる無口

・ 岡山・・・高校三年 剣道部男子部 休部のち復活

・ 常盤 冬子・・・高校三年 唯一人のビジュアル担当 元ミス学園
出戻り剣道部員

「寿々喜」サイド

和菓子さま・・・和菓子屋「寿々喜」の店員 若旦那？

師匠・・・「寿々喜」の店主

女将さん・・・「寿々喜」の女将さん

御隠居さん・・・「寿々喜」の先代店主

1・はじめは、仙寿ノ（三月）

弥生三月、朝。

四月からめでたくも高校三年生になる柏木 慶子さんは、開館と同時に入館した図書館で予約の本を受け取ると、軽やかな足取りで自宅への道を歩んでいた。

穏やかな春の陽気である。

その陽気に誘われて、一本裏の通りをいつになく「お散歩」しながら帰るなんて、贅沢なことをしている慶子さんだった。

慶子さんはてくてくと歩きながら、たったの一月でこうも季節が変わるものかとしみじみと思った。

今年の冬は寒かったなあ、と。

しかし、今となつてはそれも過去の事。

るるんと心弾む慶子さんの心の目には、冬に眠っていた木々の芽が暖かな日差しに誘われるようにして緩んでいく様子も美しく映っていた。

慶子さんをるるんとさせているのは、春の陽気だけではない。

慶子さんが持つ布製のカバンの中には、今まで読みたいとは思っても読むことができなかった本の数々がどっさりと入っていたのだ。

実際のところ、かなりの重さになっているのだが、そんなのは今の慶子さんにとってはどうってことないものであった。

にまにまとはほ笑みながら慶子さんは思う。

ああ、青春だなあ、と。

図書館で好きな本を好きなだけ借りるなんてことは、たいていの女子高生にとっては日常的なことであつたり、または全く興味の無いことでもあつたり、つまりが「青春」なんて言葉を使うほどでもない出来事なのかもしれない。

けれど、慶子さんにとっては、他の人には些細なこんなことさえ、青春と呼べるほどの慶事であつた。

まあ、青春の全てが慶事ばかりであるとはいえないのだが、今の慶子さんの心の中は「青春＝慶事」なのだから、そこらへんはご勘弁願いたい。

ふと、慶子さんの鼻孔をくすぐる匂いが早春の風に乗ってふわりとやってきた。

ここで花の匂いであつたりすれば、「まあ、慶子さんってば乙女ね」ってなものだが。

「ぐりとぐらを思い出すこの匂い」

慶子さんは立ち止り、匂いのする方角へと鼻をふんふんとさせながら歩きだすと、ぴたりと足を止め、その左斜め上を見上げた。

見るとそこには、壁から飛び出た銀色に輝くやや大きめのダクトがあつた。

「ここかあ」

くんくんと鼻を動かしながら、香ばしいホットケーキ系の匂いの流れをキャッチする慶子さん。

次に慶子さんは、そのダクトのある建物の周りをゆつくりと歩き出した。

どう考えても業務用のダクト。

つまりが、これは、絶対においしいものを作っているお店があるということだ。

わくわくしながら、その建物の正面に着いた慶子さんは正直驚いた。

「え。和菓子屋さん？」

しかもこの和菓子屋さんは、慶子さんの図書館および駅へと向かうルート上にあるお店なのである。

つまり、慶子さんは毎日このお店の前を通っているってことだ。

一本違う道を歩いていたはずなのに、匂いにつられて来てみれば、

それはいつもの道の上にある見慣れた和菓子屋さんだったってこと。

けれど、もしこのいつもの道を歩いていたら、ダクトから流れる匂いに気がつくことなく、この和菓子屋さんの前も素通りだったのだ。

縁とは妙なりと慶子さんは思いつつ、暖簾の出ていないお店の中を覗いた。

まだ開店はしていないようだが（慶子さんが腕時計を見ると、九時を少し過ぎたところだった）、ガラスの引き戸の向こうには、所謂「和菓子」がショーケースに綺麗に並べられてあった。

当然ながら、ホットケーキらしきものは見当たらない。

本当にここのお店の匂いなのかを確認するために、再び慶子さんは早足でダクトへと向かった。

匂う。

そしてもう一度、注意深くダクトのある建物の正面へと向かう。

他にもお店がないか、確かめる様に。

けれど、どう考えても、そのダクトは和菓子屋さんのものとは思えなかった。

「おかしい」

和菓子屋さんからホットケーキの匂いなんてするはずなのに、と慶子さんは首を捻る。

すると、ガラガラと扉が開く音と同時に「どうかいたしましたか？」という男の人の声がした。

びつくりしてその声の主を見ると、和菓子屋さんの制服と思われる白いうわっぱりに白い帽子を被った男の人が、開店前のお店から出てきたのだった。

心底驚きながらも、礼儀にだけは煩い両親に育てられた慶子さんは「おはようございます」とその人に挨拶をした。

すると和菓子屋さんもそれに応える様に「おはようございます」と挨拶を返してきた。

しかし、和菓子屋さんはそのまま慶子さんを解放するような雰囲気でもなかった。

そりゃ、そうだろう。

開店前の店先に立ち「おかしい」などと言っている人物は、その人物こそが「おかしい」と判断されてもおかしくないのだ。

慶子さんは腹を括ると「あの」としゃべりだした。

そして「話すときは相手の目を見て」と言う母の教えを思い出し、しっかりと顔をあげその和菓子屋さんのことを見上げた。そう。

見上げるほどに、和菓子屋さんの背は高かった。

そして、白い帽子の中にきつちりと前髪を入れているせいも顔もばつちりと見えた。

流石和菓子屋さんだけあって、顔も和風だと慶子さんは思った。

その顔立ちは、すつきりと爽やかである。

しかし。

確かに、すつきりと爽やかな顔立ちのはずなのに、そう言いきれない何かがあると慶子さんは思った。

顔の中の何かがその邪魔をしていると。

「なんでしょう」

「あの」と言っただけ黙ってしまった慶子さんを促すように、和菓子屋さんが言う。

「あ、はい。あの、実は、あのダクトから」と言っただけ建物の横を指す、「あの大きなダクトからホットケーキの匂いがしたので、なんだろうと」

慶子さんはそう言うと、和菓子屋さんの様子を伺った。

和菓子屋さんといえば、慶子さんのその言葉に意表を突かれたような顔をしたあと、「ああ、なるほど」と言った。

「洋菓子店かと思われたんですね」

「はい。すみません」

そうなのだ。

慶子さんは、その匂いからてつきりケーキ屋さんだろうと思ったのだった。

「あの。お時間は、ありますか？」

和菓子屋さんが慶子さんに訊いてきた。

慶子さんが首を傾げると、和菓子屋さんは「よければお店を少し覗かれませんか」と言ったのだ。

開店前のお店。

しかも和菓子屋さんに入るなんて、特別のここのように思え慶子さんはどきどきした。

お店に入ると、まさにさっきのホットケーキの匂いがした。

「ここで待っていてください」

和菓子屋さんに店内にある椅子をすすめられた慶子さんは、大人しくそこに腰かけた。

そして、座りながら店内を眺めた。

はつきり言つて、慶子さんと和菓子の間には、今までの人生の中で接点という接点はなかった。

せいぜい、食べておはぎと柏餅くらい。

しかも、柏餅に関してはあまりいい思い出はない。

慶子さんの名字は「柏木」というのだが、その名字ゆえに小さい頃のあだ名は柏餅だった。

更に言つと、柏餅をめぐつては、幼いころに苦い出来事があり……。

柏餅は好きだし、怨みもないのだけど、せめて自分が違う苗字か、柏餅が柏餅という名前でなければと小さな頃は思ったものである。

そんなことを思い出しながら和菓子のショーケースを眺めていた慶子さんは、ふとあるお菓子のところで目が止まった

それは桃色した、まさに桃を模したお菓子であった。

確かああいうのを「なんとか菓子」って言うのだけれど、と思い

つつその「なんとか」が出てこない慶子さん。

実は慶子さん、その桃のお菓子そのものよりも、それに添えられた説明文に最初に目がいったのだ。

—— 長寿を得られると言い伝えのあるお菓子です。

こ、これは……。

「お待たせしました」

声とともに、目の前には小さなお盆を持つ和菓子屋さんが立っていた。

そしてその上には、おしぼりとお茶ともう一つ。

「ホットケーキの匂いの正体は、これです」

小さなどらやきがあった。

「どらやき」

ああ、なるほど。

確かにどらやきの外側部分は、ホットケーキに似ている。

「よかったら召し上がってください」

和菓子屋さんはそう言うのと、お盆を慶子さんの隣の椅子の上に乗せた。

どらやきからは、いい香りが漂っている。

「いいんですか？」と、一応慶子さんは和菓子屋さんに訊くと、「もちろん」という答えが返ってきた。

慶子さんはいただきますと言うと、おしぼりで手を拭き、そしてどらやきを手に取った。

どらやきは、慶子さんの手の中にすっぽりとおさまった。

そしてほんのりと温かい。

「……小鳥みたい」

昔飼っていた文鳥の温かさとそれは似ていた。

そして慶子さんは、どらやきを一口ぱくりと食べた。

ふわりと口の中に幸せが広がった。

外の生地のかな甘さと柔らかさ。

そして、それと馴染む餡子のつぶつぶ感。

「おいしいです」

なんておいしい食べ物だろうと慶子さんは思った。

ちつとも特別じゃない「どらやき」という食べ物なのに、どう考えてもそれはちつとも普通じゃないおいしさだったのだ。

「ありがとうございます」

慶子さんの言葉に、和菓子屋さんは嬉しそうな顔をした。

そしてそのまま慶子さんは無言でどらやきを食べ終わると、お茶をぐいっと飲んだ。

「え」

びつくりして、湯呑の中を見る。

見た目は普通のお茶だ。

「お茶までおいしいです」

考えてみたら、そりやいいお茶の葉を使っているのだろう。

慶子さんのところの安いお茶とは単価が違うのだろうと思った。

慶子さんの言葉に、和菓子屋さんはにこりと笑った。

その顔を見て、またしても慶子さんは失礼にも、バランスが悪い
と思ってしまった。

一体この親切な人（御馳走してくれた時点で慶子さんの和菓子屋
さんへの評価はそうなった）のどこが慶子さんにそう思わせるのか。

うむむと思いながらお茶を飲みほして「ごちそうさまでした」と
言った慶子さんの視界に、再び桃のお菓子が入った。

「あの」

「はい」

「お店は何時に開店でしょうか」

「十時に開店でございます」

「あの」

「はい」

「お菓子の予約をしてもいいですか？ 開店時間になったら買いに来ますので」

「はい。……どらやきですか？」

「あ、どらやきも買いたいのですが、あの桃のお菓子を」

そう言つて慶子さんは目当てのお菓子を見る。

すると和菓子屋さんもその視線を追うように、桃のお菓子を見た。

「桃。『仙寿』ですね」

「せんじゅ」

「はい。仙人の仙に寿と書いて『仙寿』です。中国には食べると長寿になると言われていた桃がありまして。仙女が持つ園に三千年に一度だけ実をつける桃なんですけどね。これは、それにあやかつて作られた上生菓子なんですよ」

「……上生菓子」

「え」

「あ、いえ。ああいった和菓子つて名前があつたよなあと思つたんですけど、思い出せなくて」

上生菓子。そうだ、そうだ。確かそんな名前だつた。

「仙寿は、おじいさまやおばあさまに、ですか？」

「いえいえ。あ、でもそうですね。普通は」

そう言つと、慶子さんは話すのを一瞬ためらつたあと「母です。母に、です」と話し出した。

「実は、私の母はずつと体を悪くしていて、入退院を繰り返していったんですけど。でもようやく先週、もう自宅療養でいいつてことになつて。ほんと、日に日に回復して。で、すごく嬉しくて。先生ももう大丈夫つて言つてくださつて。家では母もリハビリだからつてお料理も少しずつしだして。で、私にも高校生らしい生活をしてね、なんて言つてきて、部活に入れたとか、おけいこ事でもしたらとかうるさくて。でも、もう私は高校三年なので部活もないだろうつて

話なんですけれど。あ、大学付属の高校なんで受験はないからそういう面ではいいんですけど。でも、今更初心者の高三を受け入れてくれる部活なんてないですよ。あつたらどこにでも入りますってで、ああ、そんな話じゃなくて。で、ええと。つまりですね。あのお菓子は母の為に。母に食べてほしくて。そりゃ、先生は大丈夫っておっしゃっても。ええと、だって。……お母さん、すごく痩せちゃって」

涙がぼろりと出た。

医者は大丈夫だと言う。

母もリハビリだからって、家の事をやりだした。でもその母の腕は、慶子さんの知っている腕よりも一回りは細くなっていた。

大丈夫、大丈夫と呪文のように唱えても。

それでも慶子さんは不安だったのだ。

こんな「気持ちのところで話」は、家族にもしたことがなかった。

と、いうよりも、家族にこそできない話だった。

中学一年の冬に母が倒れてから高校三年になる前のこの春まで。

慶子さんはひらすら耐えた。

病院にいる母を心配させないために、母を支える父を心配をけないように。

慣れない料理もしたし、洗濯もした。

付属とはいえ、あんまりな成績をとるわけにもいかずそれなりに勉強もした。

そして、病院へのお見舞いもできるだけ行った。

冬に眠っていたのは、木々の芽だけではなかった。

木々の芽が耐えた冬よりももっと長い冬を、慶子さんという木の芽は耐えたのだ。

そして今。

暖かな日差しではなく、どらやきの甘い匂いに誘われて入ることになった和菓子屋さんで、慶子さんの木の芽は緩んだのだ。

「予約は、不要です」

和菓子屋さんはそう言うと、するりとショーケースの裏側に入った。

「おいつつ、ご用意しますか？」

和菓子屋さんが訊いてくる。

「み、みつっ！」

家族三人分だ。

慶子さんは涙を拭きながら慌てて立つ。

「開店前なのに、いいんですか？」

「一期一会ですから」

「え？」

慶子さんの疑問には答えぬまま、和菓子屋さんは手早く仙寿を三つ取ると箱に入れた。

そしてその箱にお店の包装紙をくるりと巻いた。

「おいくらですか」

慶子さんの言葉に和菓子屋さんは少し考えた後、「一つ二百五十円ですので、三つで七百五十円でございます」と言った。

慶子さんが千円札を出すと、和菓子屋さんはお釣りを渡してきた。

和菓子屋さんは箱を小さな紙袋に入れると、それを持って慶子さんの側までやってきた。

「仙寿は、三月のお菓子なんです」

和菓子屋さんはそう言うと、ショーケースを見た。

慶子さんも見た。

「仙寿だけでなく、この緑色した菜の花も。勿論、通年ご用意しているものもありますが、和菓子は季節とともに移り変わっていくのです。ですから、お店の前を通って次に買おうと思っ

が変わるともうなかったり。同じお菓子を食べるには、次の年を待たなくてはならない時もあります」

「次の年、ですか」

「そうです」

だから一期一会。

いうことは。

「この上菓子を全種類食べるには、一年かかるってことですよね」

慶子さんがそう言うと、和菓子屋さんの目がびっくりするように開いた。

「……そうです」

「それは」

それは。

「すごく楽しいですね。それに」

それに、と思う。

「命がぐるぐると繋がっていく感じがします」

慶子さんは素直にそう思った。

仙寿を見てそして和菓子屋さんの説明を聞いたときに、来年もそしてその次の年も慶子さんは仙寿を買いたいと思ったのだ。

そして、自分だけでなく、昔からそんな思いをした人がいたからこそ、このお菓子は生まれてそして現在までそこにあるのだと思うと、一個の和菓子の中に永遠ともいえる時の繋がりを感じたのだ。

どらやきはまた次の機会に（出来あがっていなかったのだ）、と帰宅した慶子さんは、聞いたばかりの仙寿に関するうんちくを述べながら、帰りがけに和菓子屋さんに教えてもらった通り丁寧にお茶を入れた。

そして家族三人で、仙寿を食べた。

桃の実を模した甘いそと側と、中身の餡とが口の中で、ほろりと

溶けた。

仙寿は、どらやきを食べた時のおいしさとは、また違ったおいしさがあった。

けれど、その違いをうまく言葉にできない慶子さんだった。

だからそれは、謎のままで慶子さんは心の引き出しにしまった。

慶子さんはよく、心の引き出しにこういつた謎をしまっておく。

物事を今直ぐこの瞬間に解決したい人もいるだろうが、慶子さんはそうではなかった。

引き出しにしまつて、そしてそれを時折取り出しては考える。

慶子さんはそういう性質^{たち}だったのだ。

ちなみに、和菓子屋さんのお顔についても、その引き出しにしまつていた。

和菓子屋さんといえば。

教えてもらつた通りに淹れたお茶は、いつもよりもまるやかなであたりの柔らかかなものになった。

百グラムあたりの単価は低いのに。

和菓子屋さんに対して慶子さんは、「尊敬」という言葉が自然とわき上がった。

その結果、慶子さんが「和菓子屋さん」と呼んでいたあの男の人は彼女の中では「和菓子さま」という名前に変わったのだった。

慶子さんはその後も、何回か和菓子屋さんに行った。

和菓子さまは、いる時もあればいない時もあつた。

いないときは、和菓子さまの母上と思われる女性が接客してくれた。

そして和菓子さまがいるときは、慶子さんは和菓子についての知識を深めるのだった。

若者のわりには落ち着いた声の和菓子さまは、その所作も落ち着いたものだった。

前髪はばつちり帽子の中に収まってい

昨今の若者男子のように前髪が「M」でもなければ、腰パンでもない。

きつと立派な跡取りさんになるのだらうと、慶子さんは思った。と、思う反面。

最初に会った時に感じた、顔のバランスの悪さもどうしても捨てきれない慶子さんだった。

一体、和菓子さまのお顔の何にそんな印象を受けるのだろうか。ぼんやりとすることが気になっている慶子さんに、神のお告げのごとく閃く雷神が落ちたのは、とある日のことである。

家族そろって夕飯を食べ、テレビを見ながら食後のコーヒーを飲んでいた慶子さんは、ある俳優さんの目もとにはっとした。

そっか、そうだよ。

まさに、ガッテンと手を叩いてしまいそうになる慶子さん。ほくろ、だ。

和菓子さまの左の目もとにも、小さなほくろがあったのだ。それが、そのほくろが。

和菓子さまの顔立ちから「すっきりと爽やか」だけでは表現できない何かを醸し出していたのだ。

が。

そこまで分かったのはいいけれど、それがなんというものなのかが慶子さんには思いつかなかった。

……まあ、いいや。

一歩進んだ和菓子さまのお顔への認識を、それをそのままの形で再び慶子さんは心の引き出しにしまった。

ちなみに、慶子さんは預かり知らぬことだが。

和菓子さまは「マダムキラー」として、実はご近所では知る人ぞ知る存在だった。

つまり、慶子さんにはまだ認識できない和菓子さまのお顔の様子を一言で言うならば。

—— 色気。

食い気で一杯の慶子さんには、まだまだ高いハードルである。

まあ、ともかく。

こうして、少しずつ慶子さんにも「青春」らしきものが漂いはじめてきた三月が過ぎ。

そして四月。

慶子さんは、めでたく高校三年生になった。

新しいクラスでの自己紹介も終わり、授業選択や保護者への手紙などのプリント類がほとんど配られ始めた。

「全部受け取った人から帰宅OK」と担任の先生の声がする中、慶子さんの机の上にはばらりと一枚の紙が載せられた。

「柏木さん、空欄にサインして」

こりやまた面倒だと思いつつ、慶子さんは筆箱からボールペンを出すとその紙にサインをした。

そしてこれはどうするのだろうと、きよろきよろと周りを見渡すと「入部ありがとう」という声が横の席からしてきた。

慶子さんがサインした紙をひらりとその声の主は取り上げた。

左隣の席の男の子だった。

確か名前は、鈴木 学君といったはず。

「え？ 入部？」

「うん。柏木さん、クラブどこも入ってないでしょ」

確かにそうだけれど、自己紹介ではそんなことは言わなかったはず。

「あの。昔、同じクラスだった？」

そんな覚えはないけれど、それだったらどこかで慶子さんが部活をしていないという話を聞いたのかもしれないと思ったのだ。

「いや。クラスは今回初めて一緒」

にやにやと笑いながら、隣の席の鈴木君は慶子さんのことを眺めている。

「一期一会だよ、柏木 慶子さん」

そう言うと、鈴木君は前髪をぱっと上げた。

すっきりとしたお顔の目もとに、ほくろが一つ。

「わっ、わ、和菓子屋さん」

「正解。で、ようこそ剣道部に。初心者大歓迎なんで」

そう言うと、和菓子さま鈴木君は慶子さんのサインしたプリントをカバンに入れ、「詳しいことはまた後日」と言って教室から出て言った。

残された慶子さんは、腰が抜けるほど驚いていた。
けれど、クラスはざわめいたままで、そんな慶子さんの様子に誰ひとりとして気がつかないようだった。

柏木慶子さん、高校三年生の春。
和菓子と剣道に。

未知との遭遇。

1・はじまりは、仙寿ノ（三月）（後書き）

和菓子が好きで、和菓子の物語が書きたくて書いた物語です。
多くのかたに読んでいただきたいと思い、登録しました。

2・ときめきの春霞／（四月）

四月は卯月、春爛漫。

春眠なんか、と言うように、春は眠い。

只今青春真つ盛りで乗りに乗っている柏木 慶子さんも、当然眠い。

けれど、慶子さんにはそれだけじゃない理由があるようで……。学校への道をてくてくと歩きながら、慶子さんはこの眠さの原因となったことについて考えていた。

誰もが一度はなつてみたいと思う「三年B組」にめでたくもなつた慶子さんは、ひよんなことから同じクラスで隣の席の和菓子さまこと鈴木 学君から剣道部に入ることを勧められ（と、いうか。入部届けに署名させられ）、更に昨日は「これ、読んでおいて」と一冊の本を渡されたのだ。

その本の題名はズバリ「いろはの剣道」。

「初心者 of 剣道」でも「剣道1・2・3」でも「ホップ、ステップ、剣道！」でもないその絶妙な本の題名に、流石和の心を持つ和菓子さまお勧めの本だなあと感心してしまった慶子さんは、そこでもついうっかり「お断り」出来ぬままそれを受け取ってしまったのだった。

そう、慶子さんは剣道部入部のお断り「も」したかったのだ。けれど現実には、入部も本も受け入れてしまい。

にっちもさっちもいかず、八方ふさがりの慶子さんだった。

とはいえ、活字好きの慶子さん。

入部をする気はないにしろ、剣道というもののへの知識的興味はあって、ついついページを捲ってしまったのだ。

そう、それが昨晚のことだった。

「いろは」の割にはやけに分厚いその本を、慶子さんは一ページ目から丁寧に読みだした。

が、慶子さん。

思えば、剣道というものを直接的にも間接的にも見たことがないことに気がついた。

柔道なら、テレビで見たことがある。

お相撲は、小さな頃家族で両国に見に行った。

空手は、テレビで瓦を割る人を見た記憶がある。

けれど、剣道は。

記憶のどこをどう探しても、見たことがなかった。

そしてそのことに、慶子さんは愕然とした。

剣道は日本の武道なのに、日本人として十七年間も生きてきて、なのに一度も見ることがなかったなんて。

一体、剣道ってどんなスポーツなんだろうと慶子さんは思った。

（剣道をカタカナの「スポーツ」と言っているのか、慶子さんにはわからなかったが）

ともかく日本で生を受けた者として、あまりにも剣道を知らなすぎたことを大いに反省した慶子さんは、急いでパソコンを立ちあげ、剣道少女を主人公にした有名小説を図書館のウェブページから予約した。

当然待ち人は多かったけれど、小説によるアプローチが自分には一番入りやすいものだろうと思えたからだ。

ちよつとずれている慶子さん。

まあ、そこが彼女のいいところなんだけれど。

兎にも角にも、自分のしたことに満足した慶子さんは再び「いろは」にとりかかった。

……が。

今度は慶子さん、剣道をする為に身につけるあれこれの多さに愕然とした。

「いろは」によると、まず剣道をするには、上に着る剣道着と下

にはく袴が必要だそうだ。

しかも、着用にも決まりがあるようで。

袴だけ見ても、その前方は下げ、後方は上げ気味なるように着用しなくてはならないらしい。

これから「運動」をするというのに、着衣の際にこんな決まりがあるなんて。

運動の際に身につけるものとしては、体操着とスクール水着にしか縁のなかった慶子さん。

まさに、カルチャーショック。

驚愕の事実だった。

更に剣道着の着用時の注意として、胸で結ぶ紐（胸紐というらしい）は横結びだとか、袴の後ろ部分の腰板は腰骨にあてるとか、細かなことも書いてあった。

「いろは」に載っている写真をじっと見る慶子さん。

これを……一人で着るんだろうか。

それとも誰かに着せてもらうのだろうか。

自慢じゃないが、浴衣だって一人で着ることはできない慶子さん。

ふう、とため息をつき天井を見上げた慶さんは、十秒くらいはそのままでいたが、ぱつと姿勢を元に戻すと気分も新たにと次のペー지를捲りだし、そこにあった鎧グッズを見た。

念のために言うならば、剣道には「鎧グッズ」なる名称のものはない。

慶子さんが本の中の写真を見て、自分の中で分かりやすくするために勝手にそう変換して呼んでいるだけだ。

くれぐれも、お間違えないよう。

さてさて、と慶子さんは、鎧グッズの説明を読みだした。

「いろは」によると、剣道着と袴を無事に着用した後は、面、小手、銅、そして垂たれというものでボディを固める必要があると書かれていた。

そして、必要なもの全て着用したという写真を、慶子さんはじつと見た。

肌が出ているのは、足元だけで（裸足だ）、あとは身につけるもので全てが覆われている。

これじゃ、この格好では、このままの姿だと誰が誰だかわからないのでは？ と疑問に思う慶子さん。

ああ、だから名前が必要なの？ と垂の前にある個人の「名前」に目がいく。

この垂の一番前に付いている名前。

試合をする者は、垂の中央にこれをつけると書いてある。

名前なんてそれぞれ違うわけだから、つまりがオーダーメイドになるのだろうか？

じーっと写真を見ながら、いきなり垂に付ける名前について勘定を始める慶子さん。

そう。慶子さんは締めり屋さんだ。

それは、母に代わり家事をするようになってから身につけたスキルだ。

お料理もお掃除も一応はできるようになった慶子さんが最も好きな家事は、スーパーでのお買い物だった。

ここ数年の経験で、商品の底値情報は歴史の年号よりも動詞の活用よりも頭に入っている。

きつと将来はいいお嫁さんになるだろうし、結婚しなくてもどうにか生活していけそうな経済観念の持ち主なのだった。

先程の慶子さんの心配に戻ると、人間というのは不思議なもので、実際は全て着用して顔が見えなくても、仲間として活動するうちになんとなくのシルエットで誰が誰だか分かってくるものなのだけど。

けれどそんなことは、今の慶子さんに分かるはずもなく。

ただただ慶子さんは、何から何までもが未知の世界の剣道を、本を捲ることで探求中なのであった。

そして慶子さんは、またもや感嘆の声をあげた。
な、なんと。

手ぬぐいの被りかたにまで指南が！

面をつける前に、頭部を手ぬぐいで巻くのだが、それにもやり方があるようだった。

慶子さんは眩暈がした。

一体剣道は、「剣道をするまで」にいくつのハードルを越えねばならないのだろうか。

こんなにも決まりが沢山あったら、着たり、身につけたりだけで部活時間が終わりそうだと慶子さんは思った。

断ろうとしているのに、部活時間について考えてしまう慶子さん。

素直なんだか、お人よしなんだか、単に忘れっぽいんだか。

つまり、そんななんだかんだで夜は更け。

今朝、慶子さんは寝不足さんなのであった。

あくびをする時は手で口を覆いなさい、と両親からいつも言われる慶子さん。

歩きながらも、空いている手を使いしっかりとそれを守るけげな乙女である。

ところで、両親と言えば。

慶子さんは、剣道部についてのあれこれを親には言っていないかった。

断るつもりのもので、下手にあれこれと言いたくなかったのだ。

だから、今日こそは和菓子さまに入部のお断りをしないとけないと慶子さんは思っていた。

お断り。……できるはず。

だって「鈴木 学」君は、隣の席なんだし、同級生なんだし。

つまりが同じ年の男の子だ。

とは分かっているのに。

やっぱり慶子さんにとって、鈴木君は和菓子さまであり。

自分は尊敬する和菓子さまに言われたことを、果たして断ることができるのか？

本当のところ、自信がない慶子さんであった。

しかし、かといって、やはり自分に運動部は無理があると思えた慶子さん。

臉を閉じると、小学生の頃から可愛いアヒルさんの成績だった体育の評価が浮かんでくる。

ちなみに、他の教科はどうかというと、体育以外は大仏さまのお耳だった。

つまりが、三（三）。

しかし、何かの拍子にあひるさん二羽分の成績をもらう教科もあったため、トータルでは評定は三を下ることなくキープできていた。

成績に関しては、平均という言葉を体現化した人物なのであった、慶子さんは。

人の価値は学校の成績だけにあらず。

これは、どちらかというとお勉強ができたほうであった慶子さんの両親が、結婚し親になり慶子さんを育てる中で見出した子育てに関するモットーだった。

お陰で、すすくと育った慶子さん。

そのすすくさが、学業だけでなく、和菓子さま鈴木君にも向けられると一気にことは解決しそうなものだが。

まあ、そうなりそうもないところが、慶子さんの慶子さんたる所以^{えん}。

そんな自分の性質^{たち}に抵抗するかのように、歩きながらもぶつくさ
と、「できない」、「できる」などと花びら占いのような言葉をつ
ぶやく慶子さん。

その結果、春は危ない人が多いなあと避ける人々により、慶子さんの周りは人口密度が少なめに。

と、そんな中。

慶子さんに向って一直線に走って来る一人の人物の姿があった。

「柏木さんっ！」

自分を呼ぶ元気な声に振り向き、慶子さんが目にした人物とは。

「あれ、山路さん」

昨年同じクラスだった、山路やまじ 茜あかねさんだった。

「おはよう」と慶子さんが挨拶をすると、山路さんからも「おはよう」ととても嬉しそうな返事が返ってきた。

そして、「今朝はとっても嬉しくって」と山路さんは言う、えへへと笑った。

朝から機嫌のいい山路さんはいい人に違いないと（それには何の根拠もない）思った慶子さんは、「そうなんだ。えへへ」と同じような笑顔で返した。

すると山路さんはそんな慶子さんに、「ありがとうね。朝から柏木さんに会えるなんて、もう、大感激よ」と言ってきたのだ。

大感激。

朝、私に会えたことで？

……これは一体どういうことだろうか、と流石の慶子さんもうぶかしがる。

朝に会えて嬉しいような風貌（とてつもなく美人とか）でも、人望（とてつもなく善人とか）でもないと、自分について思っているからだ。

そんな慶子さんの様子に気がついたのだろう。

山路さんは、「あれ？もしかして訊いてない？」と言ってきた。

「私ね、剣道部なの。それで、昨日鈴木から柏木さんが入部するって聞いて！」

なんと、山路さんは剣道部。

そして、私の入部について聞いていると。

ちよつと待つてと、あわあわしだす慶子さん。

あわあわするあまり「だから、それは、お断りしたいのよお」との言葉も出てこない。

「昨日ね、そのことを聞いた時は耳を疑っちゃった。うそでしょつて。でも柏木さんの入部届けも見せてもらって、鈴木君が本も貸したって聞いて、ああ、これは本当なんだって、もう興奮しちゃた！ 凄く嬉しいし、ホント助かる。だって、五月にはクラブ紹介があるじゃない？ 部活の勧誘活動も始めなくちゃいけないし。ほら今つて、剣道の女子部は私しかないじゃない。それってこれから後輩を迎えるのに辛いつていうか」

ん？ と思う慶子さん。

山路さんの気になる言葉をリフレイン。

—— 剣道の女子部は私しかないじゃない。

え、えええつ？

ちよつと待つてえ！

山路さんの言葉に心の中で思いつきり突っ込みを入れる。

「ほら、みんな他大学受験の為に部活をやめちゃつて。で、これで二年生でもいればまだ大丈夫だったんだけど、去年の新入生勧誘に失敗して入部者ゼロ。柏木さんがいなかったら、私は女子一人だったからほんと助かったしありがたいなあと感謝なんだ。で、入つていきなりで申し訳ないんだけど、こういった事情なんで柏木さんに是非副部長をお願いしたいなあ。部長は私なんだけど。まあ、二人しかいないわけだから、そうだよ。ってことで、どうぞよろしくね」

山路さんは嬉しそうに、再びえへなんて笑っている。

その山路さんの笑顔を見て、もう断ることはできない状況だと慶子さんは悟った。

入部と同時に副部長。

柏木 慶子さん、剣道未経験にもかかわらず、副部長決定。

頂垂れ（うなだれ）ながら慶子さんが教室に入ると、既に和菓子さまは席についていて、イヤホンで何やら聞いているようだ。

慶子さんに気がついた和菓子さまは、片方のイヤホンを外すと「おはよう」と声をかけてきた。

「おはようございます」

同級生なのに、隣の席なのに、和菓子さまに対しては丁寧なしゃべりになってしまう慶子さん。

本人にその自覚はなし。

「今日の放課後から、部活に出てほしいんだけど」

さつき別れ際に、山路さんから言われたことと同じことを和菓子さまが言う。

「はい。先程、山路さんからもそう声をかけられました」

魂がどっかに飛んだ状態ながら、慶子さんは答える。

山路さんからは、今日はともかく見学して欲しいと言われた。

慶子さんが初心者であることから、まず剣道がどんなものかを見てほしいと。

放課後、山路さんは慶子さんをB組まで迎えに来てくれると言った。

そして、部室やらを案内したあと一緒に剣道場に行きましょうと。

その言葉を聞いて初めて慶子さんは、自分の学校に剣道場なるものがあることを知った。

「そっか。山路に会ったんなら大丈夫だな。ところで、柏木さん、そろそろお店に来たほうがいいよ」

「お店」の言葉に、慶子さんはぱつと元気よく和菓子さまを見た。

剣道の時とは全く違う慶子さんのお顔の輝きに、鈴木君は表情に

は出さなかったが面白いなあと思った。

慶子さんは、和菓子さまのお店には四月に入ってからすぐに行った。

桜の和菓子が出ると聞いていたからだ。

そして、その時買った和菓子は、「はなびら」という桜の花びらを模した「練り切り」のものと、「初桜」と名付けられた淡い紅色と白の「きんとん」をのせたものと、桜の葉を「道明寺」でくるんだ「桜餅」の三つだった。

同じ桜をモチーフにした和菓子なのに、三つが三つとも違っていったのだ。

そしてその時、和菓子さまが言ったのだ。

「花見は和菓子屋でもできるよ」と。

謎のようなその言葉に当然慶子さんは首を傾げ、それは一体どういう意味なのかと尋ねたところ、「四月は時期をずらして三回お店に来るといいよ」と和菓子さまは言ったのだった。

そしてその時期は、こっちから教える、と。

その時期というのを、一体どうやって自分に教えてくれるのかと慶子さんは疑問だったのだけれど、なるほどあの時には既に和菓子さまには慶子さんが同じ学校の同じ学年に在籍することが分かっていたのだらう。

つまりが、このお誘いは、そういうことなのだと慶子さんは理解し喜んだ。

「今日の帰りに、寄らせていただきます」

打って変わっての笑顔の慶子さんに、和菓子さまも小さく笑った。

和菓子さまは、剣士さまでもあった。

慶子さんは、ぼーっとしながら帰宅の途についていた。

そして、つい今しがた見ていたことを思い出していた。

放課後、山路さんと部室に向った慶子さんはそこで慶子さんが使っている鎧グッズと、剣道部をやめたという女の子からの剣道着と袴と未使用だという竹刀を二本渡された。

剣道着と袴は洗濯したばかりなのか、石鹸のいい香りがした。

しかし、鎧グッズは。

中でも小手は、なかなか香ばしものがあった。

でも、無料である。

無料の文字の前には、香ばしさは消えてしまう慶子さんだった。

どうやら、それらを貸してくれる子と慶子さんの身長は同じくらいだったようで、大きさについては何の問題もなかった。

それらを確認したあと、慶子さんは山路さんが剣道仕様に着衣を整えるのを待ち（山路さんは一人でスムーズに、何の問題もなくそれらを身につけていった！）、一緒に道場へと向かった。

半地下にある道場に着くと、既に男子部員が準備運動を始めていた。

山路さんから女子部の人数が少ないために部活は男子部と一緒にやっていると聞いていた慶子さんは、道場に入る前に山路さんに倣って一礼すると、山路さんに言われたように道場隅に空いてある椅子に腰かけた。

すぐに山路さんも、男子に混じって準備運動をしだした。

準備運動は主にストレッチで、これなら自分にも出来ると思った慶子さん。

……ささやかな自信である。

山路さんばかりを一生懸命に見ていた慶子さんだったが、ふとその中に知ったシルエットを発見した。

和菓子さまだった。

ほほう、と思う。

和菓子さまは、流石和の人なだけに剣道着も様になっていた。

立派な若者だなあと、その姿にしみじみと感心する慶子さん。どうも感心の仕方が、年よりじみているのが気になるところだ。次に、みな一旦綺麗に並んで座ると防具（鎧グッズではなく、そう呼んだ方がいらいしいことを山路さんの言葉の中から知った）をつけ出した。

慶子さんの不安をよそに、みなてきばきとそれらを身につけていく。

あっさりとしたものだ。

そして、稽古が始まった。

最初は素振りだった。

やはり、何事も基本が大事なんだなあと思った慶子さん。

そんな、十数人が一斉に素振りをするのをしばらく見ていた慶子さんは、その中でも動きに切れがある人もいれば、流れがちになる人がいることに気がついた。

素振りの次は、二人一組になって、打つ人と打たれる人に役割を分けて左右の面を連打する練習が始まった。

道場の中に、「面！」の掛け声と竹刀で面を打つ音が響いた。

と、そこでも、面に入る竹刀の音がスコンといい音がする人（もしくは「時」と、そうではなくペシリとあまりいい音でないものがあることに気がついた）。

山路さんはどうなんだろうと、山路さんを探してみると、彼女は今、和菓子さまと稽古をしていた。

そういえば、みな垂に名札は付けていなかった。

なのに、最初からずっと見ていたせいか、慶子さんには山路さんと和菓子さまのことが分かったのだ。

と、その時、スコンといい音と同時に山路さんの「面！」の声が聞こえた。

美しかった。

打つ山路さんも美しかったけれど、それを構えて迎える和菓子さまの立ち姿も動きも美しかった。

そんな和菓子さまを見て、剣士さまだ、と慶子さんは思った。
和菓子さまは、剣士さまだと。

そして、「強いは美しい」という、そんな言葉も浮かんだ。
少しだけ、和菓子を好きになった時と同じ思いが慶子さんの中に
生まれた。

が。

更に稽古内容が試合のように激しくなった途端、そんな思いは吹き飛んでしまった。

これは。

もしや。

剣道とは。

格闘技、でしょうか？

打った勢いのまま相手の体に当たってしまったたり、打ち込む時の
あの勢い。

中にはそれを受けきれずに、上手く下がれず、転んでしまう人
いた。

……。

冷や汗がたらりと流れる。

できない、できる。

心の中で再び花びら占いを始める慶子さん。

よくよく考えたら、そもそも初心者の慶子さんがその域にまで
達することができるかどうか、そこを考えるべきなのに。

初心者なのに、もうそこまで自分がすることを考える慶子さんは、
前向きかもしれないが。

まあ、そんなこんなで見学は終わり、このあと塾に行くというタ
フな山路さんと別れ、慶子さんは一人家路について現在に至るわけ
である。

慶子さんの学校は、慶子さんの家の最寄り駅の二つ先にあった。慶子さんは大学まで続くこの学校を、近所だからという理由でダメ元で受けた。

どうやっても、学力的に今一步足りないこの学校に、補欠合格ながらも慶子さんは滑り込んだ。

その時、慶子さんだけでなく両親も、「これで慶子の運は使い切った」と思ったことは、それぞれの胸中だけにあることだった。

電車を降りて、家への道をてくてくと歩くうちに、慶子さんの頭から徐々に剣道は消え、そして和菓子で一杯になってきた。

不思議だなあ、と慶子さんは思う。

和菓子さまの和菓子屋さんで、和菓子と出会う前までは、和菓子の事に興味はなかったのに。

なのに、今は頭の中は和菓子の事で一杯だ。

そしてたまに、無性に餡子が食べたくなるなんて、今まで起きなかった現象まで慶子さんに起こってきたのだ。

本当に不思議だなあと思いつつ、足取りも軽やかに和菓子屋「寿々喜」（すずき）へと向かう慶子さん。

和菓子さまのお店は「寿々喜」といった。

寿々喜……すずき、鈴木かあと慶子さんは、またもやガッテンのポーズをしたくなった。

とまあ、そんな慶子さん。

「寿々喜」に着くと、いそいそと扉を開けた。

「いらっしやいませ」という声とともに、和菓子のなんともいえない微かな甘い香りが漂ってきた。

鼻を広げて匂いを吸い込む慶子さん。

店内には、慶子さんが和菓子さまの母上と思っている女性で密かに「女将さんおかみ」と呼んでいる人物がいた。

女将さんはお客さまが慶子さんだと気がつくと、びっくりした顔になった。

「もしかして、学と同じ学校でしたの？」

制服が、と女将さんが言った言葉に、今度は慶子さんが驚いた。そういえば、学校帰りに寄るのはこれが初めてかもしれないと慶子さんは思った。

そして、どうやら和菓子さまは、慶子さんについてのあれこれの一切を女将さんには話してないらしい。

「はい。同じクラスです」

慶子さんがそう答えると、女将さんはなるほどという表情をした。

「学から、今日あたりお客様がご来店になるので、お菓子をいくつかとっておくようにって言われていたんですよ」

そういうことだったのね、と小さな声で女将さんは言うと、ショーケース内のはじめに置かれていたちいさな黒い器を出し、その蓋を開けた。

慶子さんも近寄り、それを覗いた。

中には三つの和菓子が入っていた。

一つ目は、前も買った「はなびら」だった。

若干、はなびらの色が濃くなっているように思えた。

二つ目は、桜餅だった。

葉に包まれた餅は、道明寺ではなく餡子を薄い皮で挟んだものだった。

そして三つ目が変わっていた。

丸みがあるやや四角めの和菓子は、下から上へと濃淡のグラデーシヨンがかかっていた。

紫から薄ピンクそして白へと。

まるで小さな和菓子の中に、一つの景色がのみこまれたようだった。

そしてその景色の中に、可憐で小さな小さな桜の花びらが二枚、溶けるようにのっていた。

山の景色だ、と慶子さんは思った。

春の暖かな空気の向こうに見える山々。

そして、その空気に溶ける桜の木々。

煙る花びら。

まろやかで、どこか雅な。

「このお菓子の名前は、なんていうんですか？」

慶子さんが女将さんに訊くと「春霞です」との返事が返ってきた。

そうか、霞かぁ、と慶子さんは思った。

霞の中に溶ける桜かぁ、と。

他の人からしたら、どうってことないことなのだろうけど、慶子さんは感動してしまった。

凄い、と。

きつとこのお菓子を作っている人は、すばらしい人に違いないと。

女将さんが包んでくれたそのお菓子を、慶子さんは大事な宝物のようにして持ち帰り、またもや両親の前で聞いたばかりのうんちくを述べた。

そしてそのあと。

慶子さんは、自分が剣道部に入ること両親に伝えたのだった。

翌朝、電車を降りて学校へ向かう中、「柏木さん」と声をかけられた。

振り向くと、和菓子さまだった。

ぎよつと身構える慶子さん。

正直未だに、学生服の和菓子さまに慣れないのだ。

でも、と思う。

剣道着姿の和菓子さまは、良かったと思う。

そして当然ながら、和菓子屋さんの格好の和菓子さまも。

「おはよう」と言う和菓子さまの声に「おはようございます」と丁寧ていねいに答える慶子さん。

「次は二十日過ぎかな」

慶子さんと並んで歩く和菓子さまの声が上から落ちてきた。

その和菓子さまの言葉に、慶子さんは気分がぱっと明るくなる。

昨日和菓子を食べながら、和菓子さまの言った「花見は和菓子屋でもできる」という言葉の意味がわかった慶子さん。

最初は、咲いたばかりの初々しい桜が和菓子になっていた。

そして次は、今まさに満開といった感の桜へと変わっていた。

と、いうことは。

「凄く楽しみです」

和菓子の中で、どんな風に桜が散っていくのか。

そんなことを思いながら、慶子さんは和菓子さまと一緒に学校への道を歩いて行った。

3・謎解きの柏餅／（五月）

薫風に、ベランダの鯉のぼりも揺れる五月、皐月。

花屋さんの店頭には菖蒲の葉も並べられ、そして和菓子屋さんでは、端午の節句の祝い菓子として柏餅も並びだした。

この時期になると、昔の古傷が疼く柏木　慶子さん。

小さいころのあだ名は、柏餅。

柏餅は好きだし、怨みもないのだけれど。

思いがけず嫌なことを言われた記憶というのは、十年以上経った今でも悲しいかな疼いてしまうもので。

更に言うと、今日はその原因と会わなくてはいけなくて。

このところの筋肉痛もその憂鬱な思いに拍車をかけ、大変ブルーな慶子さん。

筋肉痛の原因は、この四月から始めた剣道。

高校三年生になって、初めて入ったクラブである。

ちなみに慶子さん、剣道は堂々たる初心者。

なのに、クラブのお家事情により入部と同時にめたくも副部長就任。

更に、今月の終わりには新入生に向けてのクラブ紹介および勧誘をしなくてはならず。

なんとか先輩らしい体裁をそれまでに整えようと、部長である山路まじあかねさんの指導のもと、毎日素振りと所作の稽古に余念がなかった。

このスキルアップ。

正直いつて、アップアップ。

未だかつて運動神経と友好的な関係を築いたことのない慶子さんの身にとっては、なかなかハードな日々なのであった。

そんな中、唯一慶子さんに剣道を続ける上での光というものもあって。

この慶子さん、見かけの割には、物を持つ力（腕の力）と物を掴む力（握力）がとてもよろしかったのだ。

剣道で使う竹刀は、四百グラム程度。

けれどそれを、ずっと正しい位置でキープしたり素振りをするのは、意外にも大変なものなのだ。

それを、なんとかだけクリアできている慶子さんに、山路さんは内心ほつとし、同時に、もしかこのことを知っての勧誘だったのか？ と彼女を勧誘した同級生のことを考えたりもした。

慶子さんを勧誘した同級生は鈴木 学君といい、山路さんからしてみればひょうひょうとして掴みどころのない奴、という評価だった。

ところがどっこい、これが慶子さんの評価となると全く違う。

慶子さんにとっての鈴木君は、「和菓子さま」であり「剣士さま」でもある、尊敬に値する人物なのであった。

まさか同級生の女の子から尊敬の念をもたれ、このように呼ばれていることを鈴木君本人が知ったら、驚いちゃうこと間違いなしだ。

けれど、これは慶子さんの心の中だけにあるもので、内緒で秘密のことだった。

よって鈴木君に知られることもなく、穏やかな同級生の日々を送る二人だった。

さて、慶子さんが薫風に吹かれながらとぼとぼと歩いている先は、その鈴木君のいる和菓子屋「寿々喜」（すずき）である。

数日前、慶子さんは母に頼まれ、親戚の集まりに持参する和菓子の注文をしたのだ。

今は、その受け取りに行くところだ。

慶子さんは歩きながら、あの日のことを思い出した。

すると、ブルーな気持ちの中に、それとはちがった意味でのときどきが少しだけ混じった。

あの日、慶子さんは母から母方の親戚で集まることになったと伝えられ、その時に持参する和菓子を「寿々喜」で注文してもらいたいと頼まれた。

母方の親戚。

慶子さんの顔は、強張った。

気分は、ブルー。

なんとか用事を作り、行かないことにできないかという考えが、頭をよぎった。

しかし次に、「寿々喜」で和菓子を購入し持参するところ
で、その思考にストップが掛った。

更に集まる理由が、母の快気祝い（慶子さんの母は長いこと病院と仲良しだったのだ）と従兄弟たちの端午の節句のお祝いだと聞かされた慶子さんは、これは行かないことにはできないと悟ったのだ。

実は「寿々喜」行きは、慶子さんの母が慶子さんを思って考えた案だった。

薄々、自分の親戚の集まりに対しどうも及び腰な娘慶子さんに心を痛めていた慶子さんの母は、その場に慶子さんが大好きな和菓子があることで（和菓子というよりは、和菓子屋「寿々喜」が好きなのだろうか？　ここは慶子さんの母も量りかねているところだ）少しでもそれを楽しいものにして欲しいと思ったことと、このところの慣れない部活で頑張っている慶子さんに、たくさん和菓子を買うという楽しさを味わい、元気になって欲しいと思ったからだった。

その母の思惑通りに、一步一步「寿々喜」に近づくにつれ、ちょ

つとだけブルーな気持ちが薄れていった慶子さん。
素直ないい娘さんなのです。

「寿々喜」に着いた慶子さんは、「こんにちは」と言いながら扉をガラガラと開けた。

「寿々喜」の扉は、引き戸である。
すると店内に、和菓子屋さんの服装をした和菓子さまの後姿が見えた。

慶子さんは、クラスや通学中に和菓子さまに会うのはどういうわけか苦手に感じてしまうところがあるのだが、こうしてお店やそして剣道場で顔を合わせるのは好きだった。

にこにこしながら、慶子さんが和菓子さまの後ろ姿を眺めていると、「いらっしやいませ」という言葉と同時に和菓子さまが振り向いた。

あれ、と慶子さんは違和感を感じた。

和菓子さまが老けた、と。

そして表情も、いつになく強面こわおもてのものと。

慶子さんは立ちつくしてしまった。

そして気がついた。

この人は和菓子さまじゃない、と。

しかし任務を思い出し気持ちを奮い立たせた慶子さんは、「あの」と強面の和菓子屋さんに話し出した。

すると老けた和菓子さまの姿をした和菓子屋さんは強面のまま、
なんでしょうという表情をし慶子さんの言葉に耳を傾ける様子を見せたのだ。

その様子を見て、慶子さんは母の主治医を思い出した。

母の主治医も、いつも難しい顔をした笑わない人だった。

でも、慶子さんの質問や不安に思うことを辛抱強く聞いてくれたし、母の退院の際には笑顔さえ向けてくれた。

その主治医と、目の前の和菓子屋さんが慶子さんの中で繋がったのだ。

この人は、大丈夫だ。

今までの経験から、慶子さんはそう結論を出した。

「実は今度親戚の集まりがありまして、まとまった数のお菓子を用意していただきたいんです」

そこで慶子さんは、メモを取り出し、用意して欲しい日時と、人数とその内訳（大人と子ども）、そして予算を伝えた。

和菓子屋さんはそれを黙って聞いた後、「端午の節句のお菓子のご用意ということでしょうか？」と訊いてきた。

慶子さんは少し考えた挙句に、半分はそうで半分は母の快気祝いであることを伝えた。

すると和菓子屋さんは、柏餅とちまき、そして上生菓子の組み合わせの提案をしてきた。

「え。端午の節句の上生菓子もあるんですか？」

てつきり、柏餅とちまきだけだと思っていた慶子さんの顔がぱつと明るくなる。

慶子さんは知るところではないが、こういった慶子さんの表情は慶子さんの素直さを瞬間で表すもので、人の心に響くものでもあった。

和菓子屋さんもそんな慶子さんの表情に感心しながら、上生菓子の説明をした。

その説明は、ブルーだった慶子さんをピンクにするくらい幸せなもので、慶子さんはまるで雲の上に乗ったような、ふんわりとした気分になった。

上生菓子のことは、和菓子屋さんにお任せすることにした。

慶子さんは、自分はなんて運がいいのだろうと、柏餅のこともすっかり忘れ幸福感に浸った。

しかし、それも長くは続かなかった。

柏餅の話になったからだ。

粒あん、こしあん、みそあん、更にはヨモギ餅。

柏餅もバリエーションがある。

そんなことを和菓子屋さんと相談するうちに、慶子さんは再びブルーになった。

そして、今ではすっかり慣れた強面の和菓子屋さんに、「あの。

……柏餅に偽物と本物があるんですか？」と思いきって訊いてみた。

何を隠そう、それが慶子さんの長年の柏餅ブルーの原因だったのだ。

そのことは、両親にも話していない。

何が何だかわからなくて、説明すらできなかったのだ。

そんな長年の悩みだった慶子さんの言葉に、和菓子屋さんが少し愉快そうな顔をした。

「何か言われたことがあるんですね」

和菓子屋さんの言葉に、慶子さんは頷く。

「実は小さい頃、今回と同じ親戚の集まりで、私が食べているのは偽物の柏餅だつて言われたんです」

「偽物、ですか」

「はい。偽物、です」

和菓子屋さんは少し考えたあと、「それは、柏餅の餅が偽物だつて言われたんですか？」と訊いて来た。

慶子さんは少し考えた。

そして思い出す。

あの子は、自分が渡した柏餅を見て、その皮をとって。

「お餅というよりも、その皮を。お餅を包んでいる柏の葉を偽物だつて」

——「こんなの柏餅じゃない！ 偽物だ！ 偽物柏餅！」

あの子はそう言って皮を慶子さんに投げつけてきたのだった。

一人っ子でのんびりと過ごしてきた慶子さん。

人から物を投げられた経験はなかった。

皮だから、投げられても痛くはなかったのだけれど、人に物を投げられたという事実には、慶子さんはショックを受けたのだ。

しかも「偽物」。

「偽物柏餅」。

柏木だけに、「柏餅」と呼ばれることは多かった（主に、男の子から）。

柏餅に怨みはないけれど、正直あんまりいい気はしなかった。

あの子は、慶子さんのあだ名が柏餅だなんてことは、知らなかったのだと思う。

けれど、慶子さんにとってはそれは「お餅」であると同時に、「自分のことを指す呼び名」でもあり、それに「偽物」という言葉がつくことで、自分はダメなんだと言われているように気持ちになったのだった。

悲しかった。

ぐしゃつと、心がつぶされる思いがしたのだ。

「葉ですか。なるほど」

和菓子屋さんはそう言うのと、少し考えたあと、「わかりました」と言った。

「そのようにおっしゃった方も、今度の集まりにいらっしゃるんですね？」と和菓子屋さんは訊いてきた。

慶子さんがそうだと答えると、和菓子屋さんは「もしかしたらお力になれるかもしれません」と言い、柏餅にちよつと工夫をしてみますと言ったのだ。

慶子さんは目がまん丸になった。

これだけのことで、謎が解けたのだろうか。
でも、和菓子屋さんの顔を見ていたら、希望が湧いてもきたのも
事実。

だから慶子さんは、「お願いします」と勢い良く頭を下げた。
そして顔を上げた慶子さんと、「かしこまりました」と言っ
て慶子さんを見た和菓子屋さんの視線がぶつかった。
途端、慶子さんの頭の中に星くずがきらめいた。

初めての経験である。

あまりの出来事に、慶子さんは何がなんだかわからなくなり、
その何がなんだかわからないまま、お店をあとにした。

そして気がついたら、慶子さんは家の玄関で靴を脱ぐために座っ
ていて。

しばらくそのまま、立ち上がれなかった。

「いらつしやいませ」

その声に、慶子さんの心臓はをどきりとした。

「寿々喜」に來たのは、あの日以来だ。

お店にいたのは、和菓子さまだった。
すると。

ほっとするような、気が抜けるような、妙な気分になった慶子さ
ん。

けれど、そんな気持ちも和菓子さまの穏やかな顔で一気に吹き飛
んだ。

やっぱり和菓子さまは、ここにいるのが一番似合っている。
ふむふむと思いつながら、慶子さんはカウンターまで歩いた。

「御注文の品の確認をお願いします」

なるほど、カウンターには、柄のない紙袋が一つ、そして箱が二

つあつた。

紙袋には、束になって立てられたちまきが入っていた。青々とし、凜としたものだった。

次に和菓子さまは、一つ目の箱を慶子さんに見せた。

そこには柏餅がずらりと並んでいる。

そしてその中の二つ。

「あれ？」

首を傾げる慶子さんに、「これも、柏餅でございます」と和菓子さまが言った。

これが、本物？

よくわからないけれど、きつと持っていけばどうにかなるのだろ
うと思った。

和菓子さまはその蓋を閉めると、もう一つの箱を出した。

そして、その中は。

「うわ……」

まるでおもちゃ箱の中のような、綺麗でかわいい上生菓子が詰ま
っていた。

赤い鯉のぼり、青い鯉のぼり、そして風に揺れる吹き流し。

更には、兜。

そして菖蒲の葉や花をモチーフにしたもの。

同じモチーフながらも、練り切り*注1で作られたであろうもの
から、寒天を使い見た目も涼しいものまでと、いろんなものがあっ
た。

「これ、この全部を師匠が？」

「……師匠。あ、ああ、はい。店主が作りました」

慶子さん、和菓子屋さん改め心の中で呼んでいた「師匠」という
名前をつい口にしてしまっていた。

本人気付かず。

気付かないまま慶子さんは、箱の中にある節句のお祝いを眺めた。

はかな
儂いなあ、と思った。

こんなに綺麗なのに、心をこめて作られたものなのに。

全ては食べるために——つまりは消えていくために存在しているなんて。

季節に込めた思いも、このお菓子の向こうにある思いも、すべては一瞬で消えてしまう。

それが、儂いと。

ああ、そういえば。

仙寿を食べた時も、そんな思いがあった。

どらやきも、おまんじゅうもおいしいけれど、そのおいしさとはちよつと違う何かが上生菓子にはあるって。

上生菓子は、瞬間目の前に現れ、そこでそのお菓子の中にある世界を食べるものに見せた後、消えてしまう。

逆に、食べて無くなってしまふから美しいのだと。

有限の美しさ。

けれど、その奥にあるものは、人がその美しさを忘れない限りは無限である。

慶子さんは心の引き出しにあった謎を取り出して、今の気持ちをそつと隣に並べた。

すると、慶子さんの中でその謎は、すつと消えていった。

慶子さんは、和菓子の中にある儂いところが好きだと思い、その儂さが「おいしさ」に深みを持たせていたのだなあと思った。

慶子さんにとっては、おいしい、で終われない何かがあったのだ。

慶子さんはお会計を済ませると、お礼を言って家に帰った。
そして車に乗り、親戚の集まりへと向かった。

慶子さんには従兄弟が十人いる。

みな、従兄弟で従姉妹はいない。

その中で慶子さんは上から二番目だった。

一番上は、慶子さんの母の兄の長男だ。

確か、大学生。

次がその弟と慶子さん。

同じ年。

そしてその同じ年の従兄弟は、「偽物」発言の主でもあった。

お互いもう高校三年だし、まさかまた、柏の葉を投げられるようなことはないと思うけど。

師匠からの柏餅を御守りのように感じつつも、慶子さんの心臓は、ばくばくとしていた。

既にみな集まっているようで、玄関は靴だらけだった。

慶子さん一家が家に上がると、あちこちで赤ちゃんの泣き声や小さい子たちの賑やかな様子が聞こえてきた。

慶子さんの母の姿を見ると、涙ぐんでしまっておじさんやおばさんもいた。

自分にとっては母なのに、おじさんやおばさんにとっては、妹であり姉である母という存在が不思議でもあった。

ともかく今日の主役である母は、みなに囲まれて、賑やかだった。

「慶子ちゃんも、頑張ったね」

良子おばさんが、慶子さんの肩をぽんと叩く。

良子おばさんは、母の兄のお嫁さんだ。

「ほんと、よかった」

そう言う、良子おばさんの目にも光るものがあった。

「おばさん、私、お菓子を持ってきたの」

そう言つて袋を机に置くと、おばさんは「まあ、まあ」と言い、「みんなおいで」とちびつこたちを呼ぶと、「優、修、お茶運んで」と言つた。

修君。

やっぱりいるよねえ、といけないと思いつつ慶子さんはため息をついた。

想定内、想定内と思いながら、わらわらと集まる従兄弟の中心にいて、袋から和菓子を取り出す慶子さん。

ちびちゃんたちがいるから上生菓子はあとで、とその箱を机の奥にすつと押しやる。

そして、慶子さんは柏餅が入った箱の蓋をあけた。

「あら！」

ちびちゃんたちよりも、良子おばさんの大きな声が響く。

「まあ！ 山帰来さんきらいの柏餅かしらもちだわ。あらまあ、東京でも買えるのね。まあ、まあ。ちよつと、優！ 修！ 早くいらつしやい」

あつけにとられる慶子さんをよそに、良子おばさんがはしゃぎだす。

すると、良子おばさんの旦那さんであるおじさんもやってきて、

「ほんとだ。あるんだなあ、東京にも」と言つた。

「お待たせ」

そう言いながら、優君が大きなお盆にお急須と湯呑とお皿をのせてやってきた。

そしてその後ろには、両手にポットを持った修君。

机にお盆の上にあつたものを置いた優君が良子おばさんの側に来て、「うわ、山帰来。苦手」と笑うと、「でも、修は好きなんだよな」と言つて修君を見た。

修君はゆつくりと体を動かし、箱の中にある山帰来の柏餅を見た。

おばさんが話し出す。

「おばさんの田舎では、柏餅というと、東京みたいに柏の葉でなく

山帰来の葉二枚でこう挟んだものだったの。結婚してからもおじさんの仕事の関係でおばさんの田舎に住んでいるでしょ。だから以前、東京に来た時に柏餅を見て、もう驚いちゃって」

「おばさんの田舎では、これが柏餅だったの？」

慶子さんが訊くと、良子おばさんがごくんと頷いた。

「そう。柏の葉っぱじゃないのに、柏餅。言われれば確かに疑問を持つてもいいはずだったんだけど、そこらへん全く考えたことなく。だから、おばさん、思わず調べちゃったわ。そしたらね、おばさんの住んでいる方には柏がないんですって」

「柏が、ない」

「そう。だから、昔からこの葉で挟んでいたんだって。それに山帰来だけじゃなくて、地方によって柏餅にはいろんな葉が使われているとも書いてあったわ」

「いろんな葉っぱ……」

「おもしろいわね。それに「かしわ」って言葉には「炊葉」^{かしわ}って意味があつて、食べ物を含む葉はなんでも「炊葉」って呼ぶとかも書いてあったかなあ。なんか、色々と深かったのよねえ」

そう言つと良子おばさんは、みんなに和菓子を食べる様にと声をかけたした。

「もしかして、おまえ。覚えてた？」

修君は慶子さんにそう問いかけた。

慶子さんは、ぶんぶんと首を上下に振った。

「……っーことは、これ、仕返してやつ？」
仕返し。

今度は慶子さん、ぶんぶんと首を横に振る。

「あつそ。あのさ、すっげーいい訳していい？ いや、しちゃうけど」

そう言つと、修君は山帰来の柏餅を手を取った。

「あの集まりの前、両親が喧嘩してて。今から思えば、別にどうっ

てことない口喧嘩の一つにすぎなかったんだと思う。だけど俺は、それをやけに真剣に受け取って。親父が、やっぱ東京が便利だとかなんだとか言ったんだろうな。それに母親が怒って、東京なんて食べ物一つ違うし、とかなんとか」

で、柏餅。

「ほんと、今思うと、アホかってな話だけど、あの時はなんか母親の味方しないといけない気がして。そうじゃなきゃ、いけない気がして……。で、俺も、東京の柏餅なんて食うかって言っていたところにおまえが来て。で、あーいうことに」

ごめんな、と修君は言った。ほんとごめん、と。

その時の慶子さんの気持ちといったら、盆と正月と隅田川の花火大会が一度にきたような晴れやかさで。

そしてなにより、修君の「すっげーいい訳」に胸が熱くなった。と同時に、おばさんの話を聞いた慶子さんは、自分が食べているものだけが、東京で食べているものが「正解」で「当たり前」なのだと知らず知らずのうちに思っていた自分の考えも恥じた。

そのあと、慶子さんたちは師匠の作った和菓子を食べたり、夕飯には御寿司を食べたりで、賑やかでめでたい一日を過ごした。

そして、帰りの車の中で、慶子さんは師匠に心の中でお礼を言った。

柏餅ブルーから解き放たれた慶子さんは、少し表情が明るくなった。

更に、運動と睡眠と精神の安定により、血色もよくなり、高校三年生にしてようやく健康的な高校生女子の雰囲気醸し出してきた。

そして、それが女の子がぐんと綺麗になる時期とぴたり重なり。

新人生へのクラブ紹介で、あれこれ動く慶子さんの姿もこれまた光って見え。

決して剣道は上手くなく、美人というわけでもないのだけど。

「なあ、剣道部の三年女子のあの子、おまえと同じクラスだっけ？」

和菓子さまこと鈴木君あてに、こういった問い合わせが何件かきたことは。

慶子さんは預かり知らぬこと。

3・謎解きの柏餅／（五月）（後書き）

注1：練り切り…あんの繋ぎに求肥、寒梅粉、つくね芋を使い、練り混ぜたもの。

「和菓子の絵事典」（PHP研究社）より要約

4・嘉祥菓子 は賑やかにノ（六月）

先輩、と呼ばれる響きも一々くすぐつたい六月。

水の月で、水無月。

さらに、今月は慶子さんのお誕生月でもあり。

いやはや、めでたい、めでたい。

でも、洗濯物は、乾きません。

朝からの雨に、傘を差しながら学校への道をそろりそろりと歩く

柏木 慶子さん。

頭の中は、朝一で行われる英単語テストのことで一杯。

慶子さんは、現在高校三年生。

多くの高校三年生の頭の中は、英単語どころの騒ぎじゃないわけだから、まあ、ささやかな不幸せとでも呼びましょう。

そんな慶子さんの後ろ姿を見ながら歩いているのは、慶子さんが心の中で「和菓子さま」と呼んでいる同級生、鈴木 学君。

先月の終わりにあった、新人生に向けてのクラブ紹介以来、何故か慶子さんの知らないところで、彼女についてのお問い合わせ係化している人物である。

そしてその横を、バシヤバシヤと、水たまりにもめげずに元気に走り抜けていくのが、山路 茜さん。

慶子さんが春から入部した、剣道部の女子部の部長さんである。

「あ、鈴木。おはよう」

通り過ぎ様に横目でちらりと鈴木君に挨拶をした山路さんは、なんで鈴木って柏木さんに声かけないの？ と思いつつ、そのままの勢いで慶子さんの隣へと並び、「おっはよう！ 柏木さん！」と元気に挨拶をした。

「――あ」

慶子さんが小さく声を漏らす。

その様子を後ろで見ていた鈴木君も、思わずため息を漏らす。

山路さんの元気な声に、慶子さんの頭の中にかろうじて留まっていた英単語たちが、一気にこぼれ落ちてしまったのだ。

学校まであと五十メートル。

一時間目の英語まで、時間にして二十分。

俯く慶子さん。

泳ぐ目線。

残念だけど、水たまりをいくら見たところで、頭に英単語は戻りませんよ。

赤点必至なできの小テストにめげつつもなんとか他の授業もこなし、放課後のクラブ活動に向う慶子さん。

隣には、山路さん。

二人で一緒にいるのにも随分慣れてきた、今日この頃。

道々、今日の練習内容の話になる。

慶子さんと山路さんの努力と、男子部と共同での練習や合宿があるというPRが上手くいったのか、なんと今年は中学からの持ち上がり部員を含めて八名もの女子部員が入った。

しかも、高校からの入学者は、そのうちの六名だった。

その六名、初々しくもみな初心者。

慶子さんの通う学校は、大学の付属校で、高校からの入学者の多くはそのままこの大学に進むと言われていた。

つまり、上手くいけば、この新入生たちの多くが高三まで部活を続ける可能性が高いというわけだ。

高三になって受験の為にとこっそり仲間が抜けた経験を持つ山路さんにとっては、ここが一番のポイント。

山路さんはこの快拳に、「は、鼻血かでそうう」と言って、慶子

さんを驚かせた。

しかし、問題はこれからである。

いかにして、この六名の女の子に剣道を好きになってもらうか。それが大事。

なので、山路さんは新入生の立場に近い慶子さんの意見を参考にすべく、「ねえ、剣道のどこが好き？」なんて訊いてみた。

山路さんの質問に、目を白黒させる慶子さん。

剣道のどこが好き。

思い出されるのは、初めて見学した時の、山路さんと和菓子さまのこと。

打つ山路さん。

それを迎える和菓子さま。

立ち姿も動きも美しかった。

「美しいところかな」

その動きや所作の美しさに憧れた。

「うつ……美しい？」

しかし山路さん、未だかつて慶子さんが言うような感想を誰からも聞いたことはなく、不覚にも面喰ってしまった。

でも、そういえば、と思う。

慶子さんのコメントって、少し変わっているよなあと。

新入生が入ることになった時も、慶子さんが一番心配というか気にしていたのは、「先輩って呼ばれたらどうしよう」ということだった。

それは、はつきり言って山路さんにとっては、「はあ？」なコメントだった。

追加すれば、「はあ？」の「あ」は一度下がって、そして「？」の部分に向けておもいつき上がり気味で発声をお願いしたい。

先輩なんだから、先輩と呼ばれないほうが大問題なのに。

しかも言わせてもらえば、男子部の二年生に、慶子さんは既に「柏木先輩」と呼ばれているはずである。

と、思いながら、いやもしかして、今までの練習はほとんど山路さんと柏木さんはマンツーマンでやっていたので、男子部員との交流はなかったかもなあと思いなおした。

二年男子が、慶子さんに声をかけるってこともなかったかもしれないし。

そんな慶子さんにとって、今度入ってきた一年生こそが、リアルな意味での後輩になるのだろう。

ふむ、と思い、慶子さんに話の続きを促したところ、彼女は高校三年まで家庭の事情でクラブ活動や委員会活動に係わったことがない為、立て繋がり为学校生活を送ったことがないとのことだった。故に（ゆえに）、高三になる現在まで、「先輩」なんて呼んだことも呼ばれたこともないと。

更に、山路さんが慶子さんのことをよくよく見ていると、横つながりとも言える友だちさえそう多くはないようで。

それに気がついた山路さん。

慶子さんと同じくらいこれまた英語は得意でないのに、「オー・マイ・ガー！」と頭を抱えた。

信じられない。

そんな子がこの学校に（しかも去年なんて同じクラスだった！）いたなんて、と。

そして誓ったのだ。

自分が慶子さんの親友になるんだと。

慶子さんの学生時代の思い出の人になるんだと。

山路さん、ちょっと何かに酔っているというか、自己愛入っています。

新入生との練習はシンプルだ。

中学から上がってきた男女経験者は、山路さんを中心に二、三年

男子部員とで稽古をする。

そして初心者、これまた男女一緒に、男子部の部長である福地君を中心に慶子さんも加わって稽古をする。

慶子さん、素振りや作法などは、山路さんの特訓を受けたためと
りあえずはなんとかできる様になっていた。

とはいえ、思いつきり初心者な慶子さんであるので、一年生の練習を見つつ自分も練習をするといった具合だった。

まだ仮入部の時期なので、初心者グループは体操着でやっていた。

一年生の間で、どんな剣道着を貰うかなんて話をしている様子も
ちらほらあり、そんな様子をくすぐったい思いで慶子さんは見てい
た。

そしてそう感じる自分は、もうお客さま的な存在じゃなく、すっ
かり剣道部の一員になっているんだなあとと思ったのだ。

更に、慶子さんは、自分の周りが賑やかになったことも自覚して
いた。

山路さんや福地君を始めとして、今までの学校生活と比べると自
分の名前を呼ばれる回数が増えた。

しかも後輩たちは自分のことを、「柏木先輩」なんて呼ぶ。

つい、何カ月か前までは、まさか自分がこんなことになるなんて
想像もしていなかったことだ。

そう思うと、ついつい道場に和菓子さまの姿を探してしまう慶子
さんなのだけれど、そこに彼の姿はなかった。

今日だけでなく、このところ和菓子さまはクラブを休みがちだっ
た。

気になりつつも、他の部員の人たちは特に何も言っていないので
(だから、それは予め分かっていたことなのだろう)、慶子さんか
らも訊くことはしていなかったけれど。

……お店が忙しいのかな。

そう思った途端、慶子さんの頭には、今日の帰りに「寿々喜」に

寄ってみようという考えが閃いた。
我ながらいい案だと思った慶子さんは、晴れやかな気持ちになった。

雨は帰る電車の中で止んだようで、駅からは傘を開くことなく帰ることができた。

慶子さんはスーパーで、いくつかの買い物をしたあと、その足で「寿々喜」へと向った。

月も新たになったので、おそらく季節の上生菓子も変わっているだろうと思うと、心が弾んだ。

今日は、帰りに家の買い物をする予定だったため、お財布の中身も充実している。

さて、どんなものがあるだろうと期待を込めて、慶子さんは「寿々喜」の扉をガラガラと開けた。

「いらつしゃいませ」

お店にいたのは、女将さんだった。

女将さんは慶子さんの顔を見ると、にっこりとほほ笑んだ。

慶子さんも恥ずかしそうな笑顔を返しながら「こんばんは」と挨拶をすると、そのままショーケースへと向った。

いつも通り、一番上の段に、慶子さんお目当ての菓子が並んでいる。

するとその中でひと際目を引く、まるで宝石を上がちりばめたような菓子が目に入った。

「紫陽花もち」、とある。

つやつやとした道明寺の上に、微妙に色の違う紫色した寒天の小さなキューブが載っていた。

うつとりとそれを眺めていた慶子さん。

次にその右隣に視線を移すと、これまた菓子というよりは、本物そのもののような「青梅」が並んでいた。

緑色したそのシンプルな形は、「紫陽花もち」に比べると華やかさはないものの、シンプル故の潔さがあつた。

そして「紫陽花もち」の左隣には、「撫子^{なでしこ}」があつた。大きく咲く花に、一枚の葉。

葉の緑色があることで、薄いピンク色の撫子の花の可憐さが一段と際立つように見える菓子だった。

紫陽花、青梅、撫子。

三者三様の美しさと存在感に、慶子さんは声が出なかった。ただただ、じつとそれらを見つめるばかりだった。

そして、自分は本当に和菓子の在る世界が好きなんだと実感した。

英単語は頭に入らなくても。

自分はもしかしたら、和菓子に係わることなら、頭に入るんじゃないかと。

「あの」

ごくりと唾を飲み込む慶子さん。

どうやったら、和菓子の勉強ができますか。

慶子さんは、女将さんにそう訊こうと顔を上げた。

「いらつしゃいませ」

その低い声に、体に緊張が走る。

「こ、こんばんは」

女将さんへの言葉を唾と一緒に飲み込んでしまった慶子さんは、この店の店主である師匠に向け挨拶をした。

初めて師匠を見た時、和菓子さまが老けたかと思ってしまった慶子さん。

こうして改めて見ても、やっぱり、似ていた。

そして、どういうわけだか師匠を見ると、どきどきもしてしまう。

「紫陽花と青梅と撫子を下さい」

慶子さんが一気にそう言うと、女将さんはほほ笑みながら「かし

こまりました」と言い、持ち帰りの用意をしだした。
はあ、とため息をつく慶子さん。

その慶子さんの視界に一枚のポスターが目に入った。

―― 六月十六日は、和菓子の日

和菓子の日？

六月十六日、が？

嘘みたい、と思い、顔がにまにましてしまう慶子さん。

「どうかされましたか？」

師匠が低音で慶子さんに尋ねてくる。

師匠と和菓子さまは、声も似ているなと思った慶子さん。

でも、ほんの少し和菓子さまの声の方が柔らかい。

「あの、六月十六日が和菓子の日って書いてあったので。その日は、私の誕生日なので、嬉しいなあって思ってた」

慶子さんの言葉に、目を丸くしたあと、その目の横に皺を作って師匠が小さく笑う。

その小さな笑いというか、微かさは、和菓子さまにそっくりだ。

「そうですか。実はその日にしか売らない菓子があるんですよ」

師匠がそう言った。

「鈴木、いい加減にしるよな」

今日も元気に部活に向う慶子さんと山路さんの耳に、そんな声が聞こえた。

この廊下の角を曲がれば、その声の主を見ることができらるだろう
と思った慶子さんは、一体何事かと様子を見ようとした。

そんな慶子さんを、山路さんが行かないようにと引っぱった。

慶子さんが山路さんの顔を見ると、山路さんは無言で首を振る。そして、山路さんはそのままじっとそこに留まる様子なので、慶子さんもそれに習った。

「部活を暫く休む話は、もうついていたと思ったけど」
和菓子さまの声だった。

しかも、内容は、慶子さんも気になっていた和菓子さまの部活のことだった。

「そんなの、冗談だと思ったし」

不貞腐れたような声は、部長の福地君のものだ。

「新人生入ったし、いつまでもおまえがいないのって困るじゃん」

「困ると言われても、こっちにも都合があるし」

「都合、都合って、一体どんな都合なんだよ。鈴木、そこんと話してくれないし。こっちに説明できないような、やましい都合なんじゃないのか？」

福地君の語気の強さに、慶子さんはびっくりとした。

今まで、和菓子さまの休みについてのあれこれは、自分は知らないだけで、他の部員の人たちは周知のことだと思っていたから。

和菓子さまの都合。

部長の福地君にも話せない都合。

でも、と慶子さんは思う。

今でこそ慶子さんは、母親の病氣のことをなんとか人に話せるようになった。

けれど、まさにその最中は、この先どうなるか見えない時には、人にその話をする事は出来なかったのだ。

何を訊かれても、「家庭の事情」で通した慶子さん。

やましいとか、やましくないとか、そういったことじゃなくて。

誰しも、誰にでも言える説明ができない時というのがあることを、慶子さん自身が体験として分かっていたから。

思わず体が動く慶子さん。

けれど、山路さんがそれを許すはずもなく。

腕を掴まれ動けない慶子さんの横を、角を曲がって歩いて来た和菓子さまが無言で通り過ぎた。

その後も和菓子さまは、部活を休みがちで。

同じクラスで席も隣なのだけれど、なんだか和菓子さまをとてもし遠い存在に感じてしまう慶子さんだった。

そんな慶子さんにも、めでたくもお誕生日がやってきた。

しかも、自分の誕生日というだけでなく、和菓子の日でもあり、師匠が作った「その日にしか売らない菓子」が買える日でもあった。

「その日にしか売らない菓子」は、「嘉祥菓子^{かじょうがし}」というものだ。師匠から「嘉祥菓子」についての説明をちらりと聞いた慶子さん。

その後、本やインターネットを使い、だいたいのところを掴んだ。

ことの始まりには諸説あるそうだが、江戸時代になって盛大に行われた「嘉祥の儀」という行事があり、それが行われたのが、旧暦の六月十六日だったそうだ。

旧暦の六月といえば、暑さも厳しくなり、病気にもなりやすい頃で、そういした災いや、暑気払いの意味を込めて、菓子を食べる行事が「嘉祥の儀」で、そこで食べる菓子を「嘉祥菓子」といったそうだ。

江戸城で行われた儀式では、なんと五百畳の大広間に二万個近くの菓子が並べられ、それを大名や旗本に配ったそう。

なんともスケールの大きい行事だ。

「寿々喜」でもそれにちなんで、その日限定の菓子を販売するということだった。

要予約だというその品。

あの日、その場でばっちり予約済みの慶子さんだった。

朝からそわそわと落ち着かない慶子さん。

そんな娘の可愛い様子に、慶子さんの両親は、二人でこっそり笑っていた。

慶子さんが部活や和菓子などの家以外のことに目が向いて行くことを、誰よりも喜んでいた二人だった。

日曜ということもあり、「寿々喜」の開店時間とともに家を飛び出した慶子さんは、お店に着くといつになく混んだ店内に困惑した。

まるで町内の婦人会のみなさんがごっそり集まったのかと思うくらいの人たちが、お店に溢れていたからだ。

様子を見ると、どうもみなさん目的は慶子さんと同じようで。

お客さまの人数に合わせてか、今日は師匠に女将さんに和菓子さまの総動員でお店に立っていた。

とても忙しそう。

……出直そう。

一刻一秒を争って必要な品だというわけでもない。しかも、自分の家はすぐそばだ。

そう考えた慶子さんは、そっとお店を後にした。

手ぶらで帰ってきた慶子さんに両親は何も言わず、お昼にはちょ

つと豪華なランチを食べに出かけた。

帰りに慶子さんが欲しがっていた本を何冊かと、いらないという慶子さんを母親がひっぱって可愛いナイトウェアを購入し（剣道部の合宿用だ）、ついでに慶子さんにとても似合うコottonのワンピースも見つけたりして（勿論、母親が）、久しぶりに家族でどっさり「慶子さんのものだけ」を買い物した。

いつもは、重い重い食材を持つ慶子さんの両手には、本や服がぶら下がっていた。

家に帰り、服をハンガーにかけているとき、家のチャイムが鳴った。

すると、「慶子、いらっしやい」と慶子さんと呼ぶ父親の声が聞こえた。

父親の声に促され、玄関へと向かった慶子さんは、目を疑った。

和菓子さまが、和菓子さまの格好をしてそこに立っていたからだ。

「こ、こんにちは」

慶子さんが思わず挨拶をすると、和菓子さまも「こんにちは」と返してきた。

そのやりとりは、不思議なことに、慶子さんの中にこしばらくあったもやもやを、無くしていく力があつた。

「先程はお待たせしてしまい、大変失礼いたしました」

和菓子さまが大きな体をぺこりと曲げる。

「と、とんでもない。ちょっと張り切って早くに行っちゃって。」

それにうちは近いので、またあとにでも行けばって」

見ると和菓子さまは手に袋を持っている。

まさか。

「もしかして。わざわざ、ですか？」

わざわざ、慶子さんが予約した菓子を持ってきてくれたのだろうか。

すると和菓子さまは少し黙った後、「ついでです」と答えた。
ついでです、の返事に慶子さんはほっとした。

だって、お店はとても混んでいて。

「あ、お店にすぐ戻りますよね。すみません、お引き留めして」

あたふたとする慶子さんに、和菓子さまが袋を手渡す。

「柏木さん、お誕生日おめでとう」

そんなことを言われるなんて思っていなかった慶子さんは、菓子を受け取ったまま返事も出来ず、啞然とした様子でそのまま立ちつくしてしまった。

「慶子、どうした？」

お客さまは帰ったのに、なかなか玄関から戻ってこないのを心配したような父親の声にはっとした慶子さんは、「今、行きます」と返事をして、そのままリビングへと向かった。

リビングでは、慶子さんの菓子をあてにしてか、母親が緑茶をいれていた。

その母親にほほ笑みながら慶子さんは父親に、「届けてもらっちゃった」と袋をテーブルの上に置く。

そして袋から、菓子が入っているであろう細長い箱を出した。

まるで、マカロンでも入っているかのような、黒くて細長い箱に慶子さんは驚いた。

とても、おしゃれだ。

「洋菓子みたいだな」

父親の言葉に、母親も目を輝かせている。

シンプルにリボンだけ掛けられたその箱をゆっくりと開けると。

「……かわいい」

——うちでは、七種類の小ぶりの饅頭を「嘉祥菓子」として用意いたします。

予約した時の説明はこうだった。

そして目の前には、細長い箱に入った、七つのお饅頭。一番最初に目に入っしたのは、紅白の兎のお饅頭だ。

「なになに、紅白の上用饅頭 兎、うん、これだな」

家族で箱を覗きこんで確認するかのように見る。

そして、次は。

「おお、栗饅頭か。父さんはこれがいいなあ」

つやよく焼き上がった、栗の形をしたお饅頭だ。

ころんとした姿がまたかわいい。

「で、次は利休饅頭。ん？ ああ、生地には黒砂糖だつて。へえ」

そんな名前のお饅頭があるのか、と慶子さんもへえと思う。

「次は酒饅頭。これってよく温泉に行くと売っているよなあ」

中はサツマイモ餡とある。

慶子さん、よだれが出そうになった。

「で、そば饅頭か。素朴な雰囲気があるなあ」

そういえば、蕎麦が食いたいなあと慶子さんの父親が言う。

慶子さんの母親がくすりと笑う。

「最後が、これまた涼しげな、くず饅頭」

饅頭という名前ながら、その見た目は他のものとは全く違う。

涼、という文字がよく似合うお饅頭である。

慶子さんはじつと箱の中身をみながら、今まで自分の中でお饅頭はお饅頭で、特にそれを区分けしたことはなかったけれど、お饅頭の中にもこんなに種類があるんだなあと思った。

箱の中のお饅頭は見ているだけでも楽しく、まるで慶子さんに向けて何か語りかけてくるような、そんな賑やかさもあった。

「慶子、せっかくだから食べよう」

父親の言葉で、それぞれが好きな饅頭をお皿にとった。

慶子さんの父親は、予告通り栗饅頭。

慶子さんの母親は、珍しいからと利休饅頭。
そして慶子さんは、くず饅頭を取った。
饅頭を食べながらも会話が弾む。

今日ここに、この菓子がなくても、柏木家にピンチが訪れるとか、
そういったことはなかっただろう。

でも、今日ここに、この菓子があつたお陰で。
家族は、楽しいひと時を過ごすことができた。

それは、数年後まで残る記念すべきひと時ってことでは、ないだろう。

けれど、毎日の家族の暮らしの中で、幸せだとみなが感じた時間
には違いない。

そしてふと、自分の学校での生活を思った。

—— この間、剣道場で思ったこと。

剣道部に入らなくても、それなりに学校生活を送っていた慶子さん。

けれど、入ったお陰で、今まで知らなかった楽しさを多く享受
することができた。

それは、たとえば、山路さんとのクラブについてのおしゃべりだ
とか、福地君や他の男子部員との練習内容の改善点についての話だ
とか。

もつと言えば、他の人にはささやかなことだと笑われるかもしれ
ないけれど。

「おはよう」、と挨拶をする人が増えたこと。

特別に華やかな何かってわけじゃないけれど、仲間がいるという
喜びを慶子さんは知ったのだ。

それは、自分の周りが賑やかになったことにも繋がった。

そして、その賑やかさと、「嘉祥菓子」の賑やかさが重なった。
嬉しいな、と思った。

そして、その両方を自分にくれたのは――。

その後も、相変わらず和菓子さまはクラブを休みがちだった。

たまに、福地君がぶつくさと言っている様子も目にした。

でも慶子さんは、以前感じたような、和菓子さまをとてもし遠い存在に感じてしまうようなことはなかった。

「行つてきます」

六月最後の日曜日。

慶子さんは、朝刊に入っていたスーパーのチラシをかごにいれ、少し遠くのスーパーまで自転車で向った。

慶子さんはどちらかというと徒歩派なので、あまり自転車を使つてまで買い物に行くことはないのだが、このスーパーは改装オープンということで、超目玉商品があつたのだ。

つきつきしながら駐輪場に自転車を止め、スーパーに入る慶子さん。

滅多に來ないスーパーは面白いなあと、きよろきよろとしながら進む。

と、その時。

「こら、待てつてば」

慶子さんの横を小さな男の子が通り過ぎ、その後を男の人が追いかけて行つた。

きやきやきやと喜ぶ男の子を、よいしょと満面の笑みで抱き上げた人と目があつた慶子さん。

「……柏木さん」

慶子さん、子連れの和菓子さまと。
満面の笑みの和菓子さまと。
未知との遭遇。

5・天の川に思いを込めて／（七月）

梅雨と夏の二つの顔を持つ、七月。

あちこちに飾られる七夕の笹も目に涼しく。

下げられた短冊の色も楽しげだ。

そんな、文月。

ちよつと変化が起きた月。

王様の耳はロバの耳。

最近慶子さんの頭の中には、小さな頃に読んだあの絵本の題名がこだますることがある。

口止めされた訳じゃない。

でもだからって、誰にでも話せることでもないことだという自覚もある。

「柏木さん、おはよう」

その声に、びくりとする慶子さん。

声の主は王様……ではなく、和菓子さま。

同じクラスで隣の席で同じクラブで、そして近所の和菓子屋さんでもある。

和菓子さまはいつものごとく、さらりとしたお顔で慶子さんを見下ろしていた。

慶子さんも、いつものごとく「おはようございます」と、とても丁寧な挨拶を返す。

周りから見ると、同級生なのにちよつと変な関係の二人。

けれど慶子さんは、そんなことには気づいていないし、今はそれどころではなかった。

つい最近、慶子さんは和菓子さまと珍妙な出会いをしてしまったのだった。

それは、先月の終わりの日曜日のこと。

慶子さんは少し足を伸ばしたスーパーで、小さな男の子を連れた和菓子さまに遭遇したのだった。

しかも和菓子さまは、学校やお店では見せたことがないような（とりあえず、慶子さんは拝見したことがないような）満面の笑みをその子に向けていて。

しかも、間が悪いというか、なんというか。

お互いともに、相手に気がついてしまったという、和菓子さまと慶子さん。

お互いともに、まともに正面から認識しあってしまったので、見て見ぬふりということもできず。

一瞬の間の後に、和菓子さまは慶子さんに挨拶をすると、更に連れていた男の子の頭をぺこりと下げながら、「これ、弟」と紹介したのだ。

弟。

ブラザー。

慶子さんは、そう紹介されてからスリーテンポくらい遅れて、心の中で「え！」と驚きながら、でもこれを表情に出すと弟君が驚くかもと咄嗟に考え、「こ、こんにちは」と挨拶をしたのだった。

慶子さんが挨拶をしたのを合図に、「じゃ」と和菓子さまは弟君を抱えて、スーパーのどこかの売り場に消えて行ってしまい。

つまりがその件に関しては、それっきり、なのであった。

しかも慶子さんには見えてしまった。

男の子の靴の左と右に書かれた、「たなか」と「さとし」の名前を。

「たなか さとし」くん。

それが、和菓子さまの弟君の名前なのだろうか。

兄である和菓子さまの名前は、「鈴木 学」だというのに。

……。

靴、貰い物かもしれないし。

弟というのも、弟みたいな子、って意味なのかもしれないし。

分からないことは、心の中の引き出しにしまっ慶子さん。

気のせいかな、最近和菓子さま絡みの謎が多いような。

「新人生、みな定着したって？」

隣を歩く和菓子さまが慶子さんに訊いてくる。

ぱつと気持ちを切り替える慶子さん。

「はい。みんな入部するそうです。今度、試験が終わったら、山路さんも一緒に剣道着を買いに行く予定です」

七月の半ばには、恐怖の定期試験がある。

剣道着は、それが終わってから、みなで一緒に買いに行くことになった。

学校の友だちと（しかも後輩も！）一緒に出かけるなんて、滅多にないことなので、慶子さんは楽しみにしていた。

「良かったね」

本当に、そうだ。

新人生が山路さんが鼻血を出しそうなくらい入ってくれて、しかも一緒にお買物に行く程に仲も良い感じで。

順調すぎる滑り出しだ。

しみじみと山路さんの人徳だなあ、と慶子さんは思った。

「おっはよう、柏木さん、鈴木」

噂をすれば（慶子さんの心の中ただけだ）というので、山路さ

んも元気に合流。

慶子さんと和菓子さまが山路さんに挨拶を返すと、山路さんはすすと和菓子さまの横に行き、「ねえ、鈴木」としゃべりかけた。

そして、「鈴木はさあ、合宿には来るよね？」と言いながら、カバンからプリントを一枚取り出すと、それを和菓子さまに手渡した。

それを受け取りちらりと見た和菓子さまは、「ああ、大丈夫。ん、ああ、どうかな。微妙」と答えた。

「ああ、その答えつてば、微妙」

山路さんがふんと鼻をならしながら言うと、慶子さんに向い「そうだよ、柏木さん」と振ってきた。

戸惑う慶子さん。

そんな慶子さんを可愛いな、と思いながら山路さんは更に「ねえねえ、鈴木」と続けた。

そして山路さんは、ひっひっひつと笑うと肘で和菓子さまを小突き、「私、こんな時の為にと、とっておいた、鈴木が思わず合宿に参加したくなるような、秘密を握っているのよ」と小さな声で言った。

山地さんの言葉に、怪訝な表情を浮かべる和菓子さま。

「見たんだよね」

見た。

その言葉に、慶子さんは、勢いよく山路さんの方を向いた。

「あ、柏木さんも気になる？ うふふ、特別に教えてあげる。ひっひっひつ。ちよつと前のことなんだけど、私見ちゃったんだよね。年上の綺麗な人と鈴木が歩いているのを。随分と素敵な人と付き合っているじゃない？ 鈴・木・クン」

山路さんのその言葉に、脱力する慶子さん。

見たって、「弟君」のことじゃなかった。

ほつとしてのんびりムードになった慶子さんと相反して、和菓子さまはしかめっ面になった。

「ねえ、まさか。人妻？ いやん。鈴木のお母さんが聞いたら悲しむぞ」

山路さんが脅すような口調で言う。

人妻。

「まあ」

慶子さん、「まあ」だなんて、ちよつとオクサマ入った相槌を入れてしまう。

「聞いているだけだし、鈴木のお母さん。なんでも、鈴木がお店にいらすとマダムなお客さまが多いって。鈴木目当てで来るマダムって多いんですよ？ この、マダムキラーム」

マダム。

慶子さんはその言葉で、「嘉祥菓子」を買いに行った時の「寿々喜」の店内の喧騒を思い出した。

慶子さんも思ったのだ。

女性が多いと。

町内の婦人会のみなさまが全員来たような、混みようだ。

和菓子さまは、マダムキラー！

まだ、高校生なのに！

凄いと、尊敬の眼差しで和菓子さまを見上げる慶子さん。そんな慶子さんの視線に、ますます顔をしかめる和菓子さま。

「……限界ってことか」

ぼつりと和菓子さまが言う。

「山路さま、福地と同じクラスだね。今日の昼休み、悪いんだけど奴を誘って部屋に来てくれる」

山路さんはそんな和菓子さまの言葉を聞いて一瞬ほけて顔をしたらあと、「ラジャー」と元気に返事をした。

「で、柏木さん」

「え？ は、はい」

まさか、自分にも何かあるとは思っていなかった慶子さんは、焦って返事をする。

「柏木さんもね」

「私が、何か」

一体、なんだろうという顔をした柏木さんに山路さんが、「柏木さんにも、部室に来てほしいってことよ」と言った。

お弁当を急いで食べた慶子さんは、なんとなくの和菓子さまの視線を感じ、それに誘われるように一緒に廊下に出た。

「急がせて悪いね」

「大丈夫です」

まあ、確かにいつもよりも急いで食べたことは嘘ではないけれど、和菓子さまはそんなことがよくわかるなあと感じる慶子さん。

はっとして、□元に手をやる。

「もしや――」。

「いや別に、ご飯粒はついてないけど」

またしても的確な和菓子さまの言葉に、慶子さんはびっくりする。

和菓子さまって、エスパー？

「そういえば、七月に入ってから七夕に向けた菓子を出し始めたよ」

「七夕のですか？」

「うん。天の川や、織姫にちなんで糸車とか」

「……糸車。あ、織姫って、確か機織りを」

「うん。だから糸車とか、糸をモチーフにして菓子を作るんだよね。七夕過ぎたら下げちゃうから、よかったらそれまでに」

「はい。ありがとうございます」

頭の中で、一体どんなお菓子なんだろうかとあれこれ想像し期待する慶子さん。

□元がにまにましてしまう様子は、しっかり和菓子さまに見られています。

「—— あ、福地、山路も。はあ、あいつら張り切って来たって感じだなあ。ああ、面倒だな」

和菓子さまは、一通りぶつくさとそんなことを言った後、「まあ、仕方ないか」と一人で納得したように頷いた。

部室とは、男子部の部室のことだった。

慶子さん、入るのは初めてである。

「ちょっと、福地。もう少し掃除をきっちりしなさいよ」

慶子さんと和菓子さまが部室の入り口に来た時、山路さんのそういう声が響いた。

「女子の部室は綺麗なの？」

和菓子さまに訊かれる慶子さん。

慶子さんが入部した当時は、確かに少し埃っぽかった。

けれど、新入生を迎えるにあたり、二人で暇を見つけてはちよこちよこと掃除し、更には慶子さんが家からハーブなんかも持ってきて。

そして一年生が入ってから、交代で掃除当番をしたりして。

「綺麗だと思います」

おそらく、客観的に見ても。

「いいなあ。こっちは少し悲惨かも」

そう言いながら入る和菓子さまの後をついて、部室に入る慶子さん。

失礼ながら、いきなりケケホとむせてしまった。

山路さんは、「換気、換気」と言いながら窓を開けていた。

福地君は「そんな酷いか？」と、あまり自覚がないようだった。

「で、なんだって？ 鈴木君」

福地君が口火を切る。

誰かの何かで（布らしきもの）、ベンチを拭き、よくやく座った四人。

話しをする雰囲気はできた。

「ああ。福地が聞きたがっていた、俺が部活を休んでいた「都合」についてなんだけど」

和菓子さまのその言葉に、福地君の鼻の穴が膨らむ。

「子どもが生まれるんだ」

その和菓子さまの言葉に、福地君の鼻がきゅっと萎む。

山路さんの口は、あんぐりと開いた。

そして慶子さんは、あの日会った和菓子さまの弟君を思い出し、あの更に下に生まれるってことだろうか考えた。

そうになると、生まれてくる子は、「たなか」さんになるのだろうか。

それとも、あれが貰った靴となると「鈴木」さんになるんだろうか。

「いつ生まれるんですか？」

三人の中でこの件に関しては一番質問しなさそうだと思われる慶子さんが、和菓子さまに訊く。

「予定では、もうすぐ」

「もうすぐ、ですか」

「うん。そう」

そうか、と慶子さんは思う。

慶子さんは一人っ子だ。

慶子さんの従兄弟はみな兄弟が多いので、羨ましいなあと思っていた。

だから、和菓子さまのことも、羨ましいなあと思った。

今度は、男の子だろうか、女の子だろうか。

どちらにせよ、羨ましいのは同じだ。

「ちょ、ちょ、ちょいとそこのお二人さん！」

福地君が、どもりながらも発言してきた。

「違うでしょ。そこが焦点じゃないでしょ」

「そうよ。柏木さん、そんな呑気なこと言っている場合じゃないで

しょ。子どもよ、子ども。つまり、鈴木はあの年上の人を孕ませたって——うかが」

山路さんの口を福地君が塞ぐ。

「おまえ、なんて露骨な表現を。柏木さんが驚くだろう、ねえ、柏木さん」

福地君からの振りに柏木さんは、曖昧な表情を浮かべる。

そして考える。

慶子さんはてっきり、生まれてくる子は和菓子さまの弟だと思った。

けれど、山路さんも福地君も、和菓子さまの子が生まれるって思っているようだ。

——そうか。

「ご結婚、されたんですか？」

和菓子さまが十八歳なら、結婚できる年だ。

年上の人とお付き合いしているなら、そういった可能性だって十分ある。

ということとは、あの男の子は、弟みたいな子っていう意味だったのだろう。

そして相手の女性の名字が「たなか」さん。

なるほど、すっきりだ。

事实はすっきりしたけれど、なんとなくもやもやしたものが芽生えた慶子さん。

「柏木さん、真面目な顔でそんなこと言わないでくれる。ちなみに、まだ十八じゃないんで、結婚できないし」

「そうだ。鈴木は、七夕なんてロマンチックな日に生まれた男だった」

和菓子さまは、七夕生まれ。

七夕までは、あと数日。

「子どもを産むのは、俺の母親。で、その母親の旦那が長期海外出張中で色々心配なんで、学校終わったらなるべく家にいるように

しているってわけ」

「え、じゃ、お店も大変ってこと？」

山地さんが訊く。

和菓子さまが、はあとため息をつく。

「俺の両親、俺が赤んぼの頃離婚してるんだ。俺は親父に引き取られたってこと。で、今度赤ちゃんを産むのは、俺の産みの母親。で、母親も数年前に再婚して子どもは一人生まれて、で、次がまた生まれるってこと。これで全部。何か質問は」

和菓子さまの言葉に、山路さんも福地君も息を飲んだ。

「ない。ない、ない、ない。ございません」

一緒にいた年上の人は鈴木のお母さんってことかと山路さんは納得し、そんなことなら隠さずもつと早くに言えよと福地君は言った。

そして慶子さんは。

慶子さんは、言葉が何も出なかった。

女将さんは、和菓子さまの本当のお母さんじゃない。

「—— 柏木さんっ」

「えっ」

いきなり腕を取られたかと思うと、そのまま目の前に和菓子さまの姿があった。

和菓子さまの「都合」を訊いたあと、山路さんと福地君は合宿についての相談をし始めたので、慶子さんと和菓子さまは部屋をあとにした。

そして慶子さんは、今聞いたことを頭の中に一杯にしながら、教室に向い歩いていたところだった。

「柏木さん、危ないよ。そこ、凄い段差あるし」

和菓子さまの言うとおり視線を落とせば、新校舎と旧校舎を結ぶその場所は、人にはあまり優しくない段差が存在していた。

「あ、ありがとうございます」

慶子さんは、危うく転んでしまうところだったその箇所を、注意深く足を運ぶことで切り抜けた。

慶子さんの隣を和菓子さまが歩く。

「聞きたくない話だった？」

和菓子さまが言う。

「そんなこと、ないです」

そう答えながら、果たしてそれは本心なのか自信のない慶子さん。

「離婚なんてよくある話だし、ほら、福地だって山路だって、全く堪えてない顔をしていたし」

二人の横を、購買部のパンの袋を持った女子生徒が、急いで走っていく。

そろそろ昼休みもおしまいだ。

「柏木さんだけだよ。そんな顔をしているのは」
そんな顔。

自分がどんな顔をしているのか分からない慶子さん（だって、自分の今の気持ちだったよくわからないのだから）。

「ごめんなさい」

けれど、和菓子さまがわざわざ言うことは、あまり好ましい顔はしていないってことなのだろう。

「謝って欲しいわけじゃないし」

和菓子さまはそう言った。

「ただ――。ただ、きっと、何年か前の俺もそんな顔をしていたのかなあと思って」

和菓子さまの言葉に、慶子さんは顔を上げて和菓子さまを見た。

和菓子さまは、いつもの小さな笑いを顔に浮かべていた。

「俺も知らなかったんだ。お袋が実の母じゃないって。知らないってというのは、変か。正しくは、忘れていたというか、そこらへんのごたごたを覚えていなかったんだ」

和菓子さまは、そう言った。

「ただいま」

慶子さんが帰宅すると、玄関まで母親がやってきた。

「夕飯は、カレーかあ」

慶子さんが鼻をくんくんさせると、母親が笑った。

慶子さんの母が作るカレーは、毎回味が違う。

気まぐれで（というか、その時に安い）ルーを買うので、それも理由の一つなのだと思うけれど、スタンダードにお肉にじゃがいもとニンジン、玉ねぎの時もあれば、ナスやトマトやキャベツが入っていたり、冬になると大根が入る時もある。

その度に違うカレーを、慶子さんと父親で、あーでもないこーでもないと感想を言いながら食べるのが、柏木家のカレーだった。

ふと、和菓子さまの家のカレーはどんな味なんだろうと思った。

カレーは、各家庭によって様々だからだ。

そして、和菓子さまを産んだお母さんと、育てた女将さんとは、きつと違う味のカレーを作るんだろうなと慶子さんは思った。

弟君と一緒にいるときの和菓子さまの満面の笑みを思い、和菓子さまはどちらのカレーが好きなんだろうかと慶子さんは思った。

七夕のお菓子は、やっぱり七夕に食べたいと思っていた慶子さんは、当日、いそいそと「寿々喜」に向った。

色々と予定が入り、閉店間際にしかお店に行けないと分かった慶子さんは、予め菓子の取り置きの願いを入れていたのだ。

どんよりとした雲が空に広がっていた。

今にも雨が降りそうだ。

戸を開けると、店頭には女将さんがいた。

和菓子さまの話を聞いてから、初めて女将さんにあつた慶子さん。

相手の預かり知らぬところで、その人の話を聞いてしまうのは、どうも気まずい。

そのせいか、「こんばんは」の挨拶もいつもよりもやや小さめ。分かりやす過ぎる、慶子さんの反応。

「いらっしやいませ。お待ちしていました」

そう言つと女将さんは、いつかの箱をショーケースから出すと、「ご確認、お願いします」と言つてその蓋を開けた。

中には三つの上生菓子が入っていた。

電話で説明を受けていた、「天の川」と「糸巻き」と「笹の葉」だ。

「天の川」は、大きなかさざぎの形をした錦玉羹の真ん中を帯状に天の川が流れていて、その両側にピンク色した星と水色の星が置かれていた。

「糸巻き」は、俵型した白い糸巻きにピンクや水色した糸が巻かれていて、とてもかわいいものだった。

「笹の葉」は、葛だんごの上に、ペロンと緑色の葉が載ったシンブルなものだった。

どれもこれも食べるのが勿体ない位、可愛いものだった。

女将さんが菓子を包みながら、「雨はまだ大丈夫ですか？」と慶子さんに訊いてきた。

「一応傘は持つてきましたが、今にも降り出しそうなお天気です」
そう慶子さんが答えると、女将さんは包んだ箱を袋にいれて、慶子さんの側までやってきた。

「なんとか、もつといいですけど」

袋を慶子さんに渡しながら、女将さんが言う。

女将さんは、慶子さんが帰るまでの間は雨が降りませんように、
という意味で言ったのだろうけれど、慶子さんには「息子の七夕の
誕生日に雨が降りませんように」とも聞こえた。

その夜、慶子さんの自宅に一本の電話がきた。
和菓子さまだった。

弟が生まれたという電話だった。

電話を受ける慶子さんの視線の先には、雨で濡れた窓があった。

6・夜舟は密やかに（前編）／（八月）（前書き）

「夜舟は密やかに」は「前」・「中」・「後（上・下）」の四話構成です。

6・夜舟は密やかに（前編） / （八月）

体もアイスクリームも溶けてしまつくらいに暑い暑い八月、葉月。

慶子さん、高校生活最後の夏休み。

宿題に部活にと、思いがけず熱い日々。

「ママ」

牛乳羹を口に頬張りながら、福地君が言う。

「ほんと、鈴木が作る牛乳羹って、ママの味がするわ。ママ〜ン」
福地君の隣に座る山路さんもスプーンを握りしめたまま、そう叫ぶ。

目の前に座る同級生二人のそんな様子に戸惑い、視線をうつろろとさせる慶子さん。

「……柏木さん、この人たちの言うことは、無視していいから」
隣からの声に慶子さんは、「ママ」と呼ばれてしかめっ面をしている和菓子さまこと同級生の鈴木君を見た。

そんな和菓子さまにお構いなしに、福地君や山路さんだけでなく他の同級生までが和菓子さまに向い「ママ〜ン」なんて言いだした。

ここは慶子さんたちの学校の剣道場側のちょっとしたテラスで、つまりが只今慶子さんたち剣道部は、夏合宿の真っ最中（ちなみに四泊五日）。

そんな合宿での、今は嬉しいのおやつタイムなのであった。

ママ、かあ。

そつと牛乳羹を口に含みながら、慶子さんは笑う。

牛乳羹を食べることじたい久しぶりだけれど、確かにみんなが言うように和菓子さまの作るそれはママみたいな優しい味がするなあと思ったからだ。

「ほらね。脅してまで鈴木を呼んだ甲斐があつたでしょ。やっぱ我ら剣道部の合宿には、この合宿番長鈴木がいないと始まりませんもんね」

満足げに牛乳羹を口に運ぶ山路さんの隣で、そうだそうだと大きくと頷くのは福地君。

「合宿番長、ねえ」

そう抗議の声をあげたのは和菓子さまだ。

「それは、山路でしょ。ただでさえ予定が立て込んでいる合宿に、イベントまで詰め込んで」

「あら、合宿のスケジュールを組むことができるのはトップの特権だし。って、つまりが合宿番長は私だつてことかあ。なら、鈴木はおやつ番長ね」

山路さんがスプーンを振り上げ、そしてそれを振りおろし「任命」と一言言つた。

山路さんの声に、あちこちから拍手があがる。

—— おやつ番長！

その甘美な響きに、慶子さんは震えた。

「おやつ番長かあ。そうだよなあ。考えてみたら俺ら、鈴木と同じ学年でよかつたよな。毎年、鈴木に旨いおやつを作つて貰つていたわけだからさ」

側にいた、三年男子がしみじみと言う。

その言葉に、スプーンを持つ手が止まる慶子さん。

—— 毎年、鈴木に旨いおやつを作つて貰つていた。

それは即ち、山路さんも福地君もみんな。毎年毎年、和菓子さま手作りのおやつを食べていたつてことで……。

「毎年おやつ番長なんて、鈴木先輩って凄いですね」

いきなり「おやつ番長」が公用語として動き出した剣道部。

「でも、どうして鈴木先輩ってお菓子が作れるんですか？」

新入生が、訊いてきた。

「鈴木んち和菓子屋」

本人でなく代わりに答える福地君。

「いやさ、中一の時、こいつの家が和菓子屋って聞いて、冗談半分で『なんか作れ』って言ったら、鈴木はみんなから金を徴収して、この牛乳羹を作ったわけ。それが、めっちゃ美味くて。以来、六年間めでたく鈴木を作るおやつを食べているってわけさ」

しょうがないんだけど、どうしようもないことだけど。

激しく落ち込む慶子さん。

自分には、今回のワンチャンスしかないのかと思うと……。

慶子さん、一回にすくう牛乳羹の量を微妙に減らし、そして勿体ないとばかりに、ちまちまと食べた。

「あのさ、柏木さん。おかわりならまだある——」

「鈴木先輩！ おかわりいただきますっ！」

「あ、俺も」

「私も」

「おかわり」の声とともに、大量にあつた牛乳羹が、真夏の校庭にまいた水のようにぱつと無くなっていく。

ため息をつきながら、慶子さんを見下ろす和菓子さま。

そんな和菓子さまの視線も知らず、相変わらずちまちまとしたスプーン運びをする慶子さん。

さて。

熱中症が懸念される昨今。

運動部の合宿において、こまめな休憩と水分補給に気を配りながらの練習は必須。

たつぷりの水分用意は、一、二年生の担当。

薄めに作ったスポーツドリンクは、作っても作っても足りなくなるほどで、たまに、おもいつきり水の味しかないそれを飲みながら、部員たちはひたすら稽古をした。

救いなのは、剣道場が半地下にあったこと。

体育館に比べると、随分と涼しいと思われた。

剣道着を身につけた一年生たちは、見かけだけはなんとか一人前に見えた。

この合宿中に、一年生と慶子さんは防具をつけて、いよいよ本格的な練習をしていくことになっていた。

そついったメニューを、山路さんと福地君は頭をくつつけながら考えていたようだった。

防具は、部活用にと用意されたものと、辞めた子たちが残しているってくれたもの（勿論許可を得たものだ）を使うことになっている。

中学から続けている部員の中には、既に自分で購入したものを持っている者もいたため、なんとか足りたのだ。しかし。

「山路先輩、何やら香ばしい匂いが」

「おほほ。匂ったか。まあ、使っているうちに慣れるし」

家から持参の「捨ててもいいタオル」を水で濡らしかたく絞り、一年生と慶子さんは自分に割り当てられた防具をふいていた。

山路さんはみなの様子を見て、終わった人からそれらを陰干しをするように指示をした。

「合宿中に防具をつける」という意味の中に、「合宿中にそれらのメンテナンスをしましょう」という意味もあったのだ。

「山路先輩。小手が匂います」

「あ、小手ね。だったら、手袋を買ってもいいよ」

山路さんの「手袋」発言に、慶子さんも首を傾げる。

「ああ、この間剣道着と一緒に買えばよかったなあ。あのね、小手下に薄い手袋をしてそれで小手を嵌めると少しはましなんだよね。もし気になるようならそれを買ってみて。そんな高くないし」

「手袋」

それいいかも、と声があがる。

「あとは、練習が終わった後に一生懸命手を洗うしかないなあ。すつごく気になるようなら、香りのいい石鹸を見つけてそういったのを使うといいかもね」

山路さんの説明に、「香りといえば、部室がとていい香りがするんですけど」あれってどうしているんですかと、一年生が訊いてきた。

「あ、それは柏木さんだな」

いきなり慶子さんに振る、山路さん。

新入生に向けての部室掃除の際に、ハーブの力を借りたのは事実。

「確かに。高校の部室って、ほんのりといい香りがします」

そう言ったのは、中学から上がってきた一年生だ。

「中学の時は、まあ、女子の部室でも、ちょっと香ばしい時もあった」

その言葉に、みなで笑った。

宿泊施設は、一部屋に四人定員で、作りつけの二段ベッドが二セツト置かれていた。

三年生である山路さんと慶子さんは、そこを二人で使い、一年生女子は二部屋に分かれて使っていた。

ちなみに慶子さんは右側のベッドの下段、山路さんは左側の上の段だった。

消灯時間も近くなった頃、慶子さんはベッドから体を出し、思い切って山路さんに声をかけた。

「ん？ 柏木さん、なあに？ もしかして、枕が変わって眠れないとか？」

ノートに書かれた明日の練習メニューの確認していた山路さんは、そこから目を離すと慶子さんを見た。

「うつん。そうじゃなくて」

慶子さんは、今日一日のことを考えていたのだ。

朝、剣道部全員は荷物を持ち道場に集合したあと、山路さんの言うところの「幽霊顧問」である山田先生と一緒に（確かに先生は慶子さんの知る限りでも、あまりクラブには顔を出さない）宿泊所に向い管理人さんに挨拶をした。

次に、男女部長から館内施設の案内を受け、その後午前の稽古を行い、昼休みを挟んで再び稽古をしたあとでおやつを食べ防具の手入れをする班と稽古に向う班に分かれて行動し、宿泊所に戻ってからは部屋の掃除をして、入浴後に夕食をとった。

夕食後は夕食後で、本日の反省と明日の予定確認のミーティングが行われ……。

そしてその間、慶子さんは三年生でありながらも（しかも副部長なのに）、出番はまるでなかったのだ。

やっていることは一年生と変わりがなかったのだ。

「私、みんなが扱いやすいように、ハーブのことを勉強しておくね」

合宿に臨む山路さんと福地君の姿勢を、目の前で見ていた慶子さん。

普段なら、自分からは中々言いだせそうもないそんなことも、今ならやってしまえそうな気になっていたのだ。

慶子さん、剣道部の中で自分が役に立てそうなことといえば、部屋の美化だろうと結論付けたのだ。

ポジティブ菌繁殖中、なのである。

そして「勉強しておく」の言葉には訳があった。

確かに慶子さんは部室の匂い消しのためにいい香りのするスプレ

ーや、エッセンシャルオイルと呼ばれるものを持参し、それをバケツに数滴たらし雑巾がけをした。

しかし、それらは慶子さん自ら考えたことではなく、部室の事を家族に話した時に、母親から渡されたものだった。

つまり慶子さんはそれらをただ持つてきて使っただけで、詳しくなんかないのだ。

母親は、長い入院生活を送る中でのストレス緩和と気分転換の為に、そういったものを使っていたようだった。

けれど慶子さんにとっては、ハーブもエッセンシャルオイルもアロマという言葉も、一体何をどう区別するのか気にしたことがないくらい、受け身な位置に値する代物だった。

そんな、自分としてはあまり大きな意味もなく特別な思いがあつたわけでもないそれらのことを、好意的に取り、さらには今後也使用したいという人たちがいた。

だったら、それは勉強するしかないでしょう。

幸運にも、身近に詳しい人がいることだし。

「あ、ほんと？ 助かる。やっぱ、女子が香ばしいのは、ちょっとあれだもんね。実は、私からもお願いしたいなあと思っていたところなんだ。で、ついでと言つては何なんだけど、柏木さんにもう一つお願いしたいことがあるんだよね」

でもなあ、と山路さんが迷うような声を出す。

「ほら、柏木さんって運動部の合宿も初めてだし、副部長だって私が無理してお願いしちゃったわけだし。なのに更にお願ひするものなんだよなあって気持ちもあつて」

いつになくしおらしいことを言う山路さん。

「そんな、私なら大丈夫だから。なんでもやるから」

慶子さんの言葉に、待つてましたとばかりに子ザルのような身のこなしで、山路さんは二段ベットからするりと降りた。

そしてその様子にびっくりして固まったままの慶子さんの手を取ると、「じゃ、よろしくね。副番長！」と言ったのだ。

「副……番長？」

「そう、副番長。お・や・つ・副番長よ」

「おやつ副番長」

「そう。任命！」

慶子さん、女子部副部長に続き、おやつ副番長に決定。

早起きは三文の徳、と言えるのか。

ともかく慶子さんは、起床時間よりも早く目が覚めた。

そして、寝ているのもなんだしと、山路さんを起こさなように服を着替え、洗面所へと向かった。

洗面所どころかそこへと続く廊下にもまだ誰の姿もなく、慶子さんは自分がうがいをする音をできるだけ小さくと気にしながら、歯を磨いた。

起床時間よりは早いものの、朝食の支度は始まっているのか、ご飯の炊ける匂いがした。

そして煮干しで出汁をとる匂いも。

嗅ぎなれたその匂いに、慶子さんは自分の家の事を思った。

修学旅行以外で家を空けたのは、母親が病気になってからは初めてだなあと。

そう考えると、途端に家の事が心配になってきた。

母親は大丈夫だろうか。

洗面のために顔を泡だらけにしながらも、そのことを考えると眉間に皺が寄ってしまった。

合宿中は携帯電話の持ち込みは禁止されていたので、家の様子を知るとなると宿泊所にある電話か――。

「柏木さん、おはよう」

泡だらけで難しいことを考えていた慶子さんに、そう声をかけてきた人がいる。

慌てて顔をすすぐ慶子さん。

そんな慶子さんの耳に、しゃかしゃかと軽快に歯を磨く音が聞こえた。

ぱふぱふとタオルで顔を拭き、その音の方向を見ると、やっぱりとうか和菓子さまがいた。

「おはようございます」

慶子さんの挨拶に、歯ブラシを口にくわえたままでこくりと和菓子さまも挨拶を返してきた。

そして和菓子さまの顔を見た途端、昨晚山路さんに任命されたお役目の事を慶子さんは思い出した。

—— おやつ副番長。

果たしてそのことを、和菓子さまは知っているのだろうか。

「牛乳羹、好きだった？」

歯を磨き終わった和菓子さまがそう訊いて来た。

「は、はい。おいしかったです」

ちまちまと大事に食べたことを思い出す。

「結構量を作ったのに、あつという間にはけたよなあ」

和菓子さまは、しみじみとした調子でそう言った。

「本当に、あつと言う間でしたね」

慶子さんが自分の分を食べ終わる前に、沢山あつたはずのおかわりは跡形もなく消えていた。

「夏だからね、のど越しのいいものがないと思って、毎年寒天でおやつを作るんだ」

「寒天」

錦玉羹、琥珀羹。

寒天を使った和菓子には、とても綺麗な名前が付けられている。

「今日は、カルピスで作るよ」

「カルピス、で？」

確かに、それはとてもおいしそうだ。

慶子さんの隣で和菓子さまはじゃぶじゃぶと顔を洗うと、「柏木

さん、暇？」と訊いてきた。

はっ、とする慶子さん。

そうだ、自分は今、暇だと。

そして、毎日のこの朝の時間を利用して宿題の問題集でもやればよかったのかもしれないという考えが突如頭に浮かんだ。

しかし、時すでに遅し。

そんな代物、持ってきているはずもなし。

「暇……です」

自分がとてつもなく愚か者のような気になりつつ、そう返事をした慶子さん。

「だったら手伝ってもらってもいいかな」

「は、はい」と答えつつ、慶さんは和菓子さまの言葉に首を傾げた。

「ま、混ぜていればいいんですね、混ぜていれば」

和菓子さまについて食堂に向った慶さんは、「カルピス羹を作る手伝いして欲しい」と言われた。

そして、和菓子さまから一通り作り方の説明があった後、慶さんは寒天を溶かすという大役を仰せつかったのだ。

お料理は、母親が倒れてから始めた慶子さん。

なんとか、一般的な食事は作れるようになってはいたが、お菓子方面への進出はまだであつた。

さらに、寒天なんて。

はつきり言つて慶子さん、今までの人生の中で寒天の素材を買うという発想は全くなく。

というよりも、そもそも一般的なお店でそれが売っているなんて、思いもしなかったのだ。

「そうかぁ。これ、スーパーでも売っているんだけどなぁ。認知度低いよなぁ」と和菓子さまは言つと、「粉寒天」と書かれた袋を

慶子さんに見せ、そして「じゃあ、柏木さんはこれを溶かしてくれるかな」と言っただった。

「寒天は、お湯を沸騰させた中でしばらく煮て溶かすんだけど」、そう言いながら和菓子さまは慶子さんが必死に木べらでカルピス液に寒天を入れた鍋をかきまぜる様子を眺めながら、できたそれを流し入れる容器の準備をしていた。

「ちなみにゼラチンを溶かすには」と言っただ和菓子さま、思わずそのまま口をつぐんだ。

慶子さんがまるで木べらさえも溶かしそうな勢いで、一生懸命に寒天を溶かしていたからだ。

「……柏木さん、上手だね。じゃあ、そろそろ火を止めるね」

和菓子さまのその言葉に、慶子さんは心底安心したような笑顔をばつと向けた。

さて。

三文の徳をしたのは誰でしょう。

カルピス羹を作り終え、達成感で一杯な慶子さんに和菓子さまが「最終日には、おはぎを作るから」と言ってきた。

「おはぎ、ですか？」

ここで作るんだろうか。勿論そうなのだろう。

しかも、和菓子さまの御指導の元で！

「山路が考えたイベントってやつ。部員全員でおはぎ作りだと」「全員で」

それは、自分が出来るかどうかは別として、とても楽しそうだ。

「おいおい、鈴木。違っただろ。『おはぎ』じゃなくて、夏は『夜舟』っていうんだろ？ 以前そうレクチャーしたよな」

その大きな声とともに、床に荷物をどさりと置く音がした。

慶子さんと和菓子さまが振り向くと、そこには真っ黒に日焼けした人物が立っていた。

「やあ、やあ、お二人さん。朝っぱらから熱々のところ申し訳ないねえ……って、やばっ。こんなこと言うと山路に殺される」

「……ああ、和歌山かあ」

和菓子さまの声に、なるほどこの人は和歌山君だったかあと慶子さんも納得した。

しかし、どうにも。

慶子さんの知る和歌山君は、こんなにこんがりともしていなければ、髪の毛だって――。

「まいったよ。じいちゃんところで頭を剃られたかと思ったら、一日中畑仕事もさせられて。もう大騒ぎでしたよ」

「あっ、おおお？　もしや、和歌山？　おー！　なんだその姿は！」

そこに福地君もやって来て、わいわいと賑やかになる。

「いやあ、すまん、すまん。今日から責任をもって副部長職に当たらせてもらうからさ」

ねえ、柏木さん、と和歌山君が慶子さんの顔を覗き込んだ瞬間、
「和歌山だつてえ？」と叫びながら走ってくる山路さんの姿があった。

ピー・ピピピーと、口で笛の真似をしながら慶子さんの前に立ち
はだかる山路さん。

「和歌山、シッシッ！　柏木さんに近寄るなつて！　で、福地い！
よりによつてなんでこいつを副部長に」

山路さんが文句を言う。

「あは。くじ引きで決めました、って、仕方ないじゃん、副部長だった岡山が体調崩してそれこそ休部なんてことになったんだからさ」

慶子さんが入部した時から、男子部の副部長のポストは揺れていて、合宿前にようやく決まった副部長が和歌山君だったのだ。

わいのわいのの剣道部。

夏の暑さに負けないくらい、何かが起こりそう。
そんな予感の、慶子さん十八歳の夏休みは。

—— もう少し、続く。

7・夜舟は密やかに（中編）

—— 水の中に潜ったみたいだ。

初めて面をつけた慶子さんは、そう思った。

面をつけることで、どんなに大勢の人がその場にいても「個」になれる。

それは、水泳で潜水をした時のあの感じと似ていると慶子さんには思えた。

「防具をすると、途端に動きがぎこちなくなるよね」

着替えながら山路さんが言う。

午前の稽古では、防具の着用から礼法、素振りまでを行った。防具の着用については全く自信がなかった慶子さんだったが、なんとかどうにかなりそうに思えた。

しかし、防具なしでの素振りの感覚と着用してのそれは違い。まさに山路さんが言うように、ぎこちない動きになった慶子さんであった。

「私、ロボットになった気分でしたあ」

一年生の言葉に、慶子さんもそうそうと大きく頷き、山路さんも「あ、それ、わかる！」と言った。

「私、中学からじゃない。そうになると、同級生もみな背が低いわけよ。だって、ついこの間まで小学生だったわけだし。そうなるとう、ミニチュアな感じで一杯で、更にロボットみたいに動きもぎこちなくて、その動きがすごく笑えるんだけど、実は自分も他から見たらそうだったことでさ」

そうじゃなかった？ と、中学から上がってきた一年生に同意を求めると、その子たちもうんうんと頷いた。

「でも、不思議と段々と防具をしていたほうが心地よくなってきたりもして」

経験者の一年生が、ぼつりとそう言った。

「そうそう。身が引き締まる、というか、やる気スイッチが入ると言うか」

別の一年生がそう会話を引きとる。

「お、いいこと言うね」

山路さんの言葉に、一年生が照れ笑いをする。

「ま、他のみんなもこう思える時が来るってことで。とりあえずは、お昼をしっかりと食べて、午後もまた頑張りましょう」

その言葉に、「はい」と声があがった。

「山路、ちょい相談」

昼食が始まった途端、福地君が山路さんのところにやって来た。

「よければここの席、どうぞ」

慶子さんは、半分席を立ちながら福地君に言う。

慶子さんは山路さんの隣に座っていた。

「あ、いいの？ 助かる。じゃ、俺まだ飯に手をつけてないから、柏木さんは俺の席で食べてくれる？」

すなまそな顔をしてそう言う福地君に、「うん。私も手をつけてないから」と慶子さんが言うのと、福地君は「いや、柏木さんの食べかけなら喜ん——」と途中で言葉を切ると、「いたたたたっ！」と足を摩りだした。

「ほらほら、とつとと相談するよ」

山路さんがそう言うのと福地君は大人しく「……はい」とだけ言った。

「柏木さん、ここだよ」

福地君のいた席に向おうとすると、和歌山君が大きく手を振ってきた。

それに小さく頷くと慶子さんは和歌山君のいる席へと向かった。

「やあやあ、ようこそ」

そう言いながら椅子を引いてくれた和歌山君に従い席に着く慶子さん。

……。なんといいですか。

「むさ苦しいでしょ」

そう言ってきたのは、和歌山君とは反対側の隣の席にいた和菓子さま。

「いえいえ、そんなことは」

慶子さん、ズバリ心を読まれたことに慌て、誤魔化すかのように水を飲んだ。

そして水を飲みながら、「そうだ」と思った。

「あの」と慶子さんは、和菓子さまに小さな声で話しかける。

すると、「ん？」と和菓子さまも訊いてきた。

「明日の朝も今朝と同じ時間に食堂に来ればいいですか？」と、

慶子さんは尋ねた。

山路さんから任命された、おやつ副番長。

任命された時は、一体何をどうすればいいのか分からなかったが、偶然にも今朝の早起きのお陰でその任務を遂行することができた。

今朝和菓子さまと顔を合わせた時、慶子さんは自分が恐れ多くも「おやつ副番長」に任命されたことを和菓子様は知っているのかどうか不安だった。

しかし、カルピス羹作りに誘われ、更にはイベントで行うおはき作りの話までしてくれたということは、それは自分の杞憂きゆうにすぎなかったのだと慶子さんは思った。

早く起きて良かった。

早起きは三文の徳、とはよく言ったものだと思つた。と慶子さんはしみじみと思つた。

「朝早いけど、大丈夫？」

少し心配そうな顔で和菓子さまが慶子さんの顔を見た。

「大丈夫ですよ」

慶子さんがはりきってそう答えると、和菓子さまは「わかった。

じゃあ、今朝と同じで」と言った。

明日も和菓子さまのお手伝いだと、慶子さんがわくわくとした時。

あちこちから椅子を引く音があがった。

ぞろぞろと立ちあがった男子部員たちは食堂の前のテーブルへと進みだし、そこにはあつという間に列ができた。

今日のお昼は、冷やし天ざるうどんだった。

男子たちは、麺のお替わりの列を作ったのだった。

男子は、良く食べる。

男女共学なので修学旅行などでそういった場を目にしたことはあったけれど、こんなに間近でそのことを意識したのは初めてだった。

しかも、今日は男子のばかりの席にいる慶子さん。

その様子は、林立する樹木の間につかり生えてしまったペンペン草、といった感じだ。

ふと、和菓子さまももう食べたのだろうかと気になった慶子さんは、お行儀が悪いと思いつつ、そっと和菓子さまの様子を窺^{うかが}った。

和菓子さまは、ゆっくりと食事をしていた。

少しほっとした。

そして今度は、ちらりと和歌山君のことを見た。

和歌山君は丁度なすの天ぷらを食べようとしていたらしく、慶子さんとばっちり目が合ってしまった。

「あ。もしかして、これが欲しいとか？」

仕方ないなあと言いながら、和歌山君は口に入れようとしていたなすを箸で掴んだまま、慶子さんへ「ほら」と押しつけてきた。

目の前に、ずずずと迫ってきたなすの迫力に、動きを封じこまれ

た慶子さん。

「あほか」

和菓子さまが軽快に和歌山君の頭を叩く。^{はた}

「痛っ」

その声によって、慶子さんのなすの封印は解かれた。

午後の稽古は、大学生のOB・OGも加わり、より緊張したものとなった。

福地君の相談とは、午後からの先輩を加えてのメニューについてだったらしい。

「顧問が役に立たないだけに、先輩方が来て下さると助かるのよね」

山路さんは、そう小さな声で慶子さんに言った。

初心者グループにはOGがつき、他の部員たちはOBとのかかり稽古にはいった。

慶子さんたち初心者には、まず午前中にやった礼法の復習をした。礼法の難しいところは、相手との距離感だ。

慣れてしまえばできてしまうそれらのことを、そうなるまで慶子さんたちは頭と体で覚えていくのだ。

そして素振りをしたあと、いよいよ面打ちをすることになった。

日常生活では、竹刀で人の頭を打つなんてことは、まずない。

それだけに、ある意味最初の一步というか一打というのは、つい躊躇してしまうところがある。

と、いうことで。

自分たちもそうだったOGたちは、わざと慶子さんや一年生を焚きつけるような厳しい声をかけだした。

優しい先輩っていうのは、この場には必要ないと思ったからだ。

その中で、意外にも慶子さんは躊躇することなく、なかなかの面

を打ち込んでいた。

それを見た一年生たちは、「柏木先輩でもム力つくことあるんだあ」などとOGの言葉に挑発され頑張る慶子さんというのを意外に思いながらも、ならば自分たちも負けてはいられないとばかりにOGへと飛び込んでいった。

当の慶子さんは、OGからの掛け声にム力つくというよりも、今まで散々見てきた山路さんや他の部員の姿を思い描きながら打っていただけなのだが。

昨日よりのポジティブ菌に、もとの素直な性格が加わり、慶子さんの剣道はいい方向に転がっていた。

そしてなにより、個になれる剣道の世界を、慶子さんは好きになっっていた。

初心者ながら、弱いながらも、ある意味最強の慶子さん。

そんな慶子さんのファイトが、一年生の刺激にもなり。

そして、それをいち早く察したOGたちは、ともかくこの子を上に取り上げれば他の子も上達すると考え、慶子さんにハードな稽古をつけたした。

「お疲れ」

はあはあ、と肩で息をする慶子さんに山路さんが声をかけた。

「お疲れ様」

声をかけてきた山路さんだって、顔を赤くして疲れた様子だ。

二人して、よろよろと着替えの為に部室へと向かった。

「後悔、してる？」

山路さんはわざと「剣道」の言葉を使わずに慶子さんに訊いた。

「柏木さん、おっとりしているし。私みたいに気も強くないし」

あはは、と山路さんは笑う。

「それが、ね」

呼吸の合間で慶子さんは言葉を出す。

「気持ち、よかったの。そう言ったら、山路さん驚く?。」

疲れた中にも清々しい表情を浮かべ、慶子さんはそう言った。ぱっと山路さんの顔が明るくなる。

「わかる! 剣道ってさ、気持ちいいよね。だよ。そうだよね。いやん、仲間だわん」

えへへ、と山路さんが慶子さんに擦りよる。

「うん。すごく集中できて」

そう言ったあと、慶子さんは続く言葉を探すように、視線を泳がせた。

山路さんはせかさずに、慶子さんの言葉を待った。

そして部室の前まで来た山路さんは、そのままドアを開けた。

部室は、いつもの通り甘く爽やかな香りがした。

「うん、集中できて、それが気持ちよかったの」

色々と考えていた割には、同じ事を繰り返した慶子さん。

同じ言葉ながらも、初めの言葉と後の言葉の背景にある気持ちの深さは違っていた。

「そっか。うん、そうか」

うん、うんと頷く山路さん。

「ありがとう、柏木さん」

「え?」

突然の山路さんのありがとうに、戸惑う慶子さん。

「ありがとうは、ありがとうだから、それだけ。さ、着替えよう」

お腹すいたあ、という山路さんの後に、困った顔で慶子さんは立っていた。

翌朝も慶子さんは早起きをし、和菓子さまを手伝い、フルーツ羹を作った。

粉寒天の溶かし方も、少し慣れてきた。

「明日のことなんだけど」

和菓子さまが話し出す。

「おはぎ作り」

はい、と慶子さんは頷く。

最終日の明日は、剣道部全員でおはぎ作りをすることになっていたのだ。

「柏木さん、作ったことある？」

慶子さん、和菓子さまの言葉に片づけの手が止まる。

「……おはぎを、ですか？」

慶子さんの頭脳がフル回転する。

もしかして、日本の家庭においておはぎ作りは、一般的なことなのだろうか。

だとすると、「おやつ副番長」失格？

ひきつつた笑顔で、和菓子さまを見上げる慶子さん。

「……。ごめん」

慶子さんから視線をそらし、俯く和菓子さま。

震える肩。

心なしか和菓子さまは、笑っているような。

「いや、今のはナシで。忘れて。で、明日なんだけど、そういうわけだから早起きはしなくていいから」

午後にみんなでやるから、ということらしい。

「ああ、でも。もち米とうるち米を混ぜたものを炊飯器にかけるけど、まあそれも一人でできるしなあ」

和菓子さまがぼそりと言う。

「あの、でも。道具の用意とかは」

棚から出したり、洗ったり、と慶子さんは言う。

「そうだねえ。まあ、それもみんなで出来るし」

がくりと頭を垂れる慶子さん。

いよいよ、出番なし。

「ああ、そうだ。親父が来るんだ」

その言葉に慶子さんは、ぱっと顔を上げる。

「餡を持ってきたくれるように頼んだから」

和菓子さまの「親父」。つまり、師匠。

慶子さん、ちよつぴり心臓がどきりとした。

そしてそう自覚すると顔も赤くなってきた、ような気がした。

そんな慶子さんの顔をちらりと見ると和菓子さまは、「柏木さんは、うちの親父を知っているし、受け取りをお願いしようかな」と言った。

ようやくお仕事ができたとばかりに、「はい」と、元気に返事をする慶子さん。

「あ、そうそう。あと、餡が苦手な人もいるから、その人達用にはホットケーキを焼こうかと思っているんだよね。ここで、ホットプレートも借りられるみたいだし」

「ホットケーキ、ですか」

「うん。柏木さん得意？」

おはぎの次は、ホットケーキ！

しかも、今度は得意かと訊かれた慶子さん。

いや、もう。

得意も何もありませんが、しかし、あえて得意かどうかと訊かれたのなら。

「あんまり得意では……」

ちよつと見栄を張って答えてしまふ慶子さん。

まあ、その答え、あながち嘘つてことでもないわけで。

ちまたでは、下手すると幼稚園児でもできるホットケーキ作りだが、ご想像通り慶子さんはしたことがなかった。

即ち、得意なはずがない。

「じゃあ、福地にやらせるか」

和菓子さまの口からは、意外にも女子の名前でなく福地君の名前

が出た。

「福地君は、ホットケーキが作れるんですか」

思わず、そう訊いてしまう慶子さん。

「ああ。出来るって言うていたから大丈夫でしょ。ミックスだってあるし」

「ミ……ミックス？」

慶子さん、初めて聞く単語に戸惑う。

「うん。ホットケーキミックス」

「……」

ホットケーキミックス。

「ホットケーキ」が「ミックス」？

慶子さんがミックスと聞いて思い浮かぶのは、ソフトクリームのミックスだけだ。

バナラとチョコのシマシマで……。

しばしホットケーキミックスの単語を挟んで見つめあう、慶子さんと和菓子さま。

慶子さんの頭の中は、当然シマシマ模様。

「ああ、まあ。知らなくても、人類が絶滅することでもないから
そう言つて、またもや先に視線をそらしたのは和菓子さま。」

慶子さんの精一杯の見栄も、ホットケーキミックスの言葉の前に脆くも崩れおちたことを知らないのは、ご本人のみ。

剣道ならいきなり面を一本取られるくらいの隙の多さ。

「柏木さんは、俺と一緒におはぎの担当ってことでさ」

「はい」

ホットケーキミックスなるものの謎は残りながらも、おはぎ担当という甘い言葉に気持ちが動く慶子さん。

「副番長として、少しでもお役にたてるよう頑張ります」

決意もあたりに、そう言う。

「ん？ 何番長だつて？」

慶子さんの発言に、今度は和菓子さまの動きが止まる。

「おやつ副番長です。山路さんに任命された」

そして付け足すように「ご存知、ですよネ？」と慶子さんは言った。

「ああ、うん。副番長、ね」

「はい」

すつきりとした表情で応える慶子さんの言葉に、和菓子さまはとりあえず「ああ、そうか。そうだったよね」と合わせるような返事をした。

そして、ぱたぱたと後かたづけをする慶子さんの後ろ姿を見ながら、和菓子さまは全然すつきりしない顔で何やら考え込んでいた。

8・夜舟は密やかに（後編 上）

合宿も四日目。

午前中はいつもの稽古が行われ、午後には試合が予定されていた。

試合に参加しない慶子さんたち初心者チームは、午前中が稽古納めとなった。

いつもとはやはり少し違う空気の中で、昼食は終わった。

試合には出ない慶子さんでさえ、食べ物が喉につまりそうな感じがあった。

「柏木さん」

試合見学のために、道場の後部にいた慶子さんの隣にOGの一人が座り、小声で話し出す。

「柏木さんは、上だけじゃなくて、下も見るのよ」

つまり、足さばきにも注目しろということだ。

「はい」

その先輩からは稽古中に何度か、足さばきのことで慶子さんは注意をうけていた。

こうして自分が足りないところ（というか、足りないところだらけなのだが）の参考となる動きを見る機会があるのは、ありがたいと慶子さんは思った。

そして、こうしたOGからのアドバイスがなければ、自分は漫然と試合を見ていたかもしれないなあとも思った。

「一年生は、竹刀の構え方に注目ね」

幸い慶子さんは竹刀を比較的上手く定位置にキープすることができたが、一年生はよく「下がり気味」や「上がりすぎ」などの注意

を受けていたのだった。

OBが審判となり試合が始まった。

まずは、一年生男子と二年生男子の組み合わせだった。

学年に関係なく、実力は互角ともいえる組み合わせもあった。

初めて見る剣道の試合に、慶子さんは思わず息を止めて見入ってしまった。

まだ自分の動きだけで一杯一杯な慶子さんにとって、自分の動きだけでなく相手の動きもよみ、そして攻撃をしかけていくさまは、大袈裟に言うのなら神技のように思えたからだ。

思えば、じつくりと剣道を見るのは入部のあの日以来で、あの時に比べれば少しは剣道を知った慶子さんだけに、その動きの上手さや凄さをより感じとるようになっていたのだ。

しかし……試合。

自分にも、できる日が来るのだろうか。

正直、そんな日が来る自信のかけらも何もない慶子さんだった。

一、二年男子の次は、一年女子と山路さん対OGの試合が行われた。

OGの迫力に押されてか、実力を十分に出せないまま終わってしまった一年生たちだった。

そして続く山路さん。

山路さんとOBが進み出ると、道場の空気がサツと変わったのが慶子さんにも分かった。

礼の後、静かな道場に二人の声が響きだした。

見ている慶子さんの拳にも、力が入ってしまう。

山路さんは、積極的に前へと攻撃に出ていった。

しかしながら、山路さんの打った面、そして続けての胴、残念ながいずれも入らなかった。

代わりに、後ろに下がったOGから山路さんに向けての面があっ

た。

あつ、と慶子さんが思った瞬間、それをぎりぎりで山路さんはかわした。

けれど攻撃の勢いに乗ったOGは、やや体制の崩れた山路さんの竹刀を鋭く払うと、再び面を打ってきた。

OGの声とともに、竹刀が面に入っただいい音が響く。

慶子さん、ほおとため息をつく。

その後、なんとか山路さんも一本返すが、結果としてはOGの勝ちであった。

続いては、三年男子にOBを加えての試合だった。

慶子さんの目の前で、今までとはがらりと違った速度の世界が始まりだした。

技を繰り出す速さといい、動きのキレといい、迫力といい、どこをどう見ていいのか、何がなんだかさっぱりな世界だった。

そんな動きにも少しだけ目が慣れたころ、和菓子さまの試合が始まった。

和菓子さまの相手はOBだった。

OBは現役部員より参加人数が少ないので、和菓子さまの前までは三年生同士の試合だったのだ。

残る部員は、和菓子さま、和歌山君、福地君、そして北村君の四人だった。

北村君のことは、「副部、北村の方がまだましだったのに」と山路さんがぼやいていたのを聞いたことがあったので、覚えていた。

覚えていた、などというのが北村君に関する慶子さんに意識だが、実は北村君とは一度同じクラスになったことがあったのだ。

しかし、慶子さんも慶子さんだったが、北村君も北村君だったため、同じクラスであっても一度も話したことはなかったし接触もなかった。

北村君は無口な人だった。極端に。

慶子さんは剣道部に入ってから尚、まだ北村君と話したことはなかった。

（と、いうよりも慶子さんが話したことのある男子の方が少ないと言える気もするが）

部内では、和歌山君と仲がいいらしい。

和歌山君は一人でも賑やかなだけに、面白いコンビだと慶子さんは思った。

「小手、面！」

OBの細かな動きとともに、積極的に和菓子さまに打ちこんでくることが目に入る。

更に、慶子さんがOGからアドバイスされた足さばきに関して、和菓子さまの相手のOBはとも自由なスムーズに行っていて、そのフットワークの軽さには目を見張るものがあつた。

ついついその足さばきに目がいつていた時。

スコーンと、まるで面のお手本のような音が響いた。

和菓子さまの一本が入った。

ひたすらOBの足元に注目していた慶子さんは、残念ながらその様子を（視界には入ってはいたが）しっかりと見ることはできなかった。

そして続く試合の中でも、どうしても慶子さんはそのOBの足元に目がいつてしまい、和菓子さまが小手を決めたときも、やはりその瞬間を見ることはできなかった。

—— とても軽やかな足さばきを見ることはできたけれど。

—— 和菓子さまは、勝ったけれど。

不完全燃焼気味な慶子さん。

良かったけれど、良くないような。

OBの中には、慶子さんたちのように体の真ん中あたりで竹刀を構えるのではなく（これを「中段の構え」という）、もっと上の方

で構える攻撃的な「上段の構え」をする人もいて、更に別世界の試合が展開されていた。

特に最後の北村君とOBの試合は、声だけ聞くと喧嘩とも思えるような大きなさと、激しいつばぜり合いのため、道場内の緊張は最高潮だった。

「凄かったね、北村。負けたけど」

部室に戻る途中で山路さんが言う。

「うん。もう、心臓が破れるかと思った」

そう慶子さんが返した時、「おーや、おや、女子諸君」と言いながら和歌山君が会話に加わってきた。

和歌山君は、ああ疲れたあ、と言いながら山路さんの肩に手をまわすと（その手は速攻で山路さんに振り払われてしまったが）「ねえねえ、ボクの試合も見てくれた？」と訊いてきた。

「見ました。凄かったです」

和歌山君の相手のOBは和菓子さまの相手とは対照的に、彼の体の倍ほどある体格のいい人だった。

「確かに凄かったよ。いろんな意味で、山城さん。大学進んでから更に体でかくなっているし、しかも本気だすし。で、ボク、負けちゃうしい」

わざとメソメソしたような顔で、「山路い」と和歌山君が山路さんにもたれかかる。（そしてそれは、お決まりのように、再び山路さんに速攻で振り払われたのだった）

和歌山君の話に出てきた「山城さん」というのは、彼の対戦OBの名前だろう。

「ああ、俺も、呉田さんならよかったのになあ」

「ああ、呉田さん！ ステップの達人！」

「そうそう、蝶のように舞い、ハチのように刺す！」

山路さんと和歌山君がにやりと笑う。

「ま、仕方ないじゃない。呉田さん、鈴木をご指名だったんだから」

「ということは、呉田さんは和菓子さまの相手のOBの名なのだろう。」

「鈴木もさ、ここんとこ練習さぼっていたからダメダメかと思ったら、まあ、それなりにほどほどって感じだったね」

「あ。もしかしてアンタでしょ。呉田先輩に鈴木が練習不足だって情報流したの。だから、先輩嬉々としてご指名してきたのね」

「……嬉々として？」

その言葉の違和感に、思わずそう訊いてしまう慶子さん。

「あ、ごめん、ごめん。そうよね。ちょっと嫌な言い方だったよね。まあ、呉田先輩って私たちの一つ上の先輩なんだけど。鈴木とは色々歴史があって」

そう言うつと山路さんと和歌山君は顔を見合わせて頷きあった。

「……ほら、鈴木って背が高いでしょ。それって中学に入学した時からそうで。まあ、流石に今と同じくらい背が高かったってわけじゃないけど、勿論。で、一方呉田先輩はというと。まあ、今も昔も変わらず、コンパクトといえますか……。でもって鈴木ってさ、何を考えているか掴みどころがないっていうかさ、飄々としたところが今と同じように昔からあって。で、まあ、呉田先輩はさ、ともかく熱い人なわけよ。そうになると、つまりが。……ねえ」

そう言うつと山路さんは肩をすくめる。

「一年間散々いびっていた相手が、一年後に自分よりも剣道が上手くなったわけだから、余計にむかつくよなあ」

いびっていた？

慶子さんの眉間に皺が寄る。

「あ、いびるなんて、マジでしていた訳じゃないから……多分。呉田さん、悪人ってわけじゃないんだから。ただ、そう、山路が言ったように熱いっていうか。熱すぎるっていうか。それから、呉田さ

んの「対鈴木」が始まってさ。鈴木に負けないようにすげー練習して。それで、まあ……勝っていたよな、鈴木に」

和歌山君が山路さんに相槌を求める。

「うん。まあ、勝ってはいたわね、呉田先輩」

そう言った後、二人は考え込むように黙ってしまった。

「まあ、あれだ！ ほれ、呉田さんも少し気の毒っていうか。山路、覚えてるか？ 呉田さん憧れの女子部の先輩が、鈴木にお熱だったこと」

呉田さんの態度には報われない恋も絡んでいたのだよ、と明るい声で和歌山君が言う。

「ああ、あつたわね、そんな面倒なことが。それにしてもお熱だなんで、妙に古い表現じゃない。和歌山」

「レトロかい？ まあ、ともかくさ、それで呉田さんがとても落ち込んだのは事実だし。そーいやさあ、その先輩だけでなく鈴木って妙に年上に人気があつたよなあ」

「あら。人気があつた、なんて過去形にしないでよ。今だって、とある情報筋によると、お店に来るミセスを魅了しているらしいわよ。鈴木は」

その山路さんの言葉に、慶子さんは以前聞いた「マダムキラー」という渾名を思い出した。

「……あれ。無反応なんだけど」

「……だから、言ったでしょ。あんたが思う通りのことはないって」

山路さんは肩をすくめると、慶子さんの顔を見た。

すると、山路さんだけでなく、和歌山君も慶子さんの顔をじっと見ていた。

「な、なんでしょう」

二人の視線に焦りながら、まさか、と思いきりげなく手で口を覆う慶子さん。

昼食に食べたものが齒に挟まってでもいるんだろうかと、見当違

いな方向に思考がいつていた。

「ねえ、山路。なんかボク、キミの気持ちがおーくわかるよ。なんつーか、保護欲？」

「ねえ、和歌山。わかるのはキミの勝手だけど、そこまでだからね。間違ってもそれ以上の欲を出さないで頂戴よ・ねっ」

ふふーん、と鼻息を荒くしながらも見つめあう二人。

そんな二人を眺めながら、剣道部は本当に仲がいいなあと思う慶子さんだった。

9・夜舟は密やかに（後編 下）

そして、いよいよ山路さん企画のイベント、「おはぎ作り」の準備が始まった。

おはぎ作りは、夕食後に行われることになっていた。

作るのは夕食後だが、材料の確認や道具の準備はその前に、夕食前に行くことになっていた。

おやつ副番長の最後の仕事として、師匠から餡を受け取る役目を仰せつかっていた慶子さんは、和菓子さまから伝えられた予定時間の少し前に玄関へと向かった。

日中の暑さの名残はあるものの、夕暮れ時特有のさらりとした風が流れだし、カナカナカナと鳴く蝉の声も耳に優しくかった。

慶子さんが宿泊所備え付けのサンダルを履き表に出ると、砂利道をゆっくりと進んでくるタイヤの音がした。

一台のバンが小道を進んできたかと思うと、慶子さんの前で静かに停まった。

バンには、「寿々喜」の名前があった。

運転席からひょいと、師匠が出てきた。

慶子さんがぺこりと頭を下げると、師匠は口だけで笑った。

そしてそのまま、後ろの扉を開け、大きな銀のバットを出した。

「ああ、いいよ。重いし。入り口まで運ぼう」

師匠は受け取るうとした慶子さんの横を通り、玄関へと進んだ。

そして玄関まで入ると、周りを少し見渡した後、それを床に置くとした。

師匠の後ろにいた慶子さんは、それを急いで止めた。

慶子さんは慌ててサンダルを脱ぐと、玄関に立ち、そして師匠から銀のバットを受け取った。

「あの。すみません。……つまり。口に入るものなので、床に置く

よりは直接受け取ったほうがいいと思いまして」

それに一旦床に置くとこれを持ち上げるのも大変になる気がして、続けた。

「そうか。ありがとう」

師匠からの思いがけない言葉に、慶子さんの目はまん丸くなる。

そして「柏木さん、だよな」と師匠は続けた。

「団扇うちわ、作って待っているから」

団扇？

慶子さんのきょとした顔を見て、師匠が笑う。

「また、お店で」

そう言つと師匠は、バンに乗りこんだ。

団扇、団扇つて、つまりが団扇なんだろうか。

そう慶子さんが考えていると、「持つてく」と言う声とともにバツトを持つ手が軽くなった。

北村君だった。

「あ、ありがとう」

慶子さんのお礼に、北村君は軽く頭を下げると、慶子さんを置いて一人食堂に向つてスタスタと歩きだした。

慶子さんも後に続こうとしたその時、開け放たれた玄関前の砂利道を、男の人がズンズンと出口に向つて歩いていく姿が見えた。

あの人は確か……そう。

和菓子さまの対戦相手の……蝶先輩！

胸騒ぎがした慶子さんは、食堂には行かずに再びサンダルを履き、蝶先輩が来た方向へと駆けだした。

ぐるりと建物を回ったところに、案の定というか和菓子さまが立っていた。

和菓子さまは、パンパンとジーンズについた土をはらっているとこだった。

明らかに普通じゃないその様子を見て、足が岩になったかのように重くなり、動きがとれなくなった慶子さん。

「え、柏木さん？」

人の気配を感じたのだろう、和菓子さまが顔を上げた。顔を上げた和菓子さまの口の端からは、血が出ていた。

それを見た途端、慶子さんはスイッチが入ったかのように和菓子さまに駆けよると、ポケットから出したハンカチを差し出した。

「あ、ええと」

珍しくうつたえた様子でハンカチを受け取ろうとしない和菓子さまにしびれをきらした慶子さんは、「少し屈んで下さい」と言っ、素直に従った和菓子さまの口元をそつと押さえた。

「こすらないで、このままで押さえていて下さい」

和菓子さまの手をとった慶子さんは、その手をハンカチの上に載せた。

和菓子さまが自分でハンカチを押さえていることを確認した慶子さんは自分の手を離し、再びじつと和菓子さまの顔を見た。

切れているのは、口。

それだけのようだ。

そして今度は、和菓子さまの全体の様子も眺めた。

特にお腹をかばっている様子もなければ、腕も大丈夫そうだ。

つまり、口の止血さえ済めば大丈夫だと思えた。

どこかに座るところはないかときよろきよとした慶子さんの目に、裏口へと続く階段が映った。

慶子さんは和菓子さまの背中に手を当てると、そっちへ座るようにと促し一緒に歩き出した。

和菓子さまは慶子さんに言われるまま、そこに大人しく座った。

慶子さんはその側に立っていた。

そのまま二人は無言だった。

カナカナカナと鳴く蝉の声だけが、相変わらず響いているだけだった。

しばし、無言の時間が流れた。

そしてようやく、慶子さんが動いた。

慶子さんは、ハンカチを押さえる和菓子さまの顔を覗くと、その手をそと取り、ゆつくりとハンカチをのけて傷を見た。

さっきまで滲んできていた血は止まったようで、慶子さんはようやく安堵のため息をついた。

しかし、改めて和菓子さまの口元をよく見ると、うつすらと青くなっている。

今度は冷やさないと。

そう思った慶子さんは、ハンカチを水で濡らしてこようと――。

「待った、待った」

和菓子さまの手が、動き出した慶子さんの腕を掴んだ。

すると、その腕を引っ張る強さに、慶子さんの体がよろけた。

焦った和菓子さまは、階段から立ちあがり慶子さんを支え。

……結果。

和菓子さまが慶子さんを後ろから抱きしめるといふ、わけのわからない状態になってしまった。

が。

当の慶子さんといえば、今の状態というよりも、今の動きで地面に落ちてしまったハンカチに気持ちがいき、和菓子さまに拘束（？）された状況ながら、それを拾おうと手を伸ばしていた。

それを察した和菓子さまは、慶子さんを抱きしめていた腕をゆつくりと離れた。

ようやくハンカチを拾うことができた、慶子さん。

何事もなかったような顔をしている、和菓子さま。

「これ、水で濡らしてきますから」

「ありがとう」

つまりが、慶子さんの当初の行動はそのまま実行されたわけですが。

つまりが、まるで何も起こらなかったかのようですが。

「俺。胸がキュンキュンしちゃった」

「俺もだよ」

そう話しているのは、裏口がばっちり見える二階窓辺に集う三年生軍団。

おはぎ作りの用意で揃って一階に下りようとしたところ、偶然裏口で起こった「鈴木学の呉田事件から胸キュン柏木さんの変」の一部始終を見ることになったのだった。

「まあ、呉田さんのことは、ありや鈴木 of 自業自得だし」

和歌山君の言葉に、三年生部員は黙って頷く。

「今までの、嘘がばれたってことだ」

「それに気がつかない呉田さんにも問題あるけどな」

「知ってて何もしなかった俺らはどうよ」

「んなの、本人の自覚に任せるしかないだろ？ 勝てる試合を勝たない人もいれば、それを見抜けない人もいて」

「まあ、それにしても柏木さんだよ」

その言葉に、頷く面々。

はあ、と一人だけ大きくため息をついたのは、部長の福地君。

「ああ！ 俺がいくら言っても、びくともしなかった鈴木がつ！」

くう、俺の今までの愛は無駄だったのかあ、と福地君が嘆く。

「福地、なに気持ち悪いこと言ってるのよ。誰だって、むさ苦しい男より、可愛い女の子に弱いって言うの。鈴木もこれでようやく人並みになったってことでしょ」

ほらほら下に行くよ、と山路さんが男子部員をせかす。

「人並みかあ。我ながら、言い得て妙だわ」

そろそろと歩く男子に、しっしつと手で払うゼスチャーをした山路さんは、窓の向こうで慶子さんがハンカチを持ち走っていく姿を眺めていた。

わいのわいのと始まる、おはぎ&ホットケーキ作り。

ほとんどの部員が珍しさもあって、おはぎ作りを希望していた。

「確かにこっちは人気薄だけどさあ」

福地君が慣れた手つきで、ホットケーキをひっくり返す。

「だからって、焼き担当は俺と北村ってさ」

花がないんだよ花が、とぶちぶちばやく福地君の側に、きゃきゃきゃと一年女子部員数名が集う。

ちなみに彼女たちは、山路さんに盛り上げ係の特命を受けた面々である。

「うわあ、部長。上手いです」

福地君の仕事を見て手をたたく。

「え、あ、そう?」

途端に元気になる福地君。

「よし、俺様の華麗なコテさばきを見よ!」

そう言つと、宙高くホットケーキが舞った。

「え、コテって。それって、ヘラっていうんじゃないんですか?」

「うそ。うちではテコって呼んでる」

「えええ! うちではフライ返しだけどお」

ホットケーキよりも、その道具の名前で盛り上がるホットケーキ組。

「なあ、北村はなんて言ってる?」

福地君の問いに、職人さんのように無言でひたすらホットケーキを焼いていた北村君は少し考え、「ひっくり返すやつ」と答えた。

「……おまえ、小学生か」

福地君の言葉に、その場の全員が笑った。

「みんながイメージするような、餅つきはしなくていいから。どちらかというと、こんな風に軽くつぶす感じで」

和菓子さまが見本をみせるように、炊きあがった米を静かに塩水につけたスプーンの背を使いつぶしだした。

それに習って、何人かが同じようにやりだした。

「餅、っていうから、もつとぺったんぺったんをつくのかと思ってました」

おはぎって、ぼた餅とも言っじゃないですか、と二年男子が言う。

「ほんと餅作りって、杵とか臼とか必要で、もつと大袈裟なもんだと」

こんなスプーンでつぶしちゃうなんて、と戸惑いの表情を浮かべる部員もいた。

「でもそう言われれば、おはぎの餅って、米粒の形が残っているっぽいよな」

「なんか、意外と簡単というか」

「ほんと。クッキーやケーキを焼くより楽かもしれません」

その意見に、同意する声があがる。

クッキーもケーキも焼いたことはないけれど、その他の意見はみなと同じな慶子さんも、そうだなあと思っていた。

手作りお菓子Ⅱ洋菓子、という認識が自分の中にもあったと慶子さんは気づいたのだ。

「和菓子」というだけで、作るのが難しいものだと言線を引いていたってことに。

和菓子は作れないものだ。お店で買うものだ。

確かに、職人さんしか作ることのできない和菓子だって沢山ある。

けれど、和菓子さまと一緒に作るおはぎは。

今やっていることは、お菓子作りビギナーの慶子さんにも出来そうなことだった。

「そういえば、これ、おはぎっていうんですか？ それともぼた餅っていうんですか？」

米をつぶしながら、一年男子が訊く。

和菓子さまはその一年男子の様子を眺め、「あ、もうこれくらい

で十分」と言うのと、「一般的には、『おはぎ』や『ぼた餅』って、みんなが今見ているように、もち米とうるち米とを混ぜて、まあ、好みによつては混ぜなくてもいいけど、そうしたもので作った餅を餡で包んだものをいうんだけど。一般的って言ったのは、それこそ地方や時期や材料、作り方によつて、一概にはそれでくれないことも多いから。まあ、そこらへんは割愛させてもらつて。で、さっき訊かれたように、同じもののなに名前がいろいろあるんだよね、おはぎって。もしかして聞いたことがあるかもしれないけど、今の季節は、夏は、このおはぎは、『夜舟』って呼ばれることがあるんだ」

「夜舟」

慶子さんがつぶやく。

いつか、和歌山君が言つていたことだ。

「夜は暗くて、舟はいつ着いたかわからない、だろ？」

和歌山君が言う。

それでも、みな顔には、はてなマークが浮かんでいる。

「だよなあ。俺も最初聞いた時、はあ？　って思ったもん」

けけけけつ、と和歌山君が和菓子さまを見て笑う。

「はいはい。笑つて下さいよ」

「ん？　あ？　ああ？　はいっ！　鈴木先輩！　もしや、舟が『着いた』と餅を『ついた』をかけているとか？」

閃いたような顔をした一年男子が手を上げて言う。

「スプーンでつぶせるくらいなんだし、杵も臼も必要ないから、いつ『ついた（着いた）』かなんて他の人にはわからないってことじゃ」

閃きの一年生がわくわくとした顔で和菓子さまを見た。

和菓子さまがにやりと笑う。

「大正解」

うつしやーと言い、ガッツポーズをとる一年生に、慶子さんもみなも思わず拍手だ。

「言葉遊びなんだねえ」

山路さんが言う。

「同じ言葉の響きでも意味はいろいろ、ってことよね。でもなんで夏なんだろ」

「俺もそれ思った。で、鈴木に訊いたら、そこまではわからんって言うてたよ」

そうなんだあと山路さんが答えた時、今度は和歌山君が何か閃いた顔をした。

「俺、天才かも。すっごいいいこと思いついちゃった」

「やめときなさい。どーせろくなことじゃないんだから」

そんな、些細な事で揉めだした山路さんと和歌山君をよそに、おはぎ作りは進みに進み。

「ラップをとってその上に餡を載せて」

和菓子さまはそう言うのと、その餡の上に俵型にした餅を載せくると包んだ。

「こうして、いい具合に餡で餅を包むように」

和菓子さまの手中で、ラップに包まれたおはぎができた。

和菓子さまはラップを剥がしながら、そつとそれをお皿に置いた。

「おお！ おはぎだ、おはぎ！」

「だから、おはぎじゃなくて、夜舟だろ」

「わあ、売り物みたい！」

興奮が一通り収まると、今度はみなで和菓子さまの説明通りに、ラップを使いおはぎを作りだした。

中に入れる餅の形は、自由ということだったので、まん丸の人もしれば、おにぎりのように三角の人もいた。

「柏木さん、さっきはありがとう」

きつちりと俵型の餅を作り、餡をつけることに集中していた慶子さんに和菓子さまの言葉が降ってきた。

慶子さん、気になっていた和菓子さまの口元をぱつと見た。

……見た。

そしてすぐに、再び製作中のおはぎに視線を落とし「はい」とだけ言った。

それきり黙る慶子さん。

その慶子さんの側に立つたままの和菓子さま。

「鈴木、助けて」

只今おはぎと大乱闘中の山路さんが、たまらずにヘルプを求めた。

「山路が終わったら、こっちも見てくれ」

意外と、餅を餡で包むのは得手不得手に個人差があるようで。

和菓子さまが側からいなくなったことに、ほっとしたような、そうでもないような、不思議な気持ちの慶子さん。

そんなドタバタの中、和歌山君はようやくターゲットを部屋の隅に誘うと、突然真面目な顔をした。

「コホン。最近キミは、部活は休みがちだったけど、こうして合宿に参加してくれて、副部長として俺は嬉しいよ」

「はあ？」

「おいおい。はあ？　じゃないよ。うん、だろそこは。まあ、いいや。うん。つまり、キミは剣道が好きだ」

「……」

「おい、おい、黙るな。そこも、うん、だろ」

「何なんだよ」

「だからあ、つまり合宿に参加した剣道好きなキミは、当然稽古も好きだよな」

「……」

「稽古」

「……」

「だからあ」

「引つかからないよ」

「げろっ」

和歌山君を置いて、おはぎ作りの現場に戻るターゲットの後ろ姿に、「おまえ、かわいくないよ」と和歌山君が叫んだ。

山路さん企画のイベントは大成功だった。

福地君と北村君のホットケーキ組は、道具についての実り多いディスカッションもあり、作業中も楽しく、そしていざ食べる段階では、メープルシロップやチョコレイトソースがたっぷりとかけられたおいしいものになった。（そして、慶子さんはホットケーキミックスの正体を知った……）

更に、ホットケーキ組は、リクエストによりおはぎ組の為に小さなホットケーキも大量に焼いていた。

おはぎ組はそれを二枚使い、「なんちゃってどらやき」を作ったのだ。

今回、おはぎ作りを希望した部員の全員が、今までおはぎを作った経験がなかった。

餡で包むのに苦戦した人たちもいたが、これを家で作ればポイントが高いつてことは分かっていた。

餡は自分で作らなくても買えばいい。

家で「おはぎを作る」っていうのが、ちょっといい。

それは今回、このおはぎ作りがとても楽しいもので、また作りたという気持ちになったからでもあった。

昼食の時とは違ってかわったリラックスした空気が流れた。

みんな良く食べ、よく笑った。

お腹だけでなく、心もいい気持ちで一杯になった剣道部。

その晩、慶子さんは夢を見た。

慶子さんは船に乗っていた。

その船で世界のあちこちを見て回っていたようだった。
随分と長い航海だったようだ。

その船も、今は港を目指していた。

凧いだ水面を、船はスウと滑るように進んでいた。
静かな夜だった。

海も空もわからない暗闇の中、潮風を受けた慶子さんは、その港
が自分にとっての終着点だということを理解していた。

港に、自分のことを待っている人がいることを知っていた。
音もなく着く船。

それとは相反して、胸の高鳴りは激しく、ときどきしながら船を
下りる慶子さん。

するとそこには、ずっと長いこと慶子さんを待っていた人がいて。

慶子さんにとっての、たった一人の人がいて。

慶子さんが何か言うよりも早く、「おかえり」とその人が言った
のだ。

おかえり。

—— おかえり。

「柏木さん、大丈夫？」

朝、部屋のリネン類をまとめながら山路さんが訊く。

「え、うん。だ、大丈夫」

「私、食べ過ぎい」

ホットケーキにまで手を出したのがまずかった、消化不良気味だ
わぁ、と山路さんはお腹をさすった。

慶子さん、夢のことはところどころ覚えていた。
でも、夢だけに。

覚えていることだけでは辻褄があわず、なんとも気持ちが悪かった。

そういう意味では、慶子さんも消化不良気味。

唯一、しっかりと覚えているのは。

——「おかえり」

そう言われて、とても嬉しかったということだけ。

部屋の掃除のあと、管理人さんと食堂のおじさんおばさんに挨拶をした剣道部一同は、いろいろとあった宿泊所をあとにした。

次の稽古は、学校が始まってからになるので、皆しばらくのお別れだ。

帰り道、話題になるのは、終わっていない宿題やレポートについて。

慶子さんも帰宅したらすぐに図書館通いをする予定でいた。

今まで、そんなことがなかったのが考えると不思議なのだが。

学校に行く途中で和菓子さまと一緒にすることはあっても、帰りが一緒になったことはなかった。

ご近所さんなのに。

ということ、慶子さんは電車で他の部員と別れ駅を降りると、そのまま同じ駅の和菓子さまと一緒に歩きだした。

なんというか。

いつもと同じ道なのに、違うように感じてしまう慶子さん。

更に、昨日の夜からどうも和菓子さまの顔を、口を見ることができなくなっていた。

昨日の夕方は、口に怪我をした和菓子さまの顔を、ガンガン見ていた慶子さんだったのに。

なんというか。

なんだというのでしょうか。

「朝顔、水羊羹。あとは、団扇だったかな」

歩きだしてしばらくすると、和菓子さまがそう話し出した。

「え？」団扇？

団扇のことは、師匠も言っていて気になっていた慶子さんだった。

「うん、八月の、今の時期お勧めの菓子。水羊羹は、まあ、水羊羹だよ」

それこそ柏木さんも家で作れると思うけど、と和菓子さまが言う。

「水羊羹をですか？」

「うん。寒天と餡を使えば出来るよ。柏木さん、合宿で寒天を溶かすの上手かったし」と続けた。

そういえば、おはぎだけじゃなくて、寒天のお菓子も作ったんだっ、と慶子さんは思い出す。

今更ながら、充実した合宿だったと慶子さんは思った。

何より慶子さんが驚いたのが、二日目以外、家の事を思い出さなかったということだ。

こんな風に、自分のことだけを考えて日々を過ごしたことは久しぶりの慶子さんだったのだ。

「『朝顔』は、練り切り。綺麗だよ」

どんな花になってるんだろうと、慶子さんはわくわくした。

「それであの、その『団扇』っていうのは――」そう慶子さんが和菓子さまに訊こうとした時。

「あ、おかえり」

二人に向い、低い声かけられた。

気がつく二人は「寿々喜」の前にいた。

そして、丁度暖簾を出した師匠と出くわしたのだ。

おかえり。

その言葉に、昨夜の夢が重なり、慶子さんは顔が熱くなる。絶対に赤くなっているだろう自分の顔を恨めしく思った。

そして思った。

夢の声。

そして、そこに出てきた人。

「おかえり」と言われたからかもしれないけれど、その人は師匠に似ていたような気がした。

そこで、流石の慶子さんもはつとした。

そんなの、とんでもない話だ。

不謹慎だ。

そんな夢を見たかもしれない自分が信じられない。

動揺する慶子さんをよそに師匠は、「学は早く着替えて店手伝え」と和菓子さまに言った。

動揺しながらも慶子さんは、「お疲れさまでした」と和菓子さまに言った。

慶子さんの「お疲れ様でした」に、一瞬だけ詰まったような顔をした和菓子さまだったが、すぐに立ち直り「柏木さんも、お疲れ様」と言った。

「そうそう、柏木さん。今、店に寄りなよ」

そう慶子さんに声をかける師匠に、和菓子さまがぎょつとした顔をした。

「学は、早く家に入れ。母さん待っているから。で、柏木さんはこっち、こっち。団扇を持っていきなつて」

師匠の勢いに押され暖簾をくぐる慶子さん。

「ま、座って座って」

いつか和菓子さまに勧められた椅子に、再び腰かける。師匠は箱にいくつかの和菓子を入れているようだった。

それに気付き、カバンからお財布を取り出す慶子さん。

「ああ、何やってんの。これは、今回は特別。次からはお代はちゃんと頂くから」

そう言つと師匠は箱を開けたまま、慶子さんの前に持ってきた。

「これね。団扇。上用饅頭で団扇の形に作るわけ。で、上にも、こ
う団扇の模様をね」

今回、中は紫芋の餡で作ってみたんだ、と師匠が言つ。

「涼しそうですね」

和菓子で団扇。

なんて面白いんだろうと、慶子さん先程までの「不謹慎」をすっかり忘れて見入る。

「で、これが朝顔。昔、学が小学校から持ち帰ったのがモデルだな」

それは、ピンクとも紫ともいえない、綺麗な色をした朝顔だった。

和菓子さまが育てた朝顔。

和菓子さまの小学校時代を想像してほほ笑む慶子さん。

「最後は水羊羹ね。どこでも作るもんだけど、だから難しいねえ」

師匠はそう言つと、箱のふたをしめて、ビニール袋にそれを入れて慶子さんに渡した。

「餡のお礼だよ」

師匠が言つ。

「柏木さん、餡を大事にしてくれたろ。餡は、店の命だからな」

大事に？

きょんとした顔をする慶子さんに、師匠は「ああ、あの時わ
かつていなかったもんなあ」と言った。

「ま、いつか。あんまりくどくど言つのも野暮だからな」

そう言つて師匠は慶子さんを立たせた。

「これからも、学と仲良くしてやってください」

今度は師匠は頭を下げた。

「そんな。私の方こそ、色々とお世話になって」

慶子さんがそう言っていると師匠は嬉しそうに、「そうですね。学が世話をしていますか」と言った。

「はい。たくさん」

そう言いながら、本当に自分は多くの事をお世話になったと慶子さんは思う。

「たくさんですか。そりゃ、すごい」

師匠はそう言っていると目を細めて笑った。

「寿々喜」を出ると、少しの時間だったにもかかわらず、むっとした空気が強まり、蝉も張り切って鳴いていた。

今日もこれから、ぐんぐんと気温が上がるのだろう。

行きより、和菓子三つ分重くなった慶子さんの荷物。けれど、慶子さんの足取りは軽く。

両親の待つ家へと元気に進んでいたのだった。

10・特別編・きんつばは、四角か丸か（前書き）

特別編は、剣道部部長の福地君が主人公です。

10・特別編・きんつばは、四角か丸か

「裕也、おばあちゃんが来るから、おつかいお願いね」

母親のその声に返事をする、福地 裕也君（高校三年生 剣道部）は大きな体をのそりと動かし渡された買い物メモを持ち、側に座っていた小学生の妹も立たせて出かけた。

今は九月。

あのぎらぎらしていた太陽も、少しは遠慮してきた今日この頃。本格的な秋が待ち遠しい季節でもある。

「ああ、息抜き、息抜き」

隣を歩く妹は、勉強から解放された喜びからか、弾むような足取りで歩いていった。

時折、そのまま道路の真ん中に行ってしまうようになる妹を端に引っ張り引っ張りしながら、福地君は買い物の手順を考えていた。

祖母が来るときは、魚を買いに少し遠くの専門店まで行かないといけない。

まあ、面倒だといえば面倒だが、妹と二人で重い空気を漂わせていただけに、確かに息抜きになった。

先程まで、妹の勉強をみていた福地君。

福地君と同様に妹も中学受験をするということで、当然のように母親から協力が求められていたのだった。

しかし、今更ながらの「流水算」やら「つるかめ算」。

高校生ともなると頭はすっかり「数学」に慣れ親んでおり、そんな中で「算数」をするというのは、中々もどかしいものがあつた。

更に理科、社会。

受験をする小学生たちは、下手をすると高校生よりも勉強しているんじゃないかって錯覚を起こしてしまう程だ。

そんなことを問題として出さないと、最早合否を決めるテストが作れないのだろうかと福地君は思った。

子どもの世界も厳しい。

とはいえ、高校三年生ながら大学受験を考えずに部活に専念できる環境があるのも、あの頃勉強して大学まで続く学校に入学したからであつて。

まあ、そんなこんなをあれこれと考えながら、妹と歩く福地君なのであつた。

「あ、お兄ちゃんの携帯が鳴つたよ」

携帯が鳴つたことを妹が知らせてきた。

「お母さんだよ。なんだろうなあ」

おそらく、買い物リストの追加だろうと思いメールを開くと、案の定『おばあちゃんからリクエスト。きんつばよろしく』の文字があつた。

「お母さん、なんだつて？」

妹が背伸びをして、携帯を覗きこむようにしてきた。

福地君は、携帯を持つ手を下げて、画面を妹にも見えるようにした。

「きんつば、買えだ」と

「え？ きんつばって、何？」

「知らないか。きんつばはだなあ、ほら、四角くて、薄い皮の中に餡子の塊が入っているやつで」

「餡子なら、お饅頭じゃないの？」

「饅頭か。そうだよなあ、饅頭って名前でもいいよな。餡子だし」

「うん。でも、お饅頭は丸いよ。四角くないよ」

「いやいや、きんつばだつて——」

そう言いながら、福地君はとあることを思い出した。

——
鰐つばを見に行つたんだ。

あの日、少し諦めたような顔をして、そう言った同級生を。

今を遡ること五年と少し前。

めでたくも第一志望の中学に合格した福地君は、入学する前から決めていた剣道部に入部した。

理由は、「スター・ウォーズ」。福地君は、「スター・ウォーズ」が好きだった。

好きになったきっかけは、誕生日だかクリスマスプレゼントに父親から贈られたライトセイバーだ。

すっかりライトセイバーが気に入った福地君は、そこから「スター・ウォーズ」に嵌り、映画やビデオを見まくった。

気分はすっかりジェダイの騎士になった福地君。

が、どんなにライトセイバーを上手く扱おうと、どうがんばってもフォースはない福地君。（当然ですが）

これはもうジェダイの騎士になるのは諦めるしかない、と思い始めたところ、図書館でたまたま手にした本に剣道の写真があり、それを目にした福地君は天からの言葉のように、自分の進む道はこれだと確信したのだった。

防具姿のその写真が、福地君の中にあった「スター・ウォーズ」の何かに触れたのだ。

意気揚々とそのことを両親に告げた福地君。（後に彼は両親から、息子のその言葉でジェダイの騎士からダークサイドへといったキャラクターを思い複雑な気持ちになったとか、そもそもあれほど気にしていたフォースについてはどうなっていたのだと訊かれ、確かにそうだと笑ってしまった）

それから福地君は、剣道が思いっきりできる環境の中学を受けるために猛勉強し、そしてめでたく入学となったのだった。

剣道部に入部してからしばらくして、福地君はそんなジェダイの騎士予備軍に約一名、毛色が変わった人物がいることに気がついた。

同級生の中でも背が高い、なんというかぼーとしたその人物は、鈴木 学君といった。

不真面目、というのではない。

やることはやっているし、運動神経だつて悪くない。

ただ、自分のような熱さがないと福地君は思った。

そういううちに、上級生の一人が鈴木君だけに絡むようになった。

まあ、福地君から見ても、ぼーとした奴であるということは、上級生から見ると余計にそうなんだろうなと思い、そういうものかなあと思つた。

「俺、あいつ嫌い」

ある日、同じクラスで同じ部の和歌山君が、ぼそりと福地君にそう言った。

和歌山君の視線の先には、鈴木君とその上級生がいた。

「言うこと細かいし、小姑かよつて。あ、男だから小舅か？」

どっちにしても声に出すと同じなのかあ、と和歌山君が自分で言つたことに妙に関している横で、ああ、上級生の方か、と福地君は思っていた。

確かに、最近の上級生の鈴木君への言動は、技術的とか礼義作法というのではなく、ほんとどうでもいいことばかりだった。

「鈴木も黙つてないでさ、なんとか言えばいいのにな」

思いのほか熱い和歌山君の言葉を、福地君はどこか冷めた気持ちで聞いていた。

あの調子じゃ、きっと夏前には部活を辞めるんだろうな、鈴木君に関してそう福地君は思っていたからだ。

そんなこんなで合宿になった。

福地君は、クラブを辞めるだろうと思っていた鈴木君が、予想に反して参加者の中にいたことに驚いた。

そして、ほつとするというよりは、心配になった。

今回の合宿から、一年生は防具をつけることになっていた。

福地君にとって待ちに待ったそれは、本格的な打ちあいの稽古が始まり、上級生とのあれこれも今以上多くなることを意味していたからだ。

防具を渡され、その着用に四苦八苦していた一年生の中で、意外にもすんなりとそれをこなしていたのが鈴木君だった。

多くの一年生が、剣道着や防具着用の際とでもぎこちないのに対し、鈴木君のそれらは同じ一年から見てもスマートだったのだ。

注意をして見ると、鈴木君の手先はともよく動き、手ぬぐいを頭に巻くにしても、胴の紐を結ぶにしても一度ではうちり決めていたのだった。

手先が器用なんだなと、福地君は思った。

鈴木君に興味を持った福地君は、彼の剣道での動きにも注目することになり、そして彼の竹刀の軌道の綺麗さを知ったのだった。

ぐらつきが少なく、ぶれないのだ。ジェダイの騎士を目指す福地君としては、ちょっと悔しい存在だ。

福地君がちょっと悔しいと思う相手は鈴木君だけでなく和歌山君もそうだし、そして北村君もそうだった。

北村君の場合は、背は鈴木君ほど高くないにせよ、体つきがとてもがっしりしていた。そのせいか竹刀で打つ音も「痛そう」なもので、稽古の相手の先輩が気の毒になる時もあった。

北村君は無口で、福地君も「おはよう」の挨拶位しか交わしたことがない相手なのだが、鈴木君とは同じクラスのせいか比較的二人でいることが多いように見えた。

合宿に入ってからにはそれに和歌山君が加わり（というか、和歌山君が北村君にやたらとかまい）、それにつられてなんとなく福地君もということで、福地君は思いがけず「クラブを辞めるだろうと思っていた鈴木君」を含めた三人と一緒にいることが多くなっていた。

そんな合宿の三日め。

鈴木君の稽古の相手は、鈴木君に難癖をつけていた先輩だった。その先輩めがけて、鈴木君の面が綺麗に入った。

目が覚めるほどのいい音が響いた。

しかし次の瞬間、本来は鈴木君に打たせる役目の先輩が急に反撃に出て、その勢いに負けた鈴木君がひっくり返ってしまったのだ。

これには流石に顧問の先生や三年生が慌て、倒れている鈴木君を起き上がらせたり、その先輩に注意したりとちよつとした騒ぎになった。

「福地、鈴木を保健室に連れて行つて」

顧問の先生から指名された福地君は鈴木君を連れ、道場から学校の保健室まで歩いた。

「足首、捻挫ね」

保健の先生はそう言うのと、シップと包帯で足首を巻きその上からネット被せ「で、どんなことがあったわけ？」と訊いてきた。

何も答えられない福地君をよそに、鈴木君は「防具に躓きました」と言つて、保健の先生におもいきり胡散臭そうな顔をされていた。

手当が終わつたので、再び二人で剣道場へと歩き出したわけだが、実質、初めて鈴木君と二人だけになつた福地君は、前々から聞きたかつたことを訊いてみた。

「鈴木つて、なんで剣道部に入つたの？」こんなになつてまで、という言葉はあえて伏せて言つた。

ん？ という顔で福地君を見下ろしてきた鈴木君に、「お、おれはスター・ウォーズが好きだからだぞ」と福地君は訊かれてもいないのに慌てて言つた。

すると鈴木君は、「ああ、ライトセイバーか」とつぶやいた。

「おまえ、持ってた？」と福地君が訊くと、「持ってた」と鈴木

君は言って笑った。

「凄い。初めて話のわかる奴がいた」と福地君は途端に嬉しくなった。

「なんだ、鈴木もジエダイの騎士じゃないかって。

」でさ。鈴木はなんで？」

そう福地君が訊くと鈴木君は「ああ」と言った後、「鰐を見に行つたんだ」と少し諦めたような顔をしてそう言った。

「つば？」

「うん。鰐。竹刀のほら、柄つかの上にある鰐だよ」

そう言って鈴木君は竹刀を握る真似をした。柄とは竹刀の持ち手の部分のことだ。

「ああ、鰐か。そっか」確かに竹刀には鰐があるが。

「……で、なんで？」

鰐を見に行ったらそれで入部？ はつきりいって「スター・ウォーズ」より意味不明だ。

「うーん。なんでかというと。福地って、きんつばを知ってる？」

「は？ きんつば？」

鰐の次はきんつばときた。きんつばってなんだ？ と福地君は思った。つまり、福地君はさっぱり話についていけなかったのだ。

「和菓子で、四角くて周りに薄い衣があって」

「ああ、あの！ はいはい、中身餡子で一杯の」

「うん。そう。そのきんつばなんだけど」

「うん」

でも、なんで和菓子？ と福地君は混乱中。

「もともとは丸だっていうんだ。きんつばのつばは刀の鰐だから」
「刀の鰐」

「でもさ、あまり間近で見ることないだろ、刀なんて。だから、中学入学して部活の紹介があった後、ああ、そういえば竹刀にも鰐はあるかと思って見に行つたんだ」

「鰐を、か？」

「うん」

「鰐を。そうしたら、入部という運びになって」

「は？」

「変だよな」

「変、つーか、普通入部しないだろそんなことで。鈴木は別に剣道をしたいわけじゃないんだから。鈴木は鰐を見たかっただけなんだから。だったらさ、断われよ」

「そうだよなあ。でも、その時はなんというか、それもいいかなあ
と思つて」

「よかねえよ」

「まあ、いいんだそれは。とにかく、それが理由」

「……変な理由だな」

「ほんと。変だよな」

変だよ、と返しながら福地君は鈴木君とゆつくりと歩く。

「で、なんできんつばのことが気になったわけ？」

そう鈴木君に素朴な疑問をぶつけると、鈴木君は「ああ、そこにくるか」と言った。

「うちさ、和菓子屋だから」

「和菓子屋？」

「うん」

「……大福とか、饅頭とか？」

「そうそう」

「へえ。珍しいね」

「そうだよな。珍しいよね」

「もしかして、鈴木って後継ぎ？」

「うーん。多分」

「つてことはさ、なんか作れるの？」

「うーん。ものによるけど」

「鈴木のが作ったもん、なんか食いたいなあ」

「食いたいつて。……今？」

「うん」

「……なら、みんなからお金集めて。それができたら作ってもいい」
果たしてその日から、鈴木君は合宿のおやつ係となり（山路さん曰く「おやつ番長」）、そしてあの合宿から福地君は鈴木君と仲良くなったのだが、振り返ってみると、鈴木君が（言い訳も含めて）いろんな思いを積極的に話してこないのは、今に始まったことじゃないんだよなあとも福地君は思った。

「いらつしゃいませ」

扉を開けると、和菓子屋独特の静けさと、品のいい香りがした。いらつしゃいませ、と言った主は、福地君の顔を見ると微妙な表情になった。

「あ、福地君。こんにちは」

柏木 慶子さんがいた。

彼女は、福地君、鈴木君と同じ高校でしかも同じ学年で同じクラブ（女子部だけ）の女の子だ。

既に関い物が済んだのか、手にはこの店の「寿々喜」の袋があった。

学校が休みでも、こうしてこの二人は会っている（「会っている」と言えるのかは微妙な状況だが）のだなと思うと、福地君は少し悔しいような気がした。

—— はて。悔しい？ 誰に対して？

鈴木君と福地君がお互い何か言いたけな表情をしつつも見つめ合い無言を貫くのに対して、慶子さんの視線は福地君から彼の妹へと落ち着きなく移っていた。

福地君の妹も、慶子さんをじっと見ている。

「こ、こんにちは」

慶子さんが福地君の妹に向けて挨拶をすると、妹は「こんにちは」

とだけ返した。

いつもは煩い位のおしゃべりで、じっとしているのが苦手な妹の大人しい姿に、福地君は眉を上げた。

「あ。草がついている」

そう言つと柏木さんは、妹の頭のとっぺんについてた葉をぱつと取った。

実は駅を降りてから見つけた、「見晴らし台公園」でガス抜きのため少し遊んできたところだったのだ。

「柏木さんに妹っていたっけ？」

「ううん。一人っ子。従兄弟はみんな男の子」

訊いてもいない従兄弟についての発言までした後、慶子さんの視線は再び妹に移る。

尋常でなくくらいの興味を慶子さんから感じる福地君。

すると、「私、五年生」と、いきなり慶子さんに自己紹介をしだす、福地君の妹。

「福地 夢子。おねえさんは？」

「柏木 慶子。高校三年生」

いや、高校三年つていうのはこれまでの流れでわかるでしょ、と福地君は心の中で慶子さんに思いつき突っ込む。

夢子ちゃんは、慶子さんの自己紹介にふーんと頷くと、「彼女？」と福地君に訊いた。

「ち、ち、違ふよ。何言うんだよ」

子どもって何言うかわかんねえ、こえーと思つた福地君。

けれど一番怖いのは、この会話の中で全く表情が変わらない鈴木君だと福地君は知っていた。

「ほら、ほら、夢子。きんつばを買いに来たんだよな、俺たちは」
そう言つと福地君は夢子ちゃんを追いたて、ショーケースの前へと進んだ。

「これ、これがきんつば」

「そんなの見ればわかるよ。ちゃんと書いてあるんだから」

私をなんだと思っているの？ と夢子ちゃんが言う。

「わかったよ。俺が悪かったよ。で、ほら。丸いだろ」

「うん。丸いけど」

「けど？」

「だって夢子、四角いきんつば見たことないのに、丸いだろって言わても困るよ」

その言葉に慶子さんが笑う。

「夢子ちゃんって、頭がいいね」

感心したように言う慶子さんに、「だって毎日受験勉強してるもん。もう、あたまパンクしそうになるくらい」と少し得意げな顔で夢子ちゃんが言った。

その夢子ちゃんの話を引き継いで、「こいつも受験するからさ」と福地君が言った。

「受験となると、流水算とか、つるかめ算とか？」

恐る恐るといった感で慶子さんがそう訊くと、ぞつとしたような顔で夢子ちゃんが「そうなの！」と答えた。

すると慶子さんと夢子ちゃんは、いかに中学受験の勉強が大変かを熱く語り始めた。

夢子ちゃんが熱く語るのはいいとして、慶子さんは既に高校三年生。

中学受験も彼方の出来事となっていてお年頃なはずですが、堂々と同じレベルでの語り合い。

「つーことで。きんつば、六個、よろしく」

福地君が注文をすると、鈴木君はあまたを下げ、用意をしまった。

そんな鈴木君の様子を眺めながら、ふと上生菓子と書かれた段の菓子をみた福地君。

ピンク色した可愛い和菓子を見て、後ろを振り返った。

「これ、似てるね」

福地君は、ピンク色した花の上に白い綿のようなものがかった菓子を指した。

主語は外したのは、わざとだ。

その言葉に、鈴木君は口角を上げるだけの笑いをして、「同感」と言った。

その言い草に、またまた悔しいような気分になった福地君。

そんな福地君の後ろでは、妹と同級生が仲良くおじゃべりをしていた。

11・恥ずかしがり屋の着綿／（九月）

九月長月、月の頃。

季節を分ける秋分があり。

慶子さんの心も少し乱れ気味。

「スマイル下さい」

洗面所で慶子さんが手を洗っていると、慶子さんの父親がにこにこしながらそう言ってきた。

「あ」

慶子さん、またやってしまったとばかりに顔を赤くする。

「慶子が行ったのは、本当に剣道部の合宿だったのかなあ」
ちよつとごめんよ、と言うと父親は歯ブラシを取った。

「手は肘から洗うようになったし、牛乳羹やおはぎまで作ってくれたし」

慶子さんは慌てて腕を拭く。

「お母さんと、慶子はどこかの食べ物屋さんでバイトでもしてきたんじゃないかって話しをしているんだよねえ」

ははは、と笑う父親に、笑顔が返せない慶子さん。

おやつ副番長として和菓子さまこと鈴木 学君の手伝いをした一番の影響が、「手洗い」という意外なところに出てしまい、それが両親の知る「ファストフードのアルバイトさん」の手洗いとよく似ているとかで、慶子さんの手洗い現場を見るたびに、父親はそう言うてからかってくるのだった。

和菓子さまといえは。

「柏木さん。鈴木ってさあ、どうなっているのかなあ」

日直でクラブへと向かうのが少し遅れた慶子さんに、同じように少し早足で歩く剣道部部長の福地君がそう言ってきた。

「まあ、クラブを休み始めたし。合宿では真面目だったのにさ」
そう言つと福地君は顔をしかめた。

慶子さんにしてみれば、「まあ、クラブを休み始めた」と言うよりは、合宿こそ「たまたま参加した」というように見えていたのだが。

「でもまだ、弟さんたちのお世話とかあるんでしようし」

和菓子さまには、七月に生まれた父親の違う弟がいる。

和菓子さまの産みの母は数年前に再婚したそうで、その人との間にできた二人目の子だそうだ。

つまり、自分とは別のところに暮らす弟が二人もいるということだ。

このところ和菓子さまは、出産や育児で大変なその母親を色々と助けていて、クラブを休むのもそういった理由からだと言いた。

そして、その助けの中には、きつとおやつ作りもあるんだろうなと思うと、和菓子さまの弟が羨ましく思える慶子さんだった。

「柏木さんがさ、部活に出てって言えば、鈴木は出るんじゃないかなあ」

福地君が言う。

「私が？ まさか」

最近、和菓子さまとは話をしていない慶子さん。お隣の席だけど。

でも、月の初めにお店に行ったときにはたまたま和菓子さまがいて、そこで少し話をしたなあと思い（といつてもお菓子についての説明だったけれど）、そういえばその場に福地君が可愛い妹を連れてやって来て、きんつばを買ったのよねえとも思い出した。

「お願いだから、柏木さん。鈴木にクラブに出るよう、言ってみてよ」

ぼんやりと違うことを考えていた慶子さんの両腕を、突然福地君ががしりと掴んだ。

「え、えええ？」

福地君のその強い力に押され、慶子さんはそのまま廊下の壁まで後ずさってしまった。

とその時、「福地」の声に福地君の体がぐいつと後ろに引かれ、慶子さんから離された。

「あ、北村！ おまえさん、いいところに。北村からも柏木さんに……って、おまえ、何すんだよ」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ福地君を引きずるように連れて、北村君はずんずんと歩いていった。

福地君に押しやられたままの恰好だった慶子さんは、ふうとため息をつくと思ひながら、部室へと急いだ。

そして、北村君みたいに腕力を付けるのはどうしたらいいのだろうかと思ひながら、部室へと急いだ。

遅れて部室に入ると、制服姿の綺麗な女の子が立っていた。

顔は知っているけれど名前までは知らない、同じクラスにはなかったことはないけれど同級生だと慶子さんは思った。

「あ。もしかして、柏木さん？」

「はい」と慶子さんが答えると、その子にはこりと笑い、「ああ、よかった。私、常盤とぎわ 冬子ふゆこ。もと剣道部。で、現在剣道部再入部希望者。よろしくね」

そう言うつと、常盤さんはちょっとだけ首を傾げた。一緒に揺れる長い髪が綺麗だった。

剣道着に着替えた慶子さんが、見学者として常盤さんを連れて道場へと行くと、ちょっとした騒ぎになった。

見た覚えのあるのも当然だった。

常盤さんは以前ミス学園コンテストでクイーンになった人で、この春に受験のために剣道部を辞めた一人でもあったのだ。

「受験、やめたのよ」

二年生男子がわいわいと常盤さんを取り囲む中、三年生軍団はちよつと戸惑っている様子だった。

「常盤、受験をやめたなんて、なあんか、怪しいなあ」

本来なら部員が増えることで一番喜びそうな山路さんが、渋い顔をした。

エスカレーターで大学まで進めるこの学校で他大学を受験をする人というのは、高二からの履修科目も含めて、ある程度の覚悟もち臨んでいることは、慶子さんでも知っていた。

受験生にとつての本当の伸びしろはこれからの季節にあるだけに、夏過ぎてすぐの段階で受験をやめるといふのは、全くないとはいわないが、珍しいことではあったからだ。

「ま、ともかく、部活を始めよう」

そう言う福地君に頷いた山路さんと慶子さんは、さつと三年生の顔になり、常盤さんが見学する中稽古を始めた。

「わっかやま」

部活が終わるなり、常盤さんの声が剣道場に響いた。

「げ、おまえ、道場ででかい声を出すなよ。とつと帰って勉強しろよ」

「そんなつまないこと言わないで。みんなでマックでも行かない？」

みんなでマック。

仲がいいんだなあと、慶子さんは常盤さんと和歌山君を見ていた。

「あら、ヤギちゃん。あなたもよ」

そう言つと常盤さんは、慶子さんの腕を組んできた。

「ちよつと常盤。柏木さんに馴れ馴れしく触らないでよ。それに何なの、ヤギちゃんって」

山路さんが、ぶーぶーと常盤さんに文句を言う。

「え。だって、柏木さんって、スケープゴードでしょ」

常盤さんの一言に、その場にいた三年生がみな固まる。

慶子さんは、スケープゴードという言葉よりも、その場のみんなの顔色が変わったことに違和感を感じた。

「やだ。本人に言っていないわけ？」

ねえ、ヤギちゃん聞いてないの？ と常盤さんが慶子さんの顔を覗き込んできた。

慶子さんは常盤さんの顔を見ずに、山路さんのことを見た。

「常盤、マツクに行こう」

和歌山君が常盤さんを慶子さんから引きはがす。

そして、北村君が他の部員たちの背中を押し、前へと歩きださせる。

その場に残ったのは、山路さん、慶子さん、そして福地君の三人だ。

山路さんが慶子さんの腕を取る。

「柏木さん」

山路さんは真っ直ぐに慶子さんを見た。

だから慶子さんも、真っ直ぐに山路さんのことを見ることができ、「ちよつと話そう」という福地君の言葉に、みなで歩き出せたのだ。

着替えないまま三人で、テラスへと向かった。

夏休み、みなで和菓子さまが作ったおやつを食べた場所だ。その場所に、三人で座った。

「俺が悪いんだ」

座るなり福地君が頭を下げた。

「二年の終わりに、鈴木が剣道部を辞めるって言いだして」

福地君は頭を下げたまま、話し続ける。

「俺はダメだって、そんなの認めないって言って」

その頃、体調を崩した岡山も休部するって話だったし、他にも何人か受験で抜けるっていう奴もいたから、と福地君は言った。

「今になれば、鈴木理由はお母さんの出産の手伝いとか、それで弟の面倒を見たりとか、そういうのだったって分かったけど、あの頃鈴木はそんなこと一言も言わないから、だから認められなくて」

福地君はゆっくりと顔を上げた。

「ずっと中学から一緒にやってきたんだ。俺の我ままだってわかっているけど、でももうわずかなんだ、一緒にこうして部活ができるのは。だから、最後までやりたいんだよ。そう言ったら鈴木は、退部はしないからクラブを休むのは認めてくれって言いだして」

和菓子さまも福地君の思いが分かったのだろっ、慶子さんはそう思った。

「でも、俺、意地が悪いから」

そう言っただけ慶子さんの顔を福地君はじっと見た。

「……俺、言ったんだ。おまえ、クラブを休みたいんなら、おまえの代わりに三年を一人入れろって。入れたら鈴木は言う通りでいいって、からかってやるような冗談半分の気持ちで」

福地君の瞳は、悲しそうに揺れていた。

「三年で、普通はクラブを引退するような時期に、剣道部に入ろうなんて奴はいないだろうって。俺、そう思ったから」

山路さんは黙ったままだ。

「そしたら、始業式の日には鈴木が柏木さんの入部届けを持ってきてさ。一体これはどういうことなんだって訊いたら、新しいクラスで隣の席になった子が何も部活に入っていないって言うから、その場で誘ったって」

福地君の話聞いて、慶子さんはいつかのことを思い出した。

山路さんと一緒に部活に向う途中で聞いた、和菓子さまと福地君のやり取りのことを。

――「鈴木、いい加減にしろよな」

――「部活を暫く休む話は、もうついていたと思ったけど」

――「そんなの、冗談だと思っただけ」

福地君は、和菓子さまに部活に出て欲しいから、無理難題を押し付けた。

どうせ、そんな人はいやしないだろうと。

けれど、そこに慶子さんがやってきたことで、福地君の思いは打ち砕かれた。

慶子さんは、和菓子さまの代わり。

スケープゴード。

でも、慶子さんには分かっていたのだ。

自分が、スケープゴードで知らないことを。

「ごめんね、福地君」

自分はどうしてもないことをしてしまったと、慶子さんは身の置き場がなかった。

いくら誘われたからといって、三年にもなつて初心者の自分が、そもそも入部すること自体が間違っていたのだと。

断るべきだったのだ。

……迷惑だったのだ。

そんなみんなの気持ちにも気づかずに、剣道部にいることが嬉しくて、浮かれていた自分。

「や、待って。謝らないで！ 柏木さんは、ちっとも、一ミリも悪くないし。悪いのは俺だし」

「そうよ。柏木さんが謝る必要なんてこれっぽちもないのよ。私は鈴木が柏木さんの入部届けを持って来た時、鼻血が出そうになるほど嬉しかったし」

山路はこの話をその時は知らなかったから、と福地君は言った。

「柏木さん、私、最初に馬鹿な男二人のやり取りを聞いた時、ほんとうもないなあと思った。人を勝手に差し出すような真似をしてって。柏木さんがそのことを了解済みで入部してくれていたならまだしも、様子を見ると全く知らないみたいだし。そのことを鈴木に訊いても、なんだかはぐらかすしさ。私の中で、どうしたらいいのかって葛藤があつた」

「ごめん」と、福地君がしよげた声で慶子さんと山路さんに謝る。

「福地、なあと、らしくもない顔をして。ついでに、福地ね、一言言わせてもらうとね、さつき『もうわずかなんだ、一緒にこうして部活ができるのは』なんて言っていたけど、どうせ大学に入ってもしつこく鈴木を勧誘するんでしょ。ミエミエだから、やめてねそんなお涙頂戴な台詞を言うのは」

山路さんがそう言うのと、福地君は「ばれたか、アイタタタ」と言った。

「でもね、柏木さん。どんな事情であれ柏木さんが入部してくれたことは、とっても幸運だと私は思っている。もし、鈴木が柏木さんを誘ってくれなかったら、私、今よりも気持ちじゃなかったと思うし」

山路さんの言葉に、慶子さんはびっくりした。

「私、三年女子一人で、本当は心細かった。いつもは強がりと言っているけど、辛かった。男子は助けてくれるって言うてはいたけど、一年生をどうやって勧誘したらいいんだろうって。ほら、去年大失敗しているから、だから凄く怖くて。それに運よく一年生が入ってきたとしても、一体一人でどうしたらいいんだろうとか。ホント、びくびくしていた」

「え、山路って、そうだったわけ？」

福地君の言葉に山路さんが、「あたりまえでしょ」と言った。

「柏木さんは、確かに初心者で、そういった意味では一年生と同じかもしれない。でも、違うよね。柏木さんは、私と同じ土俵に立と

うと、三年生であろうとすごく努力していたよね。それが、私をどんなに勇気づけてくれたか……。福地、おまえにこの気持ち、わかるかっ！」

そう言つと山路さんは、いきなり福地君をべしべしと叩きだした。

驚いた福地君が、「わあ、やめろ、やめろ」と手で山路さんからの攻撃をガードした。

「これで、柏木さんがクラブを辞めるなんてなったら！ 福地のこ
と——」

山路さんの言葉に、福地君はガードしていた手をぶらんと落とした。

「ばかばかばか！」

そう言つて福地君を叩く山路さんの目からは、涙が出ていた。

「ごめん、柏木さん。だから私、言えなかったの。葛藤しながらも、どこか『このままでいいっちゃえ』って思う気持ちが強くて。柏木さんにそのこと、言えなかった」

私だつて、ばかものよお、と山路さんが言う。

慶子さんの心は揺れていた。

今の今まで、自分は剣道部にはいけないんじゃないかって、クラブを辞めないといけないんじゃないかって思っていた。

でも、ここにきて。

自分はここにいて、剣道部にいてもいいんだと思えたのだ。そしてその思いは、慶子さんに予想以上の大きな喜びをもたらした。

確かに慶子さんは、スケープゴードとして、迎えられたのかもしれない。

……。でも。

「私、剣道部にいたい」

慶子さんが山路さんを見て、そして福地君を見てそう言つと、二人とも表情をぐしゃりと歪めた。

「俺、泣くかも」

福地君が腕で、両目をぐつと覆った。

「気持ち悪いこと言わないでよ」

そう言う山路さんも、まだ涙ぐんでいた。

テラスで、剣道着を着たままやけに水っぱい三人を、部活が終わった他のクラブの面々が不思議そうな顔で遠巻きに見ていた。

帰宅しても、ぼんやりとしている慶子さん。

あまりにもいろんな感情が、短時間であっちこっちを行き来したため、ちよつと脳内はオーバーヒート気味。

ぼんやりしながらも、夕飯の用意のためにテーブルにランチヨンマットやお箸を並べていた時、「慶子、お土産を買ってきたよ」と玄関から父親の大きな声がした。

慶子さんが玄関に向うと、父親は袋を手渡してきた。

「慶子の好きなお店の和菓子」

「寿々喜」の袋だった。

夕飯後に改めて緑茶を入れ、「寿々喜」の包みを開けた。

「これ、この間慶子を買ってきてくれたやつ。あんまりにも可愛いから、また買いたくなってさ」

箱の中には、先日慶子さんが買い求めた菊の菓子「着綿^{きせわた}」があった。

薄ピンク色した練り切りで作った菊の上に、そぼろで出来た白い綿がふんわりとかかっている。

綿の下が、見えるか見えないかといった様子が愛らしい。

「着綿」というのは、九月九日の重陽^{ちゅうじゅう}の節句の前夜に、不老長寿の象徴とされる菊の上に置かれた真綿のことだそう。

翌日の九月九日の朝に、その綿で身を拭くことで、長寿を願ったらしい。

この話は、慶子さんが「着綿」を買ったときに、和菓子さまから

聞いたものだ。

一番初めに会った「仙寿」といい、和菓子には長寿や健康を願うものが多い。

長寿国といわれる現在の日本ではなかなか想像しにくいことだが、「死」が生活のすぐ隣りにあった時代があったからこそ、願いや祈りを込めた菓子があるのだらうと慶子さんは思った。

そしてそれは、母親が長いこと患っていた慶子さんにもよくわかるもので、人々の思いが菓子となり続いていることの奇跡を感じた。

父親が買ってきた菓子はまだあった。

「これ、お芋？」

どこからどう見ても里芋としか思えないものが、「着綿」の隣にあった。

「ああ、これね。ちょっと待って」

慶子さんの父親はそう言う、ハンガーにかけてあったジャケットのポケットから一枚の紙を取り出した。

「うん、そう。訊いたんだお店の人に。……ええと、そう、里芋。でもね、そういう名前じゃなくて『衣かつぎ（きぬかつぎ）』だって」

なんでも皮のまま蒸した芋って意味らしいよ、と父親は続けた。父親の言葉に慶子さんの母親も興味深そうに「衣かつぎ」を見ていた。

衣かつぎだなんて日本語って綺麗ね、という母親の感想に慶子さんも頷いた。

そして最後の一つは。

「今日はさ、どうしても大福気分で」

あはははは、と笑う父親が箱に手を伸ばし、ふっくらとした大福をにゅっと持ちあげた。

柔らかそうな餅の中にたくさんの豆が透けて見える、とてもおいしそうな豆大福だった。

「これを食べて、明日からも豆豆しく働かせていただきます」

おどけるようにぺこぺこ頭を下げる父親に、母親も慶子さんも一緒に笑った。

家族三人で一緒にご飯を食べて、お菓子を食べて、お茶を飲んで。

そんな毎日が、とても楽しいなと慶子さんは思った。

「着綿」と「衣かつぎ」は半分にして、母親と両方の味を楽しんだ。

ぱくりと「着綿」を口にれた慶子さん。すると、さつき福地君から聞いた言葉を思い出した。

『新しいクラスで隣の席になった子が何も部活に入っていないって言うから、その場で誘ったって』

その説明に間違いはないけれど、どうも以前合宿で自分がホットケーキが得意がどうか訊かれた時の答えと似た匂いを感じてしまったのだ。

嘘じゃないけれど、本当でもない。

……どうして和菓子さまは、そんな説明をしたのだろうか？

「おっはよう。柏木さんっ」

いきなり背後からがしりと腕を組まれた慶子さん。

「お、おはようございます」びっくりして振り向くと、常盤さんがいた。常盤さんは慶子さんの目をじつと見て、「剣道部、辞めないんだ」と言った。

慶子さんも常盤さんの目を見たまま、「はい。辞めません」と言った。

常盤さんは慶子さんから視線を外すとふふつと笑い、「根性あるね。まあ、あのことはさ、別に柏木さんに意地悪をしようと思って言ったことじゃないし」と言い、「私ならね、自分の知らないところで、ことが動いているのって嫌だと思ったから」と、常盤さんは

慶子さんの腕を組んだままでそう話した。

「そうです……よね」

現実として、そうだったことは多いんじゃないかって思う慶子さんだったが、確かに今回のことは知ることができてよかったと思うので、そう返事をした。

「まあ柏木さんのそれについては、特別サービス。おまけとも言えるかな。私が昨日部活を見学した本当の理由は、山路だから」

山路さんのこと？ 慶子さんはゆっくりと常盤さんの顔を見た。

ふふ、と常盤さんが笑う。

「山路のことが気になっていたから。山路を一人にしちゃったこと、気にしてないはずじゃない」

その言葉に、慶子さんははっとした。

今までは、残された山路さんの言葉しか聞いていなかったのだから、残していった人の言葉を聞くのは初めてだったからだ。

「そんなつもりはなかったけど、結果山路が部活に一人で人残ることになって。私は、っていうか、私以外のみんなも、山路が困っていたら何かしらのことでは助けるつもりだった。だから、いつ山路がSOSを出してくるかって待っていたのに」

肘でぐりぐりと慶子さんのわき腹を付く常盤さん。

「そしたら、正義の味方が登場しちゃってさ。出番、なしじゃない？」

ねえ柏木さん、と常盤さんが言う。

「でもさ、違ってたんだよね。山路のこと『助ける』って思った時点で、もう違ったんだよね。私たちは外にいて、中にいる山路を助けたいと思った。でも山路は、助けてくれなくてもいいから、一緒に中に入ってくれる人が欲しかったんだって」

昨日さ、あのあと和歌山や北村とマツクに行っただけで誘ったのはおまえだからって全部奢らされたのよ、と常盤さんが言った。

「そこで、聞いたわ。柏木さんがどんなに役立たずで、とてもじゃないけど鈴木のことっていうか私たち誰の代わりにもなっていない」

てことを」

常盤さんの言葉に、流石に慶子さんもちよつと傷つく。でも本当のことだから、それは仕方がないとも思えた。

「あの人たちが言うには、柏木さんは、柏木さんなんだって」

誰の代わりでもないんだ、だって、ああ、そうですかってな感じよ、と常盤さんは慶子さんの腕を外す。

「私、気がつかなかった。あいつら、意外といい奴らだったってことに」

近くにいろと見えないんだよね。

「離れて初めて分かった」

常盤さんの瞳が悲しそうに揺れた。その様子は、昨日の福地君によく似ていた。

慶子さん、がっつと勢いよく常盤さんの腕を掴む。

「……なによ。放しなさいよ」

常盤さんがじろりと慶子さんを睨む。美人なだけに大迫力だ。

慶子さん、焦って手を放す。

「常盤さん、受験をやめたのなら」

「やめてないわよ！ そんなの、嘘に決まっているでしょ！」

そうでも言わないと見学なんてできないじゃない、と常盤さんが言う。

慶子さん、がくりと肩を落とす。

「受験はやめてないけど。でも、たまになら、本当にたつまゝになら時間作れるし。っていうか、作るし。……やっぱり私も剣道したいし。もし、山路や柏木さんが私を受け入れてくれるっていうなら」

「大歓迎です！」

慶子さんはそう言いながら、「捕まえた！」と思った。

「あ、そ、そう？ ふーん」

そう返事をする常盤さんの頬が、うつすらとピンクに染まった。その様子は、着綿のようでもあり。

「ちょっと、柏木さん。歩くの遅いわよ！」

ぽーっと常盤さんを眺め立ち止ってしまった慶子さんを急かすように、でも手を差し伸べる様に、常盤さんの声が朝の通学路に響く。

それに応える様に、慶子さんは早足で常盤さんのもとへと向かった。

12・秒速12センチの紅葉／（十月）

十月、衣替え、神無月。

いよいよ、学生服は冬物へと代わり、三年間お世話になった夏服は箆笥の中へ。

「慶子、ちよつと来てごらん」

二階の部屋で本を読んでいた慶子さんに父親が声をかけてきた。

「う……ん。あ、はい」

物語の切りのいいところに栞を挟むと、慶子さんは一階へと下りていった。

慶子さんが階段を下りると、和室から母親が顔を出して手招きをしているのが見えた。

「そっち？」なんだろうと慶子さんが和室に入ると、色とりどりの着物が衣紋掛け（えもんかけ）に掛けられていた。

「ああ、虫干しをしていたんだ」と慶子さんが言くと、母親はいたずらっぽい顔で慶子さんを見た。

確かにこのところ晴天が続き、今日もいいお天気で湿気もなく、虫干しにはぴったりだった。

「おお、慶子、来たか来たか。ほれ。振袖、振袖」

ひと際布がたつぷりとした華やかな着物が目に入る。振袖だ。そしてこれは、母親が二十歳の時に着たものだった。

—— かし。

「いやあ、これを着たお母さんは中々迫力があつた」

父親が「姐さん！^{あね}」と母親に呼び掛けると、満足そうな顔で母親は腕を組み、ふむふむと頷いていた。

母親の振袖は、黒だった。そこに朱や金が入り、更には様々な花

が競い咲いている。

振袖といえば、赤やピンクや最近では水色など可愛い色が多い中、黒を選ぶとは中々個性的だ。

以前慶子さんが母親に、どうして黒にしたのかと尋ねたところ「他の人と同じじゃつまらないから」という答えが返ってきた。

確かに、毎年流れる成人式のニュースをテレビで見ると、あまりいないのかもしれない黒は、と慶子さんも思う。

そして自ら選んだだけあって、その着物は母親にとっても似合っていた。

けれど自分も二十歳になったらあれを着るのかと思うと、父親の「姐さん！」発言も気になり、正直微妙であった。

慶子さんがそんな思いで振袖を眺めている隣で、父親は自分が慶子さんに振袖を見せようと呼んだにもかかわらず「むう。そういえば慶子もそろそろ。いやまだまだ……うむむ」と子どもの成長の喜びと成長故の親の淋しさの葛藤を繰り返していた。

慶子さんがずっと視線を隣の着物に移すと、「ああ、これは慶子をお宮参りに連れていった時の着物だな」と父親が言った。

それは、卵色した綺麗な無地の着物で柏木家の紋がついていた。なんでも、母親の嫁入り道具だそうだった。

「水天宮に行った時、慶子、ぐっすりと寝ていてさ。こりゃ大物になるなあ」とみんなで話したものだ」ははは、と笑う父親に母親も頷く。

大物。何をもって大物と言うのか。それとも両親の中で既に自分は大物なのか、ちょっと悩む慶子さん。

そしてもう一枚。前の二枚と比べるとこじんまりとした、若草色の子ども用の着物。

「懐かしいなあ。慶子が七歳の時に着た七五三の着物だろ。これ、お母さんのお下がりだけど、慶子にも似合っていたよねえ。神社に来ていた外国人の人たちに写真を撮ってもいいかって訊かれて、モデルさんみたいだったよなあ」

慶子、覚えているか？ と訊かれたので、慶子さんは覚えていないよ、と答えた。

とはいえ慶子さん、その神社に行く前までの記憶はあったのだ。美容院に連れて行かれて、髪を結われて、紅を差して。

けれどその紅が、どうももったりとした感じで気になってしまい、以降の記憶はそのまま感に消されたかのように全て無くなっているのだ。

「神社でさ、慶子と同じくらいの年の外国の男の子が、しきりに慶子のことを可愛い可愛いって言って、お父さんは追い払うのが大変でさあ」

呆れた顔で父親を眺める母親をよそに、いやあ、可愛い娘を持つと大変だあと、親ばか満載の父親。

「ほらほら、これ。まだ慶子に似合いそうだよなあ。うん、可愛いぞ。慶子、あててみるか？ あの時のことも思い出すかもよ」

そんな父親の言葉に、戸惑う慶子さん。

父親に悪気がないのは分かっている。

けれど、なんとも言えない気持ちになってしまったのだ。――

十八の自分が、振袖でなく七五三の着物を勧められたことに。

「思い出さないよつ。だって覚えてないんだもん」思わず強く言い返してしまった慶子さん。

そして、慶子さんの語気の強さに「おつ」という顔をした父親にも気づかず、「覚えてない」と言葉に出したことで、慶子さんはあることを思い出した。

「……あのさ」と話し出す。その慶子さんの言葉に両親は耳を傾ける。

「小さい時のことって覚えていないこと、多いでしょ」今の七五三の話にしても、それに赤ちゃんの頃のお宮参りにせよ、と。

ふんふん、と頷く両親。

「それって、その頃のことを私が覚えていないって、嫌？」そう問われた両親は顔を見合わせ、同じタイミングで笑いだした。

「嫌って、なんだそりゃ。子どもが小さな時のことを覚えていないのは、当り前だろ」お父さんだって自分が小さい時のことなんか覚えてないもんな、と言う。

「でも、もし、覚えていたら……より良かったのかなあと思ったりして」

——そこらへんのごたごたを覚えていなかったんだ。

「覚えてないと、つまりが……知らないってことになっちゃうし」

——俺も知らなかったんだ。お袋が実の母じゃないって。

「本当は知っているのに、知らないってことは、なんか、ちよつと」

——知らないっていうのは、変か。正しくは、忘れていたというか

「……悲しいかなあって」

そう。いつかの和菓子さまのあの言葉を聞いた時、慶子さんはとても悲しくなったのだ。

和菓子さまには、産みのお母さんとの思い出がない、ということだから。

「こんにちは」

今日も今日とて「寿々喜」の暖簾をくぐる慶子さん。両親から、お三時の菓子を買ってくるようリクエストがあつたのだ。

「いらつしゃいませ」

お店にいたのは、師匠だ。師匠とは、あの夏の合宿帰り以来顔を合わせていなかった。

あの時は、自分が見た不埒な夢とそれをなぞるような師匠の「おかえり」の言葉のため、動揺してしまった慶子さん。（とはいえ、その日も師匠に誘われるまま店に入り、おまけにお土産までしっかりいただいてしまったのだが）

そしてその後も、「寿々喜」に行こうと思うたび、「買いたい気持ち」と「師匠に会うのが不安な気持ち」のせめぎ合いがあり、けれど毎回結局は「買いたい気持ち」「食い気」が勝ち、更には運もあってか師匠と顔を合わせることはなかったのだが、遂にというか当然のようにこの日を迎えてしまったのだった。

慶子さん、一瞬構えたものの、とりあえず気持ちを落ち着かせ、改めて師匠の顔を見たところ——はて。

これが、嘘のようになんともなかった。

師匠は師匠で、和菓子屋さんのご主人以外の何者にも見えない……。

そのことについて考える間もなく、「ああ、柏木さん、お久しぶり」と師匠から名指しでのご挨拶が。

曖昧な笑顔を向けながらも、自分のその反応にほっとしつつ、でも少し気が抜けてしまった慶子さん。

てくてくといつものようにガラスケースに近づき、そして、目がまん丸になった。

菓子の名と師匠の顔を、交互に眺める。

「ははは。やっぱり、驚いたか。奴の言うとおりだね。これね『山路の茜』って言って、色づく山の秋の夕暮れを表してるの」

師匠の言葉に、はあ、と頷き再びじつと菓子を見る慶子さん。

「で、この菓子はね、棹物^{さおももの}って言ってね、羊羹を作る細長い器で作るんだ。この上と下のスポンジみたいな生地は浮島^{うきしま}といってね、餡に卵や砂糖や小麦粉を混ぜて作ったもの。食感はしつとりとしててね。もしかしたら、それとは知らずに食べたことがあるかもしれないね。で、間にあるのは赤い羊羹ね。夕映えに染まる小路ね。ところどころに小豆も入れてね。で、それを一個一個、小分けにしたんだな」この小分けっていうのは、珍しくも学からの提案でさ、と師匠は言った。

慶子さんの目かららんと輝く。これは、絶対に買わねば、と思ったのだ。買って、山路さんと常盤さんに食べてもらいたいと。二

人にこれを見せたらどんな顔をするのかと考えただけで、わくわくとした。

「いやはや、本当に嬉しそうだなあ」とつぶやくのは師匠。つぶやきなだけに、慶子さんには聞こえず。

慶子さんは、視線を「山路の茜」から隣に移した。

そして、これまたどきりとした。

そこには、紅葉^{もみじ}の葉の形をした、上生菓子があった。けれど、その葉はまだ紅葉^{こうよう}は、していない。

まるでさつき、虫干しをしていた慶子さんの七五三の着物を菓子にしたような、若草色だったのだ。

菓子の名前は、「初紅葉^{はつもみじ}」とあった。

「これは、なんでまだ紅葉していないんですか」

この菓子とさつき父親に七五三の着物を勧められた時のなんとも言えない気持ち——自分の未熟さを指摘されたような思いとが重なり、ついそんなことを訊いてしまった。

「ああ、これね。うん」

そう言うとは師匠は、少し考えるような顔をした。

「『まだ紅葉していない』っていうのは、違うなあ」師匠はそう言うのと、うんうん、と頷く。

そして、「もうすぐ紅葉するんだよな、って思いながら作ったんだ」と続けた。

「……もうすぐ」

「そうそう。うん、確かに、春にこの菓子を作ったとしても似たような色になったかもしれない。でも、春に作るときは、緑が芽吹いてくるそんな様子を思いながら作る。でも、この緑色した紅葉^{もみじ}は、こうみえても既に紅葉^{こうよう}する準備ができている緑なんだな。同じに見えても、内に込めた思いが違うんだよなあ」

でもまあ、見る人にとっては同じかもなあと師匠は言った。

——見る人にとっては同じ緑。

でも、心の目で見れば、もう紅葉^{こうよう}する準備はできている紅葉^{もみじ}であ

り……。

その師匠の言葉を聞いて、慶子さんは自分も勇気づけられた気がした。背中がしゃんとした。

それによくよく見れば、ほんの少しだけ、紅葉もみじの葉の先に黄色が入っていたのだ。

ふっと笑顔がこぼれる。

慶子さんは、そしてその隣にあるもう一つの菓子を見た。

きんとんで作ったいがの真ん中に、栗の実が一粒どんと入っている「実り」を。

ころんとしたその様子がとてもなく可愛らしくて、慶子さんはガラスケースにのめり込んでしまうほど菓子を眺めていた。

「本当に、好きなんだなあ」

再びぼそりと師匠が漏らした言葉は、やはり菓子に夢中の慶子さんの耳には入らず。

そしてそんな慶子さんの様子を見ていた師匠の口の横の皺は、ふっと深くなった。

「で、これが、来月の文化祭で行われる交流戦の相手校に渡す、お知らせの手紙の草稿で」

山路さんがおにぎりを頬張りながら慶子さんにプリントを渡す。

「文化祭の日の交流戦」

渡された紙には、交流戦の日時とここまでの交通機関と駅からの簡単な地図。そして当日のタイムスケジュールなどが書かれていた。

剣道部では毎年学校の文化祭の日に合わせて、他校を招き交流戦をしているということだった。プリントに目を通し、卵焼きをぐくんと飲み込んだ慶子さん。

「山路い。今時、お手紙なんて面倒。あそここの試合は毎年のことなんだしメールでいいじゃない、メールで」

ちよちよと打ってぴつと送っちゃえばいいに、そう茶々を入れるのは、廊下側の窓から二人の様子を眺めている常盤さん。

受験生ながらも、剣道部に再入部した人物だ。

彼女はミス学園だっただけに、その姿は美しく、廊下を歩く男子もちらちらと視線を向けていた。

「常盤、お弁当は？」山路さんが訊く。

「カロリーバーを食べたから大丈夫。今は食後のコーヒータイム」
そう言う常盤さんの手には、自販の三角パックのミルクコーヒーがあった。

その様子を見た山路さんは、わざとらしく大きなため息を一つつくと、「常盤さあ、薬剤師を目指しているあんたが食べているものに私があればこれ言うのも変だけどさ。それ、栄養的にはいいのかもしれないけど、食事はそれだけでいいってもんじゃないんじゃないの？」そう言っただけのお弁当箱からおにぎりを一つ取り、お弁当箱の蓋に載せ常盤さんに勧めた。

常盤さんの進路を初めて知った慶子さんは、ぱつと常盤さんの顔を見て、「薬剤師ですか。凄いですね」と言った。

慶子さんの素直に感心したような声に、「あれ。もしかして、珍しかった？」と常盤さんが訊いた。

慶子さんは少し考えた後、首を縦に動かした。

「私の周りには、家族とか親戚には、医療関係に進んだ人はいなかったから。だから、そういった人たちは別世界の凄い人たちだと思っていたので」と慶子さんが言うと、「案外世俗にまみれているもんだよ」「こーんな風にね、と山路さんが常盤さんを指した。 常盤さん、その指をパチンとはじく。

「常盤さん、でもどうして、薬剤師に？」興味を引かれた慶子さんがそう訊くと、常盤さんは口からストローをぱつと外し「ん。小さい頃、体弱くて、いろいろとお世話になったから」と応えてくれた。

「はん。どうせなら口の悪さも治してもらえばよかったのに」と山路さんが笑いながら言うと、「ふふ、口の悪さを治すと副作用として美貌も損なうって話だったんでっ」と常盤さんも返してきた。

「かーっ！　なんとか言ってやってよ、柏木さん」むしゃむしゃとおにぎりを頬張りながら、慶子さんに助けを求める山路さん。

「え。あ、ええと。ああ、は、白衣が似合いそうですね！」焦りながらちつとも助けになっっていない発言をした慶子さんに常盤さんはほほ笑むと、「ふふ。柏木さんってば、ホントのことをっ」と言い、山路さんに向けては勝ち誇ったような顔をした。

そして常盤さんは優雅に三角コーヒを慶子さんに差し出すと、「飲む？」と訊いてきた。

それを慶子さんは丁寧に断り、反対に「よかつたら、これも」とお弁当箱から唐揚げと卵焼きを取り、「一緒に載せますね」と山路さんに断りおにぎりの横に並べた。

それらをじつと見る常盤さん。

「まあ、そう言うなら。食べてもいいわよ」と言うと、私もそっち行くからと廊下から教室に入ってきた。

「ここ、座っても大丈夫かな」と常盤さんが慶子さんの隣の席を指すと、「ああ、そこ鈴木さんの席だから。座ろうが立とうが寝ようが踊ろうがご自由に」と山路さんが言った。

「ああ、そうか。隣の席だったんだもんね。そっか、そっか。それで誘われたんだっけ？　剣道部に」

鈴木も手が早いなあと常盤さんは言いながら、山路さんからお箸を借りおにぎりと唐揚げをぱくぱくと食べたした。

「そういえば、そうよ。もしこの席順じゃなければ、柏木さんは剣道部にいなかったってことよ」山路さんは、慶子さんの机に向って拝み始めた。

なんともいえない居心地の悪さを感じつつも、そういえば、と慶子さんは慌てて手さげから「そそと昨日買った「山路の茜」を二

つ出した。

「忘れるところでした。これ、どうぞ」

慶子さんは、二人の前にそれを並べた。

「和菓子？」常盤さんがびっくりした顔をする。

「もしかして、鈴木家の？」山路さんの言葉に慶子さんが頷くと、常盤さんがへえ、という顔をした。

「この和菓子には、名前があるんです」

慶子さんは、悪戯をする子どもみたいなわくわくとした気持ちになりながらそう言った。

「名前？和菓子に？」二人が揃って首を傾げる。

そこで慶子さんは菓子の一つを取りそつと傾け、プラスチックケースの裏にある製造シールをぺりつと剥がし二人に見せた。

「えっ。山路の……茜」山路さんが「えええ」ってな顔をして驚く。

慶子さんは、ふふふと笑う。

「和菓子の名前になるなんて、顔に似合わず風流な名前なこと。

山路」常盤さんもふふつと笑う。

「うむむ。まあ、渋い名前だとは存じておったが、むむむ」山路さんはそう言つと、お菓子をじつと見た。

「食べてもいいの」と常盤さんが訊くので、慶子さんは「どうぞ」と言った。

「柏木さんの分は」と山路さんが訊いてきたので、「私は昨日いただいたから」と返すと、山路さんは胸を押さえ、「く、食われたかあ」と芝居がかった動きをした。

二人が「山路の茜」を口に運ぶのを、慶子さんはときどきしながら見守った。

そして二人の口角が、「山路の茜」を入れてにゅつと上がるのを見て、慶子さんは心底嬉しくなった。

「ミスター鈴木といえさ、交流戦に出るのならそろそろ部活にも出てくれないと、と。……噂をすれば」

のそのそと教室の入り口をくぐり、噂の主が自分の席へと戻ってきた。

「鈴木、私の名前の使用料を払いなさいよね」と山路さんいい、「山路の茜」を手に取りぱくりと食べる。

「ワタクシ、只今デザート中ですから」常盤さんはそう言うと、この席からはまだどきませんとばかりに、「山路の茜」をぱくついた。

「で、名前の使用料の代わりといっってはなんだけど、鈴木もそろそろ部活に出てくるんでしょうね」

そんな山路さんの問いに、「うん」と返事が返る。

思いがけない答えに山路さんも常盤さんも、うつと唸る。

慶子さんも当然驚いた。

「ややや、なに、本当！ 本当に、出てくるのね。ってことは、これでもう柏木さんが福地に廊下で押し倒されたり、誰かさんへの告白を強要されたりすることがなくなるってことよね」

山路さんの言葉に慶子さんの動きが止まる。山路さんのその表現は、少しおかしいような。

「これは早速、あの熱血部長に報告せねば。常盤、行くよ」山路さんの声かけに「あいよ」と常盤さんも応える。

「ごちそうさまあ」と常盤さんは手を合わせてお弁当箱の蓋を山路さんに返すと、柏木さんに手を振り二人でそそくさと教室を出て言った。

「クラブに」「福地が」

慶子さんと和菓子さまの声が重なる。

和菓子さまは慶子さんに「先にどうぞ」と言うと、常盤さんがいなくなった自分の席に座った。

「もう、お手伝いはしなくて大丈夫なんですか」部活に出るということとは、もうお手伝いがなくても大丈夫ということなのだろうか。

「ああ、手伝い、ね。うん。もう、大丈夫。……それに、どちらかというと」と言うと和菓子さまは一旦言葉を切り、「いや、ごめん、

なんでもない」と答えた。

ならば、それ以上聞くのはよくないことなんだろうな、と慶子さんは思った。

「あ、では、どうぞ」慶子さんは和菓子さまに会話を譲る。

「あ、うん。……なんでもない」その和菓子さまの言葉とチャイムが重なり、結局それはうやむやのまま終わった。

クラブに行くと、福地君が仁王様のように道場の入り口に立っていた。

「ありがとねっ、柏木さん！」

福地君がにこやかに慶子さんにお礼を言う。

「ええと。はい？」慶子さんは、なんでしょう、と福地君の顔を見る。

「え。だって、柏木さんが鈴木に『クラブに出て』って言ってくれたんでしょ」

えっ、と慶子さんが思った時、「アホか」と背後から声がした。

「おう、鈴木くん！ 元気ですかあ！」周りが呆れるほど、福地君の機嫌はいい。

「あのな。おまえ、なにアホなこと——」そう言う和菓子さまの肩を組むと福地君は、「いやあ、今日はみんな揃ったなあ」と道場を見た。

慶子さんもつられて見ると、一人のひよろりとした男子が、「やあ」と手を振っていた。

「あ、岡山」和菓子さまの声に、ああ、あの人が休部していた岡山君かと慶子さんは思った。

「岡山さ、進学のこととて親と揉めていてさ。ストレスが相当胃にきて、大変だったらしいぜ。でも、なんとか上手い具合に話はついて、体も薬で良くなってきて、で、部活にもめでたく復活ってわけよ」

「へえ。岡山、進学の事でねえ」と和菓子さま。

「そついや、明日だよな。俺ら向けの学部説明会」と福地君が言う。

学部説明会とは内部進学者に向けての大学学部説明会のことだ。

「ほほお。学部説明会ですと？ ああ、暢気よね、キミタチはさ」と言ってきたのは常盤さん。

「おお、常盤、常盤。おまえ交流戦に出るだろ」と、福地君が言う。

常盤さんがいれば、女子部は心強いこと間違いない。

他校との試合を観たことがない慶子さんは、交流戦が楽しみだった。

「出るわよ」

一言そう言った常盤さんと、気のせいか慶子さんは目があった気がした。

あれ？ と慶子さんが常盤さんを見ると、常盤さんはみなに向い「とつとと稽古始めよう」と声を上げた。

たつぷりと充実した稽古を終え、山路さんと常盤さんとともに部屋へと向う慶子さん。

半地下の道場から地上に上がったところで、「あ、『山路の茜』

！」との常盤さんの声がした。

その声に、慶子さんと山路さんはふつと顔を上げた。

二人の目の前には、空一杯に広がった夕焼けがあった。

夕焼けは空を染め、雲に朱を差し、学校の校舎や樹木を優しく照らしていた。

ああ、綺麗だ。慶子さんは言葉もなく空を眺めた。疲れた体に、夕焼けは優しく染みてきた。

「うむ。『茜』はいいとして、『山路』はないじゃない」と山路さんが突っ込むと、「じゃ、山路がそこに立てばいいじゃない」と常盤さんが返した。「で、夕日を浴びて山路茜」常盤さんが、ふふと

笑う。

そんなやりとりを聞きながら、慶子さんはまだ緑色した紅葉^{もみじ}が夕日に染まる様に視線を移した。

「あら。紅葉^{もみじ}ちゃんは、まあだ、紅葉はしてないわね。ところで、柏木さん、知ってる？ 紅葉前線の南下速度って、秒速12センチなんだって」と常盤さん。

「は？ 南下？」と山路さん。

「うん、南下よ。だって、紅葉だもん。で、それが、平地で進む速さがそんなだって聞いたの」と常盤さんが言う。

秒速12センチ。これくらいかしら、と慶子さんが親指と人差し指でその長さを作る。

そして、その長さをまじまじと見ながら、日本列島が徐々に紅葉していく様子を思い浮かべた。そして「初紅葉」のことも。

「常盤あ。それ、男から聞いたんでしょ？」と山路さんが言うと、常盤さんは澄ました顔で「お答えできませんわ」と言った。

「そんなうんちく言って、女を口説こうとしてんじゃないの？ あんな下手にプライドが高いから、自分より知識があるっていうだけで、コロリといきそうだし」と山路さんがけけと常盤さんをからかう。

その言葉を訊いて、慶子さんははっとした。

プライドは高くはないと思うけれど、でも、思い当たる……ような。

山路さんの言葉は、常盤さんでなく慶子さんのハートに矢のように刺さったのだ。

二人と別れ電車に一人で乗る慶子さんは、窓の外に視線を置きつつもその瞳は景色を見てはいなかった。

さっきの山路さん言葉が、慶子さんの心に刺さっていたのだ。

—— 自分より知識があるっていうだけで

思えば、家では慶子さんはいつも両親に何かを教えてもらう立場だった。

そして、母親が病気になってからは以前よりも慶子さんの周りには大人が増えたこともあり、思い返せば自分は常に誰かに何かを訊き答えをもらう立場だったように思った。

答えをもらうこと、教えてもらうことが、自分の安心できるポジションだったのだと。

初めて師匠を見た時、強面ながらも信頼できる人だと思えたのは、それは母親の主治医に似ていると思ったからだ。自分の話に耳を傾け、答えをくれる人だと。

自分は、立場が違う人との付き合いしかできないのだろうか、慶子さんは考えた。

と、その時、山路さんと福地君の泣きそうな顔が浮かんた。

そして常盤さんの、ちょっと恥ずかしがるような顔も。

あ、そうか、と慶子さんはいろんなことが繋がった。

確かに自分はそうだった。でもそんな自分のことが見えたのも（山路さんの言葉が刺さったもの）、みなと同じ立場で考え悩み、自分なりの答えを出す経験があったからこそなのだと。

おそらく、剣道部での経験がなかったら、山路さんの言葉も自分の上を素通りしていたのだと。

慶子さん、冷や汗がたらりと流れた。

そして、頭の中で「セーフ」という声が聞こえた。

よかった、高校生の間にこんな自分に気がつくことができ、と。

ほお、と大きく息を吐き、すっきりとした気持ちで電車を下りて街を歩きだした慶子さんの目に、「大学案内揃えています」との本屋さんの張り紙が飛び込んできた。

そういえば、明日は大学の学部説明会だった。

大学生かあ、と慶子さんは思った。

ようやく、高校生をやっている自分だっただけに、大学というの

はまだまだ遠い存在でいてほしい気がした。とはいえ、そんな暢気なことも言っていられないだろう。

慶子さんは、大学に進学はしたいと思っているので、そうすると学部を選ばなくてはならない。

—— 学部。

今まで自分の将来のことはあまり考えたことがなかっただけに、そうすることが怖い気もした。何を学びたいか、どんな将来を見据えて選ぶか。

既に進路のことで親と揉めたり、他大学受験を考え勉強している同級生もいるというのに、自分は……。

「受験、するの？」

びっくりして振り向くと和菓子さまがいた。

「し、しません。今でも大変なことになっているのに」言わなくてもいいことまで、つい正直に言ってしまった慶子さん。

和菓子さまは笑うと、「本屋に用事でも」と慶子さんに訊いてきた。

「い、いえ。ただこの張り紙を見て」

「ぼーっとしていた、と」

「……そう、です」

じゃ、帰る？ と和菓子さまが訊くので慶子さんは頷き、一緒に歩きだした。

和菓子さまとこうして歩くのは、二度目だなあと考えた。夏合宿の帰り以来だと。

そしてまたしても、師匠への勘違いを思い出し、あいたたたな気持ちになる。

「福地、随分と柏木さんに迷惑をかけたみたいで」と和菓子さま。

「と、いうか、そもそもは俺だよな」と続けた。

慶子さんはなんて返していいかわからず、俯いていた。

「柏木さんはスケープゴードじゃない」きっぱりとした口調で、和菓子さまが言った。

「そんな理由で誘ったわけじゃないけれど、でも、俺はクラブを休まないといけなくて。だからその点では……利用した」ごめん。

隣を歩く和菓子さまが、頭を下げたのがわかった。

しかし、スケープゴード云々についてのことは、慶子さんの中では既に終わっていたことだった。

しかも、あの時でさえ、和菓子さまに剣道部に誘われたことを怨むような気持ちはなかったのだ。

慶子さんが悲しかったのは、自分がほいほいと誘いに乗ったことで、福地君や他の人の気持ちを潰してしまったと思ったからだ。

だから慶子さんは、静かに首を横に振った。そして「誘ってもらってよかったです」と言った。

今さっき「セーフ」と思えたことだって、剣道部に入っただけのことだった。

もし入っていなければ、と考えると目の前が真っ暗になる。

すると和菓子さまは、「柏木さんは、いい人すぎるな」と言った。「親と喧嘩なんかしたことないでしょ」とも。

「喧嘩、ですか。喧嘩、というか、この間もちよつと父に強く言うてしまったりとか。……あります、けど」慶子さん、着物の事で父親に強く言うてしまったことを思い出す。

「へえ、あるんだ」と和菓子さま。「ありますよ」と慶子さん。

「そつえば、この間柏木さんのお父さんが店に来てくれたな」と和菓子さまが言う。

「あ、『衣かつぎ』ですか」

「うん。菓子の名前を聞いてくださって、一生懸命メモされてた。だから、俺、箱の下の製造シールに菓子の名前が書いてありますよって言えなくて」

慶子さんは、あの日父親がジャケットのポケットからメモを出し、菓子の説明をしてくれたことを思い出した。きっと和菓子好きの娘のためにと、してくれたことなのだろう。

「わかります」

そんな父親の姿を思い浮かべ、慶子さんは泣きたいような、笑いたいような気持になった。

「……言えないといえば。さっき、昼休みのことなんだけど」
昼休みのこととはなんだろうと思いつつ、慶子さんは「はい」と相槌をうつた。

「柏木さんが、お手伝いしなくて大丈夫なのか、って聞いてくれた時、言えなかったことがあって」

はて、あの時何か言えないようなことがあったのだろうかと思いつつ、「はい」と再び相槌をうつた。

「手伝い、じゃなかったんだ。そんな立派なもんじゃないんだ」

慶子さんは驚いて和菓子さまを見た。和菓子さまはじつと前を向いたまま、慶子さんの隣をゆっくりと歩いている。

「自分の為に行っていたんだ」という和菓子さまの声がした。

—— 自分のために。

一体どういふことなんだろうと、慶子さんは耳を傾ける。

「そう、自分の為。生まれた赤んぼに、進って言っただけど、あの子に昔の自分を重ねて見ていたんだ。母親が進に接する姿を見たかった。それを見て、俺にもそうだったのかなあって、知りたかった」

慶子さんは、はっと息を飲んだ。

覚えてないこと。知らないこと。……忘れていたこと。

「こっちが何か言ったわけじゃないけど、母親も学の時はどうだったとか、そういう話もしてきて。で、もう十分だと思った。もう、進に母親を返さないって。でも、どんな理由でも俺が行くことでちょっとは役に立つんだって理由をつけてずるずると行っていたけど」

そう言つと和菓子さまは立ち止った。

側には紅葉の木があった。

「もう、手伝いなくても大丈夫そうだし。それに、こっちもそろそろやっておきたいこともあるし」

その葉を和菓子さまはつんとはじくと、再び歩きだした。

「明日だっけ、学部説明会」

「……そう、ですね」

和菓子さまについて歩きながら、慶子さんはとても不思議な気持ちになっていた。

例えるのなら、色とりどりの着物が心の中に広がっていくような、そんな気持ちだ。

いろんな感情が、心の中からこんこんと湧き出てくるのを感じていた。

和菓子さまの話をもっと聞きたいと思った。そして自分も話したいと。

和菓子さまに対して、そんな気持ちになったのは、初めてだった。

以前は、あまり学生服姿の和菓子さまは得意ではなかった。

お店や道場にいてくれる和菓子さまのほうが、いいと思っていた。

自分に和菓子のことを教えてくれたり、剣道の先輩としての姿を見せてくれているほうが。

少しずつ、でも確実に、紅葉前線は南下していた。

そして、同じように、慶子さんの心もゆっくりと何かが変わり始めている。

13・しんぼうの木練柿こねりがき(前編) / (十一月)(前書き)

「しんぼうの木練柿こねりがき」は、前編・後編になります。

13・しんぼうの木練柿（前編） / （十一月）

駆け足で夕暮れが訪れる霜月。
思いがけない寒さに首がすくむ、十一月。

慶子さんの背中の胴紐には、白いたすきがひらりと付けられていた。

体育館でみなが見守る中、慶子さんは礼をすると前に進み＊そんきよ蹲踞をした。そして審判の「はじめ！」の声に立ち上がると竹刀を構えた。

遡ること三週間前の朝の事。

慶子さんが山路さんと通学路で一緒になったところから、このことは始まった。

大学の学部説明会で思いがけない出会いをした慶子さんは、自分の進路について明るい未来が見えはじめ、ちよつと浮かれてもいた。

そんな慶子さんに山路さんは、ひらりと一枚の紙を渡してきたのだ。

なんだろうと慶子さんがひょいとそれを受け取ると、山路さんの手書きの文字で「先鋒 柏木」とあったのだ。

「先鋒」というのは、和菓子さまから借りている本で見たことがある単語だった。

しかし、なんでその「先鋒」の横に、自分の名前があるのか。はてなと首を捻りながら、慶子さんはその下に視線をずらした。

すると「次鋒 八坂」、「中堅 常盤」とあり、更には「副将

安井」「大将 山路」とあった。

慶子さん、立ち止り、瞬きもすることもできないまま山路さんを見た。

と、その時。慶子さんの背中にどんとぶつかってきた人がいた。

慶子さんもよろけたが、ぶつかったその人もよろけたような気配がした。そして何かが転がる音も。

「す、すみませんっ!」、その声に振り向くと、足にギブスをした男の子が慶子さんに謝ってきた。

「いえ、私こそ急に止まったから! だ、大丈夫ですか?」

慶子さんは、地面にぺたんと手足をついているその人の側に行き、立ち上がる手伝いをしようとした。山路さんは地面に落ちていた彼のものと思われる松葉杖を拾うとその子の側に行った。

「俺、よそ見をしてて、すみません。あ、一人で立ち上がれますんで大丈夫です」慶子さんにすみません、と言いながらその男の子は山路さんから杖を受け取り、立ち上がった。

そしてぺこぺこ頭を下げながら、通学路の人波に紛れていった。

「足、大変そう」慶子さんがそう言うと、「あ、あの子か! この間あったサッカー部の試合で、相手チームのすごいラフプレイの餌食になったって子は」二年男子よ、骨にひびがはいたとか聞いたよと山路さんが言った。

サッカーのラフプレイ。慶子さんも、父親と一緒にテレビで見たサッカーの試合で、何度か見たことはあった。

「あ、そうそう試合、試合。だから慶子さんも試合よろしくね」

「試合」

「うん。もう、すごく悩んじゃった。副将を常盤にするか、一年の安井さんにするかで。でも、安井さんは来年の部長候補だから、やっぱりここは踏ん張ってもらおうと。で、柏木さんと一年の八坂さんも迷ったけど、柏木さんの頑張る姿が一年生のいい刺激になるかなあと思ってこうしたの。もう、これがベストかなあ」と寝不足

よお、と山路さん。

「や、ややや。こ、これは、つまり試合の」慶子さん指に力は入り、持っている紙に思いきり皺が寄る。

「うん。だからさっきから試合って言っているじゃない。これ、今度の交流戦での団体戦のメンバー表」けろりとした顔で山路さんが言う。

「だ、団体戦ってことは、試合」慶子さん、もしかしてこれはまだ自分が見ている夢の中の出来事なんじゃないかって思いながらそう訊いた。

「団体戦は、試合だけど。え、どうしたの？」柏木さん、顔が白いよと山路さんが言う。

慶子さん、二度ほどつばを飲み込み、喉を潤す。

「だって、これ。私の名前が」書き間違いじゃないのかって意味で、慶子さんは訊く。

「え、やだ。私、柏木って漢字を間違えて書いていたとか？」恥ずかしい！寝ぼけていたから、と山路さんが紙を覗きこむ。

「ん？これで合っているよね。ああ、びっくりした。間違ってたないよね、漢字。——え。柏木さん、大丈夫？」

美白希望の諸先輩が見たら羨ましいと思うほど、その時の慶子さんの顔は白かった。

そして、その日から、以前に増してのスパルタ練習が始まった。

放課後だけでなく、山路さんと一年生と（そして時々常盤さん）一緒に朝稽古も始まり、慶子さんは家に帰ると湿布臭を撒き散らす存在になっていた。

そんな慶子さんを、母親は興味深く、父親は心配そうに見守っていた。

試合に出るなんて、そんな日が来るとは思っていなかった慶子さんは、そんな日が来てしまったことでのあれこれを受け入れ始めた。心の中にあつた試合への恐怖心も、日々の練習の積み重ねにより薄れていったのだった。

そして試合の当日の朝。

緊張マックスの慶子さんの周りに、女子部のみなが集まる。

試合に出ない一年生たちは、慶子さんのことを人ごととは思えず、「頑張ってください」の言葉にも熱が入った。

「柏木さん、足さばきが上手くなってきたよ。だから落ち着いて、いつもの調子で」とは山路さんからの言葉。

そして、「柏木先輩って、意外と度胸あると思うので、大丈夫です」とは八坂さん。

「そう、先輩って見た目と違ってスタミナありますもんね。持久戦でも大丈夫かも」と話すのは安井さん。

八坂さんも安井さんも、ここ最近の慶子さんの上達ぶりに正直驚いていた。そして、そんな慶子さんの姿に、刺激もされていた。

そんな中、寝不足そうな顔で大きな欠伸をしたのは常盤さん。連日、早朝から深夜まで。目標に向い勉強をしている努力家だ。

「ねえ、柏木さん知ってる？ 剣道で一本取るのって、竹刀をどこかにびしっと当てないとダメなのよね」そう言いながら長い髪をくるんとさせた。

「つ・ま・り。びしっと当てさせなければ、逆にいくら打たれてもOKってこと」常盤さんの言葉に山路さんが唸る。

「まあ、間違ったことではないわ。それは」と山路さん。

「実際さ、打つ本数が多いからって一本取れるわけじゃないもんね。それこそ、びしっと当たるのが一本あればそれでビンゴなんだし」と続けた。

確かにそうだ、と慶子さんも思った。

「だから、おじけず、おびえず、堂々としてきなさいよ」と常盤さんは言い、「柏木さんが負けても、八坂さんが負けなければどうにかなるわよ」といきなり八坂さんに振った。振られた八坂さんは、「ひゃあ。やや、が、頑張りますっ」と声を上げた。

今回の交流戦は、「勝者数法」だった。

勝者の数により、団体としての勝敗が決まるのだ。

慶子さんは、みな顔を見た。

そうするとで、この春から自分がしてきた練習を思い出すことができた。

—— 大丈夫。

そして慶子さんはこう思った。自分は自分のベストを尽くすのだと。

「はじめ！」

審判の声に竹刀を構えた慶子さん。相手は同じ高三だそうで、流石に慣れた動きで慶子さんを襲ってきた。

いきなり、慶子さんの構えた竹刀が振り払われ、面を狙われた。

慶子さんは素早く払われた竹刀を戻し、打たれまいとそれを防いだ。すると、今度は腕が上がったために隙ができた胴に相手の竹刀が向けられた。

その時、浮かんだのが常盤さんの言葉だ。

—— びしっと当てさせなければ、逆にいくら打たれてもOK

慶子さん、相手との間合いをわざと詰めた。

すると、竹刀は胴に当たったものの、それは一本を取るような鋭さには欠けたものになった。

次に慶子さんは、相手が体勢を直す隙をつき、さっと後ろに下がると相手の小手を狙った。

大きな声をあげ、そして打つ瞬間にキュツと竹刀の握りに力を込めた。

パツと審判の白い旗が上がる。

わぁ、という声があがる。

白、白、白！ あ、私だ！

慶子さん、自分の体中に凄い勢いで血が巡るような気がした。嬉しくてたまらなかった。

しかし、試合はまだ終わりではない。

五分間で三本勝負。決まらない場合は延長。これが今回のルールだ。

慶子さんに一本を取られた相手は、今度は慎重に慶子さんを攻め始めた。

さっきのような隙はなくなり、確実に一步取る作戦に変えたようだ。

じりじりと試合は進んだ。

慶子さんも何度か、竹刀を払い相手に飛び込もうとしたが、その度にかわされた。

落ち着いて、落ち着いて、と慶子さんは自分に言い聞かせた。

心臓が、痛い位にバクバクと音を立てているのがわかった。そして、それについ気が取られた瞬間。

慶子さんの首をめがけて、竹刀が突かれた。突きだ。

うわっと思いい、慶子さんはよけようとしたが、しかし間に合わず、突きは一本入ったかと思われた。

が、竹刀は慶子さんの首の横を鋭く突き抜けていった。そしてよろけた隙に、相手からの面を慶子さんは受けた。

赤い旗が上がる。相手チームが、うわっと思り上げる。

これで同点になった。

慶子さんは悔やんだ。今のは、自分のせいだと。一瞬、試合とは別のことを考えてしまった自分のせいだと。

そして、負けたくないと思った。勝ちたい、と。

慶子さん、じりじりと間合いを測り、攻めに入った。

相手が自分よりも強いのは分かっている。だからこそ、攻めてこられるのを待ちたくはなかった。

今のように、何が何だか分からないうちに一本を取られるのは嫌だった。

持久力はある。残り時間、ずっと攻めるくらい、稽古でもやってきたことだ。稽古でできたのだから、今もできる筈。

そう慶子さんは自分に暗示をかけると、今まで習ったこと全てを

ぶつけた。

竹刀を払い、面を狙う。そして胴を。更に面の連打をする。そして小手も狙う。

自分が習ったことの全ては、みなのお陰なのだ。それを、今やらないで、いつするのか。

枯れそうになる程の声も出し、慶子さんは相手に向っていった。しかし、相手と慶子さんはキャリアも違えば、上手さも違った。

慶子さんがしていたことは、山路さんが言った「打つ本数が多いからって一本取れるわけじゃない」であり、相手にしてみれば常盤さんの言った「びしつと当てさせなければ、逆にいくら打たれてもOK」な状態だったのだ。

時間ぎりぎりのところで、相手の一本が慶子さんの胴に入った。赤い旗が上がる。

先鋒、慶子さんは負けてしまった。

礼をして下がる時、次鋒の八坂さんと目があつた。八坂さんは、慶子さんに向って大きく頷いた。

竹刀が飛んだ。

八坂さんの対戦相手が、竹刀を手から放したのだ。一時試合が中断され、再開された。

「なんか、おかしい」常盤さんが隣にいる安井さんに言う。
安井さんも無言で頷いた。

体育館には、試合場がもう一つできていた。そこでは、男子一、二年生の合同チームが相手校と戦っていた。

「……荒いなあ」北村君が和歌山君に言う。

「ああ、ちよつと気をつけないとな」和歌山君の顔が曇った。

女子部は、その後の八坂さん、常盤さんと勝ち、二勝一敗で副将の安井さんへと繋いだ。

安井さんが勝つか、負けるかで団体戦の流れが変わる。

安井さんは、とてつもないプレッシャーを感じた。しかし、その時、慶子さんの首が目に入った。

安井さんは、大きく深呼吸をすると、堂々とした足取りで試合に臨んだ。

しかし、安井さんの相手は相手校でも一、二を争う三年の選手だった。しかも、体つきが安井さんとは明らかに違った。パワーのある相手だった。

安井さんが相手からの技を上手くかわし、小刻みに打ちにはいると、相手はつば競り合いに持ち込み、何度か安井さんを吹き飛ばすかの勢いで押してきた。

体勢が崩れながらも、安井さんはなんとか相手と互角に渡り、延長戦まで迎えた結果、引き分けたのだった。

実力を考えると、それは勝ちにも匹敵する引き分けだった。

二勝一敗一引き分け。勝負は、大将対決となった。

山路さんの相手は、ここ二年毎回山路さんと対戦している相手だった。良くも悪くも相手のことをお互いよく知ってるはずだった。しかし、山路さんから見て今日の相手校はいつもと様子が違った。

今までの選手の動きを見て思ったことだが、どうも動きが荒く、乱暴でさえあった。

本来なら直すべき癖もすぐ出ているように思え、突っ込みどころはいくらでもあった。しかし、強くもあった。気迫もあった。

ともかく勝てばいいといった、力で押してくるような、ごり押しともいえる剣道だった。

感情で対応すると、ついムカつき、こっちまで技が荒くなる可能性があった。

引つ張られない、冷静に、確実に。

飛びかかってくる相手を、確実にかわしながら、山路さんは正確

な技を繰り出した。

つば競り合いからは、距離を取り、引き面を打った。

白い旗が上がる。

そして、相手が小手を狙ってきた時には、素早く腕を上げ、竹刀が下に振り下ろされたところに面を打った。

しかし、僅かに入らず。

にらみ合いが続き、相手が威嚇のために大きな声を出してきた時も、負けずに声を出した。

そして、山路さんは勝負に出るべく大きなアクションで面を狙った。そして相手がそれを防ごうと、わずかに上げた腕めがけて小手を打った。

サツと白い旗が上がる。

両チームから、歓声と落胆の声が聞こえた。

礼をしたあと、改めてチーム五人が並び、再び礼をした。

アナウンスで、次の試合までの休憩が告げられた。

——そして。

「柏木さん！」山路さんが慶子さんに抱きつく。

一人だけ負けてしまい、責任を感じていた慶子さんは目を白黒させた。

すると、「山路、ほら一年生も抱きしめてあげて」と常盤さんは言った後、その二人の頭を撫でた。

「ん！二人とも、よく頑張った！」山路さんは両手に二人を抱え込む。

「今のうちに柏木さんは、ここ、冷やしてきなよ」時間ないし、と常盤さんは言う、薄手のタオルを慶子さんに渡した。

相手校も水飲み場を使っていたので、慶子さんは少し離れたところにある水飲み場へと急いで向かった。

次は、二チームに分かれた男子三年が、それぞれ試合をすることになっていたのだ。見逃すわけにはいかない。

常盤さんから借りたタオルを水に濡らし絞り首に当てていると、
「柏木さん」と声をかけられた。

振り向くと、和菓子さまだった。

和菓子さまは「たすき、外すよ」と言うと、慶子さんの背中にあ
った白いたすきをしゅるりと外した。

そうだ、たすきは次の人たちに渡さなければいけなかったのだ、
と慶子さんは焦り、「すみません。ありがとうございます」と言っ
た。

和菓子さまは慶子さんをちらりと見て「つけて」と言うと、背中
を向けた。

ああ、たすきを、と思い慶子さんは濡れたタオルを蛇口に掛ける
と、和菓子さまの背中の中につまみで自分の背中で揺れていた、
たすきを結んだ。

そして、和菓子さまは背が高いんだなあと思った。これくらいの
背があれば、面を打つのがさぞ楽しかろうと。

「ありがとう」と和菓子さまは言うと、慶子さんの方を振り向き
「赤くなってる」と言った。

ああ、と思い慶子さんは再び常盤さんのタオルを首に当て、「と
ろくて」と言った。

慶子さんの言葉に和菓子さまはきゅっと口を結ぶと、「じゃ」と
言って体育館へと戻って行った。

慶子さんはその後ろ姿を眺めながら、もしや和菓子さまはたすき
を探しまわり、こんな辺鄙な水飲み場までくるはめになったのかと
気がつき、迂闊な自分の行為を深く反省した。

「先鋒は、鈴木かあ」

山路さんの声に、「仲良くおそろいね」と常盤さんが言う。

慶子さんかというと、自分が結んだたすきが気になっていた。

「おかしくないよね、たすき」と山路さんに訊くと、「へっ？ 何、

柏木さんが結んだの？」と逆に聞かれ、常盤さんからは「すつごく上手く結んでいるよ」とお褒めの言葉をいただいた。

さっきまでは、女子部の試合を見るのが精一杯だった慶子さんは、男子部の試合を見て驚いた。

「ん。やつぱり、荒いね。勿体ない」と常盤さんが言うと、「そのことについての情報、仕入れたよ」と山路さんが言った。

「あちらさん、コーチが変わったんだって」山路さんはそう言った。

和菓子さまの相手は、上段の構えだった。

背が高いその人が、上段にすると余計に大きく見えた。

面を打つ時も、左手一本で竹刀を持ち打つため、動きが派手に見えた。

相手の打ちこみに、同じチームから拍手があがった。しかし、旗は上がらない。

それを見ながら慶子さんは、さっきの自分の攻めはまさにあんな感じだったのだろうなと思った。

「残心」山路さんが言う。「うん、弱いね」常盤さんが答える。

残心とは、技を繰り出したあとも油断せずに、相手の動きに応じることが出来る気構えの事を言う。

技を入れた、はいおしまい、ではなく技のあとにも続く気持ちと動きが剣道には求められるのだ。

和菓子さまが、小手を空振りした相手の面めがけて竹刀を振り下す。

白い旗が上がる。慶子さんたちも盛り上がる。

その後も和菓子さまの攻撃は続いた。和菓子さまは、右に動き相手の左小手を狙った。

すると相手は小手を打たれまいと、腕を大きく上げた。

その隙を狙い、和菓子さまは抜き胴を打った。

和菓子さまが、相手の脇を抜けていくのと白い旗が上がるのは同

時だった。

うわっという歓声があがる。

和菓子さまが礼をしたときに、白いたすきがひらりと舞った。

慶子さんは胸がいっぱいになった。

終わってしまえば、女子も男子三チームも全て勝利をあげた団体戦だった。

後片づけも全て終わったあとで、福地君は部員全員に剣道場に集まるよう声をかけた。

上座には福地君、山路さん、そして幽霊顧問の山田先生が座った。

そして慶子さんたちは向かい合うように、ずらりと並び座った。

「改めて、お疲れさまでした」福地君の声に、みなも「お疲れさまでした」と返した。

福地君は、何度も話し出そうとしながらも言葉が見つからないのか、うーとかあーとかいった言葉しか出てこないようだった。

すると山路さんがコホンと咳を一つしたあと、「では、女子部の部長よりお先に一言」と言った。

「みなさん、今日は本当にいい試合をありがとう。おかげで私も、自分の好きな剣道をすることができました」

山路さんの言葉に福地君が、「おまえがそれを言っちゃうのか」と小さな声で抗議した。

「今日の試合で、私は『勝つこと』について考えさせられました。もし、『勝ちたい』気持ちを計測できる機械があつて、試合前にそれを計っていたとしたら、おそらくうちの学校は負けていたと思います」

幽霊顧問の山田先生が、にこにこした顔で頷いている。

「女子部の先鋒の柏木さんの試合で、相手の勝ちたいという思いと

それに伴う際どい技を見た時、正直肝が冷えました。と同時に、そこまでして勝ちにこだわる相手の姿に嫌悪感を抱きました。しかし、そんな私の思いは、柏木さんの姿を見たことで払拭されました。柏木さんは、はっきりいって未熟ながら、正々堂々と相手に立ち向かっていました。その姿からは、相手と同じように勝ちたいという強い思いが伝わってきました。結果は負けてしまいかしたが、私は、というか、多分女子部はあの試合を見て、自分たちは柏木さんの側で勝ちたいと強く思ったと思います」

山路さんの言葉に、女子部のみなが頷いていた。

「けれど試合も終わり、冷静に考えると、相手校のどんな手を使っても勝ちたいと思う気持ちもわかりますし、勝ちたいと思う気持ちは大事だと思いました」

山路さんの隣で、福地君が大きく頷いた。

「これから段々と技術が向上すると、技術があるだけに、自分がどういった剣道をしていくかの選択を迫られることになると思います。今の私の出した答えはですが、それはあくまで選択肢の中の一つなんだと思います。正解はないと思います。正解というよりも、考えることが大事なんだと思います。残り少ない高校生活ですが、そういったことも一緒に考えて悩んでいけたらと思います。以上です」

山路さんの言葉に、「ありがとうございます」と声があがった。

「う。やりにくい」、恨めしそうな顔をして福地君は山路さんを見た。

「あ、つまりが。ダークサイドに」福地君の言葉に、みなが「へ？」という顔をした。

「福地！ また、スターウォーズか？」と和歌山君の茶々がはいる。

「う、うるせー！」福地君はそう言つと顔を赤くした。

「俺は、山路みたいに高潔にはなれなくて、勝てるなら多少のこと

はいいと思っている。でも、なんていうか、多少のことっていうのは多少のこと、やっぱりそれ以上超えてはいけないラインもあるってことは、うん、わかっている」

そう言う福地君は、照れ隠しするかのように、おでこをぼりぼりと掻いた。

「ああ、でえ、その。つまり、そのラインの見極めが大事なのかなあと。それがないと、もう、それは『スポーツ』とは言えないものになるんじゃないかって、それを考えさせられた今日の試合でした。ともかく、みんな、よく戦いました。おしまいです」と福地君が言う、山路さんの時と同じように「ありがとうございました」と声があがった。

どうしても勝ちたい思い。

それは、今日の試合での慶子さんの思いでもあった。

しかし、自分は技量がないために、基本になぞった動きしかできなかった。

けれど、慶子さん以外の女子部は、技量があっても、際どい技の使い方には走らなかった。

見た目は同じでも、それは違う。

もしこの先、今よりも上達した時、自分はどいつた選択をするのか。

慶子さんは宿題のようなその問いを、心の引き出しにそっとしまった。

13・しんぼうの木練柿（前編） / （十一月）（後書き）

* 蹲踞・腰を下ろす時に、つま先で体を支えること。その際は真
つ直ぐ姿勢よく。

14・しんぼうの木練柿（後編）

「文芸学部 文化史学科かあ」

慶子さんの両親は、進学先が記入された進路希望用紙と学部説明会で配られた資料を見比べながらそう言った。

「色々調べただけけれど、やっぱりそこで勉強がしたいと思って」

先日の学部説明会、特に何かを学びたいと確固たるものがなかった慶子さんは、説明会が楽しみというよりは不安だった。

既に自分の進路を決めている常盤さんのことを考えると、焦りもした。

そんな中、文芸学部文化史学科の説明に、慶子さんは引きつけられた。

文化史学科では、過去から現在においての人々の暮らしに密接した風習や風俗について学ぶのだといった説明があった。

そして、その説明の中に、行事と食べ物、更には菓자에触れる映像が出てきたのだ。

和菓子を好きになったことで、慶子さんは今まであまり意識してこなかった日本の行事について知ることが多くなってきていた。

また同じ行事ながら、地方によって食べる菓子がそもそも違ったり、名前は同じでも中味は違うものだったという経験を実際にした。

自分が興味を持てることと、所謂「学問」とが重なる経験は、今までなかったことだ。

興奮しながらその日のうちに、説明会で聞いたことを両親に話した慶子さん。

大学では是非ここに進みたいと伝えた。

しかし、両親からはストップがかかった。

進路については、すんなりとOKが出ると思ってた慶子さんは、

正直戸惑った。

一時の思いだけで四年間のことを決めるのではなく、少し冷静になって他の学部や学科も検討するようにと言われたのだ。

言われてすぐには、素直にそうは思えなかった慶子さんだったが、同じように進路で迷うクラスメイトや部活の仲間との会話の中で、両親の意図も理解することができ（自分と同じように「何がなんでもこの学部」、と熱くなっている人を見ることが自分の姿が見えたのだ）、慶子さんなりにもう一度まっさらな気持ちで、各学部について説明を読み、ネットでも調べ、先生にも話を聞きに行き、希望者が参加できる現役大学生を囲んでの座談会にも出席をした結果、やはり自分にはそこが一番合っていると思えたのだ。

進路希望用紙には、親の承諾のサインが必要だった。

慶子さんの両親は顔を見合わせ頷きあうと、父親がそこにサインをした。

「頑張つて」

父親が慶子さんに言う。娘を見るその目は、少し眩しそうだった。

「亥の子餅、亥の子餅」

呪文のようにつぶやきながら、慶子さんは軽やかな足取りで「寿々喜」に向っていた。

遅まきながら購入したイラスト付きの和菓子の本に、十一月の和菓子の紹介として「亥の子餅」が出ていたのだ。

イラストによると、「亥の子餅」はふっくらとした鶏卵に形が似ていた。

餅の形も素材も、例のごとく時代や場所により違うらしいが、最近目にするのできる多くはそのような形で、まわりにはきな粉が付いているとのことだった。

きな粉かぁ、と慶子さんは思う。

そして、そろそろ切り餅を買う季節になってきたが、その時は合わせてきな粉も揃えたいと思った。

きな粉の付いた餅を口に含んだことを考えると、それだけで幸せな気持ちになってきた慶子さん。明らかに、にやついているであろう自分にはつとした。

このにやにや顔で歩き続けていたら、怪しい人になってしまう…。

慶子さんは、努めて思考を真面目な方面へ真面目な方面へと移すべく、さつき本で読んだ「亥の子餅」についてのおさらいを始めた。

「亥の子餅」とは、旧暦十月の初の亥の日食べる餅で、万病を払う意味と、多産な猪にあやかり子孫繁栄の意味もあるそうだ。源氏物語にも出てくる菓子だということで、どんな場面に出てくるのか読んでみたいと慶子さんは思った。

読んでみたいが古典だし……と躊躇していたところ、母親から「源氏物語の現代語訳」を勧められ、確かにそうだ、その通りと、思わず膝を叩いてしまった慶子さんだった。

学校で一部分だけを読んでそれでもうおしまいだと思っていた源氏物語と、こうして再び出会う機会が来ようとは。

和菓子を好きになってよかったな、と慶子さんは思った。

和菓子を好きになったことで、それに繋がる世界にも興味を持つことができるようになったからだ。

今回の進路先然り。

本当に得をしたなあ、と慶子さんは思った。

慶子さんは、自分の世界がぐんぐんと広がっていくのを感じていた。

「寿々喜」の暖簾をくぐると、「いらっしやいませ」と女将さんの声がした。

慶子さんが「こんにちは」と言うと、女将さんの目じりに皺がよ

った。

慶子さんはショーケースに「亥の子餅」があることを確認し満足そうにほほ笑むと、その隣にある柿に目を留めた。

柿の色はとても濃いもので、菓子の名は「木練柿」とあった。読めない人も多いということか、「こねりがき」とのふり仮名もあった。

当然読めなかった慶子さんは、一つ一つの漢字は読めてもそれらが続いていると確かに読めないものだなあと思った。

「これは、どういった柿なのですか？」本に出ていただろうか、と首を捻りながら女将さんに訊くと、「木練柿とは、柿の実が木の枝になったまま熟したもののことを呼ぶんですよ。昔はお茶の席での菓子としても出されたと聞いたことがあります」との答えが返ってきた。

「枝になったまま」

そういえば柿は、買った時から明らかに柔らかく熟しているものを除けば、自宅で少し追熟してから食べるなあと。つまり逆算すると、収穫時はそれ程には熟していないということなのかもしれないと。

枝になったまままで完熟した柿であれば、流通させるにも気を使うことになりそうだ。熟した柿は、つぶれたり傷ついたりしやすいからだ。

そして思った。実際の「木練柿」とは、どんな甘さなのだろうか。

「柿の実が枝になったままだと、鳥も食べにくるし、おまけに時期を逸すると熟しすぎて実が落ちてしまうし。なかなか大変みたいですよ」と女将さんが言った。

「本当に、そうですね……。見極めが難しそうです」と慶子さん。

「ふふ。やっぱり、色づくとも早く収穫したくなるのが人情でしょうから。でもおいしい柿を得るためには、そこは辛抱するしかないん

でしょうね」と女将さん。

辛抱か、と慶子さんは思う。先日試合で、やみくもに打ちに行ってしまった自分は、まさに辛抱が足らなかったなあと。こんな自分では、とてもじゃないけれど「木練柿」は育てられないと。

その時、お店の奥から音がして「じゃ、行ってくるから」と和菓子さまが顔を出した。

和菓子さまは慶子さんのことを見ると、ぺこりと頭を下げた。慶子さんも急いでそれに倣った。

「学、ありがとうね。あら、そうだわ」そう言うと女将さんは、手をパチンと叩き慶子さんのことを見た。

「柏木さんもよければ、学と一緒に行ってみたらどうかしら」

女将さんの言葉に、慶子さんはどきまぎとした。

「学はこれから、酉の市に行くんですよ」

とりのいち、ああ、酉の市。

十八年の人生の中で、それはついぞ出でたことのない単語だった。

慶子さんにとってのそれは、新聞やテレビで見聞きするだけのものだったから。——でも。

「あの、酉の市はついこの間もやっていたような気がします」

天気予報前のちよつとしたコーナーで、その様子を見たことを思い出した。

「ああ、それは一酉。今日は二酉」つまり今年は二回酉の市が立つんだ、と和菓子さまが言った。

ちなみに酉の市とは、十一月の酉の日に行われる祭りのことを言い、縁起ものの熊手などが売られる。暦によつては、三回ある年もある。

そういえばテレビでもそんな話をしていたっけ、と慶子さんは思うと同時に、自分とは縁のなかった「酉の市に行く」という行為が、急に身近なものに感じられた。

「学に、注文しておいた店用の熊手を取りに行ってもらうんですよ。

もし柏木さんが酉の市に行ったことがないのなら、話の種に一度行ってみると楽しいですよ」と、女将さんはしきりに市に行くことを慶子さんに勧めた。更に「菓子はお取り置きしておきますから」とまで。

話を聞くうちに、酉の市に行ってみたいなあと思いはじめた。見るだけだった場所に、実際に行ってみたいと。

しかし、乗り気なのはあくまで女将さんで、市に行く和菓子さまに誘ってもらったわけではない。

うんうんと悩んでいる慶子さんを横目で見つづ女将さんは、「学、もなか最中」と『切山椒』きりざんしょうを忘れずに買って来てね」と言った。

「あのね、柏木さん。神社の側にね、熊手の模様がついたおいしい『最中』を売っているお店があるんですよ。図柄も可愛い。それで、『切山椒』っていうのは酉の市名物の菓子だね。ちょっと大人の味がするんですよ」と女将さんは慶子さんに説明をした。

ごくんとつばを飲む慶子さん。菓子の話を聞いては、黙っている。れない。

「あの、一緒にしても」果敢にも和菓子さまに訴える慶子さん。そんな慶子さんに、和菓子さまは黙って頷いた。

慶子さんはお店の電話を借りて、両親に帰りが少し遅くなることを伝えた。

酉の市に行くことを伝えると、一番小さいのでいいから熊手を買ってきて欲しいとリクエストを受けた。

そのことを慶子さんが和菓子さまに言うと、「熊手って、年々大きいのを買っているから、それでいいんじゃないかな」と言われた。

東京では浅草の神社が有名な酉の市だが、「寿々喜」では毎年歩いて行ける地元の神社に行っているということだった。

聞くと、ここから二十分もかからない、慶子さんも知っている神

社だった。

けれど、いつもはその神社は生活圏内でないため、酉の市が立つことも慶子さんは知らなかった。

和菓子さまと二人でつらつらと歩くうちに、道路沿いにお祭りでお馴染みの屋台が出ているのが見えてきた。人も増えてきた。神社に近づいて来たのだ。

「とうもろこし」、「お好み焼き」、「ベビーカーステラ」などなど、買わないにせよ屋台のお店は出ているのを見るだけで、楽しい気持ちになるものだ。

その屋台の中に、今まで見たこともないような食べ物があった。

「切山椒」だった。

「いらっしやい、いらっしやい！ 食べてって！」

お店の女性が、お餅みたいなそれをへうで細長い拍子木のように切ると、更にさいの目状に小さく切り屋台の前にあるお皿に載せていた。試食用にと、置いたものらしい。

色は、赤に白に緑と茶とあった。

「いただきます」和菓子さまが一つ取り、慶子さんを見た。慶子さんも倣って「いただきます」とそれを口に入れた。

口に入れた時は、のし餅の様な、すあまの様な食感があった。けれど、そのうちに口の中にほのかな山椒の味が広がっていった。

慶子さん、目を大きく開いて和菓子さまを見た。確かに、これは大人の味だ。

「二袋下さい」和菓子さまの声に、「まいどね」と女性が嬉しそうな顔をした。

「切山椒」を入れる袋には、おたふくの絵が描いてあった。それだけでも、ご利益がありそうなおめでたさを醸し出していた。

「先にお参りを済ませちゃおうか」との和菓子さまの提案に、慶子さんは頷いた。

境内の中もまるでお正月かと思うほど人が多く、お参りも当然のように並んだ。

並ぶ慶子さんの視線の先に、コートを着込んだ人たちが背中を丸め拜む姿が見えた。

今までは慶子さん、神様をお願いすることといえば、母親のことばかりだった。

けれど、母親が元気になってきた今、改めて何かをお願いするとなると。――成績だよな。

そう。成績の事しかないだろう。実は、来月に行われるテストまでが、大学進学に関係してくるのだ。

進学への意欲も満々な今、失敗は許されない。

順番が来た慶子さんは、お財布からごそごそと五円玉を出すと、どうか赤点だけはとりませんように、と一所懸命をお願いをした。

お参りが終わったので、目的の熊手を買ったためにと脇の参道へと行くと、熊手がトンネルのように両側から高く、そして覆いかぶさるようにわさわさと飾られていた。

赤や金の飾りをつけた華やかな熊手が、所狭しと飾られていた。

更には、夜でもないのに、下げられた数多くの提灯には灯りがともっていた。

日の光でもない、かといって蛍光灯の明るい光でもない、柔らかな赤い光が慶子さんを包んでいた。

初めて来たのにどこか懐かしく、それでいて日常とはほんの少しずれたお伽話の世界に迷い込んだような、そんな気分が慶子さんになった。

熊手から感じるその迫力と、それを取り巻く景色のなんともいえない美しさに言葉も失った。

まるで、この世ではないような。ここは、この世でも、あの世でもない、違うところだと……。

そんな中、多くの人があっちの熊手屋さんこっちの熊手屋さん、とふらりふらりと歩きながら、お店を覗いている様子が目に入った。

提灯の灯りは、人々の顔をも穏やかな表情に染めているようだっ

た。

中には既に熊手を買った人もいて、お店の人から「下に向けないで！ 熊手は前を向けて、前を向けて！」と声をかけられていた。

熊手は下を向けちゃいけないんだ、でも重たそうだから前を向けて持つのも大変そうだと慶子さんが思った瞬間、すぐ側で上がった「いよー！」とのかけ声にびっくりとした。

声のする方向を向くと、今度は三本締めが始まった。

熊手を持ったお客さんを囲むようにお店の人が並び、三本締めを打っていた。

そしてその周りの買い物客まで一緒になり、手を打っていた。

外国の人は、そんな様子を珍しそうにカメラに収めていた。そして慶子さんも、外国の人に負けなくらいの珍しい気持ちで、この場所の全てを体で感じていた。

「柏木さん、こつち」ふいに和菓子さまの声が降ってきた。

背筋がすつと伸びた和菓子さまは、お伽話から抜け出てきた公達きんたちのように慶子さんには思えた。

和服を着ていたら、さぞかしこの場に似合っただろうにと思うとおかしくなった。

「あ、なんか笑っているし」和菓子さまはそう言つと、慶子さん到手招きをして歩きだした。

笑っている場合じゃなくなった慶子さんは、慌ててそれに従った。

そしてとあるお店の前まで来ると、「おお、若旦那。毎度！」と熊手屋さんの大きな声がした。

「とびきりいいの、できていますよ！」と言つと、お店の人は大きな熊手を和菓子さまに渡した。

熊手には「寿々喜さん」の文字が入っていた。

「あれれ。大将は？」お店の人が和菓子さまにそう聞くと、「腰痛で」と困ったような顔をした。

師匠は、腰痛！ 慶子さんもびっくりした。

「それじゃ、お店、大変でしょ」と訊かれたことに対しては、「もうすぐ、じいさんも来るし」と和菓子さまは答えていた。

じいさん？ 和菓子さまのお爺さんという意味だろうか？ そういえば、今までそういった人はお店にはいなかったように慶子さんは思った。

和菓子さまと慶子さんは、さっきの買い物客のようにお店の人にぐるりと囲まれると「家内安全！ 商売繁盛！ ますます繁盛！ よお、」との掛け声のあと、三本締をしてもらった。

「若旦那！ 彼女さんと仲良くなっ！」とのお店の人の声に、和菓子さまは「はいはい」と答えていた。

そんなあちこちでの勢いにのまれ、神社の出口近くまで押しだされた慶子さんは、ようやくその頃になって両親に頼まれた熊手を買っていたことに気がついた。

「私、ちよつと買ってきました」慶子さんが言うと、和菓子さまも「あ、そうか。俺も忘れてた」と慶子さんのあとに続いた。

慶子さんは一番近い熊手屋さんに行き、改めて自分が買うという目で熊手を見たところ、今更なのだが熊手には値段がついていないことに気がついた。

どうしようと、きよろきよろすると、慶子さんの前にいた親子連れが千円札を出して、小さな熊手を買う姿が目に入った。

これだ！ と思った慶子さんは、親子連れがいなくなったあと、そそくさと小さな熊手が並ぶコーナーの前に立った。

そこには、和菓子さまが買った熊手とは比べ物にはならないにせよ、たくさんの種類の可愛い熊手があった。

「お姉さん、小さくても縁起ものだよ！」熊手屋さんが慶子さんに威勢良く声をかけた。

お店の人のその一言は、熊手を初めて買う慶子さんに勇気をくれた。

慶子さんは頷きながら、熊手の中央に招き猫がいるものを選び買った。

「ありがとうございました！ 来年もどうぞよろしくね！」お店の人は言うと、慶子さんに渡す前に熊手が包装されたビニールにお店の屋号のシールをぱつと貼った。千円の熊手ながら、シールのお陰で格が上がったようにも見えた。

慶子さんは受け取りながらにつこりとほほ笑むと、後ろで待っている和菓子さまに振り向いた。

和菓子さまは慶子さんを見て頷くと、二人は神社の出口へと向かった。

「あとは、『最中』だ」

今度はこっち、と和菓子さまが慶子さんを呼ぶ。

神社に行く人の流れに逆らうかのように、二人で人ごみを縫って歩いた。

和菓子さまのあとについて、小道に入るとこれまた行列ができていた。

「これくらいなら、すぐに順番は来るから」と和菓子さまは言う、列の最後尾に並んだ。

「『最中』のお店なんですか？」慶子さんが訊く。

「うん。そう。頑固なおやじさんが、『最中』だけを作って売っているんだ」

和菓子さまの言葉に慶子さんは笑う。頑固といえば、師匠だってそんな感じだ。

「あの、腰痛は大丈夫なんですか？」と慶子さんが訊くと、「親父ね。毎年この季節になると痛むみたいです。ほら、急に寒くなるでしょ。腰が冷えちゃうんだろ。うな。進歩無いというか、学習能力がないというか」腰痛ベルトで乗り切ろうとしているみたいだけど、と続けた。

列は、和菓子さまの言うようにどんどん短くなり、あつと言う間に慶子さんたちの番が来た。

「四つずつを二つ作って下さい」

和菓子さまはそう言つと、「柏木さんの家の分も頼んだから」とも言つた。

「はん、若造。色気づいたかと思つたら、お嬢さんの言うことも聞かずに勝手なことして。自分勝手な男は嫌われるぜ」と、皺だらけの顔にますます皺をよせながら、店主のおじいさんが言つた。

「いいんですよ」と和菓子さまは言つと、受け取つた包みの一つが入つた袋を慶子さんに渡した。

「若造。大將は腰痛か」そう訊くおじいさんの言葉に、師匠の腰痛は相当有名なのだと慶子さんは思つた。

「学習能力なくて」と和菓子さまが言つと、「この若造が生意気な口を」とおじいさんが言つた。

「そういえば、近々うちのじいさんが戻ってきますよ」と和菓子さまが言つと、「お！ そりゃ、ばあさんたちが大騒ぎだなあ。それにしてもあいつ、まだ生きていたか」と、につと笑い「つてことはよ。若造もこれから色々と大変だつてことだなあ」と面白がるような口調で言つた。

「みんな、お知り合いなんですな」

最中屋さんを出て、しばらくしてから慶子さんが言つと、「地元だし。……うん、地元だからね」と和菓子さまが言つた。

「柏木さんは、あまりこつちには来ないの？」と訊かれたので、「はい。駅方面には行きますけれど、反対側にはあまり」と慶子さんは答えた。

すると和菓子さまは、「歩ける距離だから、こつちも来るといいかもね。あの、交差点の向こう」と言つて指をさした。

「あそこにも、和菓子屋があるんだよね」団子とか、おはぎとか、お赤飯もおいしいよ、と。

和菓子さまが指す方向を見ながら、これくらいの距離ならなんてことなく歩けるから、今度行ってみようかなと慶子さんは思つた。

「……それに。まあこつちが言うことじゃないけど、デパートの地

下にも有名和菓子店が店舗を出しているし。つまり、うちだけが、和菓子売っているわけじゃないから」と和菓子さまは言った。

最初のうちは、ふんふんと聞いていた和菓子さまの言葉が、段々と慶子さんにとってはキツイものに聞こえてきた。

和菓子さまの言っていることは尤もだ。いろんな店の和菓子を見たり、食べたりするのは、とても楽しいことだろう。

ただ、そういったことを和菓子さまから言われると、何故か突き離された気持ちになってしまう慶子さんだった。

そして、そう思ってしまうのは、自分の我ままなのだろうかとも。

和菓子さまは「切山椒」を袋から出すと、それを慶子さんが持つ「最中」の袋の中に入れた。

「つき合わせちゃったから」

慶子さんはびっくりして、首を横に振った。酉の市について行きたいと言ったのは、慶子さんなのだから。

なのに、そんなことを言われると、気持ちをどうもっていいのかわからなくなった。

行きとは違った妙な空気が、慶子さんと和菓子さまの間にはあった。

和菓子さまは何かに怒っているのだ、としか慶子さんには思えなかった。

そして和菓子さまが怒ることといえば、自分がここに付いて来てしまったことなのだろうと。

ああ、またやってしまった、と慶子さんは反省した。

誘われたからと言って、ほいほい乗ってはいけなかったのだと。

（しかも、和菓子さまに誘われたわけではない）

だからといって、今日のことを謝るのもなんだか余計に空気を悪くしそうで、慶子さんはどうしていいかわからず、ただ黙っていた。

黙りながら、そういえば自分はいつもどうしていいかわからない

ときは黙ってしまっ、と思った。

何か、話題を。

当たりさわりのない何か話題を、とあれこれ考えたところ、慶子さんの頭には自分の進路についてのことが浮かんた。

「この間の学部説明会で」と、唐突に慶子さんが言っと、和菓子さまも「え」という顔をした。

「え」という顔には、怒りはなかった。

ということは、この話題は大丈夫そうだと思い、慶子さんは話を続けた。

「文芸学部文化史学科で、日本の風習や風俗について学べることを知って」慶子さんの言葉に、和菓子さまも説明会を思い出したのだらう、「ああ」と相槌をうつてくれた。

それにほっとした慶子さんは、「私、そこに進もうと思っています」と言った。

慶子さんの言葉に和菓子さまは少し考えるような顔をしたあと、

「ああ、そうなんだ」と言った。

「はい。だからさっきは、神社で、十二月のテストが上手くいくようにお願いをしたんです」

慶子さんがそう言っと、「柏木さんは、真面目に授業を受けているように見えるけど。一体何が不得意なの？」と和菓子さまが訊いてきた。

何が不得意か。これまた、非常にやっかいな質問だと慶子さんは唸った。

逆に言えば、何が得意かということだ。

「……万遍なく、ふ、不得意です」正直に答える慶子さん。

その答えに和菓子さまは、うっと詰まりつつ、「でも、確か、作文とか感想文で柏木さんの名前を見た気がするんだけど」と言った。

和菓子さまのその言葉に、ひいとなる慶子さん。

「それは、まあ、たまたまというか。本当に何かの気まぐれのように

に、稀にそういう珍事が起こるんです」と慶子さんが言つと、「……珍事。ん。そうなのかなあ。でも、読んだときに良く書けているなあと思つた覚えもあるんだけど」と和菓子さまが言った。

慶子さん、額から汗を流しながら「いや、そんな。でも、最近はそのなことは」と答え、あれ？ と思つた。

確かに、ごく稀にそういったことで取り上げてもらうことはあつた慶子さんだったが、そう頻繁にというわけでもなかった。

しかも、高三になってからは、そういったことはないのだ。

なのに和菓子さまの口ぶりからすると、どうも慶子さんの書いた文章を過去に読んだことがあり、しかもそれを覚えていようだった。

と、いうことは、慶子さんの書いた文章が余程印象に残るものだったか、単に全てにおいて和菓子さまの記憶力がいいのか、ということになるのだろうか、考えるまでもなくそれは後者であると、慶子さんは結論付けた。

「き、記憶力がいいんですね」慶子さんの言葉に、「どうかなあ」と和菓子さまは答えた。

「そういえば、お取り置きした菓子は、『亥の子』と『木練柿』とあとなんだつけ、という顔を和菓子さまがした。

「『初時雨』^{はつしぐれ}です」と慶子さんは答えた。

「初時雨」は、初冬の雨をきんとんで表した丸っこい菓子だった。綺麗な名前の菓子である。

慶子さんの答えに和菓子さまは、「そっか」と言った。

慶子さんたちは、既に「寿々喜」の前まで帰つて来ていた。

慶子さんは和菓子さまを見上げ、「進む学部は決められたんですか？」と尋ねた。

進路希望用紙の提出日は、もうすぐだ。

和菓子さまは立ち止り、慶子さんを見下ろした。

「俺、進学はしないんだ」

その言葉の意味を、慶子さんは最初わからなかった。

そんな顔の慶子さんを見て、「大学には進まずに、他の店で修業をするんだ」と和菓子さまは言い直した。

—— 進学はしない

その言葉が、突然の北風のように、冷たく慶子さんを襲った。和菓子さまは、慶子さんと同じ大学には進まないのだ。

15・掌の上の山茶花／（十二月）

王様の耳はロバの耳。

慶子さんの頭に、いつかと同じフレーズが蘇る。

以前も口止めはされなかった。

そして、今回も。

それは信頼されているというよりも、そこまでの間柄ではないのだと、慶子さんには思えた。

ジングルベルの音楽が街のあちこちで流れる中、試験の最終日をどうにか終えた慶子さんはふらつきながらも家に向っていた。

目指すはベット。ともかく眠りたかった。

試験中の睡眠時間は、あるようなないようなものだった慶子さん。

一刻も早くお気に入りのふもふもとしたブランケットにくるまって、思う存分眠りたかった。

いつもよりも軽めのカバンが肩からずり落ちるのを押さえた時、肘の内側でカバンの外ポケットにある携帯電話が震えたことに気がついた。

おそらく母親からのメールだろうと思い、道の端により携帯を開いた。

「ああ、はいはい」

案の定の母親からのその内容は、図書館で予約した推理小説を取ってきて欲しいというものだった。

運がいいというか、タイミングがいいというか、慶子さんは今まさに図書館の前を通過中であつた。

母親からの神がかったメールに感心していると、電柱の上に留まっていたカラスと目が合った。

ちらりと、この鳥は母親の使いだろうか、などファンタジーなことを考えた慶子さん。

そして、そういえばそんな小説を以前読んだことも思い出し、更にそういえば最近は勉強ばかりで（！）本を読んでいないことにも気がついた。

せっかく図書館に寄るのなら、と慶子さんは自分が読む本も物色しようと思った。

にまにまとしながら図書館を出る慶子さん。

以前から読みたいと思っていたファンタジー小説を見つけたのだ。

カバンの中には、母親の本と自分の本。

ああ、好きな物語を読めるというだけでどうしてこんなにわくわくするんだろう、と眠気も忘れ足取りは軽やかだ。

そして、軽やかついでに、慶子さんは裏の通りをお散歩しながら帰ることにした。

昔ながらの家が多いこの裏通りには、歌に出てきそうな垣根もあり、慶子さんは心の中でその歌を口ずさんだ。

ジングルベルもいいけれど、この景色にはこの歌が合うなあと思っている。

そんな慶子さんの目に、またまた歌の通りの山茶花の花が映った。

咲く花も少なく、葉を落とした樹木が多いこの季節、くれないいろ紅色したその花はそんな周りの景色さえ明るく見せるほどに、鮮やかだった。春にここを歩いた時は、穏やかな日で、木々も青々とした葉をつけていた。

そんな景色の移り変わりに、過ごし重ねた季節を感じた。

「寿々喜」の銀色の大きなダクトが目に入る。

—— あの日、ここからあのいい匂いがしなければ。
全ての事は、今と全く違っていただろう。

慶子さんはそう思いながら、ダクトの前を通ると、再びそこから出てくる匂いに反応してしまった。

……この匂いは。

慶子さんは、首を傾げた。

それは、今まであまり嗅いだ事のない匂いだったからだ。

あの日のように、慶子さんは角を曲がり「寿々喜」の店の前に行った。

お店の前を見る限りでは、特別に変わった様子はなかった。

はてと思い、視線をダクトのある方向へと向けた時。

「H a h a h a ! H a h a h a !」

「寿々喜」の扉の開く音と同時に、朗々とした声を伴った大きなサンタクロースが、慶子さんの目の前に現れた。

サンタクロースは、サンタクロースの服を着て赤い帽子も被っていた。

髭は付け髭のようだったが、帽子から出ている銀髪は、鬘ではなくどうみても本物だった。

しかも、目の色も少し淡くて。

つまりが、外国人のおじいさんだと思われた。

そして、慶子さんは英語が苦手だった。

和菓子屋さんの前でサンタクロースに遭遇する確率は、どれくらいものだろうか。

たとえそれが天文学的数字だろうと、ともかく慶子さんは遭遇したのだ。

「M e r r y X m a s !」

サンタクロースはそう言っと、持っている袋から小さなビニール袋を出し慶子さんに渡してきた。

「さ、サンキュー」

慶子さんは受け取りながら、なんとか英語でお礼を言う。

慶子さんは渡されたものを見た。

それは、人形の形をしたクッキーで、クリスマスシーズンによく見るものだった。

「あの、これは『寿々喜』さんで」作ったものですか、と尋ねようとした慶子さんは、でもまさか「寿々喜」でこのクッキーは作らないだろうと結論を出してしまい、その言葉を飲み込んでしまった。

そんな慶子さんの耳に、「おや。お嬢さんは、うちのお得意さんかね」と言うサンタクロースの声が聞こえた。

慶子さんは驚いた。

今、自分にはこのサンタクロースの話した内容が分かった。

もしや、このところ頑張った勉強の成果がこんな形で出たのだろうか。

今までびくびくとしていた女の子の顔が急に輝いたのを見たサンタクロースは、「よかったらお茶でも飲んでいくかい？」と慶子さんを誘った。

あれれ、と慶子さんは思う。

今も聞きとれた、と。

さっきの喜びを一旦忘れ、少し冷静にこの状況を考えた慶子さん。

もしかして、このサンタクロースの話す言葉は、英語ではなく全て日本語ではないのかと。

もしかして今自分は、このサンタクロースにお茶に誘われたのではないかと。

そして、その結論を出す間もなく、あれよあれよといつかのようになにかのごとく、図書館からダクトそして「寿々喜」（店内）のコースをたどったの慶子さんだった。

「いらつしゃいま」

ま、のところで言葉を止めたのは、師匠。

眉間に皺を寄せながら、サンタクロースと慶子さんを交互に見ていた。

「この子、お店の前で拾ったよ」

軽い言葉でサンタクロースはそう言うと、最早指定席のようになった店内の椅子を慶子さんに勧めた。

「ぼく、お茶いれるけど、元くんははじめるどうする？」

飲むでしょ、とサンタクロースが師匠に訊く。

会話から察するに、元くんとは師匠のことだと思われた。

いや、師匠の名前云々よりも、このサンタクロースは確実に日本語を話しているのだ、という事実を慶子さんは受け入れた。（因つて、勉強の成果云々は、あっさりと取り消し）

そして、師匠のことを元くんと呼ぶということは――。

「お父さん。菓子を配るのはともかくとして、その格好はやめてくださいよ」

お父さん。

サンタクロースは、師匠のお父さん。

――「そういえば、近々うちのじいさんが戻ってきますよ」

そして、和菓子さまのおじいさん。

和菓子さまには、和の血だけでなく洋も血も入っていたのだ。

「お嬢さん、柏木さんっていうのね」

サンタクロースはサンタの衣装を脱ぎ、和服に着替えていた。

サンタクロースから小粋な御隠居さんへと変身だ。

「学のね、同級生さんなんですよ」

師匠に替わり、お店に出た女将さんがそう言った。

「おお！ ガールフレンド！」

慶子さん、あやうく持っていた湯呑を落としそうになる。

今のは、一体どういった意味での使用なのだろうか。

英語と日本語だと、その単語が持つ意味が違ったように記憶して

いたからだ。

とはいえ、そんなことを訊けるはずもなく。

どういう顔をしていいのか分からないので、とりあえずまたお得意の曖昧な笑顔を浮かべてしまう慶子さんだった。

「学くん、ぼくに似ているからモテるでしょ」とサンタクロース改め、御隠居さんが言う。

ぼくに似ている。

似ていると言われても、御隠居さんは外国人のお顔で和菓子さまは思いつきり和風なお顔だ。

背格好の立派さは、確かに御隠居さんから来たのだなあとは思っけれど、お顔はどうなのだろう。

慶子さんは、じつと御隠居さんを見つめた。

……似ている、のだろうか？

首を傾げる慶子さんに御隠居さんはくすりと笑うと、「ここ」と左の目もとのほくろを指した。

「あ！確かに、似ています」

和菓子さまの目の下にも、御隠居さんと同じような小さなほくろがあった。

そう、それは妙にアンバランスだと慶子さんは思っていたのだから。

「ふふ。でしょ。学くんには色気があるから」

御隠居さんの言葉に、慶子さんは、ああ、そうか！と合点した。

そうなのだ。和菓子さまの、爽やかとだけでは表現できない、慶子さんの中にもややもやとあったあのアンバランスさは、「色気」だったのだ。

なるほど、そうか、そういうものだったかと、慶子さんはすっきりとした。

そういった目を持ち今までの事を思い出すと、「マダムキラー」だとか、「先輩にモテる」だとか、和菓子さまに関してのそんな話

は既に聞いていたのだ。ただそれが、ここへとは繋がらなかったのだった。

つまりそうか、色気か。色気なんだ、と慶子さんはうんうんと頷く。

御隠居さんに言われなければ、慶子さんにはまだ分からなかった分野だと思えた。

「それに比べ、元くんは、喜一郎さんきいちろうさんに似ちゃったからな」
硬派というか、とつつきにくいというか。

「喜一郎というのは、義母の兄でこの店の二代目なんですよ」

女将さんの話によると、二代目の喜一郎さんが体を悪くしたため、妹の鈴子さんの夫である御隠居さんがその後を継いで、現在の師匠へと店を繋いだらしい。

「元くんを見ていると、喜一郎にい義兄さんがいるみたいね」

御隠居さんが言う。

「伝統もいいけど、今も大事なのにな」

そう言う御隠居さんは、肩をすくめてショーケースを見た。

生憎持ち合わせがなく、今日は菓子を買って帰れない慶子さん。

ちらりと見たショーケースには、慶子さんの大好きな上生菓子が綺麗に陳列されていた。

慶子さんが持ち帰った御隠居さんからのプレゼントを母親は目ざとくみつけ、お茶をいれだした。

クッキーは、蕎麦の味がした。

ダクトからの匂いはこれだったのだ、と慶子さんは納得した。

クッキーはサクリとした食感が心地よく、口の中でほわっと溶け、つつい次の一枚へと手が出てしまいそうなおいしさだった。

—— 伝統もいいけど、今も大事

御隠居さんの言葉を思い出すと、慶子さんの心はざわざわとしてくるのだった。

先生達も採点に気合が入っていたのか、試験翌日の朝一番の授業から、初日分のテスト返しが行われた。

頑張つて勉強をした成果か、はたまた酉の市でのお参りが効いたのか、今のところ慶子さんの答案はなかなかいいものだった。

とりあえずほつとした気持ちで午前を終え昼休みを迎えた慶子さんのところに、「柏木さん、ちょっと」と福地君がやって来た。

席が近くのクラスメイトとお弁当を広げようとしていた慶子さんは、断りを入れ、席を外した。

校舎の各階のちよつとしたスペースには、簡単なテーブルとイスが置かれていて、空き時間のある生徒が勉強していることもあれば、お弁当を食べる場所として利用してもいた。

福地君はそこに慶子さんを誘った。慶子さんは言われるままに大人しく椅子に座った。

福地君の今日のお昼は購買部のパンのようで、茶袋からはパンが次々と出てきた。その数、計六個！

ははあ、と慶子さんはそのパンの数に驚いた。

そんな慶子さんの様子にも気がつかずに、福地君はビニール袋を破りパンを出すとパクパクと食べた。

「俺、シヨックだわ」

二つ目のパンの袋を開けながら、福地君はやつと話し出した。

一方、お弁当の包みをようやく開けようとした慶子さんの手は、福地君のこの言葉で一度止まった。

が、ああ、やっぱりその話なんだと思い、再び手を動かした。

「今朝、聞いた。鈴木から進路のこと。大学に行かないで、和菓子
の修業をするって」

慶子さんは福地君の言葉を聞きながら、箸を出した。

そして、お弁当箱のふたを開けた。
するとそこにはいつもと変わらぬ、母親の手作りのおかずが詰ま
っていた。

卵焼き、きんぴら、ほうれん草のおひたしに生姜焼き。
それらを見たら、気持ちがすつと落ち着いてきた。

「鈴木にとつてはそれが大事なことだろうし、友だちとしては応援
したい気持ちは十分あるんだけど」

でもさ、と福地君はそう言うとき黙ってしまった。

福地君の気持ちは良くわかった。

それは、まるで鏡に映したように、自分と同じだった。
だから慶子さんは、「淋しいよね」と福地君に言った。

「そ、そう！ そうなんだよ！ 淋しいんだよ！ んなこと言っ
たら、山路には気色悪いって言われそうだし、和歌山には笑われそう
だから」でも、誰かと話したくてさ、と言う福地君に慶子さんはう
んうんと頷いた。

「こんなこと言えるの、情けないけど柏木さんだけだから」

福地君の言葉に、慶子さんはお弁当箱から顔を上げた。

そして、照れたような泣き出しそうな顔をした福地君に向い、は
にかんだ笑顔を見せた。

「ちよいと、柏木さん」

福地君と別れて廊下を歩いていると、今度は常盤さんに話しかけ
られた。

「ああ、私の登校日も終わろうとしているのにい」ああ、こ
れからが面白くなりそうだっていうのに、つまらないと常盤さん
が言う。

常盤さんは受験生なので、いろいろと忙しいのだ。

「聞いたわよ、鈴木のこと。で、見たわよ、福地との逢い引き」

「あいび……えっ」

あいびきとは逢い引きなのだろうと、そしてそれは誤解だと慶子

さんは説明しようとした時、「ちよつと、柏木さん。いいかしら」と今度は担任の先生までが慶子さんに声をかけてきた。慶子さん、大人気の日である。

先生について行つた先は、職員室だった。

職員室には、和菓子さまがいた。

和菓子さまは、剣道部顧問の山田先生と話しをしていて、その山田先生と担任の席は隣同士だった。

「いろいろすみません」と担任は山田先生に頭を下げると、ため息を一つつき、和菓子さまの背中をとんと叩いた。

和菓子さまは、慶子さんのことを見ない。

それに気がついた慶子さんは、慌てて自分の視線を和菓子さまから逸らした。

「うーん。柏木さん」担任は椅子に座ると、鍵で引き出しを開け、一枚の答案を出した。

それは、古典のテストだった。受け持ちは、担任だ。

答案を見た慶子さんは、気絶しそうになった。

「記入ミス」

明らかに、回答欄に不自然な空白の箇所が一つあった。

「ずれていなければ、書いてある分は全問正解だったのに」

答案用紙は、見ただけでこのテストが赤点だとわかるものだった。

「次の授業で返すけど。でもね、柏木さん——」

どうしよう、どうしよう、と慶子さんは混乱した。

そして、自分が大学のどの学部に進み何を勉強したいかを、両親に伝えていた姿を思い出した。

あんなに偉そうに、熱く語っておきながら、自分がやるべきことさえ満足にできなくて。

答案の見直しなんて、そんな初歩も初歩のミスを——。

「先生」

はつきりとした声が慶子さんの頭の上に響いた。

「あら、鈴木君、なにかしら」

担任の先生の声もした。

慶子さんも、はっとした。

「でも、大丈夫ってことでしょ。柏木さんの大学進学は」

え、と慶子さんは和菓子さまを見上げた。

「ええ、そうよ。まあ、残念ながらこれは赤点だけど。でも再試験をするし。それに今回の柏木さんの出来なら再試験もいい点とれそうだしね。他の教科も今のところ特に問題はないみたいだし。それに、もし古典がダメでも、そもそもそれ以外で柏木さんの単位は足りそうだしね」

だから今、そう説明していたじゃない、と担任が言う。

「ただ、この答案をいきなり授業で返したら、柏木さん驚いちゃうだろうって思っ、だからこうして呼んだのよ」

—— だから今、そう説明したじゃない。

ふにやふにやと慶子さんは脱力した。

そうなんだ、大丈夫なんだ、それを先生は説明してくれたんだ。

はあ、と慶子さんはため息をついた。

「じゃ、俺、教室に戻ります」

和菓子さまはそう言う、と山田先生と担任に頭を下げ、慶子さんのことを見てきた。

「あ、柏木さんも戻っていいわよ」追試頑張るのよ、と担任が言った。

「あ、ありがとうございます」

小走りで和菓子さまの後ろをついていきながら慶子さんはそう言った。

「……べつに」

和菓子さまは、振り向きもせずにそう言った。

慶子さんの足が止まる。

それに気がついた和菓子さまの足も止まる。

「担任つてさ」和菓子さまが話します。

「悪い人じゃないんだけど、話が回りくどいんだね」柏木さんのテストといい、俺の進学といい。山田先生まで借りだすなんてさ、どうかしていると和菓子さまは言った。

「和菓子屋の息子が、大学に行かずに和菓子の修業するのってそんな変かな」

予想はしていたけど、福地もぎゃーぎゃー騒ぐし、と。

「あ、福地君は」そう言いながら、これは話していいものかどうかと慶子さんは迷った。

そして、淋しいといった気持ちのことは話さずに、「応援したいつて言つてましたよ」とだけ伝えた。

「……なんで？」

「え？」

「なんで、柏木さんがそんなこと知っているわけ？」

なんでって、それは。

「ええと、お話しをしたというか」もしかして、これさえも伝えないほうがよかったのかと慶子さんは後悔をした。

「福地と話した？」和菓子さまは怪訝そうな顔をした。

「はい」と答えながら、慶子さんはつばを飲み込んだ。

「いつ」更に和菓子さまは訊いてくる。

「い、いつ？」

「さつき、あの、一緒にお昼を食べた時に」

掌に「人」という文字を書き、飲み込みたい衝動に駆られつつ、

慶子さんは答えた。

すると和菓子さまは、「ふうん。仲がいいね」と言った。

な、仲がいい？ 福地君と。

確かに、仲が悪い人とは一緒にお昼は食べないだろうし。そしてそう言われてみれば、慶子さんにとって福地君は、仲の良い間柄といえるのだらうと思った。

だから慶子さんは、うんうんと頷いた。

すると和菓子さまはもう一度、ふうんと言つと、慶子さんを置いてさつさと歩きだした。

わけもわからず、廊下に一人残された慶子さん。

そんな慶子さんを追いたてる様に、休み時間の終わりを告げる予鈴が鳴った。

「全く。失恋でもしたかのような顔してさ」

久しぶりの稽古のあと、山路さんが慶子さんにそう言った。

思わず右手で頬を押さえる慶子さん。

「あれ、柏木さん。歯痛？」

なんか元気ないと思つたら、と山路さんが言った。

と、いうことは、失恋したかのような顔をしているのは自分ではなく——「見て、あの福地の鈴木を見る顔。情けないやら、気色悪いやら。全くさ、鈴木がこの世からいなくなるってわけでもあるまいし」

山路さんの視線の先にいるのは、福地君。

和菓子さまが大学に進まないことを淋しいと言つた、福地君。

でも、あの時最初に淋しいという言葉を使ったのは、慶子さんだ。

—— 仲がいいね。

そうかもしれない。自分は福地君と同じ気持ちなのだから。

応援したい、でも。

—— 和菓子屋の息子が、大学に行かずに和菓子の修業するのってそんな変かな

変なんかじゃない。全然。

わかっている。変なのは、素直に応援できない自分のほうなのだ。

「寿々喜」の暖簾をくぐると、お店には御隠居さんがいた。

一度は入り口に立ったものの、ずりりと後ずさった慶子さんに、帰さないとばかりに御隠居さんが「やあ、柏木さん」と大声で声をかけてきた。

貫禄負けした慶子さんは、敗者に相応しく、とぼとぼと前に進んだ。

「さあ、今日は何にしましょうか」まるで八百屋さんや魚屋さんのようなその問いかけに、慶子さんの頬は緩んだ。

「そうそう。女の子は笑わないと。まあ、男の子も笑ったほうがいいけどね」

元くんなんていつも眉間に皺だもんね、お義兄さんに似ちゃったね、と御隠居さん。

「ぼくと奥さんが暢気だったから、お義兄さんも元くんも難しい顔になっちゃったのかなあ」

ぼくのせいかなあ、と御隠居さん。

「さて、さて。かわいい柏木さんへの今日の一番のお勧めは、『藪柑子』（やぶこうじ）。あ、ぴんとこない？ 『藪柑子』って言うよりも、十両って言ったほうが分かりやすいかな。万両、千両って赤い実をつける木があるでしょ。それと並べて十両ね」

ショーケースの中にある「藪柑子」と説明のある菓子は、三角形に伸ばした緑色の練り切りの上に丸く形をつけたつぶ餡を載せ、三隅をその上にかぶせたものだった。

そしてその三隅に、小さな赤い実がぱらぱらと散らしてある。

また練り切りは完全には餡を隠していないため、その赤い実と黒い餡のコントラストが綺麗だった。

「藪柑子」の形はシンプルだ。シンプルなのに、情緒もあり美しさもあった。そしてその形はモダンでもあった。

「藪柑子」とビターなチョコレートを、一緒に洋食器に載せたら綺麗だろうな、と慶子さんは思った。

「次は、柚子饅頭ね。毎年この時期になると作る上用饅頭ね。口に

入れた時の柚子の香りがいいね」

ほのかに柚子色をし、頭に小さな緑の葉をつけた饅頭がころんとあつた。

饅頭の皮には、ところどころ小さな黄色い柚子の皮が見えた。爽やかだ。

「饅頭」と「爽やか」という言葉が並ぶのは変な話だが、この柚子饅頭を見るとその言葉しか浮かばなかった。

食べることを考え、ふふふと顔が笑ってしまう慶子さんに「これも面白いよ。黒砂糖のきんとんで作った『初霜』。なかは、白餡ね」とご隠居さんの説明があつた。

黒砂糖のきんとん。

きんとんの上生菓子は今まで何度も食べたけれど、黒砂糖味のものではなかった気がした。

口の中で、どんな味が広がるのか楽しみだつた。

そして最後に残つたのが、「山茶花」。

つい先日見た花が、菓子となりここにあつた。

そのことが、慶子さんの胸をぎゅつとさせた。

「そつか。柏木さんの一番は、これかあ」

御隠居さんが嬉しそうに言った。

「小さい店のいいところつて、みんなであれこれ言いあいながら菓子を作れるところなんだよね」

春から「寿々喜」に通っている慶子さんだか、こういつたお店内の出来事は初めて聞いたと思つた。

「ぼくはね、『藪柑子』大好きなの。初めて義兄に認めてもらったのがこの菓子だから。なかなかモダンでしょ。そして、材料を試すのが大好きな元くんはね、今回いろんな黒砂糖を取り寄せてはあれこれ考えて『初霜』を作つてたのね」

御隠居さんの説明には、「山茶花」はなかった。

「学くんはね、まだお店に出すものは勿論作れないからね。この『山茶花』を作つたのは手直しを含め元くんだけだ。初めてじゃない

のかなあ、あの子が考えた菓子を元くんが採用したのは」

つまり、これは和菓子さまが。

慶子さんの気持ちに一番響いた「山茶花」は、和菓子さまが。

「椿じゃなくて、山茶花つてところが渋いよね。でも、はつとしたんだよね。椿と山茶花があったら、椿のほぅが通りもいいし、ついそっちを作ってしまう。けど、あの子は今自分が感じる美しさを、その感じ方を大事にしたんだあって。ぼくね、元くんとな、和菓子の事、いろいろ話すの。まるで元くんがお父さんでぼくが息子みたいな会話なんだけど。ぼくね、元くんは古いよって。もっと今のモチーフを取り入れなよって。でもね、そういうことじゃないんだね。古いつか新しいとか。学くんの菓子を見て、ああ、そうかってぼくも思った。きつと元くんもね。菓子は頭で考えるんじゃないで、体感として何をどう感じてそれをどう表現するかが大事だつてね。結果として出来たものは、古典的なものである場合もあれば現代的なものである場合もあって。和菓子は、お店によっていろいろね。いろいろあっていいの。でも、うちの考えはそれね。それで行くんだってね」

若いつていいね、と御隠居さん。真つ直ぐで、濁りがない、と。

「柏木さんが、『山茶花』を選んだのもそれを証明しているもんね。柏木さんの目に映る景色と学くんのそれは、とても良く似ているね」

帰宅後慶子さんは母親に挨拶をした後、部屋に籠った。

結局「寿々喜」では、「山茶花」一つしか買わなかった。

箱から出した「山茶花」を、慶子さんはそつと掌の上に載せた。

紅色した小さな花の菓子。

師走の住宅街で、鮮やかに咲くその花に。

その中に、和菓子さまの決意と、それを受け入れた師匠や御隠居

さんの気持ちが詰まっているように慶子さんは感じた。

—— 応援したい。

慶子さんは強く思った。

なのに瞳からは、涙がこぼれるのだった。

16・春隣、恋隣 / (二月)(前書き)

今回の物語は、事故や病気についての記述が多くなりました。

読まれるかたのお立場によっては、辛い思いや、気分を害する可能性があります。

ですので、申し訳ありませんがご自身の判断で読んでいただきたいと思います。

尚、次回更新の物語の前に、今回の簡単なあらすじを載せることで今回お読みいただけなかった方へのフォローとさせていただきますと思います。

よろしく願いします

16・春隣、恋隣 / (二月)

睦月、一月、はじまりの月。

高校生活も、あと三月みつき足らず。

「—— ややつ、大変だつて！」

剣道場に入る前に素早く一礼をすると、福地君は稽古が終わり面を外している部員に向い焦ったように言った。

「遅いよ、もう稽古は終わりましたよお」私が挨拶しちゃったよ、と山路さんが言う。

慶子さんは、頭から手ぬぐいを外しながら、そんな二人のやりとりを聞いていた。

冬の道場は底冷えがし、袴越しに感じる床の温度は、剣道を始めたことで初めて知った冷たさだった。

慶子さんは、先日和歌山君が道場に顔を出した顧問の山田先生に、「床暖房にして下さあい」と直訴していたことを思い出すと、くすりと笑った。

「や、や、や、山田先生が」

慶子さんは、頭の中を読まれたかのような「山田先生」の名前にどきりとした。

みなが一斉に顔を上げ、福地君を見た。

「落ち着け、福地」低い声で北村君が言う。

「ああ、うん。ええと、せ、先生がさ、山田先生が、学校のすぐ側に横断歩道があるだろ、あそこを渡っていたら、車にはねられたつて」

道場が一瞬、しんと静まった。

「あんたが職員室に呼ばれたのって、そのことで？」

福地君は大きく二回頷くと、「そう。それで、救急車で運ばれたって。な、なあ。山田先生、大丈夫だよなあ、なあ？」

そう福地君から投げられた言葉を返せる者は誰もなく、慶子さんも隣に座る安井さんと顔を見合せながらも、言葉は何も出なかった。

その後みなで寄った職員室でも、それ以上の情報は入っておらず、剣道部の面々は不安な思いを抱えたまま帰路に着いた。

「……救急車」

自身の手で救急車を要請したことがある慶子さんは、暗い気持ちになった。

そして、ぶるつと震えると、首元に入りこむ風を避けるためにマフラーの位置を少し上にずらした。

倒れた母親が救急車で運ばれ、のちに入院、そして手術となり。

……手術。

慶子さんは、手術に関するあれこれも思い出していた。

手術の前に署名をする、いくつかの書類。

手術は勿論のこと、輸血や麻酔に関しても、生じる可能性のある

デメリットがそこには記されていた。

それを初めて目にした時の^{おの}の慄き。

慶子さんは小さく首を振ると、母親に頼まれた買い物を思い出し、駅近くの文具屋に寄った。

手袋とマフラーを外しカバンにしまい店の入り口で小さな買い物かごを手にすると、慶子さんは真っ直ぐにお目当てのコーナーへと向い、母親お気に入りメモ帳を何冊か手に取り、かごに入れた。

その後もつらつらと店内を見ていた慶子さんは、はつとあること

に思いがいき、更に店の奥へと進んで行つた。

そしてしばらくその場で考えた末に、小さな折り紙の束をあるだけ全てかごに入れるとレジへと向おうとした。

「あ、柏木さん？」

ふいに後ろから声をかけられた。

和菓子さまだった。

和菓子さまは、視線を慶子さんから、そのかごの中へと落としていた。

かごの中には、こんもりと積まれた折り紙がある。

「……もしかして、山田先生に？」

和菓子さまは慶子さんの返事も聞かずにその買い物かごを慶子さんの手から取ると、「実は、これもそうなんだ」と言つて一枚の色紙をそこに入れた。

「駅に着いた途端、福地からメールが来てさ。自分が買い忘れたからって俺に買えって」

恐らく、山田先生への寄せ書き用の色紙なのだろう。

慶子さんは和菓子さまの言葉に頷きながらも、「でも、折り紙は私が個人的に買おうと思つていたので」と和菓子さまに取られたかごに手を伸ばした。

和菓子さまは、ふいとかごを慶子さんの手の届かない方へと動かすと、「千羽鶴つてさ、本当に千羽折るのかな？」と訊いてきた。

かごは和菓子さまの体の後ろに。取りかえすには、回り込まないといけない。

和菓子さまの言動に戸惑いながらも慶子さんは、「私は、そうしました」と答えた。

「ふーん、そうなんだ。千羽か。となると、まあ、部員一人当たり何羽折ればいいんだ。ああ、でも、部員だけじゃなくて、学校全体に呼びかければ、簡単に集まるか」

そう言つと和菓子さまは、ぶつぶつと計算を始めた。

「で、でも」そんな和菓子さまの様子に焦りを感じた慶子さんは、

それは違うと思ひ声を上げた。

和菓子さまは、ん？ という顔で慶子さんを見た。

その和菓子さまの顔を見ると、慶子さんは今から自分が言おうとした言葉が、お腹の底まで引っ込んでしまったのを感じた。

言わないほうがいいのだろうか。――でも。

「の、ノルマじゃないので」慶子さんは弱々しい声でそう言つと、直ぐに俯いた。

こんなことを言つて、偏屈者だと思われたらどうか。

言つたことは後悔してはいないけれど、でも、それとは違つちで、こんなことを言つ自分が融通がきかないようで嫌だつた。

「……あ。ほんとだね」

しかし和菓子さまから返つてきた言葉は、慶子さんの意見を否定するものではなかつた。

慶子さんは驚いて顔を上げた。自分の気持ちが通じたのだろうか。

「ごめん。俺、焦つてた。柏木さんが折り紙を沢山買っているのを見て、ああ、そうか、折り鶴かつて思つて。そう思つたら、一刻も早く、それこそ明日にでも、それを山田先生に届けたくなくてさ。でも、そうだよな、ダメだよな。そんな折り鶴じゃ、意味ないな」
そう言つと和菓子さまは、「柏木さんに、嫌なこと言させた」と言い、再びごめんと謝つてきた。

「そんな、とんでもないっ」

慶子さんは、自分の思ひをこうして和菓子さまがわかつてくれたことが嬉しかった。

嬉しくはあるものの、こうして二人で向かい合っている状況は、恥ずかしくもあつた。

許されるものなら、この場から逃げだしてしまいたいほどだつた。

しかし、そういった行動はあまりにも不審である。

「つまりさ、ノルマじゃなきゃ、いいんだよね。……というか。ま

さか柏木さん、一人で千羽もの鶴を折るつもりだったってことはないよね」

和菓子さまの言葉に、慶子さんははっとした。

「一人で折るとか、そこまでは、考えていなかったです。とにかく、千羽鶴を山田先生に、っていう思いと、だったら折り紙を買わないと、という思いだけだったので」

事実慶子さんは、大量に折り紙をかごに入れたものの、その先の展開についての具体的なプランは全くなかったのだ。

家に帰ったら、早速折ろうとは思っていたが。

「うん、わかった。なら、俺、賛同者ね。で、色紙を買って言うたくらいの福地だから当然奴も賛同すると思うし」

和菓子さまはそう言うのと、「部内でも学校でも、有志ってことで気持ちのある奴らにお願いするっていうのはどうかな。当然、俺がさっき言ったような一人何枚とかいったノルマはなし」

どうだろうか、と和菓子さまは慶子さんの顔を覗き込んできた。

顔を逸らしたいと思いつつ、そうするはとも失礼だという気持ちもあり、慶子さんはかろうじてなんとか顔の位置を動かさずに、和菓子さまの言葉に頷いた。

「はあ、よかった。じゃ、折り紙と色紙は、俺がまとめて払うってことで。……あれ、これ」

和菓子さまの言葉に、慶子さんは買い物かごの中に母親に頼まれたメモ帳が入っていたことを思い出した。

「あ、それ、私のです。それは私が」そう言う慶子さんに、和菓子さまはかごからメモ帳だけを取り出し、渡してくれた。

和菓子さまはメモ帳を見ながら、「そういえば、柏木さん。正月に風邪を引いたって」と言ってきた。

「あ、そうなんです。だから『花びら餅』は母にお願いして……」
新年の上生菓子である「花びら餅」は、紅色の薄い菱餅の上に甘く煮たゴボウとみそ餡を載せ、餅でぱたりと閉じた上品なものである。

花びら餅は葩餅はなついでちとも書き、菱葩ひしなづひという正月の行事食に由来しているという。

菱葩の歴史を辿ると「はがため齒固」に至り、それはその名の通り、猪、鹿、大根、瓜、おしあゆ押鮎などの固い食材を食べることで長寿を願ったもので、菱葩はその「はがため齒固」が、儀式化する過程で生まれたそうだ。

現在のようなかたちになったのは江戸時代とされ、中に入るゴボウは押鮎の見立てらしい。

また、ゴボウは深く地に根を張ることから、家の土台をしつかりし一家の繁栄を築くとされ、その長さは長寿にも繋がり、縁起のいい食材とされ使われたようだ。

「寿々喜」では、「花びら餅」は毎年予約制だそうで、慶子さんは張り切って注文していたものの、当日に咳の酷い風邪を引いてしまい（ちなみに父親も同じ風邪を引いていた）、急遽受け取りを母親に頼んだのだった。

そこで慶子さんは、はたと思った。

確かに慶子さんは風邪を引いていた。

けれど、それをどうやって和菓子さまは知ったのだろうか。

母親が、わざわざそのことを和菓子さまに伝えたとは、どうしても考えられない。

窺うような眼差しを、慶子さんは和菓子さまに向けた。

「お母さんがいらしたとき、俺が聞いちゃったから。『柏木さん、風邪でも引いたんですか』って。そしたら、お母さんが頷かれて」

ああ、そういうことか、と慶子さんは少し安堵した。

和菓子さまもそれ以上の話はしてこなかったので、この話はそこで終わった。

「ええと、柏木さんっている？」

慶子さんは、席から立ち上がり訪ねてきた人たちにぺこりと頭を下げると、折り紙の入った袋を持ち教室の入り口へと向かった。

休み時間になると、こうして同じ学年の生徒たちが慶子さんのところにやって来るようになった。

「とりあえず、五十枚欲しいな」

慶子さんが言われた枚数を手早く数え渡すと、「山田への折り鶴できたら、あそこに入れとけばいいんだよね」と教室の前に置かれた小さな段ボール箱をその子たちは指した。

幸いにも山田先生の怪我は命にかかわるものではなく、その知らせを福地君より聞いた剣道部一同は、ほおと安堵したものだ。

しかし、全身を強く打ったためにできたあちこちの打撲と足の骨折により、そのまま入院という運びになったらしい。

先生の骨折箇所は大腿部で、結果としては手術をしなくてはならなかったようなのだが、それも上手くいったようで術後の様子も良好だという話だった。

他の先生にも相談し、剣道部としてはもう少し先生が落ち着いてからお見舞いに行くことに決めた。千羽鶴を持って。

有志で折る千羽鶴の事は、まず慶子さんと和菓子さまが山田先生の隣の席でもある担任に相談をした。

その話は担任から校長に上がり許可が出たため、慶子さんたち剣道部が窓口となって山田先生への千羽鶴の呼びかけを行い、折られたそれは各学年の剣道部員のいるクラスに設置した段ボール箱に入れるというしくみを作った。

箱は、登校した担当者が毎朝職員室から自分のクラスに持ちこみ、下校の際は再び職員室に戻し、職員室には更に大きな箱があり、毎日集まった折り鶴はそこに溜められた。

山田先生とは接点のなかった慶子さんのクラスメイトも、慶子さんが休み時間に折り鶴を折る姿を見て「参加させて」と声をかけてきてくれた。

休み時間になると、慶子さんの周りには人が集まり、そしておしゃべりをしながら折り鶴を折る、そんな光景が日常になっていた。

更に、慶子さんは鶴を折る前に、折り紙の裏に言葉を書いていた。

それは、「早く治りますように」だったり、「痛みがなくなりますように」というものだった。

当然、折ってしまえばその言葉は見えない。

そんな慶子さんの折る鶴を、クラスメイトたちは「祈り鶴いのらづる」と名を付けた。

そして、それもまたたくまに学校中に広まり、山田先生への折り鶴には、生徒たちからの隠れたメッセージが込められるようになっていった。

「山路先輩、柏木先輩」

稽古が終わった後、一年生部員たちが二人の周りに集まってきた。

何かを察した山路さんはさっと表情を「部長」の顔に変えると、「はい」と返事をした。

慶子さんも、いよいよか、ときどきとした。

「女子部の部長、副部長を決めました」

緊張した顔でそう話すのは、安井さんだ。

山路さんと慶子さんは安井さんの顔を見ながら頷くと、話を先に進める様に促した。

「部長は、私、安井がします。そして副部長は」そう言うと安井さんは、隣にいた一年生の背中を押した。

「佐藤がやります」

佐藤さんとは、今年入部した剣道初心者の一年生だ。

正直、八坂さんがやるものだと思っていた山路さんと慶子さんだったが、安井さんはじめ一年生の顔を見ると、これはこれでいい選択だったのだろうと思えた。

「山路先輩と、柏木先輩を目標にがんばります」

「うん、頑張つて」

山路さんは、一言一言に力を込めたしつかりとした声で、一年生にエールを送った。

「はあ、いよいよ引退かあ」

さっきの凛々しさは何処へ、首に乱暴にマフラーを巻きつけた山路さんは、ふにやふにやな歩き方で駅へと向いながら慶子さんにそう言った。

今月一杯で、三年生は引退だ。

多くの部では、既に三年生は引退をしていたので、一月引退の剣道部は特別といえた。

「その頃には、山田先生が退院できているといいけれど」

慶子さんがそう言くと、「そうだよな。ほんと」と山路さんが相槌を打ってきた。

「私たち、山田先生の事を幽霊顧問なんて言っていたけど、まあ、確かに幽霊顧問なんだけど、感謝もしてるんだ」

山路さんは少し照れたようにそう言った。

「あの先生、全くの文系で運動なんて苦手も苦手で。私たちが入る前から顧問だけど、先輩に聞いたところによると、定年で辞めたその前の先生の後に誰も適任者がいなくて。体育の先生や運動の得意な先生は既に他の部の顧問だったらしくて。そんな中で先生が顧問になってさ。確かに稽古にはあまり顔を出さないけど、対外的なこととかそうついたことは丁寧にやってくれてさ」

慶子さんも、「幽霊顧問」と呼ばれながらも、和菓子さまの進学問題でも担任の先生が山田先生に相談していたことや、文化祭で行われた試合の時の先生の様子を思い浮かべていた。

「幽霊顧問」でも、山田先生は生徒からは信頼されている先生なのだ。

「それにしてもさ！ 柏木さんって凄いよね！」体をシャキンとさせ、手袋をした手ではふっと手を叩くと山路さんはそう言った。

「凄い？」

何か凄いことをしただろうか、と慶子さんは今日一日の自分の行動を振り返る。

「折り鶴よ、折り鶴。あ、違うか。祈り鶴、だっけ？ みんな折り紙にいそいそとメッセージを書いているよ」

ああ、そのことが、と慶子さんは顔が赤くなった。

「普通はさ、『元気になって下さい』とか書くじゃない？ なのに福地だったら、『あんまん奢って下さい』とか書いてて。私、びっくりして、あんた何書いてんのよ！ って怒鳴ったら、『だって、奢ってくれるってことは元気になったからこそできることだし』なんて言つて。そしたら、他の男子もそれを真似して、『焼き肉』だとか『ふかひれ』とか、折り紙がまるで食べ物屋さんのオーダーみたいになっちゃったのよ」

全くねえ、と山路さんは大きくため息をつく。でも、その顔はちよつと変だ。

「山路さんは、なんて書いたの？」

慶子さんがそう訊くと、「……ショートケーキ、です」と山路さんが観念したように答えたので、慶子さんは笑ってしまった。

「あ、ああ！ 柏木さん、今、私の事を食いしん坊だとか思ったでしょ？」

くすくすと笑う慶子さんのわき腹を、山路さんはつんつんとつつく。

「ま、いいんだけど。だからさ、つまり、そういった発想っていうの？ 折り紙にメッセージって。それ、いいなあと思って」

慶子さんは、少し黙ったあと、大きく一度深呼吸をした。

「私、折ったから」慶子さんはそう言った。

山路さんが慶子さんの顔を見る。

慶子さんはその山路さんの顔を見て、口だけでほほ笑んだ。

「あのね、うちの母、長いこと病気でよく入院したから。だから、母の為に折ったの、その『祈り鶴』を」

慶子さんを見る山路さんの目がまんまるになった。でも、その目

の中には、憐れみも好奇心も、そういった慶子さんが恐れていたものはなかった。

慶子さんは、山路さんの姿に、初めて会った時の和菓子さまを思い出した。

あの時は、まさか同級生だとは思わずに、母親の話をしてしまった。

山路さんと和菓子さまは同じだった。

「中学一年の時なんだけど、母が倒れたの。母の体調がすぐれないっていうのは、前々から分かってはいたんだけど、私、あまりそのことをシリアスに考えてなくて。たまたまそうなのかな、すぐに元気になるのかなあ、位にしか考えてなくて。ある日、学校の帰りに、本屋さんやら図書館やら散々寄って家に帰った時があつて。そうしたら、玄関を開けたら」

慶子さんは、ふうと息を吐いた。

「玄関に、母が倒れていて。母は、病院に行こうとしていたみたいで、保険証とか診察券とか側に落ちていたカバンにあつて。遅くなつたとはいえ、父もまだ帰ってくる時間じゃなくて。でも、母の様子は、明らかにおかしくて。父を待っている場合じゃないって、救急車に電話して」

山路さんが慶子さん左手をそつと握った、手袋越しに。

「それから、検査とかいろいろあつて。そうしたら一つじゃなくて、なんかいろいろ病気が見つかつて」

山路さんの手を慶子さんがぎゅつと握り返す。

「入院とか手術とか、ドラマでしか見たことがない生活が始まってそれが落ち着いたのが、高校二年の終わりかな」

えへへ、と慶子さんが山路さんに笑いかける。

「それで、お母様。今は、どんな状態なの？」

静かな声で山路さんはそう訊いて来た。

「うん。落ち着いている。勿論、病院には定期的に通って、検査はしているんだけど」病気によっては、手術して数カ月でもう診察も

終了っていうのもあるし、逆に何年か続けて通わないといけないのもあるんだよね、と慶子さんは説明した。

そう山路さんに母親の様子を話しながら、慶子さんはいつになく心が穏やかで軽くなるのを感じていた。

—— もうすっかりよくなったの？

母親の友人や、親戚からさえよく掛けられるこの言葉を、慶子さんは苦手に感じていた。

その言葉は慶子さんに、「YES」しか求めていないように思えてしまったし、また「すっかりよくなる」という言葉の意味が慶子さんにはよくわからなかったからだ。

何をもって、すっかりよくなる、という状態なのか。

そして、すっかりよくならないと、いけないのか。

母親が自分たちのところに帰ってきてくれただけでも、本当に嬉しい慶子さんにとって、その質問には何の意味も見い出せなかったのだ。

「……山路さん、あのね」

そう言つと慶子さんは、母親が今も抱えているある状況について、初めて自らの意思で人に話しだした。

「いらつしやいませ」

慶子さんが暖簾をくぐると、女将さんがお店にいた。

「こんばんは」

店内の暖かさに顔をふうと緩めると、慶子さんは上生菓子の前へと歩き出した。

「あ、綺麗」

流線形の白い練り切りに、緑と黄色のぼかしの入った蕾のような

菓子。

しかも、名前はカタカナで「スノードロップ」とある。
このモダンさは。

「先代が作った『スノードロップ』です。この時期に咲く、可愛らしいお花なんですよ。厳密に言うと違うらしいのですが、日本名では『待雪草』や『雪の雫』と呼ばれることも多いそうで」

「スノードロップ」はその名の通り、今にもしたたり落ちそうな雪の雫のように菓子さんには思えた。

その落ちる少し前の姿が花となり、菓子となり、永遠となり……。

もう、これは絶対に買わねば、と菓子さんは鼻息を荒くした。

「母さん、電話」

その声とともに、和菓子さまが子機を持ち女将さんの後ろからひよいと顔を出した。

そして、菓子さんを見るとぺこりと頭を下げてきた。

「学、お店をお願い」

女将さんは菓子さんに頭を下げると和菓子さまの背を押し、菓子さんの前に立たせた。

「いらつしゃいませ」

「こ、こんばんは」

和菓子さまも帰ったばかりのようで、制服の上着を脱いだだけの姿だった。

しーんと静まり返った店内。

柱時計だけが、元気に時を刻んでいた。

菓子さんは黙ったまま、「スノードロップ」の隣にある「丹頂」と名のある、白くてまん丸な菓子を見た。

その視線に気がついた和菓子さまが、「雪平せっぺいで中は白餡です」と説明をしてくれた。

雪平、雪平、と菓子さんは頭の中で繰り返す。

先日買った本の中に、雪平の説明があったはずだと思い出す。

雪平とは、白玉粉と砂糖で作った求肥きゅうひに、卵白で泡だてたメレンゲを入れ、更に白餡を入れて作ると書いてあった気がする。

洋菓子でも使うメレンゲを和菓子でも使うんだなあと思った記憶が、蘇った。

「丹頂」は、鶴をかたどった菓子だった。

赤いくちばしと小さな黒い目が可愛らしい。

ふふふ、と思いながらその横に視線を移すと、きんとんでできたはるとなり

「春隣」という菓子があった。

黒いきんとんの上には、緑色と黄色のきんとんがちょこんとのり、そしてその上には金粉がちらちらとかけられていた。

「春、ですか？」慶子さんが訊くと、「春の隣にある季節。すなわち、冬つていう意味です」と和菓子さまが答えた。

そして、土の中から福寿草が顔をのぞかせる様子なんですよ、とも。

春隣。

ああ、なんて希望のあるいい名前なのだろう、と慶子さんは思った。

寒く辛い季節を乗り切りたいと願う人々の思いが詰まっているなあ、と。

思えば、病気や怪我也そうだ。

「痛みがなくなりますように」と願うのは、今その人が痛みを感じていると思うから。

「元気になって下さい」と願うのは、今その人に元気がないからだ。

「柏木さん」

和菓子さまが、同級生の声でそう話しかけてきた。

珍しいなと思い、慶子さんは「はい」と返事をした。

「俺、柏木さんのお母さんじゃべったことがあるんだ。もう、随分前。中学の入学式で」

思いがけない話の展開に、慶子さんはびっくりした。

「柏木さんが同じ中学だつていうのは、入学式に向う途中に俺たちが使う駅で見かけて知って。やけに仲のいい親子三人だなんて思ってたから。うちは、店があるから、来たのは母親だけだったけど」

入学式？

慶子さんの記憶の中に、和菓子さまはいない。

「その駅で、母親同士は子どもが同じ学校だつて気づいたみたいで、お互い頭を下げていたよ」

全然知らない、と慶子さんは青くなる。

そして、和菓子さまの話はまだ続く。

「入学式が終わって、母親と正門で待ち合わせしているとき、柏木さんたちも通って。そこで、柏木さんのお母さんがわざわざ戻ってきて俺に言っただ。『同じ駅だったよね。うちの娘はカシワギケイコっていうの。よろしくね』って」

お母さん……。慶子さんは今度は赤くなった。

「でもさ、同じ学校っていても同じクラスでもないし、よろしくと言われてても、一体どうすればいいのかわからなかったし」

和菓子さまの言葉に、慶子さんはそれはそうだろうと共感した。

もし、逆の立場でも、慶子さんが和菓子さまに「よろしく」するなんてことは考えられないだろうし、と。

「しばらくして、柏木さんの表情が、入学式の頃とは変わってきたことに気づいて」もしかしてクラスで何かあったのかなって、柏木さんには悪いと思ったけど、同じクラスだった奴に訊いたこともあるんだ、と。

「そんな事實はなかったみたいで、少し安心したんだけど。でも、俺がそんなことで安心したからって、だからって柏木さん表情が良くなるってことでもなくて」

自分が全く知らないところでそんな風に気にしてくれた人がいたんだと、慶子さんはなんともいえない気持ちになった。

「でも、何もできなくて。そうこうしているうちに俺の両親から産みの母親の事を聞いて。……今更なこと、それを受け入れるしか

ないことなただけ。でもどこかに、誰かに、このどうしようもない思いをぶつきたいって気持ちもあって。そんな時、自分の顔を鏡で見て驚いたんだ。この表情は、同じだって。柏木さんと同じだって。悲しいとも、苦しいとも、悔しいとも、でもそれを受け入れるしかないって顔だって」

慶子さんは、ただただ和菓子さまの声に耳を傾け、そしてその時の自分の心情を思い出していた。

「そしたらいろんなことが繋がって。そういえば、うちの店の前を買い物袋やクリーニングの袋を重そうに持って歩く柏木さんがいたなあ、とか、保護者会には、柏木さんのお父さんが来ているって話を聞いたなあとか。そんな漠然と見知っていたことがようやく繋がって。もしかして、柏木さんのお母さんに、何かあったんじゃないかって」

まさにその通りの状況だった慶子さんは、またまた驚いた。

そして、そのこととは別にショックでもあった。

見られていたとは。……買い物姿を。

仕方がないことだけれど、和菓子さまにいつては道行く人の一人かもしれないけれど、恐らく髪を振り乱して荷物を運んでいただろう姿を見られていたというのは、乙女の気持ちとしては、好ましくはないことだった。

「そうになると、また柏木さんのお母さんの言葉を思い出したりして俺は、その俺の産みの母の話を聞いたあと、気持ちが悪くさくさとして荒れて。でも、そんな時でも部活に行くと、変な奴らばっかだけれど、一緒にいると気分が紛れて、気持ちが悪われたから。だから、柏木さんにもこんな場所があれば少しはいいのかなあと思っただけで……って思うだけだったんだけど。でも、あの日、高三になるって春休み。柏木さんがうちの店の前をうろろしててさ」

俺、心臓が止まりそうなくらい驚いた、でもって、童話の「三匹のくま」を思い出しちゃったよ、と和菓子さまが言った。

つまり、慶子さんは森に迷い込んだ女の子で、和菓子さまたちが

熊ということだろうか。

「見たら、柏木さんの表情も穏やかになっていて、部活にも興味が
ありそうだったから、だったら剣道部に誘って思ってたさ」

剣道部に誘った理由、曖昧なままにしていたけど、これがそう
なんだ、と和菓子さまは言った。

「俺が部活を休む理由にも使ってしまったて……。それは本当に反省
している」とも。

「いえいえ」と慶子さんは手を振る。そして、まじまじと和菓子さ
まのを見た。

不思議だな、と思った。

自分が知らないところで、自分のことを心配してくれた人がいる
ということ。

そして、自分は一体目の前の人に何を返すことができるだろうか、
と。

「これ、お正月に柏木さんのお母さんからいただいたんだ」

和菓子さまはそう言つと、ポケットの財布から一枚のメモを取り
出した。

それは、慶子さんがこの間文具店で買ったものと同じ柄。

知っているのだ、和菓子さまは。

—— ありがとう

それは母親の筆跡だった。

慶子さんの母親は、声帯の機能に問題が生じ、結果声を出すのが
困難であった。

山路さんにも伝えた、慶子さんの母親が今現在抱える状況とはそ
ういうことだ。

一時期は聞く側としては声とは言えない、聞きとりも困難な空気

を含んだ擦れた「音」のような声しか出なかった母親だが、その後のリハビリでなんとか聞く側にとっても言葉として聞きとれる「声」が出る状況にまでなっていた。

とはいえ、その声の大きさは、限りなく微かだ。

基本、電話での会話は無理だし、静かな場所でその声に聞きなれた家族ならば会話はできるものの、雑音の多い外に出て人と話すのは、母親の声がそれらによってかき消されてしまったため困難であった。

そのためのメモ帳だった。

とはいえ、外でそのメモが使われるときは、買いたいものや要望を示すためであり、こうして自分の気持ちを家族以外に向けて書くということは、非常に珍しいことだと思えた。

……でも、と慶子さんは思う。

書きたかったのだろう。

慶子の母親として、「ありがとう」と。

「ありがとうございます」

メモを見せてくれて、そして母親からのメモを受け取ってくれて。

そんな気持ちを込めてお礼を言うと、和菓子さまは、少し困ったような顔をした。

その和菓子さまの顔を見て、この話を慶子さんにするには相当に勇気がいったことだったのだろうと察した。

母親が和菓子さまにメモを渡さなければ、和菓子さまは、慶子さんを剣道部に誘った理由や、そこまでに至る説明をせずに済んだのだろうか。

いや、違う、と慶子さんは思った。

和菓子さまには、言わない選択だってあったはずだ。

……でも、話してくれた。

そしてそれはおそらく、慶子さんのためなのだろうと。

慶子さんと母親の間に、このことでわだかまりができないように、と。

慶子さんは、和菓子さまのことを深く信頼している自分に気がついていた。

そして、自分の気持ちに、信頼だけじゃなくそれ以上の想いもあるということにも、ようやくたどり着いた。

私は、和菓子さまがとても好きなんだと。

冬の隣に、春があるように。

慶子さんの恋も、それはいつのまにか隣にあった。

そう、まるで二つ並んだ教室の机の様に。

睦月、一月、はじまりの月。

春隣、恋隣。

・あらすじ「春隣、恋隣」（前書き）

一月の物語「春隣、恋隣」のあらすじ。

物語中に、事故・怪我・病気の記述が多かったため、読むことを躊躇された方のためのフォーローのページです。

本編「春隣、恋隣」を既に読まれた方は、スルーしてください。

・あらずじ「春隣、恋隣」

一月に入り、今月で剣道部も引退の慶子さんたちのところに、顧問の山田先生の交通事故のニュースが入る。

山田先生の為に、折り鶴を折る慶子さんたち。

鶴を折りながら、慶子さんは母の病気の為にもそうしたことを思い出し、初めて自分の口から山路さんに母の事、そして今も母が抱える問題について語った。

鈴木君は、正月の菓子「花びら餅」を風邪を引いた慶子さんの代わり取りに来た、彼女の母と接することとなった。

彼が慶子さんの母とこうして接するのは実は二度目で、一度目は中学の入学式だった。

その時慶子さんの母は、同じ駅を利用する同級生として鈴木君に慶子さんのことを「よろしくね」と言ったのだ。

つまり鈴木君は、慶子さんのことを中学入学の時から知っていたのだった。

そして、理由は分からないながらも、彼女の表情が段々と暗くなる様子も見えていたのだった。

彼自身、実母のことで気持ちが荒れた時、剣道部の友人たちといること修正することができたので、慶子さんにもそんな場があればいいと思っていたところ、高校三年になる前の春休みに、思いがけず明るい表情の慶子さんが「寿々喜」の前にいたことで彼女に声をかけ、そして何かクラブ活動をしたいようなことを言っていた慶子さんを剣道部に誘ったのだ。

鈴木君が慶子さんを剣道部に誘った本当の理由は、そこにあった。その話を鈴木君から聞いた慶子さんは、彼に対して自分がとても信頼を寄せていたことに気がついた。

そして、信頼だけでなく、恋する気持ちも。

「冬の隣に、春があるように。

慶子さんの恋も、それはいつのまにか隣にあった。

そう、まるで二つ並んだ教室の机の様に。」（「春隣、恋隣」より）

一月は、慶子さんの母の病氣、鈴木君の今まで黙っていた事情、そして慶子さんの恋心が明らかになった月でした。

一月の菓子

「花びら餅」・「スノードロップ」・「丹頂」・「春隣」はるとなり ↓ 春の

隣にある季節。すなわち、冬っていう意味。土の中から福寿草が顔をのぞかせる様子を描いた菓子。

17・それは、メジロか鶯か / (二月) (前書き)

先月の物語を、注意書きによりお読みになれなかった方のために、
あらすじ「春隣、恋隣」をアップしてあります。
該当される方、どうぞご利用ください。

17・それは、メジロか鷺か／（二月）

窓の外は雪景色。

二月、如月、冬の月。

そして、勝負の月。

「ああ、悔しい！」

悔しい、悔しいと言いながらゴリゴリと勢いよくチョコレートをテンパリングするのは、山路さん。

そんな山路さんを、心配顔で見ているのは慶子さん

「まったく！」

「あつ、山路さん、危な……」

その慶子さんの言葉と同時に、山路さんが持っていたボウルはぐるとバランスを崩してひっくりかえり、液体となってぶちまけられたチョコレートは、机の上へとゆっくりと広がっていった。

しばし二人の間に訪れる静寂。

「……か、かーっ！！ほんと、あつたまくる！」

そう言うとう山路さんは流れ出したチョコレートを、更に手でうつと広げた。

「大丈夫？　山路さん」

「ごめん、柏木さん。つい、興奮してしまっ」

混乱のあとの休憩タイム。

チョコレートまみれになった台布巾を何枚かゴミ箱に捨てた後、二人は一旦休憩の為に、隣の和室で炬燵にあたることにしたのだ。

山路さんがさつと*雪見障子を開けると、昨晚から今朝にかけて

積もっていた雪も、日中の日差しにより融け始めているのが見えた。

休みの土曜、慶子さんは山路さんに誘われ、彼女の家でバレンタインデー用のチョコ作りをしていた。

対象人物は、それぞれの家族や友人、そして既に「元^{もと}」という呼び名を前につけることになった、剣道部三年男子だ。

先月末で、三年生は長かったクラブ活動にピリオドを打った。

稽古の最終日には、なんと松葉杖をつきながらの山田先生も道場に顔を出し、みなで泣いたり笑ったりしたものだ。

さて、バレンタイン。

慶子さんにとってのバレンタインは、母親と一緒にデパートに行き（母親の具合が悪い間は、駅前の洋菓子店に慶子さんが行き）、父親が好きそうなチョコを買い渡すというものだったので、手作りするの初めてだった。

友チョコも、勿論もらったこともあげたこともあったが、それもいつも買ったものだった。

普段、何気なく食べていたチョコレートも、いざ作るとなると大変なんだなあと思いつながら、慶子さんは山路さんがいれてくれたお茶を飲んだ。

「しかし、我が国の職人さんの技とは、素晴らしいものだね」

山路さんの前には、慶子さんが持参した「寿々喜」の上生菓子があつた。

山路さんの家族は、両親に四人の兄（！）の七人家族だ。

慶子さんはそれを知った時、それだけの数の和菓子を買うことができるのだと大いに喜んだ。

いつもは最高でも三個しか買えない核家族代表の柏木家で暮らす慶子さんにとって、七個というのは端午の節句以来の大量購入の機会だったからだ。

慶子さんは上生菓子三つに加え、餅や饅頭にどらやきなど、どつさりと購入した。

そしてそれは当然のように、山路家の家族数を越えたものになった。

「このお菓子の名前は、ええと……」

さつき訊いたのに忘れちゃったよ、と山路さんが言う。

「『未開紅』よ」
みかいこう

慶子さんはそう言うって山路さんの前に置かれた、四角い菓子を見た。

未開紅は、名前の通り開きかけの紅梅を表したものだ。

以前食べた、「藪柑子」（やぶこうじ）と少し似た、折り紙のようなデザインをした菓子だった。

正方形に広げられた練り切りの四隅を中心に向い折ったその菓子の中央には、黄色の＊しべがちょこんと載っていた。
（＊

しべ↓雄しべと雌しべ）

ただ「藪柑子」と違い、包まれた餡は外からはほとんど見えず、練り切りの色も緑でなく淡い紅と白の二層になっていたため、「藪柑子」のようなシャープさはなく、寧ろ可愛らしいものになっていた。

そして、慶子さんの前には、今にも囀りだしそうな鶯の菓子、「よろこび」が置かれていた。

——「菓銘かめいがついて、はじめて菓子になるんだ」

それは今朝、和菓子さまから聞いた言葉だった。

鶯の姿をした菓子を注文するときに、慶子さんが自信のないような声で「よろこび」と言ったのを和菓子さまが訊いたのが始まりだ。

最近、デパートに行くと必ず地下の食料品売り場で、和菓子の

チェックもするようになった慶子さん。

西の市に行った時に和菓子さまに言われた、「うちだけが、和菓子を売っているわけじゃないから」が影響しているのは確実。

デパートに行くことで、多くの有名和菓子店の本店が京都にあることに、慶子さんは気が付いた。

商品に詳しい店員さんからは、「こなし」と京都の気候についての興味深い話を聞くこともできた。

デパートにある和菓子屋のショーケースには、二月になると梅や鶯の菓子が多く出てきた。

鶯は、青えんどうのきな粉がたっぷりとまぶされた「うぐいす餅」や、上用饅頭に鶯の焼き印が押されたもの、そして勿論、鶯の姿をした上生菓子もあり、それらの多くは「春告げ鳥」や「うぐいす」の名前で出ていた。

つまり、慶子さんは今のところ、「寿々喜」がつけたようなネーミングの鶯の菓子は、見たことがなかったのだ。

鶯に見えるけれど、鶯が歌っているように見えるけれど、これは違うものなのだろうか。

慶子さんは、そう考えてしまったのだ。

すると、和菓子さまが言ったのだ。

「菓銘は、多くの人が考えるよりもとても自由なんだ」と。

「よろこび」は、やはり鶯の菓子だった。

「よろこび」には、鶯の歌う喜びと、人がその歌を聞くことで春の訪れを知る喜びの二つの意味が込められているのだと、和菓子さまは話してくれた。

そして、そうした菓子の名——菓銘がつくことで、菓子は菓子としての命が与えられ完成するのだと教えてくれたのだ。

逆に言えば、銘の無い菓子はなく、銘のつけかた一つとっても、十人十色だと。

そういえば、御隠居さんが作られた菓子、「スノードロップ」はカタカナだった。

和菓子には、伝統と自由がある。

その時慶子さんは、悟ったのだ。

「寿々喜」の菓子だけしか知らなければ、気がつかなかったことかもしれないと。

——「うちだけが、和菓子売っているわけじゃないから」

あの言葉を聞いた時は、冷たく突き放されたように感じてしまったが、和菓子さまの思いはそこじゃなかったのかもしれないと。

他の店の菓子を知ることが、巡り巡って「寿々喜」の菓子を知ることになるのではないかと。

つまり、「寿々喜」の菓子しか知らないで、それで満足していた慶子さんは、和菓子さまから見たら井の中の蛙だったのだらうと……。

そう思った時、初めて気持ちの全てで、和菓子さまが誰から何を言われても修行に行くのだという決意を、理解できたような気がしたのだった。

仕切り直し、ということ、残りの材料と作る個数の確認を山路さんと慶子さんは始めた。

すると、どうしてもチョコレートが足りないということが判明し、急遽山路さんはクッキーやケーキを焼こう、と言いだした。

慌てる慶子さんに、山路さんはいいいものがあるんだと言って台所に走ると、クッキーミックスとパウンドケーキミックスを持ってきた。

その「ミックス」の文字に、慶子さんは夏合宿で知ったホットケーキミックスを思い出した。

—— さぞかし、おかしかったんだろうな。

あの時の和菓子さまとの会話を思い出すと、つい汗が出てしまう慶子さんだった。

山路さんの「箱の裏に書いてある通りに作れば大丈夫」とのアドバイスを信じ、慶子さんは任されたパウンドケーキの種を作ることにした。

量りを慎重に使い、グラムをきっちりと合わせ、山路さんが出した卵やバターも、箱の裏に書いてある説明書き通りに用意をした。知らない分、丁寧に慎重な働きをする慶子さん。

山路さんは隣でその様子を見ながら、パウンドケーキの型を慶子さんに渡した。

二人で職人さんのように、黙々と作業をこなした。

まずは、慶子さんが担当したパウンドケーキを焼き始めると、その間にチョコレートをアルミの小さなカップに流し込んだ。

焼きあげたパウンドケーキの荒熱を取る間には、クッキーを焼いた。

チョコレートの固まり具合の確認をしながら、ラッピングの用意を始めた。

山路さんは、がさがさと買い物袋からラッピング用の小さなビニール袋を人数分出すと、そのビニールの口を結ぶ巻きで買ったりボンを、同じ長さへと切りだした。

慶子さんは山路さんが出したビニール袋の中に、中敷きとして白いレースのついた紙を入れた。

「おっと、常盤の分を忘れるところだった」

山路さんはそう言うと、袋を一枚取り出し「常盤の分」と言った。

常盤さんは、慶子さんたちのようにそのまま付属の大学には進学をせずに、他大学受験組だった。

大学受験。

二月はまさにその本番であり、勝負の季節だった。

なんでも常盤さんの家は、山路さんが通う塾の側らしく、山路さんがチョコレートを作ったことを知った常盤さんは、わざわざ催促のメールを送ってきたそう。

「いかなかったらポストに入れといて、だつて」どんだけ女王様なんだか、と言いながら山路さんの表情には労わりの色が見えた。

そのチョコレートを、常盤さんが楽しみにしていることを知っているからだ。

——自分たちの仲間が、人生の岐路に立っている。

その事実、慶子さんと山路さんをどこか落ち着かない気分にした。

とはいえ、何が出来るというものでもないことは、十分にわかっていた。

自分たちに出来るのは、応援しかないのだ。

そして、もしこのチョコレートがそれになるのなら、とても嬉しいことだと二人は思っていた。

「そうそう、聞いてよ柏木さん！」

常盤さんの時とは違い荒々しい口調で、山路さんはチョコレートをぶちまける原因となった、塾の話を始めた。

付属の大学へと進学予定の山路さんだが、英文科志望のため、苦手な英語の強化の為に塾に通っているのだ。

英語が苦手な山路さんなのに、塾にまで通って英語力をつけようとしているのには理由がある。

彼女は将来、旅行会社の添乗員として、世界中を回りたいという夢があるのだそう。

「塾の小テストで、一番出来が悪かった人が一番良い人にチョコをあげるなんて賭けが、私の知らない間に決まっています」

あれは、わざとだ。直前に言うなんて酷い。せめて知らなければ、しらばつくれることもできたのに、と山路さん。

「私、一番ビリでさ。負けちゃって。そうなるって仕方がないんだけどさ、なんか腹が立つでしょ」

そんなことを考えていたら、つい興奮しちゃって。

「その一番の子って、女の子だったの？」

バレンタインということもあり、クラスの女の子への友チョコ用はあるものの、ほとんどが男子用にとシンプルな包装なので、その子が女の子なら友チョコ同様に可愛いラッピングにしようと、慶子さんは思ったのだ。

すると山路さんは一言、「男」と言った。

「男」の言葉に、慶子さんは詰まった。

二人の間に再び訪れる静寂。

「……か、かーっ！！　ほんとっ！　あつたまくる！」

そう言つと山路さんは、今度は巻かれたままのリボンを、宙に放り投げた。

全てが無事に済んだ頃には、日はすっかり暮れていた。

和室には、小さなラッピングの袋がいくつもでき、まるでお店屋さんのようだと思つた。

出来あがつたもの全ては、山路さんが学校へと持ってきてくれることになった。

慶子さんのカバンにあるのは、慶子さんの父とクラスメイトへの友チョコ数個のみだ。

駅まで送るとの山路さんの申し出を断ると、慶子さんは玄関でブーツを履いた。

「柏木さん、足元に気をつけてよ」

雪はほとんど融けたとはいえ、あちこち滑りやすい状況には変わらないから、と山路さんは言った。

「うん、大丈夫」

そう返事をする慶子さんは、このブーツは滑り止め機能もついたなかなかの優れ物で、来る時とても快適だったのだと、山路さんに説明をした。

山路さんは慶子さんの説明を訊くとほっとした顔をし、そして「あ、そうだ」と言うと、ぱたぱたと和室に戻りラッピングされたチヨコレートの袋を一つ取ってきた。

「確か、帰り道なんだよね、鈴木の家って」

そう言うと山路さんは、慶子さんにその袋を渡した。
「持つて行く荷物を減らしたいから、ご協力よろしく」

山路さんの家から駅は近く、しかも一本道だったので慶子さんはなんとなく駅に着くことができた。

雪は、日中の暖かさのお陰でほとんど残ってなく、水気も思ったよりも少なく、山路さんが心配するような（ブーツの機能を発揮するような）ことはなさそうだった。

電車に乗り込み、慣れない街の暗い景色が目の前を通り過ぎていくのを見ながら、慶子さんは山路さんとのチヨコ作りを思い出している、楽しい気持ちになった。

そして少しだけ、山路さんが勝負に負けたという人にも興味があった。

「寿々喜」の菓子を、山路さんと食べたのも楽しかった。

慶子さんは、持参した菓子を自分は食べるつもりはなかったのだが、山路さんのお母さんが「お兄ちゃんたちに見せても菓子の良さはわからないだろうから」と言い、遠慮する慶子さんに「せっかくだから」と勧めてくれたのだった。

山路さんの両親が「珍しい」と言って、道明寺でできた生地の上を椿の葉で挟んだ「椿餅」と、そして「可愛い」と言っては上生

菓子「水仙」を取ったあと、山路さんと慶子さんはそれぞれ自分が好きな菓子を選んだのだった。

「よろこび」には、二つの喜びがあると和菓子さまは言った。

けれど実際「よろこび」を口にしたことで、慶子さんは三つ目の「食べて楽しい」喜びを知った。

菓자에銘がつくことについても、慶子さんは考えていた。

銘——つまり名が付くことで、そのものの存在が明らかになるのは、菓子だけの話じゃないと思ったからだ。

先日、慶子さんは、自分の和菓子さまへの思いが恋であることを自覚した。

自分の気持ちに、名前をつけたのである。

そうしたこと、その思いから慶子さんは逃げられなくなった。誤魔化せなくなった。

自分の中にある思いと、その思いを抱く相手との関係に、折り合いをつけなくてはならなくなった。

——悟られてはいけない。

それが慶子さんがつけた、折り合いだ。

この思いが、和菓子さまを好きだと思ふ気持ちは、悟られてはいけないのだと。

和菓子さまは、慶子さんがとてもお世話になった人だ。

慶子さんの事情を薄々と感じ、氣遣つてくれていた優しい人だ。

もし、慶子さんの気持ちがばれてしまったら、さらに気を遣わせしてしまうことになるだろう。

それは、恩を仇で返すようなものだ。^{あだ}

——和菓子さまには、何も知られてはいけないし、知らせる必

要もない。

慶子さんにとって自分の恋とは、そういうものだったのだ。

改札を出ると慶子さんは端により、家にメールを入れた。

今日は父が仕事の為、家には母親一人だったのだ。

母親からはすぐに、今日の夕飯はおでんだと返事が来た。

そのメールを見て、楽しみだなとにこりとしながら携帯を閉じた時、下げていた視界に、誰かが入ってきた。

予感とともに顔を上げると、そこには果たして和菓子さまがいた。

「……こんばんは」

おそらく表情のないであろう顔で慶子さんがそう言つと、「山路から電話があつて」と和菓子さまは言った。

「あ、これから山路さんのお宅に？」行く途中なのだろうか、と慶子さんは訊く。

暗いけれど、山路さんの家は駅からすぐだし、と思った時和菓子さまが手を出してきた。

「荷物、持つから」

慶子さんの荷物といえば、チョコレートが入った紙袋でたいして重いものではないのだけれど（たいしてどころか、全く！）、つい慶子さんは和菓子さまの手にそれを渡してしまった。

「どっか、寄るところはあるの？」

その和菓子さまの問いかけに「いえ、ないです」と答えながら、

「あの、山路さんの家には」行かなくていいんですかと慶子さんは再び訊いた。

すると和菓子さまは慶子さんの顔をじっと見た後視線を逸らし、「……どうしてそう思うのかなあ」とつぶやくと、行かないよ、と付け加え、更には「柏木さんを迎えに来たんだよ」と言つたのだ。

「……迎えに。私を」

誰かに迎えに来てもらったことなんて、慶子さんはここ数年なかった。

—— なかったのだ。

慶子さんの心に、あたたかくけれど少し切ない小さなものが宿った。

胸がギュツと苦しくなった。

和菓子さまが振り向いた。

慶子さんは、小さな笑顔を見せると、和菓子さまの後について歩きたした。

「ああ！ 学校に来てよかったあ」

山路さんが福地君にチョコを渡すと、そんな大袈裟なお礼の言葉が返ってきた。

慶子さんが北村君に渡すと、北村君はすぐにリボンをほどこし「開けていい？」と訊いてきた。

バレンタイン当日、山路さんから「チョコが欲しい人は来るように」と招集をかけられた元剣道部員は食堂に集まり、みなでお昼ご飯を食べていたのだ。

「開けていいって、もう食っているし」

和歌山君は北村君の様子を見ると、そう言って笑った。

「あ、うまい」北村君の言葉に、貰ったままで開けていなかった面々が一斉にリボンをほどこき始めた。

「すげつ、いろんな種類がある」

「ふふ。チョコだけじゃつまらないって、私たち、いろいろ考えたのよ」ねえ、柏木さんと山路さんが言う。

ふふふ、と慶子さんも笑いながら、本当はチョコの材料が、とあるアクシデントによって足りなくなっただけだとは言わなかった。

「あ、そういえば鈴木は？」

福地君に訊かれた慶子さんは、「今日はお休みですよ」と答えた。

そうなのだ。和菓子さまは、今日は学校を休んでいた。

「福地さあ、鈴木、鈴木って、あんたは鈴木の女房か」と山路さんが冷やかすと、「……まったく山路は意地の悪いことを」どう思う柏木さん、と福地君は慶子さんに泣きついた。

「まあ、でもさ。受験関係なしに、来ない三年も多いじゃん。もう卒業にはいろいろ足りているしね」と和歌山君が言う、と、「それに今日は高校入試の準備とかで、半ドンだし。一、二年はともかく来る三年は少ないって」と岡山君が言った。

「明るいうちに帰るのは、妙な感じだなあ」と北村君が言、と、「そうだよ。あいつ、大学にもこないしさあ」と福地君が、また和菓子さまが大学に進まないことを、愚痴りだした。

慶子さん以外のみなは、呆れたような顔で福地君を見た。

「あ、そういえば鈴木。京都に行ってたんだ」

北村君の言葉に、福地君がわざとらしくため息をついた。

「はあ。もう、そっちの人、気取りですか」

そう言う、とチョコを乱暴に口に入れた。

「え、そっちの人って」と山路さんは言うと、慶子さんの顔を見た。

しかし、慶子さんがわけのわからぬ顔をしていると判断した山路さんは、「鈴木の修業先って、もしかして京都なわけ？」と北村君に訊いた。

すると今度は男子全員が呆れたような顔をして、「そうだよ。な

んで知らないわけ？」と山路さんに訊いてきた。

山路さんは心配そうな顔で慶子さんを見た。

けれど慶子さんには、そんな山路さんの姿は映らなかった。

京都。

ああ、そうか。京都か。

京都。

慶子さんの頭の中は、たった今知った事実で一杯一杯だったからだ。

カサカサと冬の風に揺れるスーパーのビニール袋をさげながら、慶子さんは家路についていた。

このところ、学校の帰りは日が暮れていることが多かったので、晴天の中をこうして歩くのは北村君の言う通り妙な感じだった。

寒さと考え事のため、俯きがちだった慶子さんの鼻に、ふいに爽やかな花の香りが舞い込んだ。

ぱっと顔を上げると、なんとといったばいの白い花をつけた「しだれ梅」が満開だった。

見上げるようにその花を見た慶子さんは、寒い風に枝を揺らしながらも咲く梅の姿に心を打たれた。

梅はまるで自分のその生命力を誇るかのように、冬の青い空の下でしっかりと白き花を開いていたのだ。

更に驚くことに、その枝には二羽の緑色した鳥が止まり、しかも嘴くちばしを梅の花の中に入れていた。

—— 鳥が、花の蜜を？

びっくりして立ち止った慶子さん耳に、「メジロは梅の蜜が好きだからねえ」との声が聞こえた。

「——こんにちは」

慶子さんの側にいたのは、洒落た着物姿の御隠居さんだった。

「こんにちは、柏木さん。ばくね、ここの梅ね、毎年楽しみなんだよね」

「こね、うちのお得意さんだし、とにこにこしながら御隠居さんは言った。」

「鳥が蜜を吸うなんて知りませんでした」

そう言いながら慶子さんは、飽きもせず花から花へと蜜を吸うメジロを眺めた。

「うん、そう。でもね、何十年生きてても、世の中には知らないことや、わからないことって多いもんだよねえ」

御隠居さんはそう言つと、しかしまるで絵のように綺麗だねえ、と独り言のように呟いた。

「メジロなんですネ、この鳥は。私、もしかしたら驚なのかなあつて」

「ふふ。そうね。でも驚はね、歌は聞かせてくれても、姿はなかなか見せてくれない恥ずかしがり屋さんだからね」

その点メジロは、人から見ると自由で大らかだね、と御隠居さんは言った。

そして、「柏木さんは、どっちなのかなあ」と言つと、慶子さんの顔を見下ろしてきた。

慶子さんが返事に困りながらも、視線をメジロから移すと、「学くんね、京都に行くつて」とご隠居さんは言った。

御隠居さんの、自分とは違う色の瞳を慶子さんは見つめた。

慶子さんは、その深い深い瞳の中に、落ちてしまいそうになった。

何もかも話してしまいたいような、そんな気持ちになった。

——何も知られてはいけないし、知らせる必要もない。

慶子さんは、ごくんと唾を飲み込むと、口角を上げた。

「はい。クラブのみんなで、応援しています」

そう、明るい声で返した。

御隠居さまは、ふっと目じりを下げて「そう。ありがとうね」と言った。

その顔は、確かに笑っているはずなのに、どこか悲しそうにも見えた。

「柏木さん！ 常盤が、やったよ、やりましたよ！」

二月の終わり。

長い試験を乗り切った常盤さんの照れくさそうな笑顔とともに、山路さんの声が朝の空にとける。

学校に向う道の途中での吉報に、慶子さんは思わず常盤さんに抱きついた。

二月、如月、冬の月。

少女たちの季節は、大きく動き出した。

17・それは、メジロか鶯か／（二月）（後書き）

*こなし…あんと小麦粉や米粉と混ぜ、蒸したもの。しつかりとした歯ごたえ。

*練り切り…あんの繋ぎに求肥、寒梅粉、つくね芋を使い、練り混ぜたもの。「和菓子の絵事典」（PHP研究社）より要約

一般的には、「こなし」は京都を中心とした関西方面で、「練り切り」は関東で、ともに上生菓子を作る時に使われますが、関東でも京都から移ってきたお店や、修業先が京都だった場合は「こなし」を使われる場合もあるようで、いろいろです。ちなみに、「虎屋」さんでは「こなし」のことを「羊羹製」と呼ぶそうです。

*雪見障子…障子の一部が（私は知っているのは下の方が）ガラスになっていて、障子部分を上下に開け閉めできるもの。障子を開けなくても、下の部分を上げると、外が見えるのです。便利。

18・特別編・化かすか化かされるか、椿餅（前書き）

山路茜さん主役の、特別編です。

18・特別編・化かすか化かされるか、椿餅

「自分はこれくらいでいいんだと思っているから、点数が伸びないんだって」

小テストでの勝負に完敗し、答案用紙を握りしめたまま机の上に伸びていた山路さんに、彼女の天敵ともいえる潮木君のそんな声が降ってきた。

「だいたい、勘違いが多すぎ。勉強していれば出来るレベルなんだから、それが出来ていないってことは勉強をしていないってことであれ、もしかして、勉強はしたけれど出来てないとか。まさかねえ、そんなはずないよなあ。未来のツアコンさまに限って」

山路さんが黙っているのをいいことに、この潮木君という人は、山路さんの痛いところをビシバシと突いてきた。

もしここが剣道場なら、山路さんにも勝ち目はあったものの、塾の教室の一室では勝ち目どころか、引き分ける手立てもなかった。

「……黙って聞いていれば、ネチネチと」

日頃、大らかな剣道部男子（約一名掴みどころのない人物もいたが）と過ごしている山路さんにとって、潮木君は出会った時から、「なんか合わない」人だった。

山路さんはすつくと立ち上がると潮木君を見上げ、「この……クソダヌキ野郎が！」と叫ぶと、握っていた自分の答案用紙を投げつけた。

そのまま教室を出て、帰路を急いだ山路さん。

見る人が見れば、頭の上からは蒸気機関車のように、シュシュシユと湯気が出ていたはずだ。

人には聞かせられない、潮木君への悪口雑言を湯気とともに吐き

出しながら、でも山路さんにはわかっていた。

——人は凶星を指された時ほど、頭にくるものだ。そう認めたあたりから、山路さんの歩きにも勢いはなくなってきた。

ふと、シヨウウインドウに映った自分の姿に気付き立ち止る。

——みつともない。

この怒りは確かに潮木君に向けて現れたものだけだ、その源は、もともとの原因は自分にあるのだとわかっているから。

山路さんが初めて英語に出会ったのは中学の授業で、ひと目で自分とは相性の良くない科目だと認識した。

人間誰しも得手不得手があり、山路さんの場合の得手は体育で、不得手は英語なんだという、ただそれだけの話だったから。

体力にも自信があつた山路さんは、将来は体育か体操教室の先生になれたらなあと思っていた。

それが大きく変わったのは、中一の夏。

リュックを背負い明らかに旅行者と思われた外国人の夫妻に、山路さん一家（両親および、兄たちプラス山路さん）が電車内で話しかけられた時のことだ。

夫妻は何かに困っていたようで、そのことを英語で山路さん一家に訊いてきたのだ。

すると、両親は不安な顔つきでお互い見つめ合い、四人もいる兄たちに至っては視線をあちこちへと彷徨わせ始めたのだった。

最初から自分の出番ではないと、外野を決めこんでいた山路さんだったが、待てど暮らせど家族の誰ひとりとしてその問いに答えないうちなので、仕方なくその夫妻に向かい一言「いえす」と答えたのだった。

決して「YES」でも、ましてや「イエス」でもない、日本語臭

ブンブンの「いえす」だったのだが、それが夫妻には通じ、山路さんはとても感謝され、夫妻は家族の中で一番小さな女の子が自分たちの問いに答えたことを褒めるような仕草をして、次の駅で降りて行ったのだった。

夫妻からの問いは、「次の駅は表参道ですか？」というもので、確かに次の駅は表参道だとわかっていた山路さんは「いえす」と答えた、それだけの話だったのだが、外国の人と話が通じた楽しさ（しかも家族の中で自分だけが！）という体験は、今まで海外に全く目を向けていなかった山路さんの意識を変え、ついには海外の人と関係のある仕事がしたいと思うほどまでに育ったのだった。

しかし、そもそもの始まりが「簡単な英語でも話は通じるのだ」という点にあったため――そこに山路さんの成功体験があったため、塾に通いはしているものの、潮木君が言った「自分はこれくらいでいいんだ」感が根底に流れていることは、否めなかった。

否めないけれど、ム力つくし、腹も立つ。

潮木君にも、そして自分にも。

そして悔しかった。

あんなテストで負けちゃう自分に。

そして、そんな勝負をしかけてくる潮木君は、意地がクソ悪いと思った。

「茜、チヨコありがとう」

夜遅くに帰ってきた長兄にそう声をかけられると、山路さんは「どういたしまして」と手をひらひらと振って返事をした。

同じクラブで、もう親友と呼びたい柏木さんと一緒に作ったチヨコは（諸般の事情でチヨコだけではないが）、少し早いが作ったその日に家族に渡していた。

次男、三男、四男、長男、そして父親。

山路家は男子率が高い。

おまけに、剣道部も一応は男女別とはいえ一緒に練習することも多く、山路さんの周りは男子率が高いのだった。

つまり、通常でも、バレンタインには五個のチョコを必要とするわけなのに、クラブの分も入れると結構な数で……ん？

……五個。

五、という数字に山路さんは、たらりと冷や汗が出た。

あれ、あれ、あれ。

もしかして、家用のチョコを自分は四個として計算していたかもしれないと。

ダッシュで和室へと向かい、チョコを数えた山路さん。

……一個足りないし。

カウントを終えた時点で、山路さんは長兄の部屋に走った。

「お兄ちゃ——」

ノックを省略で部屋を開けると、兄が山路さんの作ったチョコをむしゃむしゃと食べているところだった。

「ん？ なに？」

チョコを頬張りながらそう訊いてくる兄の部屋の扉を、山路さんは「あはは。なんでも」と言っただけで閉めた。

——やばい。

そして、次から次へと兄たちの部屋を開けまくり、そこに既に残骸になったチョコの包みを発見したのだった。

山路さんを可愛がる兄たちは、「茜、ありがとう」などとにかくしながら言ってくれるものだから、山路さんも長兄への対応同様に笑って済ますしかなかったのだが。

——やばい。

素早く和室に戻ると、チョコの包みの前で山路さんは眉間にしわを寄せながら腕を組み、正座をした。

目の前にあるのは、元剣道部員男子と受験真つ盛りの常盤さんか

らの頼まれ物と、山田先生へのものだ。

どれ一つとして、あげないわけにはいかない。

つまり、やっぱり、そうになると、塾での賭けで渡すことになった潮木君へのものを割愛ということになるんだろうけれど、あれはあれでやっぱりあげないとまた何を言われるかわかったもんじやない。

また、作るか。

潮木君のためだけに？

うーんと悩んでいた山路さんのところに、ひょっこりと母親が顔を出した。

「茜、ここにいたのね。あのね、これすごくおいしかったのよ」

山路さんの母親はそう言って、半分だけ綺麗に残してある和菓子をを見せてきた。

それは鮮やかな緑色した椿の葉に上下挟まれた餅で、山路さんはひと目見た途端「これだけは絶対に手をだすまい」と思った一品でもあった。

椿といえば、街のあちこで花を咲かせているあの椿で、この菓子の葉は、どう見てもそれと同じものだ。

あの場では言わなかったものの、「椿餅」を見た時の山路さんの感想は「タヌキが頭の上に葉を載せて、菓子に化けるとこうなるんだろうな」ってことだった。

色だつて、どういうわけか、茶色だし。

山路さんが選んだ「未開紅」とは、大違いの代物だった。

母親の「おいしかったのよ」の言葉に、眉間にしわが寄る。

その前から、チョコを前に眉間にしわを寄せていた山路さんだっただけに、それは一層深くなった。

しかし母親からの熱心な「食べてみて」の声に背中を押されるように、その葉をどけて一口で菓子を口にいった。

「桜餅」とは違い、葉は食べないようだった。

「……え。おいしい」

挟んである葉っぱはしつかり緑だし、挟まれた餅の色は茶色と微妙だしで、一体どんな味なのだろうかと内心不安だったのだけれど、シナモンの香りよく味も深く、また餡にもあい、絶品ともいえる味だった。

「日本の職人さんって凄いのね」

さっき自分が言ったことと同じような台詞を、母親が言う。

「ここ、茜の同級生のお店なんですよ。お嫁に行けば」

母親のその言葉に、食道を通った餅が逆流しそうになった。

「鈴木、鈴木」

廊下の前を歩く「約一名」を発見した山路さんは、はりきって声をかけた。

鈴木君は山路さんの声に、ゆっくりと振り向いた。

「あのさ、『椿餅』のことなんだけど」

山路さんがそう言うのと、鈴木君は「ああ」と何やらわかったかのような顔をしてきた。

その鈴木君の様子に、少し面白くない気持ちになる山路さん。

「……何を訊こうとしているか、わかつているの？」

いつになく、ひねくれた物の言い方をしてしまう山路さん。

「喧嘩したいわけ？」

鈴木君の返事に、山路さんはおや、と首を捻る。

「あれ。なんか、虫の居所が悪い？」

山路さんがそう言うのと、鈴木君は肩をすくめた。

「『椿餅』のことを訊こうと思ったけど、なんか、気が失せた」

「あ、そ」

そう言うのと鈴木君はぷいと前を向いて、歩きだそうとした。

「ちよ、ちよい待ち！」

山路さんはそう言うのと鈴木君の制服をぎゅと掴み、廊下の端に鈴木君を引っ張った。

「あの日、何かあったわけ？」

主語も具体的なことも言わず、山路さんは自分が鈴木君に慶子さんを迎えに来るように電話をした日のことを尋ねた。

正確に言えば、山路さんは迎えに来いとは言わなかった。

ただ、「今、柏木さんがうちを出たよ。少し時間が遅いよね」と言っただけだった。

鈴木君はため息をつく、「なにも」と答えた。

「なにもって。なにも、なんにもなかったってこと？」山路さんは、半ば呆れたような声でそう言った。

山路さんも決してこの二人に何かあったとは思っていなかったが（もしあったとしたら、誰かさんの様子が絶対におかしいからだ）、こう改めて「なにも」と答えられると、じれったいようなイライラとした気にもなった。

「……なんか変なの」

山路さんの言葉に鈴木君は顔をしかめると、「もう、いいだろ」と言い立ち去った。

山路さんは、自分を含めた剣道部の面々が、鈴木君と慶子さんのことに薄々（というか、既にもう薄いとはいえないので「濃々」か？）気付いているのを知っていた。

特に鈴木君に関してはかなり早い時点で、慶子さんのことを特別な女の子として見ているというのは明らかだった。（その点は慶子さんの方が遅く、一緒にいる山路さんでさえ、「もしや」と思い始めたのはつい最近だ）

あれは、大学の進路について、互いに話した時だ。

慶子さんは文化史学科に進むつもりだと言い、その理由として、学科の説明で和菓子に触れる映像が出てきたことを話してきた。

そして、そこから慶子さんは、鈴木家が営む「寿々喜」の和菓子についての話を、延々と山路さんにしたのだった。

その時山路さんは、衝撃を受けた。

慶子さんとしてはあくまで「和菓子」が好きだというスタンスで話してくるのだが、どうも山路さんにはそれが「その店の息子が好きだ」としか聞こえなかったからだ。

こんなにも好きなのに、それを本人が気がつかないことであるのだろうか、と。

じっくりと話を聞くうちに、慶子さんは菓子への思いと鈴木君への思いのあれこれを混同しているのではないかと、山路さんは推測した。

とはいえ、まあ、もうしばらく様子を見ようと思っていた山路さんに訪れた、二度目の衝撃。

それは、バレンタインの菓子作りで、慶子さんを家に呼んだ日のことだ。

雪の中顔を赤くしながら、しっかりと防水の効いた「寿々喜」の袋の中に、どつさりと菓子を買って持参した慶子さんを見て、そしてその袋の過剰なまでの包装を見て、「なんだこの二人は！」と山路さんは鼻血が出そうになったのだ。

この娘さんは、自分がどんなに嬉しそうな顔で「寿々喜」の菓子を持っていいのか気付いていないのか、と。

そして、あのマダムキラーと言われるミスター鈴木が、一体どんな顔をしてどんな思いでお天気の良いなか菓子を買いに来た慶子さんを迎え、そして見送ったのかと思うと、友だちながら泣けてきたのだった。

だから、帰りに電話をしてあげたのだ。

そうか。

「何も起こらないだろうな」、と思いながらも、どこかで「何か起こればいいのに」、と自分は思っていたのだと。

そういった少しはロマンチックな気持ちだが、自分にはあつたんだ

なあと。

そして、周りから見ると自分の気持ちぐバレバレで、しかも自分でもそのことがわかつているミスター鈴木と、英語の勉強において同じような状況の自分が重なったのだ。

そうなのだ。

「自覚」だけじゃ、だめなのだ。

動かないと、変わらない。

私も、鈴木も。

「はい。約束の品」

そう言うのと、山路さんは塾が終わった後の廊下で、潮木君に菓子の包みを渡した。

「へえ。わざわざ買ったんだ」

潮木君はそう言うのと、がさがさと袋から箱を取り出し、蓋を開けた。

「……なにこれ」

まあ、そうだろう。

小さなプラスチックケースに入れられたそれは、箱を開けて上から見ると、緑色の葉っぱしか見えないのだから。

「ふふふ」

山路さんは「椿餅」を見た時に思った「タヌキが頭の上に葉を載せて、菓子に化けるとこうなるんだろうな」との思いと、前回自分が潮木君に浴びせた「クソダヌキ」とが重なり、潮木君にあげるとしたら、この菓子しかないだろうと思ったのだ。

確かに見た目は、見慣れないものであったが。

「すつごくおいしいよ」

近所の和菓子屋で買ったため、「寿々喜」ものとは少し違ったが、それでも文句なしにおいしかったのは、自分で確認済みだ。

せつかくお金を出して、しかも人にあげるのだから、おいしい物がいいに決まっている。

「ふーん。おいしいんだ」

そう言っていると、潮木君はプラスチックの蓋を開け、「これもしかして椿の葉？」と訊いてきた。

「そう、椿の葉。この菓子はね、『椿餅』って言うのよ。聞いて驚け、なんと『源氏物語』にも出てきた歴史のあるお菓子なのだぞよ」

結局はインターネットで調べた蘊蓄を、山路さんは披露した。

「『源氏物語』？ …… へえ」

そう言っていると潮木君は、一口でそれを食べた。

潮木君は、もぐもぐと口を動かしながら「あ、うまいかも」と言った。

「ふふふ」

そうでしょう、そうでしょう、と山路さんはその言葉に納得すると、「じゃあねえ」と潮木君にひらひらと手を振った。

「待てよ」

帰ろうとする山路さんの通学かばんを、潮木君が引っ張った。

「なによ」

もう、用事はないはずである。

あ、用事はあったか。

山路さんは潮木君の顔を真っ直ぐに見上げると、「私ね」と話した。

すると、いつもは意地悪な顔しかない潮木君が、焦ったような顔をした。

はて、と思いながらも山路さんは、「私、『これくらいでいいんだ』って思うの、やめにするから」と言った。

そして、「勉強、頑張るからさ。……ええと、まあ、ありがとね
っ」「そう言っと、再びひらひらと手を振り、塾を後にした。

残された潮木君に、教室に残っていた友だちが顔を出し、「残念。
告白ならず」と野次を飛ばしていたけれど。

それは、山路さんの預かり知らぬこと。

18・特別編・化かすか化かされるか、椿餅（後書き）

次回が最終話となります。

19・ふたたびの、仙寿（前編）／（三月）（前書き）

最終回なのに、まえがきです。

物語に早く進みたい方が多いと思いますので一点だけ。

今月は、季節が一巡したということで、和菓子に関する記述はあまりありません。

剣道部員たちの卒業についての物語が中心です。ご理解いただけたらと思います。

物語の後は、いつものところで、みなさまをお待ちしています。
では。

19・ふたたびの、仙寿（前編）／（三月）

季節は、ぐるりと一回り。

弥生、三月、ひな祭り。

「あこや」に「菱餅」、「ひなあられ」。

「草餅」食べて、厄を除け。

——そして、全てのはじまりの「仙寿」。

慶子さんは、母親と一緒に雛人形をしまいながら思った。

一年前は出会いの季節だった三月が、今はそれぞれの旅立ちの季節であると。

卒業式まで、あとわずか。

伸びてきた髪を指先でつまむと、和歌山君は、はあとため息をついた。

春休みには、じいちゃんの畑の手伝いに行くことになっていた。

和歌山君は土いじりが好きなので、文句はあれこれと言ってみるものの（これは甘えだって自覚はある）、実際のところ野菜作りは好きだったのだ。

そうはつきりと意識したのは、この間の夏休みのことで、夢中になるあまり剣道部の合宿に遅れてしまったほどだ。

そして実は進路も、親やじいちゃんを巻き込んで大騒ぎした拳句、滑り込みで運よく舞い込んだアグリカルチャー系の大学への学校推薦をちゃっかり取り、合格まで手にしていたのだ。

学校の成績もまあ良く、クラブ活動もまあ続けていたという

のが幸いだった。

この時ほど和歌山君は、やるべき時にやるべきことをやっているということは、強みになる（いつなんどき、こういったチャンスが降ってくるかわかったもんじやない）と実感したのだった。

なのに、和歌山君の表情には覇気がなく、側にあつた鏡を覗き込んで、再びため息をつくあり様。

和歌山君は後頭部をひと撫ですると、「頭の形がなあ……」とつぶやいた。

やや絶壁頭の和歌山君は、農業は好きでも、丸刈りはあまり好きではなかったのだ。

岡山君は、先日送られてきた大学の入学書類をまじまじと見ながら、この一年のことを振りかえった。

両親ともに公務員である彼にとり、進路とは即ち両親と同じ道であり（それが両親の意向でもあつた）、昨今の日本の状況を省みるとそれは「正解」以外の何物でもないと自分でも思っていた。

人生に冒険は不要である、と。

しかし、たまたま友人から貰ったチケットで観に行った映画で、全てが変わった。

岡山君は、「映画」と出会ってしまったのだ。

一本の映画が、岡山君に「映画の世界」への扉を示してしまったのだ。

岡山君は映画館を出るなり携帯電話でこの監督の事を調べ、その足で彼の係わった映画のDVDを借りた。

それからが大変だった。

岡山家始まって以来の、大乱闘時代が始まったのだから。

当然大反対の両親とのしつこいまでの話し合い。人格を否定されるような言葉。

しかし、結果、現在彼は希望学部への入学書類を手にしていた。とはいえまだ完全に、親は岡山君の進路を認めたわけじゃない。

そうなのだ、これからが大変なのだ。そのことを、岡山君は誰よりもよくわかっていた。

年度末で忙しい両親に代わり、北村君は弟のためにインスタントラーメンを作っていた。

自宅で公認会計士の事務所を開く北村家では、こうしたことはよくあることで、よって北村君も麺類ならなんなく調理することができたのだ。

「兄ちゃんも、会計士になるの？」

中学生の弟が、箸や器を用意しながら訊いてきた。

「うん」

北村君は迷いのない声でそう返事をする、「できたぞ」と鍋ごとテーブルの上に二人分のラーメンをどんと置いた。

「なんで俺が」

福地君はそう言う、腕を組んできた常盤さんに嫌そうな目を見た。

密着している為、福地君からは常盤さんの頭のとっぺんしか見えないが、とっぺん一つとっても確かに常盤さんは美少女だった。

「全く、剣道部の三年男子くらいよ。私に腕を組まれて嫌そうな顔をするのは」

常盤さんはそう言う、ほらほらと、まるで牧羊犬のように福地君を追い立てる。

卒業式の練習も終わり、そろそろと教室に戻ろうとする途中で、常盤さんはいきなり福地君をつかまえると（その様子を見ていた山路さんは、にやりと笑っていたが）、こうして校舎裏まで連行しようとしていたのだ。

確か、昨日は北村がつかまったと言っていたっけ。

北村君からのばやきを、げらげらと笑って聞いていた福地君だったが、よもや翌日自分が同じ憂き目にあうとは予想もしていなかった。

た。

まだ受験を終えていない仲間はあるものの、概ね付属大学や学校推薦で進学を決めるこの学校の生徒たちは、卒業までの数日間をこうした「イベント」で盛り上げて過ごしていたのだ。

ミス学園に輝いたこともある常盤さんだけに、こういった「イベント」への「呼び出し」は多い。

そしてそのたびに、常盤さんは目についた剣道部仲間を連れては、断りに行くのだそうだ。

目的地に近付くと、福地君も知る、真面目でいい奴が立っていた。ブルータス、おまえもか。

一気に重くなった福地君の足を、常盤さんがおもつきり踏んできた。

ぎゃあ、と出そうになる声を押さえながら常盤さんを見ると、なんと彼女は見たこともないような悲しそうな表情を浮かべ、福地君を見上げていた。

常盤さんは、確かに綺麗だった。

性格を知っている福地君でさえ、そう思った。

だからこそ、尚更に。

……美人は怖い。

福地君はそう思い、これから自分がこの芝居に付き合うことになるかと思うと、ため息が出そうになった。

芝居といえば、妹もよく芝居がかった様子で、福地君に頼みごとをしてくるではないか、と。

訂正。女は怖い。

小さな妹にさえ、すでに負けそうな日常生活を送っている福地君は、しみじみとそう思ったのであった。

「柏木さん」

ここにきて慶子さんは、クラスメイトの女子から声を掛けられることが多くなっていた。

三年にもなるとクラス単位の授業もほとんどなかったため、なかなか同じクラスという仲間意識は生まれなかったのだが、「折り鶴」での団結や同じ大学に進学するという共通の話題、そしてもう高校生活もこれで最後なのだ、という思いから慶子さんのクラス全体が、急激に仲良くなってきた状況があった。

ということで、慶子さんはクラスメイトと一緒にお昼を食べたり、空き時間をもとに過ごしたりしながら、春休みや、大学でのことなどを話していた。

特に、兄や姉が同じ大学に進んでいる人たちからは、サークルやクラブの情報が既に流れ始めていた。

「うちの大学の女子って、他大学の男子に人気があるらしいよ」

そんな話も出て、わいわいと盛り上がりも見せていた。

「春休みのうちから、アルバイトもしたいなあ」そんなことを言う子もいた。

また、お化粧品や洋服の話なども出た。

どここのファンデーションがいいとか、口紅が可愛いとか。

今まで全く縁のなかったそういう話題に耳を傾け楽しみながらも、慶子さんは最近悩んでいるとあることに気持ちは揺れ、ついつい心はお留守になってしまふこともあった。

山路さんは困っていた。

中学から何度か同じクラスになった男子から、「柏木さんを紹介してほしい」と頼まれたのだ。

紹介といっても文字通りただ自己紹介しあうようなものではなく、その裏にはきつちりとラブがあるんだろうなと察してしまうわけでもあって。

いつもだったらそんな話は、はなから受けないのだけれど、今のこの「もうすぐ卒業」という独特の空気の中で、思わず頷いてしまった山路さんだったのだ。

とありあえず、「本人に訊いてみるから」と言って教室を出たも

の、実際どうしたものと困っていた。

すると、目の前に、この話を相談するのにぴったりの人物を発見し、山路さんは小走りに近づいていった。

「ちょっと、相談よ」

山路さんは瞳を輝かせながら、今あったこと全てを話し始めた。

「——と、いうわけなのよ」

重かったものを全部目の前の人物に掃きだした山路さんは、すつきりとした気分で相手の反応を待った。

「無視」

すると一言、その人物、鈴木 学君はそう答えたのだ。

「え？ む、無視？」

どういう意味よ、と山路さんは訊く。

「ほっとけ、って意味」

「ほっとけ、って、何もするなってこと？」

「そう。直接本人にでなく、山路に『紹介して』なんて頼んできたんだろ。なんだそれ。問題外。うっちゃれ」

「うっちゃ……」

思いもよらぬ、鈴木君のはつきりとした言葉に、正直山路さんは驚いた。

そして、悟った。

「……つまり、あんたもそうしてきた、と」

去年の新入生クラブ勧誘において、慶子さんの頑張る姿が一部の男子に好評で、彼女と同じクラスの鈴木君あてに何人かが相談したとかいう「噂」は耳にしたことがあったが、「噂」はあったがその後どうなったかという話は聞かなかったので、てっきりガセネタだと思っていたのだが。

山路さんの問いに、鈴木君は答えない。

「でももしそんなことして、直接本人に言うなんてことになったら、どうするのよ」

山路さんがそう訊くと、「直接言えないから第三者に頼むんだろ。」

それに、もしそんなことになったなら。相手に断りに行く時に、ついて行ってもいいし」と鈴木君は言った。

「相手に断りに行く時って。……なんで、あんたがそう決めんのよ」

山路さんはそう言いながら、「ああ、でも確かに。断るだろうね」と自問自答してしまった。

しかし、「ついて行ってもいい」とは。

いやはや、鼻血もの。

おみそれしました。

「でも、大学生になつたら、どうするの？」

誰が、とは言わずに山路さんは訊く。

「なるようにしか、ならないでしょ」

鈴木君はそう答える。

その答えが、離れてしまう諦めからきているのか、離れていても大丈夫だという自信からきているのかは、山路さんにはわからなかった。

ただ確実に、彼女のことは彼にとって、やはり弱点なのだと思うた。

山路さんから見ると、器用に卒なく事を運びがちな鈴木君にとって（それこそ、剣道部の先輩に睨まれたら簡単に自分の実力を放棄してしまうような奴が！）、彼女に対してはどうしていいかわからないといったところが、事実なのだろう。

ふむふむ、なかなかどうして。

鈴木だって、ただの高校生男子じゃないのさ。

可哀そうな気はするけれど、でもこんな鈴木は面白いと思う自分を、山路さんは少しだけ意地悪だなあと思った。

「へへ。鈴木のことさ、なんだか掴みどころのない胡散臭い奴だつてずっと思っていたけど。ようやく尻尾を掴んだって気になったよ」

「……尻尾。なんだそれ」俺は狐か、と鈴木君は言う。

「でも、いいよ、鈴木。私の中で赤丸急上昇だ、うん。あんたつてさ、女の子を見る目はあるんだね」そう山路さんが言つと、「そりゃ……どうも」と珍しく鈴木君の顔が少し赤くなった。

浮足立った卒業式までの数日が過ぎた。

学校に置いてあつた各自の荷物の持ち帰りにより、教室はどんどんとクラス独自の色を失つていった。

そんな中、クラスの黒板には、次々と寄せ書きが集まつた。

自分が進む大学名や、好きだつた購買部のパンのベストテンや、宛先のない告白文などさまざまな言葉が、所狭しと色とりどりのチヨークで書かれた。

くすくすと笑いながら秘密の言葉を書き込むクラスメイトとともに、慶子さんもそこに言葉を寄せた。

そして、卒業の日が来た。

20・ふたたびの、仙寿（中編）／（三月）

卒業式は、粛々と執り行われた。

講堂には三年生と保護者が集い、一、二年生は、各クラスのテレビから卒業式の様子を見ていた。

慶子さんにはクラスメイトの顔が、いつもとは少し違って見えた。

そしてきつと、みなからすると慶子さんの顔もいつもとは違うのだろうと思った。

今日で、この制服を着るのは最後だった。

制服のない生活というのは、自由なのだろうが、その自由さが不安でもあると慶子さんは思った。

講堂を出ると、順番にクラス写真を撮ることになっていた。

順番がまだこないクラスは、クラスごとに固まってはいるものの、雑談をしたり写真を撮ったりと自由に過ごしていた。

平日だったためか、父親よりも母親の姿が多く見られた。

保護者もカメラを構えたり、立ち話をしたりと、みなこの場を楽しんでいるようだった。

慶子さんは、保護者がいる場所に視線を向けた。

母親を探すためだ。

昨晚唐突に、母親は慶子さんの卒業式に行くと言いだした。

一人で来るなんて、と不安になった慶子さんは助けを求めるように父親の顔を見た。

ところが父親は慶子さんの思いに反し、「ぼくの分までよろしく

ね」なんて言葉を母親に掛けたのだった。

慶子さんは今朝、「無理をしないでね」と言葉を残し、先に家を出た。

慶子さんのその言葉に、ただ笑顔を向けてきた母親だったのだが……。

しかし、中々見つけることができないその姿に、母親は来るのを止めたのかもしれない、という考えが慶子さんに浮かんだ。

それならその方が安心だとほっとした後、もしか途中で体調が悪くなり倒れたのかもしれない、といった違うパターンが浮かび、途端に気持ちが焦りだした。

そんな慶子さんに向かい、手を振ってくる人がいた。

着物姿の「寿々喜」の女将さんだった。

そしてその隣には、同じように着物を着た――虫干しをした

時のあの卵色した着物を着た、母親がいた。

母親は綺麗だった。

少し細いけれど、病気をしたとは思えないくらい、生き生きとした表情だった。

慶子さんは二人に駆け寄ると、まずは女将さんに頭を下げた。

「お母様とね、メル友になったの」

着物もね一緒に着たのよ、と女将さんはそう言った。

そんな話は初めて聞いた慶子さんは、驚いた顔のままで、母親を見た。

すると母親はいたずらそうな顔をして、着物に似合わない小さなピースサインを慶子さんに送ってきた。

その姿に、慶子さんはうわっと涙が出た。

「あらあら」

女将さんがそう言うと、慶子さんの母親が慶子さんの背中を撫でた。

慶子、慶子。

まるで、そう呼ぶかのように母親の手は優しく、ゆっくりゆつくりと慶子さんを撫でた。

—— お母さんが戻ってきた。

慶子さんはそう思った。

「お母さん」が戻ってきた、と。

「ほら、学」

見ていないでこっちに来なさい、と女将さんの声が聞こえた。

和菓子さまは慶子さんの母親に頭を下げると、「柏木さん、クラス写真を撮るって」と慶子さんに声を掛けてきた。

慶子さんは頷きながら、ポケットからハンカチを取りだすと涙をふいた。

そして、母親と女将さんに向い、はにかんだような笑顔を見せた。

その笑顔に、二人の母親の優しい表情が向けられた。

「写真屋さん、腕がいいといいけど」

女将さんはカラリとした明るい声でそう言うと、「ねえ、学。皺の修正とか、してくれると思う？」と訊いてきて、その場のみなを笑わせた。

四人で写真撮影に向かう中で、女将さんは慶子さんに「まだ決まったわけじゃないんだけど」と、あることを話してきた。

「すつげー牽制球」

「計画的」

「アンタツチャブル」

「……鈴木い！」

剣道部の男子四人は、校庭の隅で起こった小さなドラマを見ながらそう言った。

「ねえ、賭けない？」

そこに元ミス学園も加わり、やんややんやと話題の二人の行く末を想像した。

クラス写真を撮り終わると、待っていましたとばかりに後輩たちが校庭に流れ込んできた。

「山路先輩！ 柏木先輩！ 常盤先輩！」

一年生たちの声と共に、三人の目の前には次々と花束が差し出された。

「ありがとう！」

元気良く花束を受け取る山路さんの横で、「え、私にまで？」と常盤さんは珍しくも照れると小さな声で「ありがとう」とお礼を言った。

チューリップに、フリージア。

優しい春の花々が、ゆらりゆらゆらと揺れている。

「ありがとう」

慶子さんが笑顔でお礼を言うと、一年生たちは途端にしくしくと泣き出してしまった。

戸惑う慶子さんをよそに山路さんは、「おお、よしよし。……辛い？」と一年生に訊いた。

すると一年生たちはこくこくと頷き、「今までは、先輩方は引退されたといってもまだ学校にいて下さったから、だから安心だったんですけど」と涙声で話しました。

「もう、上に誰もいないと思うと、不安でたまりません」

「新入生が入らなかつたら、どうしたらいいんでしょう」

そんなメソメソとする一年生たちの前に、「おいおい、そんな時は男子を頼れって」と福地君が現れた。

そして、そろそろと二年生や一年生の男子部員、そして三年生もそこに集まってきた。

男女ともに、剣道部全員が集合した。

「君たちの某先輩はね、平気そうな顔しながら一人で抱えていたけどね」

山路さんが平気なんかじゃなく不安で一杯だったことは、今では慶子さんも福地君も知るところだった。

「なんでも自分たちでやれば偉いつてわけじゃないから。SOSは恥じゃないよ。そこら辺はさ、協力して」

その言葉に山路さんが、むすっとした顔をした。

「なんか、まるで私がダメな見本のようなっ」

ぶう、としかめっ面をする山路さんに、「っーか、いい見本すぎたんでしょ、君は。俺をみなさい、この隙だらけの人格を」

そんな福地君の言葉に、みなが笑った。

その笑いの中で、福地君は「ほれ、相棒」と言うと、山路さんに花束を渡した。

それを合図に、岡山君は常盤さんに、和歌山君は、「副部长ご苦労さん」と慶子さんに、それぞれ花束を渡した。

「これ、俺らからのホワイトデーだから」

福地君はそう言うと、カラカラと笑った。

「たまには、いいこと考えるじゃない」

山路さんはそう言うと、二つの花束を大事そうにぎゅっと抱きしめた。

そんな二人の姿を見ながら慶子さんは――慶子さんだけじゃなく剣道部員たちは、この二人の明るさと行動力にどれだけ励まされただろうか、と思った。

花形と呼ばれるには程遠いこの部を、それでも大事に、そして盛り上げてくれたのは、この二人なのだから。

「おい、みんな」

写真を撮るぞお！ と、松葉杖が二本から一本になった山田先生が、これまたその姿には重すぎるといった感じのカメラを首からさげてやって来た。

「ああ、先生！ 俺がやりますって」

岡山君はそう言つと、先生に向かい駆けだした。

慶子さんが荷物を取りに教室に戻ると、見慣れたその部屋が、早くもよそよしく感じられた。

クラスでの集合写真で解散だったため、そのまま帰った生徒も多く、教室はがらんとしていた。

剣道部での写真撮影や、離れ難さからの立ち話は、案外時間を取ってしまつたようだった。

母親たちは一足先に帰り、慶子さんはこの後、山路さんと常盤さんとともに帰ることになっていた。

慶子さんは唯一、この教室が自分たちが過ごした場所である形跡を残す黒板の前に立った。

そして近寄ると、抱えていた花束を左手に持ち、空いた右手の指で自分が書いた文字の上をすつとなぞつた。

「誰もいないとは」

教室の入り口をくぐりながら、和菓子さまがそう言った。

「……あ。なんか取り残されたような」

慶子さんはそう言いながら慌てて自分の書いた文字に背を向けると、「俺たちが、一番最後かなあ」と言う和菓子さまの言葉に頷いた。

和菓子さまが、視線を慶子さんに向けてきた。

慶子さんも同じように、和菓子さまのことを見上げた。

ふつと降りてきた二人の間の沈黙に、慶子さんは息ができないくらい緊張を感じた。

すると突然、「ひゃっほー！　さらばだあ！」という声が廊下を走ったかと思うと、そのままその声の主は階段を駆け下りていった。

一体何が起きたのかと、慶子さんも和菓子さまも、廊下のほうに注目した。

その二人の目の前を、今度は「祝！　卒業！　みんな、ありがとう！」と言いながら同じように駆け抜け、下りていく人の姿が見えた。

慶子さんと和菓子さまは、顔を見合わせた。

「……あほか」

和菓子さまがそう言って笑いだしたので、慶子さんも同じように笑った。

慶子さんは、ずっと迷っていたことがあった。

和菓子さまに、お願いしたいことがあったのだ。

しかし、それをお願いするのは、少し図々しいのではないかとも思え、あれこれと迷い考えていたのだ。

でも、と思う。

それくらいのお願ひなら、迷惑にはならないのでは、と。

常に身につけているような携帯電話の番号やアドレスを、教えて欲しいと願う訳ではないのだから。

「す、鈴木君！」

思いがけず大きな声が出てしまい、慶子さんも驚いたが、慶子さんに名前を呼ばれた和菓子さまは、もっと驚いた顔をした。

「……初めて名前を呼ばれた」

そんな和菓子さまのつぶやきが聞こえる筈もない慶子さんは、そ

のままの勢いで「あの、京都の、京都の住所を教えてください。手紙、出したいので」と言った。

「……手紙」

そうつぶやくと、和菓子さまはくすりと笑い、「手紙かぁ。いいな、それ」と言った。

そして慶子さんが自分の席に戻りカバンから取り出し渡したメモ帳に、すらすらとそれを書くと思返してきた。

こことは違う、京都独特の住所表記に、そしてそれを空で覚えていた和菓子さまの姿に、とてつもない距離を慶子さんは感じた。

「ありがとうございます」

慶子さんは、真っ直ぐに和菓子さまを見上げてそう言った。

「本当に、ありがとうございます」

慶子さんには、もっと伝えたい言葉がたくさんあった。

けれど、こうして向き合つと、そういった言葉がとても薄っぺらなことに思え、言うことができなかったのだ。

「あんまり、そう感謝されても」

和菓子さまがぼそりと言う。

そして、「俺も柏木さんに、一つだけお願いがあるんだけど」と言った。

「お願い、ですか？ ……私に、私に出来ることなら！」

自分に出来ることならなんでもやります！ という気持ちで慶子さんは言った。

しかもたった一つだけ、なんて。

一つとはいわずに、二つでも三つでも叶えたい気持ち満々だ。

「おかえり、って言ってもらえるかな」

和菓子さまの思いもよらない言葉に、慶子さんは目が泳いでしまった。

「おかえり、と言えはいいんですか？」

今だろうか？ 今、言えはいいんだだろうか？

「うん。俺さ、最低でも三年は、店には戻らないと思う。いや、も

しかしたら、それ以上。こっちに戻って店をやるには、勉強が必要だとわかっているから」

三年。

それ以上。

にわかには想像できないその年月に、慶子さんは途方に暮れた。そして、目頭が熱くなった。

「柏木さんは、これから大学に入って、そのあとはどこかに就職して。もしかしたら、結婚もして『柏木さん』じゃなくなっているかもしれないけれど」

慶子さんは和菓子さまの言葉を黙って聞きながら、未知なる未来の自分の姿を想像した。

「それにもう、うちの店の側には住んでいないかもしれないけれど」

その言葉に、慶子さんは胸が詰まった。

「それでも、もし、柏木さんがうちの店に寄ってくれて、その時に俺が店に戻っていたら」

うんうん、と慶子さんは頷く。

「おかえり、って言って欲しいんだ」

そう言うと、和菓子さまは笑った。

慶子さんは声も出さずに、ただただ頷いた。

そして頷きながら、いつかの自分の夢を思い出した。

船での旅の後、自分が帰るべき場所へとたどり着いた時に、誰かが言ってくれた「おかえり」を。

自分の帰る場所。

いるべき場所。

そこに戻った時に聞く、「おかえり」という言葉の尊さを。

「私でよければ」
そう言うと慶子さんは、顔をくしゃくしゃにしながらも笑った。
和菓子さまは静かに、「ありがとう」と言った後、もう一度「ありがとう」と言った。

慶子さんと和菓子さまが一年を過ごした教室の黒板の隅には、まるで二人を見守るかのように、ある言葉が書かれていた。

—— 一期一会。

そしてこの時が、この二人が高校時代を共に過ごした、最後の時間となったのだった。

三月の、とある晴れた日。

和菓子さまはカバン一つを持ち、住み慣れた家を街を、出発した。

そして、和菓子さまが京都へと旅立った数日後。

「寿々喜」のガラス窓には、アルバイト募集のちらしが貼られた。
しかし、そのちらしは、それを書くのに使った時間よりも短い時間しか、貼られることはなかった。

待ち構えていたかのような、アルバイト希望者の手により剥がされたためだ。

21・ふたたびの、仙寿（後編）／（三月）

弥生、三月、ひな祭り。

「あこや」に「菱餅」、「ひなあられ」。

「草餅」食べて、厄を除け。

病院帰りの慶子さんは、バスの停車ボタンを押すと、ふうと息を吐き座席の背にもたれた。

窓の向こうの景色からも、木の芽が、桜の蕾が緩んでくるさまが見えた。

そんな早春の景色を眺めながら、慶子さんは右手の親指と中指で挟むようにして、左手薬指に嵌った指輪に触れた。

硬質な感触のそれは、慶子さんの薬指を定位置としてから一年が過ぎようとしていた。

バスが信号で停まった時、制服を着た少女たちが花束を持って歩く姿が目にはいった。

この場所からは、彼女たちの声は聞こえはしなかったが、くすくすと笑うような、そして時折涙ぐむような、そんな様子は見てとれた。

——そして、今の自分ならわかった。

あの頃のあの時間は、決して甘いことばかりではなく、不安で苦しいことも多かったのだが、それでも、それさえもとてつもなく贅沢なものであったのだと。

まるで星屑のようにキラキラと、あの頃にしか出せない輝きがあったのだと。

バスが走り出すと同時に、少女たちの姿も遠くなった。

――頑張れ。

あの頃の不安な自分を思い出し、そしてこれからのあの少女たちに向けて慶子さんはエールを送った。

停留所に近づくにつれ速度を落とし始めたバスの窓から、見慣れた背の高い姿を見つけた。

慶子さんは、ほっとため息をつくとき、バスが完全に止まってから、ゆっくりと席を立った。

手すりにつかまりながら慎重に、一段一段ステップを下りていく。

すると、慶子さんが完全に降り立ったのを確認したかのように静かにバスの扉は閉まり、そして走り出した。

「おかえり」

慶子さんの荷物を取ると、慶子さんの帰りを待っていた背の高い人は、その声を掛けてきた。

「ただいま」

慶子さんはそう言うにつこりと笑い、慶子さんと同じ指輪を薬指に嵌めた、若旦那こと、鈴木 学くんのことを見上げた。

「歩ける？」

学くんは慶子さんと手を繋ぐと、心配そうな顔でそう言った。

慶子さんは大きなお腹を労わるようにさすると、「大丈夫よ」と言ってほほ笑んだ。

慶子さんと学くんは、ゆっくりゆつくりと二人の住む街を歩きながら、訪れつつある春の景色を楽しんだ。

「あら、『寿々喜』さん」

赤ちゃん、もうすぐね、と道路を掃いていたご近所の人から声を掛けられる。

その言葉に、二人してぺこりと頭を下げる。

ベビーカーを押してきた見知らぬ若い奥さんからは、優しい視線を送られた。

道端で井戸端会議中のおばさまがたからも、「あらあ、立派なお腹だこと！」と声を掛けられた。

赤ちゃんがお腹に宿ってから慶子さんは、こうして知っている人知らない人に係わらず、そのお腹に人々からの優しい視線が向けられることを感じていた。

そして、そのたびに、心の中にじんわりとほっこりとした幸せが広がり、その嬉しい気持ち全部が栄養になってお腹の赤ちゃんへも送られるような気持ちになったのだ。

慶子さんは学くんを見上げて、ほほ笑んだ。

そのほほ笑みは、青空のもとでぱつと咲いた白梅のようだった。

「おーい、おかえり！」

お店の横に最近常設された縁台では、和菓子とは一番縁遠いような風情の御隠居さんと、御隠居さんのお友達の近所のおばさまがたがお茶を飲んでいた。

そしてよく見れば、顔を皺だらけにしながら茶をすする御隠居さんの悪友、最中屋店主の姿もあった。

お茶の側には、学くんが作った小ぶりの上用饅頭「春宝」^{しゅんぽう}があった。

小さな白いお饅頭には薄紅色したばかりがいり、そしてその上には桜の花の塩漬けがちょこんと載せられていた。

慶子さんが初めて「寿々喜」で買い求めた「仙寿」に込めた願いは叶えられ、あれから八年の月日が過ぎた今でも、慶子さんの母親もそして勿論父親も元気だ。

そして、師匠も女将さんも御隠居さんも、ありがたいことにみな

元気で、慶子さんに宿る「春の宝」の誕生を楽しみにしている。
学くんの小さかった弟たちも、時折二人揃ってお店に遊びに来ていた。

「ただいま！」

縁台に座り手を振る御隠居さんたちに向かい、慶子さんは元気に答える。

弥生三月、幸せ月。

季節は、なんども巡っても。

慶子さんの隣には、和菓子さま。

この先も、ずっと。

21・ふたたびの、仙寿（後編）／（三月）（後書き）

参考文献一覧は、こちらより

<http://kanokonno.web.fc2.com/wagasii14.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6423p/>

和菓子さま 剣士さま

2011年4月28日12時40分発行